
とある拡散の粒子移動（フリーウォーカー）

水深無限風呂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

フリーウオーカー
とある拡散の粒子移動

【Nコード】

N0016N

【作者名】

水深無限風呂

【あらすじ】

ある日突然、友人は学園都市へと引っ越した。特に理由も分らないが…何せ友人が少ない物でな…いや、友人はいるんだ、いるぞ？でもな、ほら、唯一無二の物がどうたらこうたら……

友達少ない可愛そうなオリ主が学園都市に引っ越した友達を追いかける話です、でも、その友人が死ぬほどチート能力で面倒な事になったり…いつの間にか隣の住人に壁を開通されてたり…超展開な日常を味わうお話でもあります。原

作介入はなるべくせず、とあるシリーズの世界観だけを使った二次創作作品です。最後に一言だけ『超展開万歳!』

01・引越し<Start>；（前書き）

初めまして、今回とある先生…というか空気使い先生（代表作：とある物質の法則無視）の方から『お前もとある系の小説書けよ、書かなきゃ三途の川を三度往復させた挙句地獄に突き落としてやる』と脅迫を受けたので、楽しませてもらうことにしました、よって、向こう側とのつながりがありえない程凄いです、なので、あちらを読んでからこちら側、その方が楽しめると思われます、まあ、此方単体で読んでも多分大丈夫ですがね…

01・引越し<Start>;

小学五年生まで一緒に登校通路を歩き、一緒に遊び、一緒に楽しく笑い…笑顔だらけの生活を送った私の最大の友人…しかし、彼は小学五年生のある日、親から化け物と言われ…、引き籠もってしまった、私は直接家にも行ったが会わせて貰えず…メールなども送ったが返事は全く帰ってこなかった。

それを私は二年半続けた

傍から見れば悪質なストーカーだろう…そう思われてもいい、私にとって彼はそこまで魅力的だった

しかし、遂に…ある日、最悪の出来事が起こった。

友人に会いに家に行けば親は「あの子なら、もう居ないわよ?」と平然な顔をして答えたのだ

信じられなかった、こんなものが人間なのかと

化け物、と言われた力も好き好んで身に付けた力でもないだろうに私は彼を哀れんだ、涙さえ流した程だ

それから全く連絡は取れない、携帯も変えたようだし
もしかしたら死んでいるのかもしれない

だが、近所の人の話では研究者らしき老人と共に何処かへと向かった、という話が多かった
では何処へ向かったか…私は自問自答を繰り返し、最終的に一つの答えに辿り着いた

『学園都市』

巨大な壁で囲まれたそれは、あの時の私にとって彼を閉じ込める檻にしか見えなかった

しかし、親にどう頼んでも学園都市には近づく事すら出来ず、+私はつまらない人生を歩み続けた、彼が居なくなつた私の人生はまるで歯車の欠けたオルゴールのように空回りしかしくなく、楽しい学校生活は過ごせたが、何かが足りない…

満足できない

そんな感じだ

…だが中学三年の冬、そんな人生に転機が訪れた
それは親の一言

「…光二、学園都市に住みたく無いか？」

思わず言葉を失つた…。私は彼が学園都市へと移つたという話を聞いたその日から毎日熱心に頼み込んで
も絶対に駄目、その一言で終わらされた話を親が私にしているのだ

「…父さん…今…なんて？」

「いや…な、父さんが間違っていた気がするよ、お前は必死に友人の元へと行きたいと言っていたのに、

父さんはそれを完全に否定した、謝らせてくれ、すまなかつた…」

あろう事か頭まで下げられたのだ、だが私は未だに親の考えが分からなかつた

「…しかし、急に…なぜ？」

「ああ…お前もそろそろ高校生だろう？いい区切りだし…お前の意見も聞こうと思ってな…」

私は歓喜のあまり踊りだしそうになったが…それを抑え、父さんに一言言っただ

「ありがとう」と

当日、私は自分の荷物を持ってバスへ乗る

『学園都市』…そこは外側とは何年もかけ離れた科学力を持っており

人間の秘められた能力を開花させる事ができるという…

そして私は思う

同時に搭乗した人達は胸に何を抱えているのだろう

自分の秘められた能力への期待か

それとも未知の科学力への好奇心か

私はどちらでも無い

友人に会えるかもしれない、という期待だ

私はバスの窓から流れる外を見ながら考える

彼の身長はどのくらい伸びただろうか、

私より高いだろうか、

低いだろうか、

髪を染めたりなどはしてないだろうか、

不良になっ てはいないだろうか、

悪い女に騙されてはいないだろうか、

自分の事を覚えているだろうか、

楽しく生活しているだろうか、

：

生きているだろうか、

> i 1 0 6 7 7 — 1 5 2 0 <

01・引越し&It・Start>(後書き)

私も学園都市に行きたいです

02・入学式<Reunion>（前書き）

入学式なんざ寝てた記憶しかねえぜ！ヒャッハー！
卒業式もなア！ハッハー！

02・入学式<Reunion>

それで私は中学校をそつなくこなした訳だが…この生活に面白い事も思い出も無いので話す事は無い

だが勘違いしないで欲しい…私にとっての面白い生活とは『彼』が居なくては成り立たない物だ、つまり私がつまらないうんとも他の人から見れば十分楽しそうに見える

まあ、その中でも思い出せる事といえば能力の開花ぐらいだろうか…

私の能力は『フリーウオーカー粒子移動』

自分の体を微粒子化させ、自由に移動する、という物でレベルは4だった

どうやら初めて見られる能力らしく、レベル分けが詳しく設定されていないから空間移動能力と同じで自分を対象にできるならレベル4、だとか

拍手が起きるくらいなのだから恐らくレベル4というのは価値ある物なのだろうが、正直、『より価値のある実験動物』モルモットと言われる気がするのではないので…とても不愉快だ

他にも風紀委員なる物の一人から勧誘などを受けたが…無論断った、正直に言えば面倒だし、人の為に何かしている暇があれば私はさつさと『彼』を見つけない

そして何より一番気に食わなかったのは勧誘してきた奴が『さす』的な痛い語尾を付けてた上に高飛車っぽく、そして若干見下し

てたからだ、一発殴ってやろうか。と考えたぐらいに腹が立った

…というより、この学園都市での人助けなど本当に無意味だろう

何せ、力を持った人間は試したくなる物だ、最初は動かない標的相手に試しても、段々と動くものを狙いたくなる、そうして辿り着くのが同種族の人間、だ

そんなゴミのような人間は幾ら拾って捨てても無くならない

そんな事に時間を割くなんて馬鹿馬鹿しすぎる、それが私の考えだ
捻くれているように見えるかもしれない、でもそれが事実なのだから仕方が無い

【事實は受け止めるべきだ】

事実を認めず『そんな事言わずにやってみよう、いつかは報われる』
なんていう方がもっとタチが悪い

いつ報われる？誰に報われる？どうやって報われる？

そんな事を聞いても誰からも答えは出ない

何故なら報われないからだ、

もしも報われた、と思うことがあってもそれは必然であり、その為の努力をしなくてもその物事は起こる事が決まっていたイベントだろう

何故なら運命は決まっている、ただ分岐点が異常に多いだけだ

でもその分岐点というのはいい事をする、悪い事をする、なんていう小さな物じゃない

『目の前の人間を殺す』

『自分の右手を切り落とす』

『首をつる』

そのような人生を終わらせる分岐点のみだ

つまり人生とは私から言わせれば『バットエンディングがとても多く、グッドエンディングが一つだけある死にゲー』なのである、死にゲーといってもやり直せないが

なので、正確には『バットエンディングがとても多く、グッドエンディングが一つだけあり、尚且つコンテニュー不可で時間制限付きの死にゲー』という事か

等と若干危険な事を考えながら朝の朝食のチーズトーストを頼張り、玄関のドアを開け、階段を降り

入学する高校『かぜなみ風波ヶ丘がおか高等学校』へ向かう

その際、曲がり角があった、普通なら『パンをくわえた可愛い子とぶつからないかな』等と考えるが…私の場合『パンをくわえた』

彼』とぶつからないかな』である、我ながら少々異常だと思う

もつとも、私がパンをくわえてるので彼がくわえている必要性は皆無だが…

が、別にそんな事は無かった、代わりにトラックが突っ込んできたあんな物にぶつかったら運命の出会いを果たし、楽しい生活が始まる所か、生活が終わる…ちなみに少々頭にきたので運転手の顔を覚えてやった、何故かガスマスクをしていた。学園都市って本当に意味が分からないな…

そして…途中に超豪邸があった、中にはどんな成金が住んでいるのだろうか…

私の予想では『…ですの』の痛い小学生…いや、今年で中学生か？恐らく、あれは小学5～6の若干大人ぶっていて一番うざったい時期の喋り方だ、いや、口調とかではなく、一方的な物言いとか

そして、超豪邸を通り過ぎようとした瞬間…

思いっきり何かが横から突っ込んできた

が、私は衝撃を微粒子化して逃がし、そのまま元の形に戻る

所謂モーションキャンセルという奴だ

これを応用すると真面目に北斗ナント力拳が真似できる、頭は破裂しないが

とりあえず私はぶつかった人物に安否を確かめる言葉を掛ける、これで死ぬわけは無いが…こういう場合はお約束だろう？お嬢様とでもぶつかれば「大丈夫ですか？おぜうさま」とでも何とでも言える

のだがどうも男らしい…今日は本当に厄日だな

「おい、大丈夫か？」

「痛え…あ、ああ…すまな…」

相手の顔を見て思わず硬直する

転んだ少年の顔は昔にどこかで見た顔に似ている、顔つきが変わってはいるが、何処となく彼に似ている

何時だろうか、最後に見たのは…？まるで思い出せないが

そんな事はどうでもいい

やっと会えたのだ、『彼』に

みかみあきら
御神光に…

私は抑え切れない衝動を噛み殺し、一応確認を取る

「……光、か？」

私の言葉に飾りっ気の無いショートカットの少年は一瞬困惑した表情を浮かべ、すぐに不思議な物でも見た表情へと代わる

「…まさか…光二か…？」

その答えに私は思わず涙を流しそうになる、光だ。本当に光に再会できた…

私は基本的に神を信じない、実家は神社だが…だが、この時だけは心の底からこう思えた

【神様ありがとうございます】

一人で感動している私の事などお構いなしに光は懐っこく爽やかな

笑顔と共に話し掛けて来る

「おいおい……！マジで久しぶりだな……！ははっ！本当にあんのかよ！？こんな偶然！凄えな！」

昔より若干明るくなったかもしれない、元々私の知っている光は能力の話もあつてか自分を縛っていた、しかし、この学園都市ではそれが普通として受け入れられる。明るくなるのが普通……か

「ああ……久しぶりだな……」

感動の余り言いたかった言葉は全く言えない、頭の中が真っ白になるというのはこういう事なのだろう

「いやいや……やべえだろ……なんだよ、この奇跡……」

光も光で未だに信じられない、といった表情をしている
私も私で本当に嬉しかった、だがそこで声が挿まれる

『光アアアッ！！フラグ建てるのは別に構わねえが急げよ！？遅刻は許さねえ！！！』

豪邸の方からの声だった

見ればそこには面白い物を見物するような挑発的な表情で此方を見る少年が一人

その少年に対し光は負けじと叫ぶ

「うるせえー！引き籠もりのお前には言われたくねえよ！つかこっちは今久々にまともな友人の顔みて喜んでんだよ！！！」

まともな友人……か、先程の人生の捉え方など絶対に言えないな……とか考えてると再び豪邸の少年は叫ぶ

『そおかー！だが俺は何故か友人が出来ないのでその気持ちは分からんーッ！』

いやいや、引き籠もりなら普通できないだろう。と私が心の中で突っ込むと光はそれを代弁する様に叫ぶ

「当たり前だろうがぁー！お前引き籠もりだろぉー！」

その言葉に豪邸の少年の表情は先程までの笑顔から一変して怒りに代わる、同時に嘲笑の表情も浮かべる

『黙れえーッ！つか遅刻じゃね、お前！？ざまあ！超ざまあ！リア充爆発しろー！』

…遅刻？何を言ってるんだ…まだまだ時間に余裕があったはずだ、かーなーり余裕があったはずだ

しかし光は途端に顔を青くして私に急いだ口調で言う

「そうだよ、そうだよ、そうだった！お前も急げ！あと三分だぞ！」

…何と？思わず脳内で時間が止まった、いやいや、おかしい…腕時計で見る限りじゃ余裕は配布したい程ある……

光を疑うわけではないが、思わず自分の腕時計を確認する、ちなみに私の腕時計は有名時計ブランドの【Wire d】だ
しっかり食い入るように自分の腕時計を見ると秒針が止まっていた

「うえ？」

思わず素の間抜けな声を出してしまう…おいおい、こっちの方がこんな事ってありえるのかよ！？だ。終わったな、私、始業式で遅刻とか…何処の学園ドラマですかコンチクショウ

「という事で急ぐぞ！って…あと一分しかねえ！無理だ…」

光はがつくり肩を落とす、そりやそうだろう…無理だな、朝っぱらから能力使う気にもなれ無いしな…。

……仕方ない

「なあ、光……諦めよう、いつその事もうゆっくり歩いて行こうじゃないか」

その言葉に光は驚愕する。…昔は私の考え方は『人間＜規則』だったからな。その頃の私しか知らない光にとってこの言葉は驚きだろう。昔の私ならば絶対にありえない台詞だからな…。

「……いいのかそれで？」

光はきよとした表情で聞いてくるが、そんなやり取りをしている間にもう時間切れだ

「いつその事始業式が終わった頃を狙ってクラスに入ろうじゃないか」

「すつごいダメ思考！？新学校生活始まって早々そんな不良みたいな！？」

「おいおい光…ダメ思考とは酷いな、前倒れ思考と言ってくれ」

「お前本当に変わったな！？」

久々に見る光の笑顔、この瞬間の為だけに生きてきた、そう思える…
……結局先生方からありがたいお言葉を頂く事になった。初日から
コレか…

02・入学式<lt;Reunion>>(後書き)

……本当にこんな状況になったら私は仮病を使って休みますね、先生のありがたいお言葉は耳に痛いです

03・新聞部&1t・Speed> ; (前書き)

自分の作った世界に入りたいんですが、どうしたらいいですかね？

03・新聞部&It:Speed>

「なんという事だ…事態は思ったより重い…」

時計の音だけが静かな部屋に響き、まるで世界の全てが止まったような感覚に囚われそうになりながらも夕暮れで赤く染まった部屋で椅子に座り、私は真剣に悩んでいた

…アイス片手に

普段、私は必要な分の栄養さえ取れば問題は無いのでアイスなど買わないのだが、シヨックのあまり買ってしまった…

【ゴリゴリ君 ヤシの実サイダー味】

本気でゴリゴリとした食感の上にヤシの実サイダー味という意味不明な味なので死ぬほど不味い

だが、それが絶品の用感じられる程までに私はシヨックを受けていた

私がシヨックを受ける原因は二つ

一つ目は何かよく分からない意味不明な集団に誘われ、参加してしまった事

二つ目は光関連

とりあえずまとめよう、まずは一つ目からだな…

時は体育の授業中

私は体育の授業には参加しなかった、理由は右足の捻挫
ついこの間、光の住んでいる豪邸に住む引き籠もり『風波聖徒』かざなみ まさとに
会った時だが…階段で思いっきり踏み外した

風波は…少々変わっていたが…まあ、いい奴だったよ、个性的、と
いう事で…何しろ光の友人だ、いい人間に決まっている、違かった
らこの世から出て行つて貰うだけだ

まあ、そんな訳で見学している、目の前では楽しそうに運動に勤し
む生徒達の姿が広がっている、あれ、光が珍しく来ていた風波を殴
り飛ばした…仕方が無いな、風波が通りかかった女子生徒の口説き
に入ったりするからだな…

その光景を見ていると何故か自分だけ隔離されたような気分となり、
無駄に気が滅入る…とか思えば別に良かったのだが、今は光との
再会で超ハイテンションだったので全然気が滅入らなかった、むし
ろ眠たくなってきた、なんて感じな時に声を掛けられた

「もしもし？生きてますか？」

何処から現れたのか急に女子生徒が目の前に屈み込む感じで食い入
るように顔を覗き込んで来る

その声は何と言うかこう、エネルギーが余つてるというか、元気す
ぎるというか、私にとっては見てて疲れる

それと同時に物凄い質問だと思った、生きて無かったなら私はなん

なんだ、生きる屍か

たしか…見学は私一人だけだったが…

黒髪ショートにやや童顔、胸皆無、胸が残念な感じになってるが、それ以外はほぼ完璧だろう、まさにアウトドア系といった感じで、街の中を歩けば振り返る人もちらほら出てくるだろう

「生きてますね、生きてるなら返事をお願いします、死んでるなら聞いてください、一方的に喋るので」

「どんだけ私を殺したいんだ…君は…」

この童顔胸鉄板娘め、と言いそうになったが私は表面上では人当たりのいい奴という事で通らせているので我慢する

「おお、まだ貴方の心臓は弱弱しくも力強く動いていた訳だ、これこそ生きているという感動…あなたも噛み締めるといいですよ！」

目の前の女子生徒は目を閉じ、心底感動しているような口調で語る…馬鹿にしているのか？

分らない、第一印象はよく分らない奴だ、むしろ理解できる人物が居るなら紹介してくれ、そして今すぐここに連れて来て説明してくれ

「…で、何か用があるのか？」

思わず少々声に怒りが混じるが…仕方の無い事だと思う。そんな私の声に対し女子生徒は大げさなりアクションをして、言葉を返す

「おおっと、死人が生き返ったのに驚いて本題を忘れていました…
不覚！」

「既に君の中では私は死人扱いか、酷いな、酷すぎる」

間違いなく学校という教育の場でなければ殴っている
本当に驚いたような口調で言うものだから本気で腹が立つ、なんだ
コイツは…病院から抜け出したか？…いやいや、待て、落ち着け…
もしかしたら私の忍耐力を試しているのかもしれない…

「ふふふ、知っているんですよ？貴方の名前は『月山光二』^{がちやま} あだ名
は『がちたん』^{はすかしい} やけに可愛いあだ名ですね、私だってそんな可愛い
あだ名付けられませんよ？いやー本当に可愛い事^{はすかしい}で…」

本気で殴りそうになった、いや、軽く頭を叩いてしまったが…許さ
れるだろう、絶対に

私は悪く無い、断じてだ

「ひゃうつ！…痛いじゃ無いですか…」

「すまない、手が滑った、許さなくていいから消えてくれ」

女子生徒はわりと本気で叩かれた頭を抑えながら言う、若干涙目だ
った。軽く本気で叩いてしまった

可愛い声をあげても無駄だ、私の辞書に容赦の二文字は無い
むしろ可愛い声をあげれば余計叩きたい…と、言いたいところだが
私は普通だ

「で、用とは何だ…次ふざければ二度と目に光が籠らない様にして

やろう」

「おお怖い怖い、で、用ですけどね…勧誘です」

先程までの表情とは打って変わって真面目な表情になる、先程までの所謂営業スマイルだったのか…

「貴方は『^{フリーウオーカー}粒子移動』という妙な能力を持っていると聞きます…
…？あれ、『^{ストーカー}尾行移動』でしたっけ？」

私は激怒した、必ずこの邪知暴虐の女子生徒を除かねばならぬと決意した

「すまん、殺す」

どうやら本気で迷っているようで、顎に人差し指を当て悩んでいる…
私も本気で殺したいので無表情で首に手を伸ばす

「ストップ！悲鳴をあげますよ！」

女子生徒は手を突き出して言う…残念ながらコイツは可愛いので悲鳴を上げれば私が暇を持て余して美少女襲っている図にしか見えな
いだろう…

顔が悪い、又は男なら今頃殺せていただろうに…

「それで、本題ですがね…貴方は微粒子化する事で誰にも気付かれ
ず尾行する事ができる…」

なんて事を言うんだ、と心の中で思い、ちゃんと口でも反論する

「絶対にしないけどな」

真剣な顔で言われると非常に困る、ストーカーが天職だ！と笑顔で言われている気分だ…

「そして、貴方は部活動に所属していませんね？」

「ああ、面倒だしな」

部活…とくにやりたい事も無いので所属していない

「その点を全て統合した結果…貴方は新聞部に所属するのがベストです！」

お前は押し売り商人か、第一新聞部なんて聞いた事も無い…怪しすぎる…

「…断ろう」

こういう怪しい話は断るのが常識なワケで、断るしかない

「待つて下さい！今なら入部するだけで学園都市製超高性能デジタルカメラをお付けします！」

お前は通販か、今なら三本セットです！か？
だが…デジタルカメラは…魅力的だな…

思い出は大切だ

たとえば人に見せられないような物でも…な？

「…部活動時間は？」

ちよつとだけ、ほんの少しだけだが、入ろうと考えてしまった、だからこんな質問をしたんだ
活動時間が短ければ入っても…いいか…？

「え？無いですよ、そんな物、なんかスクープっぽい見つけたら適当に撮つといて下さい」

…え？…短いどころか無かった…、しかし、部活動時間無しでデジタルカメラ付き、そして一応にはコイツのような美少女がいる（性格と胸には目を瞑る）のだから…部員も多いだろう

「部員は？」

別に、別に！入ろうと考えてるわけじゃないが気になるところだ

「ええとですねえ、よく分からないんですけど、私一人しかいないつていう説が最有力説ですよ」

…あ？…多いどころか少なくさえなくてコイツ一人だと…？ますます怪しくなってきたな、先程から嫌に視線を逸らしてるしな…

「本当に部活か？」

これは、本当に疑問に思う、実は部活なんかじゃないんじゃないか？コレ…

「ああーっと…、ただいま議会でその議論が続いているんですけど、現在は部活ではなく私個人の行動である派、が勝っています」

どこで開かれているんだ、その馬鹿馬鹿しい議論は…全員に平手打ちをして目を覚まさせなければ…というよりやっぱり違うんじゃないか！何に誘われてるんだ！？私！

「つまり…まとめれば…私は面白い物を見つけたら撮って、部員が私を含めても二人で、お前の趣味で部活では無い物に勧誘されると…」

なんだ、この展開、聞いてないぞ…。私は光と幸せな学園ライフを満喫するつもりだったのだから…？

「はい！そうです！」

物凄い「ぱあーっ！」という音が聞こえるほどの笑顔で言われた…
…はぁ、付き合うのも馬鹿らしくなって来た…

「で、入ってくれるんですね？ありがとうございます」

何か勝手に話を進められた、無論入るわけが無い、こんな美味しい話には裏があるんだ

「待て、そんな怪しい物に入るはずが無いだろう…」

何を勝手に決定しているんだ…コイツは…

「では…このデジタルカメラは…」

女子生徒は片手で無茶苦茶薄いの超頑丈で耐水等…無茶苦茶超高性能デジタルカメラを人差し指と親指で挟み、ゆらゆらと私の目の

前で揺らす

…っ！釣られるな…！あれはエサだ…！掴んだら良く分らない盗撮世界に入ってしまう…！

「…ほーれ」

女子生徒は若干カメラを上上げる

「ああっ！」

思わず釣られて手が伸びる

「…これが欲しいんですか？欲しいんですね？」

女子生徒は手を引いてカメラより自分の顔を前に出すことによって、私がこれ以上カメラに手を伸ばせ無いようにする

無理矢理にでも伸ばせば私は彼女と唇を合わせる事になる

それだけは絶対にゴメンだ

別に可愛く無いとか、そういう問題じゃない

誰でも可愛ければヤツちまおう、という考えは私は反対だ

しかし私は、ここで重要な事に気が付いた

「…フッ…なんだ…簡単なことだ…自分で買えばいいんじゃないか…」

一気に女子生徒の顔が焦り一色に染まる、形勢逆転、だ

「ええ…っ！？ここで引き下がるんですか！？釣られてくださいよ！」

何か頭の悪い魚か何かに思われているようで非常に気分が悪い
それに…何も無駄に貰うことに拘らなくてもいい…買えばいいじゃないか

手持ち金で……足りるだろうか

「ほ、ほら！カメラ！」

先ほどとは大違いでかなり焦った様子でカメラを目の前に突き出してくる

だが私はもう釣られない…悟った

「フツ…どうしても私を入れたければ光のＴシャツでも持ってくるんだな…」

割と結構かなり本気で欲しい

「持ってませんよ！」

困惑の顔一色で女子生徒は言う…

ちなみに光は地味に有名人だ、…最近知ったのだが風波の父親がこの学校を経営しているらしい…

それならば風波の友人である光は知名度が高くて普通だろう…

そもそも風波自体がかなりの有名人だ、まあ…分からなくも無い…あの個性ならな

「…仕方がありませんね、では私の下着を付けますのでそれで妥協してください」

苦渋の決断、とでも言いたそうな表情でスカートの中に手を伸ばす
女子生徒

わかった、こいつ変態だ

「それを片手に私は下校すれば次の日から虐めの対象になるだろう」
それどころか光からも見限られ、私は完璧に孤立し千の風になるし
かなくなる

「私もノーパン下校なので条件は同じです」

ニツコリ笑顔で言う女子生徒：まあ、そうか：ならば：
いやいや、まて、騙されるな！落ち着け月山光二！お前の禁欲生活
はなんのためにあつたんだ！
こんなときの為だろう！

「：それは：お前が趣味、と言い張れば：いや：虐めの対象か：」
：というより下なのか、上では無いのか、いや：どちらでも困るが
：上なんていらなさそうだしな

「もう：何だつたらいいんですか！私が旧スク水に来てポーズを取
っている写真ですか！？」

マニアックすぎる上に何でお前の写真付きなら入ると思うんだ？

「どんだけ体売りたいんだお前は！」

私以外ならホイホイ釣られてしまうだろう、だが私に欲は無い

自己犠牲を続けて生活してきた成果だ

「ああ！もういいですよ！じゃあ旧スク水を来た御神光さんの写真で手を打ちましょう！」

…何？どんだけマニアックなんだと

「……」

「何でも言わないんですか？！ドン引きですよ！？」

…いやあ…

あまりにもコイツが面白い考えで言葉も出なかった、しかも何か勘違いされた

「よし、決めた…デジタルカメラだけで手を打とう」

……もうお手上げだ、放してくれそうに無い…

「…はあ、最初からそうしてくださいよ」

正直言わせて貰えば此方としても最初から諦めて欲しかったのだが…
本気で疲れたような顔をして言う女子生徒
こっちも疲れたんだがなあ…？

「あ、一応名前を聞いておこう…」

名前は一応聞いておかなければ後で色々と不都合が起こるかもしれない…、ので、一応聞いておこう

「ええと、風美丘速魅かざみがあかはやみと言います、風に美しいに丘、と書いて風美丘、速度の速に魅力の魅、と書いて速魅です」

かなり丁寧な自己紹介を受けた、此処まで丁寧な自己紹介なんて初めてだ、驚きだ

「どうやら…速度があつて魅力のある子に育つて欲しかったみたいですよ」

魅力は無いな、特に胸とか、胸とか、胸とか、うん、胸とかな

「今、胸が無いと思いましたね？それは間違いです、胸が小さければ若干大きいノースリーブ服を着るとですね…胸チラが自然と起るわけで…魅力的ですよ？今週の土曜、堪能させて上げましょう」

やっぱりコイツ変態だ！絶対そうだ！変態だ！！
アブノーマル

「頼むから家に上がらないでくれっ…！」

何真剣な顔をして話しているんだ…コイツは…というか、真面目に上がらないでくれっ…！

しかし、後にコイツが家に上がるフラグはまるで完全無敵要塞の如く折れないので結局不可抗力によってコイツは私の家に上がるのだろう、そしてコイツは本当に胸チラばかりやってきて、そうやって優しく私の心を腐らせるんだ…

「では、このカメラは今の内に渡して起きますね、ハイ」

そういつて風美丘は私の手首を掴み、カメラを手渡してきた、その手は微かながらも温もりが…

人の温もりなんて忘れていた、直に肌が触れ合うなんてかなり久しぶりだろう、特に異性

不味い…これが終わり良ければ全て良かったように思えるシステム…！

不味いな、風美丘が魅力的に見えるぞ？…落ち着け…素数を数えろ…
4…9…13……なんで私は忌み数字ばかり数えてるんだ、人格捻じ曲がりすぎだろう…

そんな時、野太い男の声が聞こえる、間違いない体育教師の声だろう

『おおーい！風美丘！また授業を抜け出しているな！？』

「うえっ！？で、では！この辺で！」

もしかして常習犯なのか…

彼女は焦って走り出すが、…あの体育教師は走力が物凄いので逃げられないだろう…

と、思ったのもつかの間…彼女はグラウンドに植えてある木に向かってジャンプし、木を蹴り、そのままフェンスを踏み台にし、開いている窓から教室内に侵入した…

しかもあの教室は私のクラスなので、中には誰もいない…
なんだ…ただのくノ一の生き残りか…

「畜生…逃げ足の速い奴め…」

体育教師…如何にも鍛えてますといった逆三角形、コイツの名前は無名島先生、学校一賑やか先生とされている、そして何とも教育熱心な熱血教師で、初日にはありがたい話を頂いた

…そんな無名島は悔しさと怒りの混じった声で呟く…いや、逃げ足とかの問題じゃない、普通の人間の動きでは無いだろう？あれ…

「先生、アイツは一体…」

「ああ、あの異常な運動神経はな…能力だ」

「能力…？」

「ああ、『クイックリー超速反射』…人間の反射速度をはるかに上回る速さで反応できる、という能力だ…壁を走るのは勿論、水面さえ走れるらしい」

「人間じゃないだろう、それは…水面を走るとは…何もありだな、ここ学園都市は…やはりくノ一か…」

「まあ、そんな速さで筋肉を動かす物だから筋肉痛やら肉離れやらを頻繁に起こすらしいが…アイツは特殊な筋肉で筋肉痛やら肉離れには全くなならないらしい…まさにあの能力の為にあるような体だな」

「速魅の速い、はクリアしているな…速い所じゃないが…」

「でも先生、どちらにしろ呼び出せば終わりじゃないですか」

「まあな、だが、俺の一つの信念ってか、負けず嫌いだな、直に捕まえるまでは見逃してやるさ…」

「なんだかんだで先生も楽しんでいるんだな……………」

「だったら始業式遅れたのも笑って許してくれよ、と」

03・新聞部&1t・Speed> ; (後書き)

体育教師って怖いですよ！なんでだろうかね？
個人的に体育教師と音楽教師はどちらも怖い

04・人殺し&1t;Level5.5> ; (前書き)

私は実際に掲示板に自分のことが張り出されたらショックで死にます

04・人殺し<Level5.5>;

もう一つは光関連の話：

時は昼休み

私は昼食を済ませばんやりと中庭を見ていた、理由はお察しの付く通り、奴だかざみがあか…いきなり勧誘されたかと思えばホイホイと釣られて入ってしまった、今思い返せばなんてこつたい、だ

中庭では、何かあったのか掲示板の周りに人が集まっていた…、しかし私の精神は後悔に支配され、動く気にもならない、それどころか広げた弁当に手すら付けていない、それほどに脱力していた

…だけではなく、内心『風美丘死なねーかなー』とか『風美丘不慮の事故で死なねーかなー』とか考えてたりしたわけだ、自分にも少しは非があつただろうが全面的に風美丘の責任にする事によって私は少しだけ気が楽になる…、まあ、それでもこの状態なわけだ…

そんな感じに私が脱力の波に身を任せていると物凄い勢いで肩を揺すられる、仕方が無いので振り向けばニコニコ顔の風美丘

……なんで来るかなあ……理由は大体察せるが……

「月山さん」

「嫌だ」

「まだ何も言つて無いんですけど!？」

言わずともヒシヒシと伝わってくる、見える、見えるぞ、お前の感情が…

どうせあの掲示板の内容を見に行こうとかそんな事だろう、絶対そうだ。間違い無い

「……掲示板に行こうとかそんなだろ、お前だからな……」

「おやおや、お前とは酷いですね……一応私は三年生だったりします！つまりあなたよりも年上なんです、敬語を使いましょう！」

人差し指を立てて、ニツコリ顔で言う風美丘。……年上…？

嘘だろ？外見の面でもそうだが、それよりなにより、認めたく無いこんな物が先輩だって言うんだったら死んだほうがマシだ…

…いや、待て、そうか…そういう事が…

「……学園都市は飛び級もあるんだな…」

「嫌でも私が年上だって事を認めたく無いんですね!？」

先輩はまだしも年上は在り得ない、絶対にだ。こんな奴が年上だったらホワイトハウスに爆竹投げ込んだほうがマシだ
でもなあ…認めないとどうせ帰らないんだろうな…こいつ…

「へー、そーなんですかー、風美丘先輩は私より年上だったんですねー凄いなー憧れちゃうなー！」

大丈夫、大丈夫、棒読みだったが大丈夫だろう、コレでこいつは満足して帰ってくれるだろう、ああ、こうして私のクラスの平和は保たれるのだ、お疲れ様、私

「むう…、棒読みなのが気になりますが…まあ、分かってくれたならいいでしょう、では私はここらで…」

そついつて教室から出て行く風美丘…。ふう、終わったか……。本当に疲れる奴だ…

「って、そんな事わざわざ言いに来る様な面倒な女じゃないんですが！」

…が、やっぱり本筋は違つようで普通に風美丘は戻ってきた…、くっ…まだ戦いは終わって無いのか…

私は本当にだるくなってきたし、もう中庭に行かないことには何も終わらないので行く事にする

席から立ち上がっただけで風美丘は察したようで満面の笑みで私の後ろを歩いてきた…

通りすがりに見知らぬ男子生徒に何回か睨まれつつも中庭に到着、人を掻き分けて掲示板の前に出る。

そこには白紙に達筆でこう書かれていた

○

— 生徒会報告

—

— 7月21日をもって

—

— 一年B組 【御神光】を

—

— 生徒会副会長に任命する

—

— なお、御神光は

—

— 放課後に生徒会室に来るように

—

— 生徒会長 夏目優火

○

……すげえ、光が表舞台に立ってる……こりゃ、夢に違いない……そう
勝手に確信した私は目をこする

○
— 個人報告

— 7月21日をもって
— 一年A組 【月山光二】を
— 新聞部副部長に任命する

— 新聞部部长 風美丘速魅

もつと嫌なものが目に入った……！？隣の風美丘は超満面の笑みで
コッチを見てくる、そのあどけない笑顔が逆に私を苛立たせる

「ハハ、風美丘先輩。何だ？コレ」

「何って、報告ですよ？分かりますよね？それと先輩は入りません
よ。もつと気軽に！」

どうやら気軽に呼んでいいらしい、なら普段の口調を開放して好き
勝手言わせて貰おう。ストレス発散になるかもしれない

「おい、鉄板女。何だ？コレ」

「報告です！」

…まあ、それ以外の答えは無いだろう。しかも全く動じないこの様
…どうやら私ではこの童顔鉄板女には勝てないらしい…、悔しいが
な…

「…とと、こんな私の報告なんてどうでもいいんですよ、問題はコ
ツチですコツチ」

そういつて風美丘は一枚の紙を指差す

○

— 生徒会報告

— 7月21日をもって

— 一年B組 【御神光】を

— 生徒会副会長に任命する

— なお、御神光は

— 放課後に生徒会室に来るように

— 生徒会長 夏日優火

○

…夢だけど夢じゃなかったー、という事だ、…いやあ、光には人を
惹き付ける魅力があるのは昔から知っていたが…やっとその魅力を
自覚したようだな、よかったよかった、コレがもし生徒会長に無理
矢理任命された物ならその生徒会長とやらを一度は殴らないと気が
済まないが…自分からやったのなら…

「なんだこれ？なんだこれええええええ！！！」

隣から聞き覚えのある声…光の声だ、どうやら、本人の意思では無いらしい

…少し、話を聞かせてもらうか

時は放課後

私は激怒した、必ずあの邪知暴虐の生徒会長を除かねばならぬと決意した。

私がメロスなら風美丘はフィロストラトス、光がセリヌンティウスで生徒会長…『夏日優火^{なつひ ゆうか}』がディオニスか、原作通りなら和解するが…私にそんな考えは一切無い。

今一言で考えを現せば『ジェノサイド』だ

私と風美丘は生徒会室の前にいる、あの腑に落ちないふざけた張り紙の真相を聞くまでは私は帰れない

コン、コン、コン、と三回ノックして、返事を待たず私は生徒会室の中に入った、私は普段行儀は良い方だ

ただ、非常に腹が立っていたのだ、生徒会長にも！隣の馬鹿げた先輩にも！

「どうした、既に下校時刻は過ぎているぞ？」

生徒会室に入って見れば高級そうな椅子にこれまた偉そうに足を組んで座っている女子生徒、これが噂の化け物生徒会長夏日優火…

ショートカットで片目隠し、顔は化粧の要らない程まで整った顔で、

一般的に美少女と言われる、顔だ

…なんだこの学校？美少女しか居ないじゃないか…

しかも、足は所謂美脚と言われる物で大変魅力的だ…まあ、一般的な目線から見れば風美丘の足も魅力的だろうが…

私的には今の所こいつ等には怒りしか無い！

一人で怒りに燃え上がる私を余所目に夏日生徒会長は勝手に話し始める

「しかし、君がここに訪れるなんて珍しいじゃないか残念だが…光はいいぞ？」

「人をストーカーみたいに言うんじゃない…それより、質問があつて来たんだ…」

まるで私を見ていないかのような雰囲気を漂わせながら夏日生徒会長は目を瞑って黙り込む

このまま硬直状態が続いても何も変わらないので、私は予め掲示板から剥がしておいた張り紙を机の上に叩き付ける

「この張り紙…意味を教えてくださいませんか？」

○

— 生徒会報告

—

— 7月21日をもって

—

— 一年B組 【御神光】を

—

— 生徒会副会長に任命する

—

— なお、御神光は

- 放課後に生徒会室に来るように
- 生徒会長 夏目優火

○

張り紙を夏日生徒会長は一瞬だけ確認し、すぐさま元の姿勢に戻る
と夏日生徒会長は呆れたような声で言う

「意味、と言われてもな…読んで字の如くだ、日本語の勉強は自分でしてくれ」

「そういう意味じゃない……分かってるだろう？」

あくまでも話を逸らそうとする姿勢に私は若干苛立ち、声を荒げる

「特に深い意味は無いさ、適任だと思ったただだよ」

……多少強引だったとは言え、もしかしたら言葉の通りかもしれない、
い、本当に適任だったから指定したのかもしれない、ならば…
私が勝手に頭に血が上って勝手に勘違いして…か…？……

私が一人で何となく納得し、後悔の念に襲われかけた時、先程まで
黙っていた風美丘が不意に話し始める

「『原石』だからじゃないですか？」

「！」

一瞬夏日生徒会長の目が見開き、すぐに先程と同じような余裕と自信
たっぷりの顔に戻る

どうやら、完璧超人と呼ばれた生徒会長も、ポーカーフェイスだけ

は習得できなかったようだ…

しかし、まさか此処で風美丘が生きてくるとは……一体誰が予想しただろうか？

「更に言えばかなり強力な能力ですよ？それに…、あの事件は悲惨でしたねえー…」

風美丘が更にそう言うと、夏日生徒会長の表情は一気に険しい物となる

「…何故あの事件の事を知っているのですか？風美丘先輩、そして何処まで知っているんですか？あの研究所での出来事を…！」

「ええ、しつかし…あなたも随分な性格の持ち主ですよ？あなたの能力ならばあの施設内の人間を助けられたでしょうに…、まあ、助けられなかったのかもしれませんがどね」

風美丘の台詞、何処か違和感を感じると思ったのだが…、今分かった

…恐らくこいつは『事件』なんて全く知らない…、最初の『原石』

…多分そこからハツタリなのだろう、そこで夏日生徒会長は大きく反応した、そこで過去に何かあったことでも予想したのだろう、だから次に『あの事件』…風美丘は遠まわしな口調で喋り、相手が言った単語から連想して会話をしている…

結局夏日生徒会長は一人で勝手にネタ晴らしをしているワケだ

…少しだけ風美丘を見直した…な

「……風美丘先輩、もしかして…あなたも『人殺し（レベル5・5）』か？」

その言葉に更に風美丘は満面の笑みを浮かべ、こう一言

「知りませんよ、だって私」

その後、風美丘は夏日生徒会長の耳元まで移動し、耳元で何かを呟く

「なっ……！？くっ……！！」

それと同時に夏日生徒会長は風美丘を激しく睨む

「ハハ、いやですねえ…そんな怖い目で見ないくださいよ？綺麗な顔が台無しです」

チツ、と夏日生徒会長は舌打ちし、再び元の表情に戻る

「……もう話すことは無い、帰ってくれ」

……結局失敗してないか？…風美丘は何がしたかったんだ…しかも、夏日生徒会長は気分を損ねた様で全く相手にしてくださらないこれは困った、というか既に私は話しに付いて行けてない

「おやおや、いいんですかねえ…？そんな事言って…これ、ばら撒いちゃいますよ？」

そう言っただけで風美丘は夏日生徒会長の顔の前に一枚の写真のような物突き出す

その写真を見て夏日生徒会長の顔は一気に赤面する

「なっ！？なんでそんな物っ！」

夏日生徒会長はかなり焦った様子でその写真を奪おうとするが、風

美丘は即座に回避し、意地悪い笑みを浮かべながら私の隣に戻ってくる

夏日生徒会長は軽蔑の視線で風美丘を睨むと、諦めたように言う

「……わかったよ、私の負けだ、御神光、彼を生徒会副会長に認定した理由は一つ、監視の為だ……」

監視……だと……？私の考えでは……そこまで重い話で無いはずが……まあいい、どうか、午前中のような話ではありませんように……あと、『知ったからには死んでもらおう』というオチがありませんように……が、触れてはいけない部分なのだろうが、此処まで来たからには決めるだけ決らせて貰おう

「監視……だと……？一体何の為に！」

「そこまで、君が知る必要は無いだろう、人には誰にも知られたく無い事もある物だ」

私が放った言葉に対し、夏日生徒会長は再び人を馬鹿にするような微笑を浮かべ、そう言い放った

「そもそも君は、何故そこまで知りたがる、友人が心配か？友情か？」

友情もあるだろうし、心配でもある……一番の理由は……もう離れたくない、だな

「そうかもしれない、私にも分からないな、だから……お前は素直に答えればいいだけだ」

私はそう言いながら、右手を微粒子化させ、高速で振動させる事によって擬似チェーンソードを作成し、夏日生徒会長の顔に当たるか、当たらないかの位置で止める

「ほう…私に手を上げるとは、よっぽどの勇氣があるか、どうしようもない馬鹿か…」

一体、何がこの女にここまで自信を抱かせる？

そこに私は若干未知の恐怖を覚えた

…が、隣でカメラを構えている風美丘の方がよっぽど恐い。何かが違う、他の人間とは…

しかし、夏日生徒会長も若干諦めが入ってるのか、すぐに話し始めた

「はあ、仕方ないな、話してやろう…まず君は、学園都市一位、一^ア方通行を知っているか？」

一方通行：知らない人間は恐らくこの学園都市にはいないだろう、何でも…どんな攻撃も通用しないと、それどころか…逆に自分の攻撃が自分に矛先を向ける、とか…半分以上都市伝説のような存在だが、私は奴の能力を『ベクトル変換』、又はそれに限りなく近い何かだと考えている

「ああ、知らない方がおかしいだろう？」

「…まあ、そうだな、で…無論学園都市一位という事は、この学園都市最強という事になる」

馬鹿にしているのか、そこまで丁寧な説明は要らないが…まあ、黙ってしよう

何か言って再び気分を損ねられても面倒だ

「しかし最強、であって無敵、ではない何事にも例外は存在するのだ」

「例外？それが光だとも言うのか？」

全く話が読めない…、というか、光を生徒会にいられた理由を聞くだけだったはずなのにな…？何故こうなってる？

「まあ、そうだ、正確には例外の内の一人、という事かな…一方通行に精神干渉系能力以外の能力で勝利することが出来る能力者…それを、学園都市側は『人殺し（レベル5・5）』と呼んでいる」

「…光が…人殺しだと…言うのか？」

…確かに、学園都市の外じゃあ、何人かに重症を負わせた、という話は聞いていたが…

「まあ、そう言う事だが本人の前では余り喋らない方がいいぞ？友情関係は案外脆いものだ」

生徒会長は再び微笑を浮かべ、此方に背を向ける…
本当に人を馬鹿にする女だ…

「ああ！あともう一つ！新聞部、副部长おめでとう！」

何故此处でそれを…？しかも隣の風美丘は元気にありがとっございます！なんて言ってる

「上下関係を忘れるなよ？」

こいつ相手に上下関係も何もあるものか！と思わず言ってしまいそうになるが、踏みとどまる

そんな感じで私と風美丘は生徒会室を後にした…

しかもそのまま成り行きで風美丘と一緒に帰る事になった…何故だ？そんな事を疑問に思っていた私に風美丘は一言

「月山さん、私が何を生徒会長に見せたか…気になりませんか？」

「別段気にならないが」

「そうですか！そんなに気になるなら見せてあげましょう！」

…見せたいんだな、こいつ…

「じゃっじゃーん！これです！」

勢い良く突き出された写真に写っていたのは

…着替え中の生徒会長

「待て、おかしいだろ？この写真！？」

「これが、我々新聞部、というモノですよ…部費はこういう写真を売り捌いて儲けてるんです」

なにやら途轍もない悪魔のような商売をしている最悪な部活動に入ってしまったようだ…！！

「ま、まさか…その写真も既に…!？」

「ふっ…そんな事をしたら死んでしまいます、出回ってることがバシたら即私はミンチですからね……」

なる程、配布してないのか、等と思った私は愚かだったようだ

「プレミア商品として一枚1200円で売ってます!」

あー、もうやだ。本当に死んだほうがマシだったかもしれない

…

そして現在に至るわけだが…

『人殺し』…光、お前は一体…何があったんだ？

04・人殺し<Level5>>（後書き）

こんな部活あったら…

正直もう学校行けませんね

05・侵入者&It・Luck>・(前書き)

おや…?がちたんのようすが…?

05・侵入者< ; Luck > ;

二つの悩みの種を見つけてしまった金曜日が終わり、今は土曜日の朝私の部屋にはベットがあるのだが異常に硬く、そのまま寝たら体中が筋肉痛を起こすという、呪われたベットなので、その上に更に布団を敷いて寝ている…で、まず起きて一番最初にする事は、その布団を押入れに入れる事だ、これから朝が始まると言っても過言ではない…

それで、布団を持って行く前に押入れを開けるのだが…開けた途端に動くものを見つけた

魅力的な足だった

「待て」

私は即座に手を伸ばし魅力的な足を掴む

正確には足首

「ひゃんっ！何処触ってんですか！」

「足首だが」

止めて欲しい、まるで私が変態みたいじゃないか

「と、とりあえず離して下さい！私が何をしたんですか！」

「不法侵入だ」

まるで自分が何もしてないかのように言い張るコイツは何なんだ…という訳で、押入れから魅力的な足の持ち主、風美丘速魅を引きずり出す

「まず色々と聞きたいのだが…」

「どんな拷問でもすればいいじゃないですか、私は何も喋りませんよ」

真顔で言われると凄い格好いいんだが…勘違いしないで欲しい、不法侵入者の台詞だ

「じゃあ縛って浴槽にずっと顔を沈めとくか…」

「水責めですね！得意分野です！」

風美丘は満面の笑みで言う

…得意分野、あるのか…そんなの…

「ハア…まあ、とりあえず…何故家の押入れに居たか…教えてもらおうか」

「ええとですね、実は私、隣の部屋に住んでるんですよ」

…

なんだと…？なんて偶然だ…

こんな奴の近所か…嫌だな

「それで…押入れが壁をはさんで左右対称に配置されてるんですよ」

「…待て…まさかお前…！」

即座に私は押入れの壁を確認する

見事に穴が開いていた

「開通させました」

…

…

開通させました、じゃないだろう…

「ああ…もうやだ…気が済んだら帰ってくれ…」

「では…まずはクローゼットを拝借させていただきますかね…」

若干嫌な笑みを浮かべながら風美丘はクローゼットに手を掛ける

…何か私が隠してるとでも思ったんだろうか、何も無いと言っのに

「…すみませんでした」

何故か急に風美丘が謝ってくる、その顔は…人を見るものではなく、欲望に飢えた獣でも見るような目であった…

「待て、何を見た？」

「…いや…まさか、貴方にクローゼットで幼女を飼う趣味があったとは…恐れ入りました」

若干顔色を悪くして、目を背けてそんな馬鹿げた事を言う、やめてくれ、本当のように思えてくるじゃないか

「何を言ってるんだ…そんな訳無いだろう」

そう言いつつも、若干不安な気持ちを抑え、クローゼットを開ける
「あ、おはようござ」

思いつきり閉めた

…何？

座敷童子か、座敷童子なのか？

中には…私のジャケットを羽織った少女が居た…うえ？

何？

「…あ、妹さんですね！失礼しました！」

「いや…私には兄弟は居ないぞ…」

「…」

沈黙が訪れる

「…えあ？飼ってるんじゃないですか、あの幼女」

「やめてくれないか、人をロリコンっぽく言うのは」

「いえ、ロリコンっぽくじゃ無くてですね、ロリコンって言ってるんですよ？」

無駄な訂正を加えられた…

そんな中、クローゼットの扉を申し訳なさそうに開けて、問題の少女が顔を出した

「あのお姉ちゃん、そこのお兄ちゃんは私とは無関係だから責めないであげといて？」

で、再びクローゼットの扉を閉める

「待て！納得できるか！」

コイツも引きずり出さないと駄目だな…

思いつきりクローゼットのドアを開けると中で少女は縮こまっていた

「さあ！無理矢理出されるか自分から出るか好きな方を選ばせてやるう！」

「じゃあ、閉じこもる選択肢でお願いするよ」

「お前に選択肢ねえから！」

思わず口調が乱れた、そこまで混乱していたのだ…今ならもう一

度ゴリゴリ君を美味しく頂けるだろう

「お前……！出てこいって！」

「や、やあーっ！離せ！離してよ！」

「ああ、やっぱり月山さんはそういう趣味が……《カシャッ》《カシヤッ》」

カメラで撮らないで欲しい、後で奪うか……というより、コイツ……本気で抵抗している……！

蹴られて手首が痛い

「畜生！なんで……なんでこんな事に……！押入れに変態は居るわ、クローゼットには座敷童子が居るわ……！呪われてるな！」

本日二回目の引っ張り出しに成功した

顔は年相応、だが成長するときと美人の部類に入るんだろうな……胸？年相応、何を期待しているんだ、足、年相応、仕方ないね……髪は黒で、若干所々色が抜けたような白い髪も混じっている、で、服装はキャミソールの上から私のジャケットを羽織っている

とりあえず落ち着くまで待つて五分後

「さて、白状して貰おうか？」

「どんな拷問でもすればよいよ、私は何も喋らない！」

何時の間にか私が拷問狂のような扱いを受けている……

「……燃やそう」

「残念だがそれは死刑に属するよ」

また要らない訂正を受けた……！

「まずは……何故このクローゼットに居たか、それを話して貰おうか……？」

「はあ、仕方が無いな、君は一から十まで説明しないと何も分からないんだな、これがヒントだね」

「よし、分かった、夏^{なつひゆうか}日優火が関連しているな？あの人を馬鹿にしている生徒会長」

地味にこの少女、あの腹が立つ生徒会長に似ているような気がする……妹か？

本当に腹が立つ……思い出すだけで壁を殴りたくなるな

「おお、本当にお兄さんは勘がいいね、助かるよ……で、あの人の能力、知ってる？」

「いや、知らない、知りたくもない」

確か……無能力者じゃなかったか？一部では運動能力という説もあるがな

「んとね、あの人、^{リミットチェンジ}確率変動っていう能力で、その名の通り、目視できる物の確率を変動させる事ができるんだよね」

……それか

奴の溢れ出す自信はそれが原因か……！

……大体分かってきたぞ、奴の言った人殺し……何故知っているか、自分も人殺し、だからか……

成る程な、やっと話が繋がって来た……

「それじゃあ、あの人もレベル5……5なんですね？」

「……？風美丘、何で知ってるんだ？」

「すみません、盗聴機を貴方の首裏に付けさせて貰いました」

……

抜け目が無いというか……

物凄い行動力というか……

「おお、凄い話がサクサク進んで楽だね、いい傾向だよ」

物凄い笑みでそんな事を言う……喋りたがりの年頃だと思うが……変わった子だな……

「で？それとこれにどんな関係が……というより、何故人殺しの事を知って……」

「まあまあ、落ち着きなよ、最後まで話は聞くものだ」

精神が時折大人びているような……

「それでね、あの人の能力は余りにも強大すぎたんだよね、だから能力の操れる値を減らそうとしたんだ」

…
不味い、どんどん暗い話に持ち込まれる、最近こんなばかりだな…
「でね、九人のクローンが作られたんだ、詳しい事は分からないけど、そのクローンとの脳波分散リンクにより、能力を減少させて、一人10%しか操れないようにしたんだ」

…成る程

「で、あの人は10%しか操れなくなつて、無事グッドエンド、のはずだったんだけど…」

出た、ゝのはずだったんだけど

「クローン達が自我を持ち始めちゃったんだよね、非常に残念な事に」

よくあることだな…

「それで、クローン達は自分の操れる確率を増やすためにお互いに殺し合いを始めたんだよね」

話す少女の顔に若干影が差す

「…で、オチは私がそのクローンの一人つて事なんだけど…笑える？」

「笑える訳無いだろ…」

深く溜息一つ

「で、何でここに来たんだ？」

「うん、私はね…この通り小さいんだよ、いわば格好の的なんだよね」

という事は他のクローンは普通に生徒会長という訳か…！？

あんな腹が立つのが本人含んで九人も…！？無理だ、ストレスで死ぬぞ

「だから月山さんのクローゼットに入っていたと…」

「悪い、それは理解できないぞ」

それとこれに共通点は全く無いだろう…

「あのね、お兄ちゃんはさ、オーバーライン法則無視にコネあるんでしょ？」

「法則無視？」

聞いた事も無いぞ、そんな物…

すると、少女は焦って、言いなおす

「じゃ、じゃあ御神光は!？」

「ああ、あるぞ」

「それならいいや…」

何がいいのだろうか…

「そもそも…それなら光の家のクローゼットに入ればいいじゃないか…」

「いや、別にクローゼットに入る必要性は無いんだよね」

…えあ? そうなのか…

何故か少し残念だ…

「あそこは…駄目だよ…うん…危ないもん…」

…何が危…風波か」

「うん、襲われかけた」

…

…

風波は…いい…奴…だ…?…いい奴だ…そうであってくれ!

「で、結局お前は何を望むんだ?」

「朝食、昼食、夕食、好き嫌いは無いよ」

やっぱりか…朝食、夕食はまだ大丈夫だが…昼食は作り置きか…

「あ、あと出来れば肌身離さず居て欲しいよ」

「無理だ」

「理性が持たないから?」

「馬鹿か」

何を言い出すんだ…しかも真顔で…

「私が学校に行っている間はクローゼットにでも入ってきてくれ」

「…そうするよ」

…

「で、名前は?」

「無いんだよね、ユウカでいいよ、ユウカで」

住居人が一人増えた…

出来れば仲良くやりたい物だな、同居するからには…

「ってか、月山さんって料理出来たんですね、やっぱり嫁になるからですか？」

「誰の嫁になるんだ、そもそも私は男だ…」

「御神光さんの嫁でしょう？夢は」

「…」

「だから何で黙るんですか…ドン引きですよ…」

…

いやあ…

05・侵入者< ; Luck > ; (後書き)

実は、この夏日優火のクローンの場合は私が最初に提案した物なんですよね、そしたら空気使い先生：早速十三話で複線を張って下さって：感謝するしか無いですね…

06・復讐鬼<Arachne>（前書き）

夏休み初日、光君は生徒会長とイチャついてるので、がちたんは寂しく過ごす事になります

：

あんだだけ美少女に囲まれて寂しいとは…なんとも贅沢な…！

06・復讐鬼<Arachne>

『それ』は急に意識を持った

もしかしたら想定されていた事かも知れないし、されていなかった事かもしれない

だが『それ』には、そんな事はどうでも良かった

『それ』は明かりを求めた、そして辿り着いた物はモニター、パーソナルコンピュータのモニターだ

『それ』は、無意識の内にその文章を音読していた

「…人体の半機械化、…そして演算装置の埋め込みによる人工的レベル5の作成…」

『それ』は余り深く考える事も無く、その文章の音読を止めたその瞬間、急に暗い部屋に明かりが点く

『それ』は思わず一瞬光りに目をくらませ、徐々に慣れ、目を大きく開く

すると一面赤い部屋、床は赤く、壁も赤い、天井さえ赤い、一面真っ赤だ

「あ…？ああ…？！…あああああああ！！」

思わず後ろに『それ』は下がった

壁に背が当たるとき、普通の人間は何も音がしないだろうしかし『それ』が壁に背を当てた時、確かに音がしたのだ

『ガシヤツ』と

時は昼食時

「待て、色々と聞きたい事はあるが、風美丘…お前は何時から私の家で昼食を取る様になったんだ？」

夏休みの初日、私の昼食には何故か風美丘が居た

ユウカはまだ分かる、何故風美丘が…

「いやあ、夏休みじゃないですか…私は料理が出来ないんですよ」

「じゃあ給食代を渡して貰おうか」

「体でお願いします」

そんな…キャツシユカードで、見たいな感じで言っではいけない台詞だと思っんだが…

「風美丘、お前はもう少し自分の体を大事にした方がいい…飯にも容姿は良いしな…」

「お？デレましたね？」

「前言撤回だ、監禁でもされて死ぬ」

そしてまるで当然かのように私の分のシーフードスパゲッティを頬張る

「んん！おお！おいひいれすね！」

「…はあ、口に含めたまま喋るんじゃない…」

別に褒められたから許した訳ではない、諦めたただけだ

「もう付き会いなよ…君達、昼から人に見せ付けて…楽しい？」

ユウカの冷たい視線と声、スパゲッティを頬張りながらも重鎮な言葉を投げる彼女は絶対に将来、立派な生徒会長へ育つだろう

今から更にもう一つ作るのも面倒くさいので昼食は抜きだ…まあいい楽しそうに、美味しそうにスパゲッティを頬張るユウカと風美丘…

そんなに上手く出来たのか…惜しい事をした…

そしてしばらくの時が経ち、二人が昼食を食べ終わった頃

風美丘はベランダへと続くドアに背を掛けていた

どうやら人の家のソファを征服するほど遠慮が無い人間ではないらしい

むしろ一番日当たりがいい場所を陣取る辺り、遠慮する心はあるらしい

いや、人の昼食を躊躇も無く食べる辺り無いか

ユウカはソファで寝転がっている、この少女…テレビも見なければ何かを強請るでもない、本当に『朝食、昼食、晩飯』しか必要としないのだ

まあ、手が掛からなくて楽だが

等と考えていた時だ、不意に風美丘が背を掛けているガラス製のドアが激しく発光した

明らかに自然のそれではない光に私は咄嗟に反応し、風美丘を庇うように横に倒れる

「風美丘ッ！」

「うええ？ ひゃあっ！」

その瞬間、ガラスを一線の光が通り、天井を貫通し、空へ消えた

…明らかに攻撃だ

「が、がちゃまさん…そういうのはお互いのリョウシヨーを得てから…」

「黙れ、それより私に感謝でもしている」

状況が飲み込めない風美丘は腑に落ちない、といった顔をする

が、無視、それより先に攻撃の主を確認するのが大切だろう、何時

二回目の攻撃が来るか分かったものじゃない

「ああ！ 成る程！ こんな取っ付き難い私でもとっついてくれると！でも安心してください、私、割と人気ありますよ」

「死ね、助けたのが間違いだった」

しかも凄いい納得したようで首を縦に何度も振りながらうんうん、と頷いている…

私はベランダに出て、敵を探す

…

下に妙なものが見えた

右手を此方に向けている人間、

成る程…アイツが攻撃主か…

私は即座に飛び降り、地面との激突の前に微粒子化し衝撃を逃し地面に着陸する

そして、もう一度攻撃主の容姿を確認する…

蜘蛛のように先の尖った白い足が四本、そしてそこから白い胴体が生えており、人間で言う腰辺りで二つにわかれ、前は普通の人間の

男の上半身、後ろは…白い楕円型の物体から、人と言う腕のような物が二本生えていた

「なんだ…？コイツは…」

私の目に映るそれは明らかに異形の物であった

「ワ…ワタしノソんザイイギハ…」

右手を私の方に向けながら、そんな事を言う

私は直感的に先程の光線はコイツの仕業だと断定し、右手の向く先から移動する

そして私が動いた瞬間、先程の光線が放たれた

やはりコイツが犯人か…暑い時に私を動かせた罪は大きい…

「月山さん！なんですか？！そいつは！」

「分かるか！むしろ私が教えて欲しい！」

私を追いかけてきた風美丘が若干焦った様子で聞いてくる

そんな事をしている間にもう一度奴は手をかざして来る

今度は私と風美丘を狙って、だ

私は先程と同じように回避し、風美丘も得意の超速反射を使って回避する

「これは…ノンストップ貫通物質！？半分以上都市伝説の能力じゃ…！」

「風美丘、何を言っているんだ！？」

風美丘は何かを知っているようで、光線を見て突然そんな事を言う

「気を付けてください！あの光線は物質に触れた瞬間、その物質を消滅させる物質へと変化して、実質上永遠に突き進む光線です！月

山さんが微粒子化しても攻撃は当たります！」

風美丘は焦ったように大声で叫ぶ、まあ…こんなに遅いんだ、そう当たるわけも無いだろう

「モクひヨウノコウドウぱターンをカイセキ…ヨソクれベル…」

今度は後ろの腕のような物体も持ち上げ、狙いを定めてくる

私は先程と同じように左に避けようとした瞬間、使用していない上の腕で私が避けた後に立つ位置であろう場所に光線を放つ

私は咄嗟に微粒子化し、上に避ける

その時、風美丘が奴に向かって蹴りを放つ

「はあっ！」

が、奴は風美丘の蹴りを左の下の腕で抑え、更にそのまま左の上の腕で風美丘の首を掴む、そして右の上の腕で風美丘の右手を掴む
完璧な固定を施し、右の下の腕を風美丘の腹に当てる

…不味い、零距离であの光線を打ち込む気か！

私は即座に微粒子化し、調度奴の腕の上辺りで元に戻り、右足をチ
エーンブレード化させ、腕を一気に切り落とす

腕を切り落とした部分から鮮血が噴き出し私の私服、風美丘の私服
その他コンクリートの地面を赤に染める

私は別に情を掛ける理由も無いのでそのまま奴の首を上段回し蹴り
で切り落とす

そして、奴はゆらりと揺らぎ、ガシャツという金属音と共に倒れ、
動かなくなった

「が…月山さん…か、仮にも人間…」

「違うな、私の知る人間は足が二本、胴体は一つ、腕は二本の金属
物を一切含まない生物だ、こんな鉄クズ…人間とは呼ばない」

ただ単に同じような外見で同じような鳴き声で同じ色の血が流れて
いるだけであり

それは人間じゃない

「そ…それより…どうするんですか？これ…」

「さあな、私にも分からない、放って置けば保健所の方々が回収す
るだろうよ、それよりさっさと帰るぞ、血がこびり付いて気持ち悪
い」

人間ではない、人間に近い何か、でもない

こんな物には関わらない方がいい、好奇心は猫をも殺す

おっと、これは人に使う言葉だったな…

場面変わって月山の部屋

私はあの後シャワーで血を洗い落とし、ベランダから死体を確認したが、既に無くなっていた
血の痕跡なども完璧に

何時の間に、誰がやったのか…まあ、入り込まない方がいい世界だろう、ここからは

これ以上知ると面倒な事になる

で、今は風美丘がシャワーを浴びている、浴びる前に

『覗いても構いませんがばれない様にしてくださいね？』

とか言っていたが、残念ながら私は今アイスを食している

…

そう

かなりのショックだった

人であった物を見て即座に人ではないと言えてしまう自分が
平然と人の首を落とせた自分が

…私一人ならそこまではしなかったはずだ
ただ…

風美丘が殺されそうになった時、急に殺意が沸いて…

そうだ、アレはアレに近い…

『あの子ならもう居ないわよ』

と平然と言ったふざけた母親

人間の姿をした

人間の皮を被った悪魔

アレを見たときも私は同じような殺意に駆られた

あの時既にこの力を手にしていたら首を刈り落としたのだろうか？

そう考えると…余計怖い

一度人間ではない、と決めてしまったら害虫と同じ扱いで人を殺せる自分が

…病んでいるのだろうか？私は…

「まあ、なんだ…色々あるよ、人生には」

ユウカの言葉である、学年で言えば小学三年生程

いつもなら腹が立っただろうが、何故か安心できた

「…助かるよ、そういつて貰えると」

「私も何回も人が死ぬ所を見たよ、しかも『自分と同じ顔をしている人達が』笑いながら楽しそうに殺す光景を、その所為で私、所々髪の色が脱色しているんだよね」

髪の色が脱色、人は極度のストレス、恐怖を感じると髪の色が脱色するらしい

冗談の様な話だが、実質、彼女の髪は黒に所々に白いメッシュが入っている髪色となっている

よほど怖い思いをしたんだろう

「大丈夫さ、もう見せない、そんな場面は…」

「…助かるよ、そういつて貰えると」

今度はユウカが私に私と言った台詞を言う

…本当に子供らしくない、というか…

「…やっぱり月山さんは子供に異常に優しい…ただ単に子供好きか

…それとも幼女趣味か…」
ハイドフレイカー

空気殺し等という能力があるなら、絶対に風美丘はその能力を有し

ている

デュアルスキル

二重能力が身近な場所に居たものだ

振り返ると、そこには自慢の魅力的な足を惜しみなく晒した格好の

風美丘が居た

…

というより、Yシャツを羽織っただけの格好

「…もう少しマシな衣装を選べなかったのか…」

「む、人が折角恥じらいを捨ててサービスしているというのに…貴方って人は…」

お前に恥じらいがあった事に驚きだ

「というより、どうした？急に」

「いやですね…一応助けてもらった訳ですから、何かお礼をしようと思った結果ですね…月山さん、食べ物余り好きではなさそうですね」

し、一日私を自由にしてもいい権利を上げようとしてもなんか、クローゼットに閉じ込められそうだったんで、抵抗が出来ないものを選ばせて貰いました」

「それはただ単にお前が肉体を見せびらかしたいだけだろう」

「そういうと、風美丘は平気な顔で『そうですけど？何か？』と返してきた

なんだお前は

「で…お願いなんですけど…私の部屋から服、取ってきてください」
「自分で行け」

「さすがにこれはちょっと…その…恥ずかしいというか…なんというか…」

若干下を向き、頬を掻きながら、若干頬を赤らめ言う…
仕方が無い…持ってきてやるか…

「だが断る」

と思ったら大間違いだ、私はそんなに優しい男ではない

「お、お願いですよ！じゃないと今この場で全裸になります」

「好きにすればいい、気が済むまでやってろ」

「ははん、まさか月山さんどうでもいい顔をして私の裸体を焼き付け今晚のオカズにする気ですね？」

「何とでも言え、私は買い物に行つて来る」

その私の非情な言葉にか、ついに風美丘は若干涙目になり、立ち上がった私の腰に手を回し行かせまいと、必死に引つ張る

「が、月山さん！お願いです！いや、月山様！むしろご主人様！何とでも呼びますから！」

「何とでも呼べ、私は今晚の材料を買つて来る」
容赦ない一言に遂に風美丘は嚙り泣きを始めた

…からかい過ぎたか

「はあ…冗談だ、本気にしないでくれ…で、鍵は？」

「何言っているんですか、押入れから行けるじゃないですか…」

「ああ、そうだったな」

泣くのは止めたとはいえ、まだ赤い目を指で擦る仕草は普通の男なら胸を打たれるだろう

そして、この魅力的な足を包み隠さず披露し、さらにYシャツを裸体の上から羽織るだけという服装…

私のように特殊な訓練を受けた者でなければ理性を放棄し襲いかかるだろう

だが流石に友を追い続けた私は格が違った

そして、押入れを開け、風美丘の部屋に入ろうとした瞬間

「あ、一枚ぐらいならこっそりポケットに入れてもいいですよ」

「よし、今夜はムニエルでいいか…」

「すみませんでしたっ！」

全く学習しない奴だ…

：

で、持ってきたわけだ、下着と適当な衣類を

で、今、私が押入れに背を向けているのは後ろで風美丘が着替えているからだ

風美丘は

『好きなときに振り向いていいですよ、というよりずっと此方を見ててもいいですよ？』

等と言っていたが流石に訓練された私は違った、見事に背を向けている

「風美丘、何故お前はそんなに私に裸体に近い物も見せたがる…よっぽど自信があるのか？」

「いえ…いや…なんと言いますかね…こう…月山さんだから見てもらいたいというか…普段はこんな事絶対にしないんですけどね…」

「…意味が分からないな」

何を言っているんだコイツは…下手したら私に好意を持っている様に聞こえるじゃないか、面倒くさい

確かに風美丘の足は魅力的だが、決してそれだけで私は好意は持たない

さすが訓練された私は違った…

「そういえば…私の友人の友人に風波って奴がいるんだが…お前に会いたいと言っていたな」

「風波？風波って…風波聖徒ですか？まさか…」

「そうだが…（私に色々と性的アピールをして来る、と言った瞬間に会いたいと言いつ出した事は黙っておくか…）」

「是非会いに行きますよ！是非！なんでも人当たりが良くて、いい人らしいじゃないですか」

…
いい人…だよなあ…

…
その後、特に変わった事も無く、予想通り夕食に風美丘が参加した…

「ところで月山さん、今日、光さんと生徒会長が並んで歩いてたらしいですよ」

「…」

「…あれあれ？まさか月山さん妬いているんですか？」

「…チッ…あの女…絶対に殺す…」

「…ドン引きですよ…」

06・復讐鬼<Arachne>（後書き）

基本、ユウカちゃんは窓の外を見てたり寝てたり、余り喋りません、空気に徹しています

…いや、初期設定じゃ某打ち止めみたいな性格だったんですけどね…
ほら、状況が状況ですし…生徒会長のクローンですし…

EX 1・Miracle on cold day (前書き)

現在、法則無視の方に追いついたのはいいんですが…あちらの話が
終わらないと私の方も書けない訳で、ということで、ラストリモー
トをリピートしながら書きなぐった

風美丘、いや、かざみんの二年の冬のお話をお楽しみください

EX1・Miracle on cold day

私が見た夢は幼き頃から見続けてきた悪夢

燃える家、助けを求める両親

何も出来ない私

私は無力だった

何も出来ずに

ただ単に

焼ける家を

遠くから

眺めるだけ

そう

眺めるだけ

泣きながら

母親と父親の名を

叫びながら

泣き叫びながら

眺めるだけ

十一月二十一日、彼女にとって最悪の日覚めだった

彼女の名前は風美丘速魅、所謂普通の女子高校生だ

変わった点と言えばレベル4、という事ぐらいだろうか

まあ、それも…ただ単に成績優秀という言葉で終わる

そして、今は午前十時

明らかに学校は遅刻であろう

しかし、彼女にとって学校など在于て無いような物だ

基本、彼女は学校に行かない

行くとしても絶対に遅刻する

何故なら彼女は自由だからだ、学校から与えられる程度の自由では

満足できない

普通なら退学レベルだが、学校側は彼女に特殊な条件を与え、自由を認めた

『年に二回特殊なテストを出し、満点を取れなかった場合は即退学』
彼女は易々とその条件を飲み込んだ

そして満点を取り続ける

時に問う人間も居る

「何故そんな危険を犯してまで自由を必要とする？」

そういった場合の彼女の答えは一つだ

「自由とは危険を犯してまで手にする価値があるからですよ」

彼女は効率を求め、価値ある物以外には全く興味を示さない人間だった

今では都市伝説なんていう馬鹿馬鹿しい物を追いかけて写真を撮るような、可哀想な感じに出来上がってしまったが

二年の時代は徘徊癖さえ直せば人当たりも良く、気さくで、成績優秀所謂優等生だったのだ

だが、最悪な目覚め方をした十一月二十一日

この日を境に、彼女は徘徊癖を完璧に治し、授業にも50%の確率で出席するようになった（尚、この50%は三年になっても治らなかった）、しかし、彼女はその代わりある物に熱中してしまう

都市伝説だ

その原因となった会話は…昼食を終えた後の雑談だった…

「幽霊？馬鹿じゃないんですか？」

彼女は価値が無い物は嫌いだ、

よって怪談話、七不思議、超常現象、全てが嫌いだ
無価値なのだ

彼女は楽しむという行為が苦手だ

空気を楽しむなんてもつての外だ

お化け屋敷なんて入って見るものなら幽霊役の人物に『もっとマシな仕事を探るか病院に行ってください』なんて平然と言うのだ

よって、彼女と楽しくお付き合いするにはオカルトの話は全て禁止だ
超常現象、それは全て化学で証明できる

その考えなのだ、彼女は

しかし、その彼女に幽霊の存在を認めさせる会話が始まった

「そうとは限らないのさ、かざみん…見てくれたまえ、この右腕、
骨折だよ？」

彼の名前は御代煉^{みよれん}、恐らく名前の文字数は最少であろう

普通に黒い髪、その髪は乱雑に切られている、恐らく自分で鏡も見
ずに適当に切り落としたのだろう、顔は中の上位だろうか、別に鍛
えている訳でもなく、勉強が出来るわけでもない、所謂駄目人間だ
しかし、それでも人は一つぐらいは長所がある物だ、

語りが異常に上手い

怪談話でもさせてみれば誰もがその話に夢中になるだろう

そして、この駄目人間は風美丘とは正反対の人間であった、オカル
トを信じ、オカルトを最早崇拜し、オカルトの為に身を捧げている、
と言っても過言では無いだろう

彼は日々日々、風美丘を自分と同じ道に引き摺り込もうと血の滲む
様な努力をしている

暇があれば都市伝説の良さについて語り

暇があれば心霊スポットに行こうと誘い

傍から見れば仲良しのカップルである、が

御代は風美丘にオカルトの素晴らしさを伝えたいだけ

風美丘は御代がしつこいから付き合っているだけ

そもそも風美丘は只今隣の部屋にて絶賛絶望中の某中^{がちやま}学生に興味津
々なので彼とのカップリングは成り立たない

「ハハ、馬鹿だから階段から落ちたかエレベーターに挟んだかした
んですね、馬鹿ですよ！馬鹿だね、馬鹿だなあ三段活用！」

「馬鹿って言うほうが馬鹿なのさ」

「黙ってください、T・REX以下の頭脳しかない野蛮人が」

彼女は人当たりがいい、だが、この御代に対しては違った

何故なら彼はオカルトが無い世界など滅んでいい、等と言い張るような男だからだ

『じゃあ、何故学園都市に来たんですか？馬鹿なんですね、馬鹿でしたね、すみません』

等と言われれば

『行き過ぎた科学はオカルトさ！一般人の僕から言わせて貰えば！』と、堂々と言い張るような男だ

「五月蠅いなあ、君こそ黙りたまえ、この優秀な頭脳は神が与えてくれた物なのさ」

「ハッ、馬鹿馬鹿しい…神なんて存在しませんよ」

風美丘はまるでゴミを漁る野良犬を見下すような表情で御代を睨む三年になった後はこのような表情はしないのだが、この時期、彼女は荒れていたのだ

人当たりは良い、というのは一部の人間に対しだけで、オカルトを信じるような人間は人間ではない、そのような考えが構築されていた

「む、神を信じぬものは救われぬぞ、信仰心を持て、かざみんよ」

「神なんて居ませんよ、居たら何で私の両親は死んだんですか？神って物は人に救いの手を差し伸べる物でしょう？」

彼女は過去に家ごと両親を火事で無くしている、その時何度神に願ったことが、しかし神は救わなかった

彼女がオカルトを完全否定する理由となったのがこれだ

「その考えは間違っている、神は神であり、便利君ではないのさ」

「そうやって…都合の良い事ばかり言って…神なんて所詮人間の理想の集合体ですよ、理想は理想であり、現実では無いんです」

その一言に対し、御代は一言

「現実じゃないから面白いんじゃないか、何でもかんでも現実になつたら面白くないだろ？」

「あーはいはい、わかりましたよ、で、その右手、何やったんですか？やっぱり階段から…」

「どうして君はそこまで僕を階段から落としたがるのかね、落ちた

いのかね？階段から、好きなだけ落ちたまえ、これは霊に折られたのさ！」

「よし、今日は午後は学校に居なくていいか、帰りましょう、帰りましょう、こんな馬鹿と同じ空気を吸っていたら馬鹿になります」

「酷い扱いだ、これは酷い扱いだ！」

嘆く御代に振り向きもせず、
 帰り支度をして速歩きで教室から出て
 行く風美丘

楽しげな空間だった教室が一気に静まり返り、刺し殺すような男女の視線、いや教師も含め教室内全ての人間からの刺し殺すような視線が御代に集まる

「……あれ？なんで皆さんお怒りになってるのかね？まるで僕が悪い人間みたいじゃないか……」

『お前ええええええ！！今日、もうかざみんの凜々しい姿拝めねえじゃねえかよ！』

男子生徒

『今日あだし、かざみに勉強教えてもらうつもりだったのに！責
任とってよ！』

女子生徒

『風美丘、今日は授業にも参加していたというのに……！お前という奴は……！！』

教師

『死ぬ！御代！いっぺん死んでその馬鹿を直せ！そしてかぜみんな謝れ！馬鹿が！死ぬ！御代！いっ（以下ループ）』[㊦]

クラス内の大合唱

ここまで来ると虐めの域である

しかし、彼は何時もの事なので冷静に対処した

「成る程、この件は僕が悪かっただろう、だが僕は謝らな　痛い痛い痛い！すみません！すみませんでしたから！水筒で殴るの止めて！ぎゃあ！血が！血が！」

彼は無能力者だ

どうしようもない

という事もあったそうな、場面変わって風美丘

特にやる事も無い彼女は適当にふら付いていた、若干幽霊の話を考えながら

幽霊かどうかは分からないが、彼は右手に怪我を負っていた
その点から察すれば誰かが幽霊を演じるなんていう馬鹿な事をやっている訳だ

彼女はその馬鹿をとっ捕まえて顔を掲示板に張り出してやろう、と考えていた

とか言っても、何処で出るかとか、全く分からない訳だが…

とりあえず彼女が適当に徘徊していた時だ

急に雪が降り出したのだ

「…雪？そんな予報は出て無かった筈ですが…」

学園都市では天気予報は絶対だ

外れる事が絶対に無い

その現象を不思議に思っている風美丘に声が掛けられた

「なあ、その人」

風美丘は、ゆっくりとその声の主の方向を見る

そこには俯いた男が立っていた

「俺、無くし物したんだ、一緒に探してくれないか？」

「何を無くしたんですか？それを言わなきゃ探しようがありませんよ」

その言葉を聞き、男は不意に『一瞬で』風美丘の前まで移動し、こう一言

「顔」

そういつて上げた顔は目と口が大きな空洞になっており、空洞の淵の皮膚は乾燥し、ひび割れ、所々から血が溢れている

「ひやは、ひやははははは！！」

男は心底楽しそうな声を上げると

男は青色の炎を体から噴出し、体が燃え、骸骨となり、それさえも

崩れ去り、姿を消す

その光景に風美丘は思わず啞然としていた
まさか本当に幽霊が存在する…、そんな事も考え、一瞬で否定し、
冷静を取り戻した気であるが、かなり混乱していた、むしろあんな
物見て気を失わなかっただけでも凄いだろう

「どおーこみてんのさ！俺あこつちだ！」

今度は後ろから声

振り向けば、良くある市販のバイクだが、所々血肉が付着している
バイクに乗り、楽しそうに声を上げる男がいた

「お前もさあ、轢き殺してやるよ！」

そういつて男は勢い良く発進し、風美丘に突っ込む

だが、この時点で男は負けた

何故雪の上でチェーンも巻かずに急発進できるのだろうか？

普通なら幽霊だから、と答えるだろう

だが、彼女は違った

この雪は偽者だ

そう考えると皮膚に当たっても冷たくも何ともない

だとすれば、あのバイクは本物なのだが…彼女は動じなかった

「ははは…やっぱり嘘だったんじゃないですか…」

そうして突っ込んでくるバイクの主の胸部に風美丘は鋭い蹴りを放つ

それはもう、殺す勢いで

そして、その瞬間上に飛び、転倒するバイクを避ける

人間技ではない、が、それすら可能にする彼女の能力

超速反射

自身のあらゆる反射速度、反応速度を極限まで上げる能力

光速レベルの弾でさえ遅く見えるとか

電撃の流れが普通に見えろとか

とんでもないのである

しかし、そんな速さで筋肉を動かせば無論筋肉痛やら肉離れやらで
とんでもない事になるのだが

彼女の場合は違った

彼女の特異な筋肉、それはどんな速さで動かそうと、どんな過激な動きをしようと

絶対に疲労しない筋肉

彼女はこの筋肉の特質を利用し、中学時代は常に陸上部のエースにあつた

どんなに厳しい練習でも絶対に壊れない体

そんな体を持っていれば自然と練習の量も尋常では無くなる

よつて、彼女は素晴らしい、魅力的な足と、異常な速度で、そう、パイルバンカーの如く射出される鋭い蹴りは、薄い鉄板なら突き破れる、との噂さえある

どんな足だよ（ちなみに死亡覚悟でその足を堪能しようとした男子学生は全治五ヶ月の怪我を負った）

話が逸れたが、そんな蹴りを心臓にピンポイントで当てられた男は死んでは居なかったが、凄く、物凄く苦しんでいた

だが、彼女は、風美丘はそんな姿を見て…

こんな行動にでた

「死んでるんですよね？ だったらもう死にませんよね？ 痛覚が無くなるまで蹴り続けてやりますよ、喜んで下さい」

死刑が男に言い渡された

「じょ…冗談じゃ…ま、待ってくれ！」

「三分間待ってやる、遺産分配しとけ」

何処かの大佐と電撃姫の混ざったような台詞を言いながら既に蹴る風美丘

その蹴りは思いっきり肩を直撃していた

「これは私の分！」

次の蹴りは腹

「これも私の分！」

次の蹴りは背中

「そしてこれも私の分！」

次はまた肩

「そして最後に私の分だ！」

最後に溝

男は無論気絶している

当たり前だろう、鉄板を突き破れる蹴りを五発も食らったのだ、死なないのが奇跡だろう

そして風美丘は男の顔を確認すると…

「おや、これは私と同じクラスの…きりかわ たくみ確か霧河拓海君でしたかね、馬鹿な男だ」

その後、霧河の気絶している写真が掲示板に

【幽霊騒動の犯人、世の中で最も愚かな男、霧河拓海】

という記事に載せられて張り出されていた事は言つまでも無く
犯行の動機はこうだった

「昔から…ずっと風美丘さんの事が好きで、はい…はい…そうです、御代が妬ましくなったんで…はい…ついやりました…はい…風美丘さんを襲ったのは…はい…そうです…はい…気絶させられれば好きに弄くれうわああああ！すみません！すみません！すみま（ゴギヤア）」

この事件を気に、彼女は都市伝説に熱中しだした

いや、正確には都市伝説の真偽を確かめる事に

情報ソースは有用な御代に頼ったが、彼は一つの条件を出した

【授業に参加しなくても良いから、普通通り登校して、下校時刻までは学校内の敷地から出ないこと】

風美丘の身を思つての事ではない

自分の身を思つての事だ

こうして、彼女は徘徊癖を直し、都市伝説に夢中になり

現在の風美丘速魅の一段階前まで完成したのだ

あとは二つの課題をクリアすれば無事完成だ

人を見下す性格

そして

暗い過去

この二つを失えば彼女は完成する

EX1・Miracle on cold day (後書き)

お疲れ様でした、なんだこの話は？

かざみんが悪者じゃないか、畜生、誰だよ作者、首吊れよ

かざみんはなあ、かざみんはなあ！

射【自主規制】と神【自主規制】が混ざった感じのいい感じのな！？

敬語の城戸【自主規制】みたいな感じなんだよ！？分かるか！？

でも…見下すかざみんも…嫌いじゃないわっ！

EX2・Do not touch the complex!! (前書き)

ドラクエ5でビアンカとフローラ、はたまたデボラ、誰を結婚相手に選びますか？

私？私はですね…ストーリー的に考えてビ飴子より甘いわ！かざみんだ！

かざみんの為になら死ねる

略してかざみん死ね

駄目じゃん、いや君死ね的には合ってるけど…

ラヴィ！

今回の話は一部の人び不快感を与えるかもしれませんが、それでもいいや、と言う方は読み進めてください、別に読まなくても大丈夫なので、嫌な方はお次のマトモな話にお進みください

EX2・Do not touch the complex!!

「どんな能力も絶対に効かない能力？」

馬鹿ばかしい会話の開始は放課後の教室、机を並べてそこにうつ伏せで寝ている風美丘と帰り支度をしている御代によって開始される

「ああ、そうだ、絶対に効かないらしいのだよ、かざみん」

「ハッ、またつまらない事を…どうせ同じ系統の能力だったとか、そういうオチなんでしょう？」

何処かの生徒会長ヨロシクの相手を人間として見ていない視線を御代に向ける風美丘

だが、御代は既に適正が出来てしまった、可哀想に…

「いんや、^{バイロキネシス}発火能力、^{スラッシャー}発電能力、さらには水流操作の三身一体を受けても無傷だったのだよ」

「嘘を言わないでください、内臓をペンチで引き抜きますよ」

「舌じゃないの!？」

思わず戦慄する御代、何しろこの風美丘は言ったらやる女だ

「殺るぜ〜 超殺るぜ〜」

「可愛くないからな、むしろ怖いわ」

「御い代がビビってる ヘイヘイヘイ 御い代がビビってる ヘイヘイヘイ」

「ビビるわ! そりゃもう!」

というより風美丘の右手にはちゃんとペンチが握られていた

そして無情の、何も考えていないような光も無い虚ろな目をして、机を叩いてリズムを取る様は

むしろお前が都市伝説の妖怪になっちゃえよ、という感じであった

「じゃあ、どうやって調べたんですか? この嘔吐き男が」

「酷い扱いだ! …ん、まあ、うん、なんかね? あのね? うん、ね? こうぶつかった女性とイチャついてムカついたから周りのスキルアウトの皆さんとフルボッコに掛かったら逆にボコされたっていう」

「ざあー！ーまあー！ーみー！ーろおー！ーヴァー！ーカ！」

馬鹿にするような表情ならまだしも、先程表現した表情なので

怖い

怖すぎる

「馬鹿って言った方が馬鹿だと何度教えれば…」

「ヴァカって言ったんですよおー！ー！生涯一生童貞のどうしようもない残念な人オオー！ヴァー！ーカ！」

これも馬鹿にする表情ならばまだしも、先程表現した表情なので戦慄さえ覚える

「……貧乳のクセに」

その禁句が放たれた瞬間

無言でうつ伏せになっていた風美丘は瞬間的にバネ仕掛けの人形のように高く、綺麗な放射線を描いて飛び

御代の首を足で圧迫する形で着陸する

「あがつ！？」

「んんん？よく聞こえませんでしたねええ？」

（ま、不味い…殺され…！）

彼は知っていた

風美丘が薄い鉄板なら貫通する蹴りを繰り出せる事を

それで病院送りになった友人は風美丘の足がトラウマになっていた事そして彼女に容赦が全くない女だと言う事を…

（あ…下着見えた、今日は青の白のストライプかー可愛いな…うん、可愛い、流行を押さえてるね！）

絶景だったそうだ

（そつだ、この事言えば…恥ずかしがって逃げられんじゃね？蹴られるかもしれないけど、回し蹴りだろうし…うん、これで行こう！）だが彼は知らなかった

「フッフ、かざみん、今日は青と白のストライプかい？可愛い趣味してるじゃないか！」

彼女には

「そうですか、それが遺言ですね？親に伝えますよ」

恥じらいが無かった事を

「どうぞ、死ぬまで見てていいですよ、三秒程ですが」

風美丘は一気に足を引き、能力をフル使用し、目にも止まらぬスピードで虎も一撃で死ぬと噂の蹴りを放つ

「危なっ！」

直感で顔を横に動かしたお陰で直撃は免れたが、恐ろしい物を見てしまった

首を圧迫されていた、と言う事は

風美丘が御代の机の上に立ち

御世は椅子を傾けて後ろの机に頭を押さえつけられる形になっていたのだが

：

後ろの机を風美丘の足が貫通していた

「…はい？」

間抜けな声を出す、だがそれも一瞬、御代は即座に土下座の体制に入る

あんな物見たら謝らずには居られないだろう

「…！」

無言で頭を床に付ける御代

というより、恐怖感が強すぎて言葉が出ないのだろう

人間、本当に恐ろしい目に遭った時、笑うというが

それさえも通り越して筋肉が硬直したのだろうか

そして更に

風美丘は埋まった足の周りを破壊する事によって、机から足を易々と引き抜き

御代の頭を踏みつける

先程机を軽く貫通した足が頭に添えられている

泣き出してもおかしくない、銃を突き付けられているような物だ

「御代さんって好きそうですね、ニーソで踏まれるの」

これが相手が普通の美少女とかだったら御代は歡喜に体を震わせるのだが

なにせ相手が化物の美少女なので、御代はライオンの巢に落とされたガゼルのように震えていた

震度7・5ぐらい

「ほれ、嬉しいんじゃないんですか？うりうり」

その可愛らしい効果音に見合う足の強さで頭をグリグリと踏みつける風美丘、

普通の美少女なら足の肉質を楽しんで歡喜に声を上げそうになるのだが

怪物の美少女の、なんていうか、もう、その、ほら、一般的な筋肉とは違う、何かが違う、一線を越した病み付きになるような肉質を味わって恐怖に声を上げそうになっている御代だった

これが机に足を貫通させた後じゃなければ御代は喜んだらう、なにせ『凄い』のだ、何が凄いのか、と聞かれると、親に『ツンデレ』って何？って聞かれるぐらい困るのだが

『凄い』のだ

「何か言ってくださいよ、ほれ」

そういつて髪を足の親指と人差し指で掴み、持ち上げる風美丘見上げた顔は恐怖の余り半泣きであった

そんな彼が気にするのは、踏んでいない左足の動き

下手したらこのまま首を押し折られるのかも知れない

そう思うと思わず許しを請う言葉が出た

「ろ…ろっひたら風美丘ひやまはご機嫌をなおひゃれるのれひようひゃ…」

恐怖の余り舌が回らない

やはり筋肉の硬直だろうか

「あ？煩い口ですね、塞ぎましようか」

喋れと言った奴の台詞である

その後、彼女は言った通りに余った左足を御代の口の中に突っ込む

御代は一瞬死を覚悟したが、普通の数度だったため、口腔内の圧迫のみで済んだ

「ひゃん！…ちょっと、何で舐めてるんですか…」
不可抗力である

当たっただけ、当たっただけ！

そうアイコンタクトで伝えようとしたが…

彼女の目には何も届かなかった、ATフィールドが五十枚ぐらいある感じだ

「まさか、何時殺されてもおかしくない状況で私の足を舐めて楽しんでるんですか？これだから欲望に飢えた犬は…」

『駄目人間』から『欲望に飢えた犬』まで下がってしまった…遂に人間を止めちまったよジョジョーッ！なんて心の中で叫びながら彼は決心した

『やってやるうじゃねえか！…むしろここからかざみに許しを請わせてみせてやんよ！』

心の中で、強く決心したのだ、強く、強く！

勇者の誕生である

そして決心を決めた勇者、御代はまず、親指から包み込むように舐め始める

「ひっ！…いよいよ本気って訳ですか、ハハ、生ゴミを漁る欲望に飢えた犬の癖に生意気ですね」

更にランクがダウンした、普通の飯ぐらい食ってるわい！と心の中で、そう心の中で！叫ぶ御代であった

口に出す勇氣は無い、だが勇者である

「じゃあ、これには耐えられますかね？」

魔王、風美丘は無情にも更に奥深くまで左足を突っ込む

右足で御代の後頭部を押さえ、無理矢理だ

「！？えぐっ…！」

その巨大な異物を喉近くまで押し込まれた御代は思わず押し出そうと抵抗する、が無意味だ

そして、歯が食いしばれないから、代わりに何かを握り締めたかったのか、椅子の足を思いつき握り締める

「おおお…こんな感じなんです…男がさせる【口の奉仕】（ソフトな表現です）ってのは…楽しいですか？御代さん、まあ私が楽しければどうでもいいんですがね」

相変わらず怖すぎる目で御代を睨みながら悪魔のような笑みを浮かべ、更に奥に押し込めない物かと左足でグイグイと押す風美丘

忘れないで欲しい、御代は、御代煉という立派な名前がある男だ、男の娘とかではなく、可愛い系、とかでもなく、中の上ぐらいの普通の男だ

そして、風美丘は、風美丘速魅という立派な名前がある女だ、可愛い系の美少女だ

足が魅力的

…話を戻そう

で、擬似【口でのご奉仕】（全年齢を目指したソフトな表現です）を男にさせて楽しんでいる今年最大の悪魔、風美丘は先程から変わらぬ調子

御代はよく分からない恐怖とよく分からないプレイにより、感覚が麻痺し、むしろ喜びを感じている

「随分とだらしのない顔をして…そんなに嬉しいんですか？変態ですね、もうむしろ平仮名で言ってあげましょうか？へんたいい」

それにしてもこの風美丘ノリノリである

基本ノリは悪い方なのだが…（しかし、彼女のこんな姿も見られたのは二年まで、三年になつては若干後遺症はあるものの、思い人にか醜態は晒さなくなった）

いよいよ本格的にヤバくなって来た頃である

御代の顔を前後に動かして楽しむ風美丘

もう気力を失ってされるがままの御代

その時だ、救世主が現れたのは

「…何してん？」

忘れ物を取りに来た男子生徒Aだった

「…あ？」

風美丘は冷静になり、現状を見渡す

御代の口に無理矢理足を入れて喜んでいる自分

もう人形状態の御代

絶句している男子生徒A

初めて風美丘は焦りという物を覚えた

「えあ…？え…！？あ！？いや、違いますから！違いますから！」

何が違うんだろうか、これで御代を風美丘が押し倒している場面ならまだ分かるが

男に自分の足を咥えさせて喜んでいる場面で違うと言われても理解不能である

とりあえず風美丘は人の口に入ってしまう程の横幅しかない細く、つい先程までは清潔だった足を御代の口から抜く

唾液やら唾液やらでももの凄い事になっていたのは言うまでもなく

そして、被害者の御代は…

「かじやみがおかしやん…もつとくらひやい…」

調教完了だった

「ばっ！何口走ってるんですか！黄色救急車呼びますよ！」

そう言いながら御代の肩を揺する風美丘

すると段々御代の目に光が籠もって行き

「っは！？僕は一体今まで何をしていたんだ…！？夢を味わったぞ！」

「へ、へえ、どんな夢だったんですか？」

「んとな、無茶苦茶美少女、そう、やけにお前に似てる美少女に口に足を突っ込まれた、僕の夢だった女子の足を口に突っ込んでもらう、という物が一瞬だけ現実になった気がしたが別にそんな事はなかったぜ！」

まだあまり正常には戻っていないらしい、所々訳の分からない事を言っている

「そうですか、よかったですね、それで三ヶ月は持つでしょう?」

「ああ、まあな、一年は行けるぞ、余裕で…」ところでかざみん、今青と白のストライプ穿いてね?」

「ええ、そうですか?」

(…待て、冷静に推理しようじゃないか、僕が意識を失う前より…外は暗くなっている、そして、僕には何故かしばらくの間の記憶が無い、そしてかざみんの左足の二ーソの先がびしょびしょぬちゃぬちゃの惨劇になっている…そう、そして、僕が夢で見たかざみんのパンツの柄、そして色までが一致…それすなわち、先程の事は夢じやなかったとい事か!夢だけど夢じゃなかったーっ!やったー!これ多分死亡フラグだ!これを気にかざみんに告っちゃおうかなー?…あ、でもかざみん年下が好きだったんだよな…つか、隣人に興味津々とか言ってたしな…くそう、僕は所詮ここまでの人間か…まあ別にいいし!あんな、かざみんの足を口に咥えるという夢のようなしたもんね!)

まさか一瞬とはいえ、風美丘の性奴隷と化していた事は彼には重すぎる話だった…

というより風美丘自体の軽いトラウマとなった為、永遠に封印された…

が、彼女等の見えない所では

【御代が風美丘の性奴隷】

という都市伝説が作り上げられたのは言うまでもなく…

その後、風美丘ファンの皆様から御代が畏敬と妬みの視線を受ける事になったり、どうやった!?どうやった!?と問い詰められる事になったのは別のお話

EX2・Do not touch the complex!! (後書き)

…なんだこれ、セーフか？セーフだよね、セーフでした三段活用！
空気使い先生から『風美丘でセウトっぽい話書け』と夢の中で言われたのでやって見ました

え？立場逆だろ？だからいいんじゃないですか…

僕はこんなシチュエーション、見た事ありませんよ

07・無感情&It・Hope>・(前書き)

やっとこさ本編に戻ります、長かった…

07・無感情<Hope>;

「以前、行方不明となった能力者達の足取りは掴めず、生徒達の間では未知なる恐怖が膨張しており」
テレビを消す

最近、能力者が行方不明になる事件が多発している、レベルも対象の能力もバラバラで全く痕跡が残っていないという

「月山さん、何やってんですか？」

玄関からの声、明らかに風美丘の声だろう

何故玄関から声がするかと言うと、決してアイツが礼儀正しく玄関から入って来た、とかそういう奇跡が起こった訳ではなく

今日は病院に行く予定があるからだ、私の頭がおかしくなったとか、そういう事では無くて

なんでも入院している風美丘の友人から話があるそうだが
嫌な予感しかしないのだが

そついう事で、私、風美丘、珍しく外に出ると言ったのでユウカ

私はソファから立ち上がり、玄関へと向かう

気が進まない

私は元々勘が鋭いのだが、今日は外に出てはいけない、そんな気がしてならないのだが…

今更どうしようも無いので向かう事にする

「月山さん、子連れとは言え、初めてのデートです、いい思い出を作りました」

「その発想は間違いだ、病院でどうやって思い出を作るんだ？」

「レ…レントゲン…」

微妙すぎる

楽しくないだろう、レントゲンは

まあ、そんな感じのどうでもいい会話をしながら病院へと向かった
訳だ

それで、向かっている途中、私の嫌な予感は当たった

「ユウカさんは将来第二の生徒会長になるんですね？」

「まあ、遺伝子的には同じだし…そうなるだろうね」

「だったら此処で死んでもらうしかない…」

「何故!？」

まあ、本気ではないのだろうか…

ユウカはわりと本気で怖がって私のズボンの裾を掴む

「だってですよ？あの生徒会長、能力無しで私とタメはるんですよ！？というより寧ろ私より速いんですから！これ以上あんなのが増えたら私は学園三位になってしまいます、二位でも満足していないと言つというのに」

…

あの生徒会長、本当に人間か？

ありえないだろう

ちなみに風美丘の走力は異常のクラスに値する、なんでも中学時代は常に陸上部のエースとして圧倒的な地位を築いていたとか、まあ、自称『絶対に壊れない体』と称すくらいだからな…練習量が半端ないのだろう

なんて平和的な会話をしていた時だった

河川敷に不可解な火柱が立った

巨大な爆発音と共に

「……いやあ、こう、油断してるときに爆発音とかなられると何も言えませんか、さあ行きましようか」

「待て、そっちは病院と反対側だ」

野次馬魂丸出しの風美丘の首根っこを掴む

「行かせてください！誰かが私を呼んでいる！」

「お前を呼ぶ時点でまともな人物ではないな」

そのまま私は抵抗する風美丘の首根っこを掴んだまま病院へ向かう
あんな爆発が起こったんだ、発火能力にしてもレベル4以上だろう
飛んで火にいる夏の虫ならぬ飛んで火にいる夏の速魅だ

「お前は…自分を犠牲にしすぎる、もう少し自分の事も考えろ」
『お前さあ…自分を犠牲にしすぎだよ、俺の事大事に思ってくれるのはありがたいけどさ…もう少し自分の事も考えようぜ？』
私が風美丘に言葉を放った時、不意に彼の台詞を思い出した
彼は私が身を犠牲にしすぎて、という
仕方がないだろう
それが私の『性』^{さが}なのだから
「うー…仕方がないじゃないですか…それが私の性なんですから…」
文句をいいつつも、諦めて私達と同じ方角へ進み始める風美丘
根本的なところで私とコイツは似てるのかもしれない、なんて事も
考えたが別に記憶する事でもなかったので、すぐ忘れる

第七学区大学病院 午後一時五十分

私達は病室の前に居た

風美丘が何時もの明るく無邪気な顔とは違い、暗く、曇りのある表情で病室のドアを開ける

「……すみません、一度、一人で行かせてください」
何時ものような明るい声ではなく、重く、沈んだ声
そんなギャップに驚いた私は首を縦に振る事しかできなかった
すると、風美丘は気力無く笑って静かに病室へと入って行く

…

五分程経っただろうか

静かにドアが開き、病室から風美丘が出てくる

「随分と早かったじゃないか」

「まあ…今日の明け方にも一度来てますから」

相変わらず気力の無い声で答える

「それより、中で待ってますから行ってください」

その言葉に対し、私は頷き、ユウ力を風美丘に任せ
病室へと入る

中には外の風景を眺めている一人の青年が居た

ドアの開く音に気がついたのか、その青年は此方に向く
その目は先程病室に入る時の風美丘のような目だった

「月光二君、かな」

弱く、脆く、儚げな声だった

そこに存在するかどうか怪しい声

「ああ、そうだが…貴方は？」

「僕、か…僕は御代、御代煉だ」

御代は力無い声で答える

そして御代はそのまま次の言葉を発する

「まず最初に…彼女の代わりに謝らせてくれ、彼女が色々と迷惑を
掛けているようだ、すまない」

彼女とは恐らく風美丘の事だろう

ああ、ものすごく迷惑が掛かっている

と言いたかったが、流石に言えなかった

「それで…風美丘は貴方が私に話があると言っていたが？」

「ああ、そうだったね…君には彼女の過去を知って貰おうと思うん
だ」

「風美丘の過去…？」

「そう、風美丘、風美丘速魅の過去だ」

私が怪訝な顔をしていると、御代は語り始めた

「僕は昔、彼女と一緒に都市伝説を追っていた仲、まあ、パートナー
としても自負しておこうか」

風美丘は暇な時、大体都市伝説の真相を明かそうと学園都市中を駆
け巡っている

…余談だがな

「…つまり、恋人だったと言いたいのか？」

「まさか！僕に彼女は支えきれないよ、それに彼女は昔から君一直
線だしね」

…なんだと？

昔からマークされていたのか…

だから私の生活サイクルを完璧に把握してるのか…

…
ストーカーじゃないか…！

「なあ、聞いていいか？何故…アイツ、風美丘はそこまで執拗に私を追う？」

本人には聞いても答えないからな…

「…その話については、まずこの質問に答える事から始まるよ、…君は神を信じるかい？」

よくある典型的な質問だが

何故かとても重みがあり、まるで裁判で言い渡された質問のように感じた、が私は即答する

「神は人に救いの手を差し伸べる者だ、だったら貴方はそんな事にはなっていない、つまり神など居ないさ」

その答えを聞いて御代は薄く笑い、こう言った

「その考えは間違っている、神は神であり、便利君ではないのさ」

「それは都合の良い事を言っているだけだ、神なんて所詮人間の理想の集合体だ、理想は理想であり、現実では無い」

私の答えを聞き、御代は満足そうに笑みを浮かべると、こう言った
「…やっぱり似ているよ、君達は」

「…？それは間違ってるんじゃないか？アイツは神を思いつきり信じているだろう？なにせ、都市伝説を追い掛け回すぐらいだから」

「それは今の彼女、昔の彼女は違ったよ、何せ今の君と全く同じ解答をしたからね」

信じられなかった

あのオカルト人間の風美丘が神を信じて無かった？

「さらに、昔の彼女は都市伝説を全て化学で証明しようと追い掛けていたんだ」

「…じゃあ…今のアイツは何なんです？貴方の言う風美丘と真逆ですよ？」

その言葉を聞き、御代はゆっくりと話す

「事故に遭った」

「事故に…遭ったんだ」

同じ文章を二度繰り返し、御代は言葉を紡ぐ

「暴走した2トトラックに引かれたんだ、僕達は」

言葉を失った

…風美丘は一度もそんな事を言っていなかった

「まさか…」

「そう、それで彼女は過去を失い、僕は自由を失った、つまり…」

一度、曖昧な表現をし、もう一度詳しく言う

この語り方は聞き手を飽きさせない語り方だった

「彼女は記憶喪失となり、僕は首から下を動かせなくなった」

記憶喪失

彼女は全くそんな素振りを見せなかったが…

隠していたのか

「彼女が覚えていたのは自分が隣人に思いを抱いていた事、そして、

都市伝説を追っていた事だけ」

次に御代は諦めたような声で言う

「僕の事など一切憶えてなかった、どうやら、彼女はそれを僕に申し

訳無いと思っっているようだけど…気にするな、と言っておいてく

れ」

…

…

とても意外な話だった

いつも明るくて

無邪気で

弁えなくて

子供みたいで、何も悩みが無さそうな奴だと思っていたが

相当な事を背負っていた

だから風美丘はずっとあんな顔をしていたのか

：

病室から出れば、風美丘は俯き、泣いていた

昨日私に見せたような安い涙ではなく、純粋な悲しみから来る涙

「全部、聞いたぞ」

「…そうですか」

風美丘は相変わらず下を向き、顔を上げない

「お前の気持ちが良い分かる、なんて言わないからな」

「…はい、言ったら嫌いになります」

病室前の椅子に腰掛けて俯いている風美丘の顔を覗き込む様にし、

私が今思ふ事を全て話す

「別にお前の気持ちが分かる訳じゃない、サイコメトリー読心能力じゃないからな」

「…はい」

「でも、これだけは言わせて貰う、誰にも、それこそ誰にも話したく無い事があっても」

私は一度言葉を発するのを止め

力強く言う

「私にだけは絶対に言え」

私は独占欲が強い

幼き頃に奪われたからこそより一層強い

相手の全てを手に入れなければ気が済まない

「でも、まあ何も全部思った事を言えって訳じゃない、言う事と言わない事は自分で判断しろ」

「…難しいですね」

「そうだ、私は攻略が一番難しいキャラだと思えよ？」

そんな言葉を聞いて、風美丘は少し微笑む

私は何と無く気恥ずかしかったので立ち上がり、顔を背ける
すると、そちら側にはユウカが言てニヤついて

（格好いい事言うじゃないか）

とても言ってそんな視線を向けてきたので、即座に逆に顔を向ける
「あー！すみません！もうウジウジと！私らしくない！」

風美丘は何かに吹っ切れたように明るい声で言う

彼女らしいとは結局なんだろうか

旧風美丘の事だろうか

それとも

新風美丘の事だろうか

どちらにせよ、それは風美丘の決めた事、もしくは決める事だ
誰も気にする事は無いだろう

風美丘は勢い良く立ち上がり、何時も通りの姿へと戻る

この時、若干先程までのが静かで良かったと思うのは些か不謹慎だろうか

「さて、月山さん、ユウカさん、行きますよ」

「おい、風美」

「速魅」

私の言葉に被せる様に風美丘は言う

「速魅と呼んでください」

「何でまた急に…」

「私は月山さんを攻略してなくても、月山さんは、いえ、光二さんは今、私を攻略完了したからですよ」

名前で呼びやがった

名前で呼ばれた事…最近では光にも無いのにな…

月山、月山、って…昔みたいに光二って呼べよコラって感じたがな…

「さあ、私が名前で呼んだんです、光二さんも私を名前で呼ばなければ平等じゃあないですよ」

「敬称付けてるじゃないか」

「私の敬称は口調というか癖なので、もう直りません」

…

なんだか気恥ずかしいな

異常に恥ずかしいぞ、これ

思えば異性の名前呼んだ事無いじゃないか、私
というか光二くらいだ、名前で呼んでるの

ちなみにユウカはそれしか名前が無いのでカウントしない

「三分間待つてあげます、名前で呼んでください」

堂々とそんな事を言う彼女に私が取った行動は

「あまり調子に乗るな」

「きゃん！」

そういつてデコピンをしながら横を通り過ぎる、という行動だった
後ろを振り向いていないから分からないが、恐らくかなり拗ねていると思う

私は若干振り向きながらこう言う

「速魅、ユウカ」

やばい、無茶苦茶恥ずかしい恥ずかしすぎる

直視できないぞ、速魅の顔

「やっとデレてくれましたねー光二さん」

「別にデレてない」

「おや？顔を背けて…恥ずかしいんですか？」

「別に恥ずかしくない」

速魅が読心能力じゃなくてよかった、と心底思う私が居た

時計を見ればもう既に二時を十分も過ぎていた

そして、結局病院を出るまで恥ずかしさに押し潰されそうになっていたのだが、

出た瞬間空気が変わった

狂気であり

怒りであり

悲しみであり

愉快であり

残酷であり

救済的であり

白く

黒く

破滅であり

創造であり

悪意であり

善意であり

清らかであり

汚れでもあり

聖であり

邪悪である

ただ単に

白い

恐怖を覚えるほど白い

嘔吐を覚えるほど白い

白すぎて

白すぎて

白ではない

「…光二さん、あまり長居しない方が…」

「…そうだな」

その場から立ち去ろうとした時、不意に声がした

「貴方が月山光二ですね？」

感情が無く

最早言葉ではなく

機械の発する機械音のように

全く感情の無い声

声した方向には

白いブーツ

白ズボンに

白いスーツ

ネクタイさえも白く

黒いオールバックの髪と

見る角度、光の反射によって変わる

定まらない目の色のみが異常に目立っていた

その男は

存在感があるようであり

空気のように薄い

そこに存在するのが当たり前で

存在してはならない

「貴方が月山光二さんですね？」

同じ言葉を二度繰り返す

音程も、喋るスピードも完璧に同じに

「『何なんだコイツは』、輝夜望と申します、てるやのぞむ『なぜ私の考えが読めた？』そういう力もありますので『何故私を知っている』貴方は栄養価が高いエサだからです『エサだと？』そうです、人間は私のエサですよ、まあ、私も人間ですが」

読心能力か？私の考えを全て見抜き、全く変わらないテンポで繰り返す姿は異常だった

「では、頂くとしますかね」

そう輝夜が言うとうと右手を軽く横に振る、するとドス黒い血のような赤の三日月型の衝撃波が飛んでくる

「危ないッ！」

私はその衝撃波を即座に危険な物と判断し、ユウ力と速魅を伏せさせる

すると、輝夜は全く動じない様子で何かをいい始める

「ある人の生きる希望はこうでした、『誰かを傷つけたい』、私がそれを解釈した結果」

私達を通りすぎた衝撃波は病院に当たると、砕け散り、塵となり、風に乗って消える

「『人体のみを切断』できる物質へと変わりました、この物質は人又はその人間の身に付けている物体が如何なる強度でも絶対に切れる物質」

そう言いながら輝夜は今度は左手を上へ上げ、一気に振り下ろしたと、今度は空から紅色の雷が一直線に私を襲う

「光二さんッ！」

しかし、速魅が私を横にありえない速度で引き、避ける
そうだ、速魅にとつては雷さえ遅く見えるんだった…

「速魅！ユウ力を連れて逃げる！コイツの狙いは私一人！」

「でも！」

「でも、じゃないんだ！行け！」

「…！死なないでくださいよ！」

「この程度じゃあ、死なない！」

その言葉を聞くと、風美丘はユウ力の手を取り、走り出す
そのとき、輝夜はまた何かを言う

「ある人の生きる希望はこうでした、『刺激を与えたい』、私がそ
れを解釈した結果…

超高電圧の雷へと変わりました、当たれば即死です」

さらに今度は右手を突き出す、が何も現れない

…

即座に理解した、何も現れないんじゃない

目に見えなかった

輝夜が操作したものは

重力

「があっ！？」

急に体が浮かび上がったかと思えば、病院の壁に押し付けられていた
首は何も掴んでないが、圧迫され、呼吸が出来ない

「ある人の生きる希望はこうでした、『全てを平伏させたい』、私
がそれを解釈した結果…

重力を操れるようになりました、このように、ね？」

締め付ける力を強くしながら輝夜は表情の無い顔で言う

「お前の… 能力は… っなん… だ… ！？」

ファンタジア

「希望代償、相手の思考を読み取り、生きる希望を見つけ、それを
元に演算パターンを作成し、相手の希望を再現する力… まあ、ここ
で言う生きる希望というのは『自分だけの現実』^{パーソナルリアリティ}の事ですがね」

丁寧な説明をしながら、一步一步と私に近づく

「貴方は栄養価値の高いエサ、というのは分かりますが、一体どんな味なのか分かりません、だから食すのです」

そして、私の目の前へと辿り着くと

今度は私の頭を右手で直に掴み

首を開放する

しかし、それで安心出来たのも一瞬

「あああああああああああッ！？」

脳に直接電気を流される様な激痛が走る

「…成る程、これは美味だ」

「ぐっ…があ…ああああああ！？」

激痛の余り目は開けられなかったが

絶対に分かったことがある

この時

コイツは狂気の笑みを浮かべていたに違いない

コイツの触れた箇所から狂気が伝わってくる

コイツは…

コイツは…！何なんだ…！？

悪い…速魅、約束を破るかもしれない

そう私が謝り掛けた時、激痛の余り意識は途切れた

…

…

「ある人の生きる希望はこうでした、『全てを守りたい』、私がそれを解釈した結果…

絶対に能力を通さない時間へと変わりましたが、一定時間、どのような能力も外側からの攻撃であればシャットアウトし、内側からの能力は通す」

「まあ、ある人と言っても…貴方の事ですがね、月山光二さん」

目から光を失い、力なく手足を重力に任せている月山の頭部を掴みながら輝夜は言う

そして、そのまま右へ放り投げる

すると月山の体は何の抵抗もなくアスファルトの地面に叩き付けられる

「こんな事はしなくても廃人確定なので…どうせなら一思いに救ってあげましょう」

そう言いながら輝夜は右手を一度握り締め、開く

すると真っ青な炎が現れ、周りの酸素を全て燃やしながら燃え続ける

「ある人の生きる希望はこうでした、『励ましたい』、私がそれを解釈した結果…」

超高温度の炎へと変わりました、これも当たれば即死です」

感情の無い言葉でそう言う

そして、さらにこう言う

「私の所為で貴方は廃人と化しました、ならば私は貴方を救わなければいけない、だから」

「救われてください」

そういい、右手の炎を高く振りかざした瞬間

パン！という軽い音と共に一面が光で包まれる

「…？」

輝夜は大して驚きもせず、目を瞑り、光が終わるまで待っていた

そして、次に輝夜が目を開けたときには

月山の姿は消えていた

「まあいいでしょう、最低限の目標は達成できました、落とし前が付けれなかっただけで」

そっくり、誰でもなく

虚空に向かって最後の台詞を言い、十一次元の世界へと飛び、何処かへ消える

「ある人の生きる希望はこうでした、『自由』、私がそれを解釈した結果…」

何処へでも飛べる力へと変わりました

最後の台詞はそこには存在しない者への言葉だった

「　　そうでしょう？風美丘速魅さん？」

…
そのとき病室では

「2メートルクの衝突事故か…上手な嘘を吐き過ぎたかもね……もう疲れた、今日は眠ろう」

御代

彼は嘘だけは吐かない男であつたが

これが

これが彼の人生で一度だけ吐いた嘘であつた

…

そして場面は変わり、路地裏へ

「こ…ここまで来れば…」

月山を救つた男、それは、髪は真つ白に染め上げており、服装は、実は下着です、と言われても誰も疑問に思わないくらい真つ白な服に普通のジーンズ、さらにその上から白衣のような上着を着ている、しかも彼の目の水晶体は真つ白であり、彼の横には白杖はくじょうが置いてあつた

しかし、先程の輝夜の白とは違い、純粹無垢な白であつた

「ど…どんな奴を拾つてきたんだ…俺…」

彼は怖いもの見たさ50%奇心50%で顔を覗いて見る

「…細かくは見えないけれども、だがしかし意外と可愛くないか？

むう…これからどうするか…」

彼の水晶体は真つ白だ

それは、所謂白内障という物であり

水晶体を手術するしかない、つまり、目にメスを入れなくてはならない

そう聞いた時、彼は即座に否定した

その結果…

暗くない所では全く目が見えず

暗い場所でも余り目が見ない、という残念な感じに出来上がってしまった

ここは路地裏であり、それなりに暗いが、あまりハッキリとは見えないため

月山の顔が女性に見えたのだろう

「とりあえず…家に持ち帰るか…」

彼は、もう一度月山の手を肩に回し、帰路へと着いた

：

：

そして、彼の自宅に到着する頃、既に日は暮れていた

何故なら、輝夜から無我夢中に逃げた所為により、おもいつき道に迷ったのだ

そして、彼は勢いよく玄関のドアを開け

「超高速帰宅五分十秒で到着ウ！」

「遅い、晩御飯は自分で作ってくれよ」

「お前…盲目の俺に何言って…」

大嘘を吐いた拳句、同居人に心無き言葉を放たれ、心が折れそうだと
…と思わず呟く彼

「っていつか、聞いてくれよ神岡かみおか！俺、人助けたぞ！盲目なのに！」

「君は厳密に言えば盲目じゃない、面倒事に僕を巻き込むな、この家から出て行け」

さらに追撃を掛ける神岡、まあつまり同居人な訳だが

「何か勘違いしているようだけど、この家の主俺だからね！？」

ちなみに普通の一軒家である

「うるさいなあ、僕は君の主だ」

「違いますからね！？」

神岡はどうやら彼には見向きもしないようだ

が、何時もの事なので彼は落ち込みもしない

どうやら神岡はソファに座りながら何かを凝視しているようだ

「ってか、神岡…お前、また通信販売見てるんじゃない？」

「違う、全く違うか」

『この掃除機はなんと！吸引力が落ちないんです！』

「なん…だって!？」

『凄いですねえ！でもお高いんでしょう？』

「だろうね…」

『それが…いまなら埃カット率100%の特殊フィルター三枚付きで、何と三万五千円!』

「や…安い!」

『安いですねえ！これは驚きですよ!』

『しかも、今なら何と！もう一セットを付けて何と六万円です!』

「…!?馬鹿な…!？」

『凄いですねえ！買うしかないですねえ!』

「確かに…」

『さらに！この特殊フィルターを一ヶ月に三枚を送るサービスを二万円でお付けします!』

「これは…!」

『此方の最新掃除機『Okuson』が欲しいお客様は…』

「買おう！買おう、白来!」

ちなみに白来とは彼、の名前である、よく苗字と間違われたり、読み方が分からないと色々と困る名前だ

因みにフルネームは白来が北河白来

神岡の方が神岡 司である

「アホか！絶対あのフィルター100%もカットしねえぞ!」

『なお実際に試したお客様の話は…H・Aさんの話を聞きましょう!』

テレビの画面が変わり、代わりにレポーターとバックに大量の健康グッズなどを詰め込んだ女子高校生が写る

『この間お買い上げになった掃除機の感想を聞かせてください!』

『もう凄いですね、毎日持ち歩いてますよ』

「嘘付け！それはただの変人だ！いいか！神岡！絶対…もう電話し

てるし……」

必死に止めようとした白來の耳に電話機の子機の子機を押す音が
入った

「……ハハハ……もう掃除機53台目……」

「スぺアだよスぺア」

「んなにいらんわ！ドンだけ速いスピードで掃除機壊れるんだよ！」
掃除機は一台で少なくとも五年は持つ

265年、それだけの期間がなければ使い切れないスぺアである

「まあ、君は人を持って来たんだ、それで掃除機でチャラだよ」

「使わない掃除機と人間を同価値にすんな！」

そんな北河の声を無視して、神岡はゆっくりと振り返る

「あーらら……それ、男だよ」

「だからどうした！？女しか拾ってくるなと！？」

北河は正直男という事に驚いたのだが、それよりも神岡の『うわ、
いらねー』みたいな反応に気が行ってしまったようだ

「にして、どうしたのさ？ダンボールにでも捨てられてたの？」

「某蛇でもあるまいし……輝夜に狙われてた」

「はやく元の場所に戻してくるんだ！」

「捨て犬じゃねえんだから！」

神岡は、見た目は華奢で、顔は上の上という、とても女性に人気が
ありそうな容姿なのだが

……

残念な性格なのであまり人気は無い

「まあ……いいけど、とりあえずソファに座らせなよ」

その言葉を聞き、白來は白杖を動かしながらソファまで辿り着き、
月山をソファに座らせる

そして、力なく腕と足を自由にしている月山を見て、神岡はこう一言

「ありや、事後だ、これ、もう廃人コース確定、つか多分意識戻
らないね」

「諦めるなよ……いや、これに関してだけは諦めるしかないか？……

輝夜の犯行だしなあ」

白来は輝夜について良く知る人間だった、
理由は単純、一時期狙われていたからだ

「まあ、しばらく様子を見て、それからだ……」

：

：

月山は真っ暗な世界で捜し求めた
速魅という光を

07・無感情<Hope>;(後書き)

前は酷かった！あれは酷かった！

でも仕方が無かったんだ！空気使い先生にやれ！

すみません、いい訳ですね、自分がやりたかっただけですわ、あれでも引かないで！寧ろ寄って！

余談ですが、極秘裏ルートで幸坂先生イラストのかざみん、見せてもらいました

イメージ通りで怖かった、幸坂先生、あなた読心能力者ですね？

08・襲撃者<Killer>（前書き）

今回はS k y p eで空気使い先生と話しながら作成しましたので
おそらく何時もより格段にマシかと

そして、今回の話は法則無視の十五話のネタバレが多少含まれます
嫌な方は最初の方を飛ばしてくださいませ

では、お楽しみください

風波君は正常です、空気使い先生のご指導の下正確に書きました

08・襲撃者<lt; Killer >gt;

暗い路地裏に一人の青年が居た

その青年は路地裏という暗い空間には、似合わない程白すぎた
その青年の名は

輝夜望

輝夜は見下していた

輝夜とは対照的で黒く、黒く、真つ黒な青年

その少年の見た目から連想される言葉はまさしく『死神』

弾けたような髪の色は光も受け付けないただ深海のような深い闇色で
目の色はどこか光りを無くした金色だ、ただ服装は標準制服の中に
青色のＴシャツを着こんだ服だ

「随分と酷い有様ですね、法則無視にやられましたか、回復しない
ところを見ると」

黒い青年の右手が丸ごと吹き飛んでいた

「うるっさいなあ！放って置いてくれよ！」

青年はそう叫びながら左手から雷槍を放つ

その速度は光の速度に達しており

輝夜は避ける事さえ出来なかった

その結果に少しだけ気が晴れたのか青年は薄い笑みを浮かべる

「どうしたのですか？随分と楽しそうですが、何か良い事でも？」

「なっ！？…直撃じゃ…！！」

輝夜は傷付く所が無傷であり、服に焦げ跡さえ無い

「ある人の生きる希望はこうでした、『全てを守りたい』、私がそ
れを解釈した結果…」

絶対に能力を通さない時間へと変わりました、一定時間、どのよう
な能力も外側からの攻撃であればシャットアウトし、内側からの能
力は通す」

輝夜は雷槍が届く前に即座に能力を通さない時間へと入り、雷槍を

無効化していたのだ

「制限時間は三十秒、使用後は使用した時間と同じ時間は使用不可……」

そんな事を言いながら輝夜は右手で青年の首を掴み、持ち上げ壁に押し付ける

「あなたは、どこまで栄養価が高くなりましたかね、木原幽平さんきはら ゆうへい」
輝夜は素晴らしいながら首を絞める力を強くする

「……むしろ栄養価が下がりましたね」

「うる……さい……なあ！人を人と見られない真正正銘の化け物が！」
その言葉がまるで聞こえていないかの様に喋り続ける輝夜

「法則無視ですか、法則無視に敗北したのですね、だから貴方の生きる希望は弱まった」

「黙……れ……！」

「貴方の生きる希望は『復讐』、それが完全となった時、私は身も心も完全に焼き尽くす復讐の炎を手に入れられる……ですが、その希望も最早無駄なようです」

そついい、輝夜は首を絞める力を一層強くし、木原の意識を刈り取り木原を連れ、十一次元の世界へと消える

……

……

月山の自室にて

そこには暗い表情をした、ユウカと風美丘の姿があった

「……あの人……死んじゃったのかな」

数々の死の現場を見てきたユウカにとっても家族と同然の存在だった月山を失うということはかなりの負担であった

「そんな訳ありませんよ、月山さんは嘘は吐いても約束は破りません」

ユウカに対し、そう言い優しい笑みを浮かべる風美丘
その笑みを見て、ユウカは力無く笑うと元の表情に戻る

「やっぱりリーダーの言った通りだ、粒子移動は居ないみたいだね！…超速反射あ？面倒くさいなあ」

そんな事を言いながら月山の部屋のベランダを勢いよく開けた人物は中学生の制服を着た夏日優火

よって、夏日のクローンである

「ひっ…！」

即座にユウカは風美丘の背後に隠れる

「あー、面倒だからさ、そのチビ、こっちに渡してよ」

夏日のクローンは如何にも面倒くさい、といった感じで頭を掻きながらそんな事を言う

「嫌ですよ、それより貴女達は何故殺し合っんです…！？」

「そんなの決まってるじゃない、オリジナルになって自由を手に入れるのよ！」

クローンは強く自身満々の声で言い放ち、更に続ける

「一つ一つ目標の為に生み出された私達にとっては自由は絶対的な物だった！」

そして、若干妬みとも怒りとも複雑な感情の入り混じる声で更に続ける

「その為に…！その為に人を殺して何が悪い！？」

「確かに自由は価値のある物ですよ、そして価値のある物を手に入れるにはどのような犠牲を払っても良いでしょう」

その言葉を聞き、夏日のクローンは薄笑いを浮かべる

「でも」

その訂正の言葉を聞き、夏日のクローンの表情は若干イラついた表情へと変わる

「その考えは昔の私です、今の私はもう」

風美丘は完全に此处で過去の自分と今の自分を別にする

「自由なんて要らない」

そう言い放つ

その言葉を聞き、夏日のクローンは期待外れの答えが返ってきた、

という表情と、結局コイツも同じか、という表情が混じった顔で溜息を吐く

「あーあーあーあーあーあー！つまらないなあ！そういう反応！もう見飽きたよ！」

そう夏日のクローンが言い放ち、懷から軍事目的に使われるような前は普通の鋭利なナイフを出す、だが夏日のクローンが持つのは少し特殊で、後ろには肉を剃るためのギザギザなサメ肌のような構造をしていて、さらに先端が漁業のモリのようになっている、刺さったら簡単には抜けないし無理に抜こうとすると苦痛を伴う

そして、ナイフを振りかざし、いざ戦闘を始めようとした瞬間バンツ！という音と共に思いつきり玄関が開く

「がちたー！ーんツツ！！俺だー！ーツツ！！結婚してくれー！ーツツ！！」

：

絶句だった

風美丘、夏日のクローン、ユウカ、全員が玄関から入ってきた人物
そう、それは風波^{かぜなみ}ヶ丘^{がおきとうがっこう}高等学校

建設者の息子、一部では人当たりのいい常識人、が、また一部では気の狂った狂人であり変態であり、変人

その名は

^{かぜなみ まこと}

【風波聖徒】

「…あるえ？がちたん居ないの？つか、おにやのこ三人でキャットファイトか！俺も混ぜろっ！」

無茶苦茶な事を言って指をワキワキと動かす風波

三人の個々の感想は違っただろう

だが、一つだけ同じ事を思っていた

空気を読み、と

^{ディストラクション}

「…くっ！物質破壊も居るんじゃ…分が悪いわね…一旦引くわ…」

そう言い、夏日のクローンはベランダから飛び降りる

「あー？逃げたか…まあいいか…生徒会長に似てたな…新ジャンル、ロリ生徒会長…ふおお…それより君は…巷でエロいと噂の風美丘速魅、通称かざみんじゃないか!？」

夏日の逃亡を大して気にもせず、風波は風美丘へと近づく
ちなみに風美丘は若干引き気味だった

「聞く所によると…旧スク水でポーズを取った写真を販売している様じゃないか？」

「いえ、してませんよ、そんな営業…というよりそんな販売をするとしても、私の体は光二さん専用です」

お互いがお互いの異なる変態具合を醸し出し、牽制の距離を保ち続ける

ユウカはもう何かに吹っ切れたのかソファに横になってしまった

「じゃあ、俺をがちたんだと思って…!!」

「嫌ですよ、光二さんは私を攻略してるんです、貴方に攻略はされません」

「…NTRもいいだろう？」

「私はこれでも純粋なので」

お互いがお互いの角をぶつけ合う獣の如く言葉の攻防を繰り返す二人
そんな試合に終止符が打たれた

「それより、私は光二さんを探しているんですよ、何かいい案ありません？」

「…あー、あれがあるぞ、多分、光が人物を追跡するイメージを加えた石とか作れば、即発見だろう」

その風波の言葉を聞き、風美丘は満面の笑みを浮かべる

「本当ですか!??じゃあ光という人を探しましょうよ!」

「あ、俺、がちたんに協力してもらおうと思って来たんだよ、まあ、この際かざみんでもいいや」

早速意気投合し、頷き合う二人

それをつまらなそうに見ているユウカ

「あ、あとゆうかりんもね」

「ゆ、ゆうかりん…?」

「そう、今、この瞬間に思いついた…ってか、君、何処かで会ったような…真口リ生徒会長…ふおお…」

「無い、気のせいだよ、会ったこと無い、初対面だ」

因みに彼女は以前風波邸を訪れた際に風波に襲われている
それは彼女の心に大きな傷を残した

…

「なあなあ、かざみんかざみん」

「その呼び方やめてくださいよ」

「この間さ、光に言われたんだ『お前はやればできる子』だって」

「いえ、なんです、それは…多分、意味を取り違えてると思いますよ?」

「ドン引きだッッ!!」

「貴方が引くんですか…」

08・襲撃者<killer>(後書き)

ふう、駄目だ、グダった
なんとかならんかね

09・図書館<Library>(前書き)

空気使い先生が仕事が遅いのでSkypeで設定を聞いて書きなぐりました

私、月山光二は普段夢を見ない人種だ、だが珍しく夢を見た
真っ暗な世界に私一人

そこに一つの光が差す

綺麗な光ではなく痛々しい突き刺さるような光
白すぎて白ではないアイツ

輝夜望が現れた

そして次に輝夜の目の前に速魅が現れる

「やめろ…」

輝夜は速魅の首を右手で掴む

「やめろ…!」

そして輝夜は左手から雷槍放ち

「やめろオオオオオオオオオオオ!」

速魅の腹を突き破った

そして、速魅の口が弱弱しく動き、こう一言

「な…んで…こんな…こと…するんですか…」

その声は驚愕に彩られていた

「光二さん…」

意味が分からなかった

気がつけば私は右手で速魅の首を掴み

左手には雷槍が

そして私は

笑っていた

「ッッああああ!」

私は勢い良く起き上がる、夢と分かっているても異常な程の恐怖感が
私を襲う

強烈な吐き気が私を襲い、思わず口を押さえる

「ハアッ…！ハアッ…！」

上手く呼吸が出来ず、酷い目眩がする

そして、左目に異常に痛む

私は覚束無い足取りで部屋の端に置いてある三面鏡に近づく

…私の部屋に三面鏡などあったのだろうか？

だが、収まらない左目の痛みの原因を確かめる事に気が取られていて、そんな些細な事は忘れてしまった

三面鏡の前で私はゆっくりと左目を抑えていた手を退かし、左目を開ける

鏡に映ったのは

感情が全く無く、色は見る角度によって変わる定まらない色をした左目

輝夜のそれであった

「あああああああ…！」

私は後ろに下がり、三面鏡の前に置いてあった椅子で三面鏡を何度も何度も何度も殴る
完璧に割れるまで

「はあっ…はあっ…くううううう…………」

私の心は得体の知れない恐怖感で埋め尽くされ、思わず部屋の隅に座り込む

その直後、部屋の扉が勢い良く開き、そして見知らない二人の男が部屋に入ってくる

「…これは…まあいいか、それより…信じられないね…輝夜の攻撃を受けて廃人から抜け出したよ…？この人」

顔は上の上で黒い髪を乱雑に梳かした感じの男が言う

「悪い、状況が分からないから何が…これは…で、何が…まあいいか、なのか分からないんだが、ちよつと待って、お前の感覚は一般人と違うから無茶苦茶怖い！何があつたん！？」

髪を真っ白に染め上げていて、服も白で統一し、更には眼の水晶体までが真っ白という、異様な格好の男が若干ヒステリックに言う

この男も白だが輝夜のような白ではなく、純粹無垢の白

「ん？大した事はないよ？三面鏡が粉々に割れているだけ」

「思いつきり大した事ある！その三面鏡無茶苦茶高エんだぞ！」

「まあ、落ち着きなよ、それより例の彼が復活したよ？ここはパーティーを行うべきだ」

「お前が楽しみたいだけだな！絶対！……でもな、まあ、凄いな……」
黒い髪の男がゆっくりと近づいてくる

「何故鏡を割ったんだい？」

「目が……左目が……」

輝夜と同じように成っていた、とは言えなかった

が、男は私の顔を覗き、こんな事を言った

「左目がどうしたんだい？別に異常は無いけれども……」

「……は？確かに私は……」

「ほら」

そういつて男は鏡の破片に私の左眼を映す

鏡に映った目はただの黒い目で、色も定まっていた

「……？」

「……幻覚か？」

……

「つまり……私は三日間寝たきりだったと？」

「まあ……目が覚めたのが奇跡だよ」

あの後二人の自己紹介と私が何故この家に居るかを二人の口から聞いた

なんでも、白い方が北河白来、普通の方が神岡司、というらしい

「……お前等は輝夜について知ってるのか？」

「ああ、痛いほどな」

「……何故？」

私の問いに神岡が答える

「実は僕は同じ研究所に居たんだ」

「そして俺はその研究所からコイツを引き受けている……」

「引き受けている？」

「そう、特殊固体の通常生活にての性格の通常化の実験さ」

そして、若干暗い顔になり、重い口を開く

「僕は特殊固体52番：最高の頭脳を持つ者と最高の運動性能を持つ者を掛け合わせて人工的に作成された超人…」

神岡はそこで喋るのを止め、あとは白来、君が言ってくれ、と言ってソファに横になってしまった

「ああ、…絶対能力^{レベルシックス}って知っているよな？」

絶対能力、その名前はあってもそのレベルに到達する人物は居ない
「一部の科学者は考えたんだよ、自然に出来た人間に絶対能力が無理なら人工的に絶対能力になる事を想定した人間を作ればいいってな」

「それが…神岡…」

「そうだ、でも発現した能力は水流操作のレベル4、だけど諦めの悪い研究者達は俺に神岡を毎月資金を提供するという条件で預けたのさ」

「…という事は他の奴も…」

「いや、他の奴は自殺した、絶対能力に辿り着けないと自分で悟ってたな」

絶対能力の為に生み出されたのに絶対能力に辿り着けない、生きる希望も何もない話だ…

「だけど、神岡だけは自殺はしなかった、まあ…本人は所謂『変わり者』で絶対能力なんてどうでもいいんだと」

一通りの説明が終わったからか、北河は、んじゃ、本題に入るか、と言い、輝夜の話に入る

「輝夜はな、神岡と同じ研究所に居たんだ…まあ、知ってるって言うても…アンタの知っている事と同じだよ、白すぎて毒々しい白で、尚且つ感情を捨てちまった人間って事だけさ、分かるのは」

…誰から感想を聞いても絶対に同じ感想が帰ってくるというのも珍しいだろうが

輝夜の場合は仕方がない、あの白は毒々しすぎる
見るだけで目が痛む

「僕は」

ソファに寝転んでいる神岡が言葉を発した

「僕は、君達の知らない事を一つだけ知っているよ」

意外な言葉に北河も驚いている

「…アイツ、輝夜望の生きる希望は…」

神岡は起き上がり、こう言った

「『救い』だ、アイツは神をも凌駕する力を手に入れて世界全体に『死』という救いを与えるのが最終目標だ、その為にアイツは人間を食らい続ける、生きる希望が『生命の死』なんて奴を見つけてしまったら…」

「世界は終わる……」

なんて奴だ…

自分の中の定義を押し付けて何も言わず殺すと言うのか…？馬鹿
げている…！

能力も馬鹿げてるなら本人の思考も馬鹿げているという事か…！！

…

場面変わってとある研究所では

「如月玲さん」
きづらきれい

「帰ってきたかー…うん、帰れ」

「ここが私の居場所です」

暗い研究所には二人の人影があつた

一つは毒々しい白すぎて白ではない男の影

もう一つはその白の毒気を受けて平然としてられる女の研究者

「お前は私の人生での最大の失敗だよ…」

「私は貴女に感謝しているんですがね、貴女じゃなければ私は希望
代償を得る事は出来なかった」

「そうかい」

女の研究者、如月は心底嫌な顔をして右手のコーヒーを飲む

「あーあ、木原君が一方通行なんて化け物を生み出したの笑ってたら…私はもつと酷いのを生み出したよ…人の不幸を笑っていると自分に帰って来るモンだねえ…」

如月はもう一度輝夜を見て、こう問いかける

「結局さ、あんたの生きる希望ってなんなのさ？ある人はある人は…って自分の生きる希望言わないじゃん、不公平だよ、それ」

「私の生きる希望ですか、私の生きる希望は『人類への救済』…私は人類を救います、それが私の存在意義なんですから」

「あのねえ、人類を救っていいのは神にしか許されないんだよ？」

「そういう事なら、そういう事なんですよ」

輝夜は遠回りに自分は神になる、と言う

「まあ、どっちかって言うともう死神だよ、あんたは…」

如月はそう言い捨て、懷から拳銃を取り出す

「自分の時いた種は自分で刈り取らなくちゃあねえ…」

その拳銃の標準はゆつくりと輝夜の頭へと登っていく

輝夜がさすがに危機感を覚えたのか、重力を操る為の演算をし始めた時

「なんてね、私はそんな大物じゃないんだ」

如月はそう言い放ち、拳銃の銃口を自分の頭に付け、引き金を引く

輝夜はそれを色の定まらない目で見つめていた

相変わらず感情のない目で

「貴女の生きる希望は…『つまらない生命の死』でした」

如月は知っていた、自分の生きる希望が輝夜の最も欲しい物なのに希望を食らわなかった事を

輝夜は自分に『希望代償』という力を授けてくれた如月を女神のよう扱っていた

その女神が目の前で死んで、感情を取り戻せれば、それが如月の考えだった

だが、それは遅すぎた

「安心してください…すぐに全員送りますから」
輝夜は女神の死を乗り越え、目標への決意を更に硬くするだけであ
った

：

風波邸にて暗い表情の風美丘に暗い表情の風波が話しかける

「光は…光は…！冬眠しちゃったんだ…！」

「はあ？今は夏ですよ夏、大体熊じゃないんですから…ふざけない
でください」

その言葉には若干の殺意が籠もっていた

「いや、さ、冗談抜きで昏睡状態なんだよ、光、いやいや起きると
思ってたんだけどね、結構脳に負担が掛かってるんだわ」

「ええ…何時起きるか分からないんですか…」

「最低でも一週間か…長くて一ヶ月か…」

「そんな…」

絶望的な答えに風美丘は、頭を抱える

「でも、まあ、なんだ、時間あるし、気晴らしに何処か行ってこい
よ」

「こんな状況に何を言っているんですか！」

この三日間風波からの膨大なセクハラ行為を受け続け、怒りの臨界
点を遂に突破した風美丘は

風波へと殴りかかる

が、簡単に避けられる

そして、横を通り抜ける際に風波は風美丘の額を人差し指で軽く押す
すると、先程まで暗かった風美丘の表情が幾らか明るくなる

「…？一体何を…」

「かざみんのがちたんの死亡に対する恐怖感を『消滅』させたんだ、
さあ、羽を伸ばしてくるべきだ」

「それも…そうですね、じゃあユウカさんはお願いします」

「え！？ちょ…！！」冗談じゃ…！！」

その言葉を聞き、不気味な笑みを浮かべて風波は了承する

(計画通り…！)

「さて、ゆうかりん、何をして遊ぼうか？鬼ごっこ？鬼ごっこだね、鬼は捕まえた人間を食べちゃうからね…？」

「くそっ…！来るんじゃない化物^{ロリコン}……ッッッ！！」

…

風美丘は言われたとおり外を徘徊していた
すると、閉鎖された図書館を見つけた

「…これは…アカデミックに探索すべきですね…」

風美丘は図書館のドアをゆっくりと開け、中へと進入する…と
奇妙な光景に出くわした

五冊の本が円形状に浮いており、

その上に人間が座っている

そして、その人間の前にはテーブル代わりなのだろうか、更にもう
一つ本が浮いており、その上には東洋風のティーカップが置いてあ
り、湯気がある事から、おそらく中には紅茶でも入っているのだろ
うか

本に座っているメンバーは、左から順に金髪で両方の耳にピアスを
してチェック柄で半袖の上着に半ズボンのジーンズを着た青年、数
日前に月山家を襲撃した中学生の服を着た夏日のクローン、脱色し
た髪に淡い赤色の目をして自分の手が隠れるほどサイズの合わない
トレーナーを着て下には短パンを履いているだけという奇抜な服装
で不気味な笑みを浮かべ続ける少女、白くてボサボサのショートカ
ットに寝不足のような不健康そうな顔だが、目には確かに何か強い
意思が籠もっており、服装は赤の派手なＴシャツを着ており、下は
普通のジーンズの青年、同じく白くサラサラした背中まである髪で、
かなりの美人であり、服装は常盤台^{とぎわ}中学校の征服に軍帽をかぶつて
いる少女

(…本当に不思議空間に出会っちゃいましたよ…)

風美丘は来た事を一瞬後悔しながらも、本棚に隠れ、得意技の盗み聞きを開始する

「Starts・議会を始めようか…議題は多重能力が法則無視に敗北した事だ」

白くてボサボサのショートカットの青年がそう言う

「あは、きいはらくん、負けちゃったんだあ？かーわいそー…んふふ」

脱色した髪少女が見た目の異様さとは正反対の甘ったるい声を出すその甘ったるい声が余計異様さを引き立てている

「ん、ハル兄、盗み聞きしている奴が居るよ」

「Really?…ああ、本当だ、居るね、本棚に隠れてなんてないで…出てきたら?」

「ひやはっ、りいだあは何でもおみとーしだねえ、あはは」

何故か風美丘が本棚の裏にいる事を見抜かれ、風美丘は不思議に思いながらも前に出る

「いやー見つかっちゃいましたか…」

「ん?超速反射じゃん、何やってんの?こんなトコで」

夏日のクローンが嫌な笑みを浮かべながら風美丘に問いかける

「まあ、なんというか…まあ、そんな感じですよ」

風美丘は特に理由も無かったので、思わず言葉を濁す

「んん?ああ、閉鎖した図書館に興味があって入っちゃったんだ、駄目だよ、それ、今度から気を付けな?」

白いボサボサのショートカットの青年が、優しそうな笑みを浮かべながら風美丘に言う

「くきや、不法しんにゅー不法しんにゅー、うふふ」

更に歪んだ笑みを浮かべながら少女は愉快そうに甘ったるい声で言う

「ま、今回は許すけど…二度目は許さないからね?それと公言しないように」

その言葉を聴いた風美丘は、安心感から来る疲れに耐えながら、閉鎖された図書館を後にした

…
「…どうするの？リーダー」

金髪の青年が白いボサボサのショートカットの青年に問う

「Fixation・決まってんじゃん、死刑だよ死刑」

先程との豹変振りに、金髪の青年は若干の恐怖を覚える

「じゃあ、私が行こうかしら？」

白いサラサラとした髪少女はそう言った、^が

「No・透子^{とこ}、お前の手を汚す必要も無い、涼子^{りょうこ}、お前、行きたいか？」

「ひやはっ、久しぶりにお仕事^{いそまつ}が回ってきたよう！行く行く、きやはは」

心底楽しそうな笑みを浮かべ、本から飛び降りる涼子と呼ばれた少女は、三メートルの高さから飛び降りたが、綺麗に垂直に着地する
「うふふ、でっわあ、^{ターンポイント}通行返し、^{みやた}宮田涼子お、出勤しまあす、ひやはは」

そう右手を上げて宣言し、宮田はスキップしながら図書室から出て行く

「んじゃ、そろそろ…俺もお暇^{いとま}させてもらうかなつと…」

次に金髪の青年が重力に反した本をゆっくりと降ろし、じゃあな、と軽く挨拶をして、図書館を後にする

「Hay・透子、ミスド（注ミス・ドーナッツ）行くか？」

「ハル兄の奢りなら行こうかしら？」

「Ok・気が済むまで食ってくれ、あつ…でも食いすぎるなよ」

そういつて恐らく兄妹であろう白い髪の二人が図書館を後にする

「はあーあ、あのチビ…運だけはいいよなあ…」

夏日のクローンはそんな独り言を言っ図書館を後にする
こうして、図書館には乱雑にばら撒かれた本だけが残った

09・図書館<Library>（後書き）

宮田ちゃんは私の中で二位か三位ぐらいに好きなキャラです

10・異常者< ; Turn Point > ; (前書き)

空気使い先生の方は第一章が終わりましたね

なんか第二章から此方との交差が多くなるそうなので

更新ペースは遅くなるかもしれませんが、ご了承の事お願いします

明け方、午前五時頃、珍しく早く目が覚めた風美丘は外を徘徊していた。まあ、この時間帯にフラついていいると警備員アンチスキルに補導されるのだが、もう慣れているので風美丘は気にしなかった。慣れてはいけない事なのだが……

そんな風美丘を後ろから追いかける人影が在った、脱色した髪に淡い赤色の目をして自分の手が隠れるほどサイズの合わないトレーナーを着て下には短パンを履いているだけという奇抜な服装で不気味な笑みを浮かべ続ける少女、

宮田涼子のそれであつた

「あは、見つけた！見つけた！犯罪者！うふふ」

相変わらず不快感を与える甘ったるい声で風美丘に話しかける

「……ん？ああ、昨日の……何か用ですか？」

風美丘は大して興味も無いので、適当な返事を返しながら振り返る

「ふふ、知ってる？犯罪者は死刑なんだよ？ひやはは」

「はあ……そうですね、というより、その笑い声は何とかならないんですか？」

風美丘は先程から宮田の口から零れている笑い声が気になって仕方が無かつたので、思わず言う

「ひやは、これは無意識の内に出てる笑いだから無理だろう、くふふ」

相変わらず顔には笑みを浮かべたままで、不気味な笑い声を発しながら笑う宮田

その姿は誰から見ても異常な物だつた

「で、何の用なんですか？」

風美丘の問いに対し、宮田はその顔により一層邪悪な笑みを浮かべ「あは、だあーかあーらあーわあーたあーしいーはあー」

次の瞬間宮田の表情がより邪悪な物になり、より一層甘ったるい声

で言う

「あなたを殺すって言うてるんだよう？」

直後、宮田は後ろにあった看板を両足で垂直に蹴り、弾丸のような速度で突っ込んでくる

風美丘はそれに対応できず、もろにタックルを食らう

「がっ……！？」

風美丘と突っ込んだできた宮田はノーバウンドで十二メートル程吹っ飛び、そのまま勢いを殺しきれず、更に五メートルほど転がり続ける

「あひゃ、まずは左手を貰うよう ひやはは」

風美丘は振り向く途中だったために、偶然左手で防ぐ形になった折れてはいないが恐らく亀裂が走っただろう
それに対し、宮田は無傷であった

「くっ……一体何が……」

下にはいきなりの攻撃で大きなダメージを受けた風美丘が
そして、それに馬乗りになるように無傷の宮田が座っていた

「私の能力は通行返しって言ってね、学園都市第一位の演算パターンを参考に「自分だけの現実」を最適化した物なんだけど、私は『反射』を手に入れたんだけど」

一度言葉を区切り、心底楽しそうな笑みを浮かべながら言う

「ベクトルの向きは操作出来なくても強さは操作できるんだ、だからさっきは看板を蹴ったベクトルをそのまま何倍にもして反射しただけ、それと衝突時のベクトルを反射して、全部あなたに返したんだ」

そう言いながら、今度は懐からナイフを取り出し、高く振り上げる、そのナイフは、裏側に大きな凹凸が出来ており、血管をズタズタにすることを第一に考えられた設計だった

「まあ、そんな訳で近距離戦は苦手だからね、武器に頼るんだ」
そういつて一直線にナイフを振り下ろしてくる

「くっ……！」

風美丘はナイフが振り下ろされきれる前に体を上に動かし、すると密着していた為に下にスライダーのように滑る

「ありゃ、逃げられちった、まあいいや、一方的でも面白くないしね、せめて抵抗ぐらいはしてね」

宮田はまたより一層楽しそうに笑い

最初に最寄の壁を蹴り、弾丸のように斜めに動き、そして反対側の壁を蹴り斜めに動く、その動きを繰り返しながら風美丘へと近づく
「これくらいならっ！」

ぶつかる前に能力を発動し避ける

ベクトルを反射する以上、攻撃は無意味、下手に攻撃でもすれば反射され、そのまま間接が在り得ない方向へと捻じ曲がってしまうかも知れない

「避けてばかりじゃつまらないよう、もっと楽しませて！」

今度はナイフを持った手を最寄の壁に当て、音速の域に達した速度でナイフを投げる

弾道は見えなかったが、風美丘はその場から大きく離れる事でナイフを避ける

「っーかまえた」

後ろに何時の前にか移動してた宮田は、風美丘の背中を軽く蹴るすると、風美丘は勢い良く吹っ飛び、反対側の壁に思いつきり左肩をぶつける

「ぐあっ……!？」

そんな風美丘の元にゆっくりと歩み寄る宮田

「もう終わりかぁ、つまんないのー、ま、こんな物でしょ」

風美丘の目の前にしゃがみ込む宮田

思わず風美丘は左手で顔面を殴ろうとする、しかし、予想通り弾かれ、左手の間接が壊れる

が、このとき風美丘は見た

宮田の顔面の皮膚から5cm程で腕が跳ね返されたのを

もしや、と思い風美丘は能力を使い、実践する

宮田を守る五c mの防護膜に触れるか触れないかの境目で腕を引き戻した

普通の人体なら筋肉が悲鳴を上げるであろうその行動も、風美丘には難なく出来た
すると

腕を引くベクトルが反射され
勢い良く宮田を殴り飛ばした

「があっ……!？」

何バウンドも地面を転がりながら、状況が飲み込めない宮田
その姿を見て、風美丘はゆらりと立ち上がる、その表情は明らかに
勝ち誇った笑みだった

「ははっ… やつと気持ちよく殴れましたよ、性悪女が」

「…え?…え?何で…」

状況が飲み込めず、その場で呆然としている宮田に風美丘は吐き捨てるように説明する

「簡単な事ですよ、内側に向く攻撃が反射されて外側に行くなら、逆をやればいいって話です」

宮田を包む防護膜に触れるか触れないかの境目で腕を防護膜から離れるように動かすことで、外側へのベクトルが反射し、内側へ向かう
「まあ、私が調べた限りでは第一位はベクトルを『操作』する能力
のようですからね、この方法は初撃しか通じませんけど」

そこで一度息を整え、風美丘は言い放つ

「所詮出来損ないの反射しか出来ない貴女には有効策って事です」

その時だ、宮田の中の何かが外れたのは

「んふ」

突然に肩を震わせながら笑い出す宮田

「ふは」

ゆらりと亡霊のように立ち上がる宮田

「はひゃっ…くひひ…そうだよ…理屈なんていらなんだ」

顔を勢い良く上げ、風美丘を捕らえる肉食獣みよた

[illegible]

そう言いながら、後ろの電柱を蹴り飛ばし、再び弾丸のような速度で飛び込んでくる宮田

「一度も同じ手は食らいませんよ！」

風美丘は倒れて避けながら、蹴りを先程と同じ要領で放つが、反射はされなかった

「は？」

防護膜まで届かなかったのか、いや違う、絶対に届いていた、じゃあ何故か

そのまま通り過ぎた宮田は地面に落ち、勢いを殺さず、転がる反射を設定していなかった

「在り得ない… あんな速度でぶつかったら首が折れるんじゃない？」

額からは出血し、その赤い血を流したままに宮田はゆつくりと歩んでくる

「くひひ…くふ、あははははははははははは！」

風美丘は思った、このまま戦いを長引かせれば、確実に宮田は死ぬ
「ああ、痛い痛い痛い痛い痛い痛い頭が割れるように痛い
よう？ あははははははは！ 」

狂ったように笑いながら距離を詰めて来る宮田

風美丘はその異様に恐怖を覚え、後退りを始めていた

「あーあ！何でもつとはやく気が付かなかったんだろー！痛いのがこんなにも楽しいなんて！楽しい！楽しい楽しい楽しい！」

風美丘の取った行動、それは

狂った人形みやたの鳩尾に強烈な蹴りを叩き込む事だった

「うん...」

倒れながらも笑いを止めない異常な宮田
終わった、そう思った

とりあえず長居は不要と思つた風美丘はその場から立ち去る

問題点が一つあった
まだ病院は開いてないのに、この左手をどうしよう、という問題だった

…
「んあ？」

宮田が目を覚ますと、目の前に見慣れた男が居た
白くてボサボサのショートカットに寝不足のような不健康そうな顔だが、目には確かに何か強い意思が籠もっている
彼女の言うリーダーだった

「まさか…負けるなんてね…今回は見逃すけど、次失敗したら死刑だから」

そうとだけ言い捨てると青年は何処かへと行ってしまう

「ふふ…私が負けたあ？私が？あんなのに？学園都市のランキングにも乗ってない無名な奴に？…くくく…嫌だなあ、こんな世界…もっと楽しい世界が欲しいよ、楽しくて楽しくて楽しくて、狂っちゃう程に楽しい世界」

「そうですか、では私に協力してください」

突如現れた声に宮田はダルそうに首を動かす

と、そこには白くて白くて白すぎて白ではない青年

輝夜望の姿があった

「んあ？あなただあれ？」

「私ですか、私は輝夜望と申します、繰り返しますが私に協力してください」

輝夜望、という言葉聞き、宮田の表情が硬直する

「え…？輝夜望って…希望代償の？」

「知っていましたか、ならば話は不要ですね、貴女の生きる希望、それはとても栄養価が高い物です、貴女の生きる希望、自分だけの現実という生きる希望ではなく、本当の意味の生きる希望、それを私は頂きたい」

言っている意味が分からなかった、彼女が聞いた話では希望代償は相手の脳内の自分だけの現実を演算パターン化し、自分の能力として使う、という話だった

「表向きにはそうですが、コインに表裏があるように裏の意味もあるんですよ」

輝夜は宮田の思考を読み、話を進める

「自分だけの現実、大抵の場合それが生きる希望に直結しているのですが、貴女の場合は違う、貴女は自分だけの現実の他に『生命の死』という別の生きる希望がある。まあ、最近までは微弱な物だったんですが、始めての敗北で跳躍的に成長したようです」

宮田は感じた

考えとか

そんな物ではなく

肌で感じ取った

殺される

「出来れば抵抗しないでください、面倒なので」

宮田は直後に走り出す、暗い路地裏を抜け、大通りへ

しかし誰も居ない、宮田は人混みに紛れ込む事で自分をカモフラージュしようとしたのだが、そう上手くは行かなかった

「ある人の生きる希望はこうでした、『孤独』、私がそれを解釈した結果：

人が自然と嫌う空間を作成する能力へと変わりました」

毒素の高い白はゆっくりと歩み寄ってくる

：

私は暇を持て余して外を徘徊していた

まるで速魅のような行動だが、それ程に暇だった

そもそも、早く自宅に帰りたいのだが、北河や神岡が『絶対安静にした方がいい』と言ってあまり外出させてくれない、というより自宅に帰れない、ゆっくりしていつてね！状態だ

そこで私は異様な空気を味わった、
行きたくない

直感的に思う空間

しかし、私は感じた

一度感じた恐怖だからこそ分かった

これは間違いなく

輝夜

私はそちらの方向に足を進める

進めるために嫌悪感が強くなるが、無視して足を勧める

すると、脱色した髪に淡い赤色の目をして自分の手が隠れるほどサイズの合わないトレーナーを着て下には短パンを履いているだけという奇抜な服装の少女が、輝夜に首を絞められている光景が目についた

「では、頂きますよ」

左手で掴んでいた首を開放し、変わりに右手で頭を掴む

「やめろ……！やめろ輝夜！」

私の声が届いたかどうかは分からないが、輝夜は無視して例の攻撃を始める

「くああああああああ！！」

そのときの輝夜の顔は一層無表情だった

まるで当たり前の行動をしているような顔、その顔を見て

「輝夜アアアアアアアアアアアア！！」

私は怒りに身を任せ、輝夜にタックルをする

輝夜は軽く吹っ飛びながらも、空中で一回転して着陸する

「おや、月光二さん、お久しぶりですね、私の希望吸収^{ホーブドレイン}を食らっても無事とは、流石です」

私は、ぐったりと倒れこむ少女の意識を確かめる

「彼女は宮田涼子さん、私に最も貢献してくれる筈でしたが」

一瞬輝夜の顔が怒りに変わったような気がしたが、無表情だった

「貴方のせいで台無しです、どうしてくれるんですか」

「人を食料扱いして……！ふざけるな！」

その言葉を聞き、輝夜は更に無表情になり

「これがふざけてる顔に見えますか」

その表情に私は恐怖を覚える、即座に少女の体を持ち上げ、逃げるに徹する事にした

が、意識の無い人間は重みが増すなんて言うが

増すなんてものじゃない、麻袋に泥を詰め込んだような重みがあった

「ある人の生きる希望はこうでした、『真っ直ぐ進む人生』、私がそれを解釈した結果……

全てを貫通する物質へと変わりました」

直後に輝夜の右手から光線のような物が放たれる

私は直感で右に避ける、倒れそうになったが何とか耐え、逃げ出す

あの攻撃は……間違い無く、貫通物質ノンストップ

そうか……あれも輝夜の被害に遭った人間だったのか……

おおよそ、動かなくなった実験動物を動かすために作った装置があれだったんだろう

そのお陰で人間と呼べるような物では無くなっていたが

……

私は普通に病院に行きました、それで同質になった部屋に変わった人物が居たんですよ

「いや、こんな所で風美丘先輩に会えるなんて……！光栄だぜ！」

「は、はあ……」

彼の名前は上矢雄一かみやゆういち

何でも、私のファンだそうだし

凄くどうでもいい

「あの走るときの完璧なフォーム！惚れ惚れしたぜ！」

「そうですかー」

何時から私はこんなに冷たい人間になったんだろうか
元々でしたね

「サインください！サイン！」

「…で、貴方は何故この病院に？目立つた傷は見えませんか？」

「いやー体内に雷の槍を打ち込まれたんだぜ」

「よく無事でしたね！？」

「気合で何とかなっただけ！」

力強く親指を立て、グッジョブのポーズを取る上矢さん

面白い人なんですが、こう、人がこう、ね？

独りになりたい時ってあるじゃないですか、そんな時に騒々しくされると腹が立つ訳で

結局そのあと、取り合いは日が暮れるまで続きました

科学で彩られた学園都市、ここで新たな交差が生まれた

自由な人間はやみと、自由な人間ゆういち

守り続ける人間こつじと、壊し続ける人間りゅうこ

そして今日も学園都市は眠らない

10・異常者<Turn Point>(後書き)

お疲れ様でした、何故か長い回になってしまいました
別に最終回とかではないんで、これからもよろしく願います

11・再会日<Restart>:(前書き)

ツインテールの人間はツンデレだと、ピラミッドにも書いてありますし

という訳でツインテールはツンデレしかないんだと、思います
多分火星の表面にも書いてありますよ、きっと

11・再会日<lt;Restart>;

自宅、いや違った、神岡…違う、北河宅

あの後気絶したままの…宮田？を担いで私は帰ってきた訳だ

「ん、月山帰え」

此方を見た神岡は絶句した

まあ、絶句するだろう、普通

「…待て、待て、何が起こつてる！？何が起こつてるんだ！畜生！こんな目要らねえよ！」

北河は意味の分からないキレ方をしながらも、一寸たりとも動かない多分、適当に腕を動かして物を壊すのが怖いのか、怪我するのが怖いのか、どちらかだろう

「……月山が死体を担いできた…！！！」

「違う」

「「殺つちまつたか…」」

何お前らは二人して頭抱えて何を言っているんだ…

「違うと言っているだろ…輝夜に襲われてた」

「…また面倒事を持ち込んでからに！出て行け！」

「よし、やっと外出許可が出たか…世話になった、また会えれば会おう」

「ジョーッック！イッツアジョーク！」

神岡の放った言葉に対し、北河がフォローする

とりあえず宮田…をソファに座らせる

「……事後だ…」

「畜生…！輝夜はロリコンだったのか！」

悔しそうな顔をする神岡、意味を取り違えているだろうだが指摘する気はない、分かっていてやっているからだ
ツツコミ待ちの人間は放置してこそ栄養価が高くなるのです（若干望風に）

アイツは対面すると笑えないが、思い出してみると結構面白い事言っている気がする

「…言い方を変えよう、輝夜に食された」

「やっぱり…！輝夜はロリコンだと言うのか！」

テーブルに強く拳を叩き付け、怒りに身を震わせる北河
なんだお前ら、そこまで輝夜をロリコン扱いしたいのか…

別に底う必要も無いが、最近ロリコン疑惑が浮上しつつある私から
言われてみれば

結構傷つく、その言葉は

「…輝夜に吸われた」

「あいつ…！いつの間にロリコンに…！？ありえるのか…！？」

神岡が困惑の表情を浮かべる
表情豊かだな、お前ら

「…輝夜に虐められていた」

「くそっ…！ロリコンの上にリヨナ好きか…！！手に余る…っ！」
北河が頭を抱え込み、泣きそうな声で言う

演技力凄いな、お前ら

でもそろそろ飽きが回って来たぞ…

「まあ、理解出来てると思う通りだ」

「道端で見つけた中学生を盗んで走りだしたんだろ？ロリコン方
面に」

「いい加減飽きたぞ」

「はいはい、真面目にやりますよーっと」

「え…？真面目について…今ので正解じゃ…」

神岡は理解していたようだが、北河は…もう駄目だ

「んー、どうかなー、三日で気が付くか？」

「ああ、途中で邪魔したからな、恐らく気絶しているだけだ」

成る程、と頷く神岡

「なら君の部屋に寝かせよう、あそこは一応一番高いベットが使わ
れている」

「待て、私が床に寝る事になる」

「いや、白来を床で寝せればいい」

「成る程、天才だな、お前は」

「お前から今すぐ出て行け」

居候と居候2（私）による勝手な決定にこの家の本当の主、北河白来は大いにキレていた

だが、所詮盲目の人間がキレた所で全く怖くもなんともないんだが…
「うるさいなあ、役に立たない癖に…まあいいや、それなら月山と
その子が添い寝すればいいよ」

「悪いが…私には私に好意を持っている人間が居てな、そういうのはちよつと気まずい」

その私の言葉を聞いて神岡がピクリと反応する

「何だと…！？好意を持つている人間が居る…！？リア充が…爆死しろ、お前が床で寝るべきである」

妙な口調に変わり妙な事を言い出す神岡

「ごめん…神岡、実は俺…彼女持ちなんだ」

「なんだおまえら？ズタズタに引き裂いてやってもいいんだぞ
あまり調子こくとリアルで痛い目を見て病院で栄養食を食べる事になる」

何を言い出すかと思えば…

「神岡、お前は一つ勘違いしている、私に勝てると思っている事だ」

「そうだぞ、神岡、俺でさえお前に勝てる自信がある、ボディブローで一撃だ」

「ウザイなおまえらケンカ売ってるのか？

ボディブローとか言ってる時点で相手にならないことは証明されたな
本当につよいやつは強さを口で説明したりはしないからな

口で説明するくらいならおれは牙をむくだろうな

おれパンチングマシンで100とか普通に出すし」

何なんだ…先程から神岡の周りを渦巻く殺気が桁違いだ

輝夜にさえ匹敵する…！

「なら私は能力を使おう（キリッ）」

「こんなに月も紅いから本気で殺すよ」

月、紅色ではない、全くない、むしろ曇ってて見えない

「あれだな、吸血鬼っぽいな、その台詞」

「そんな事を言っている場合じゃない…！北河！来るぞ！」

「あの世で僕にわび続けるお前ら……ッッッ！」

…

化け物か……？

足払いをされたと思ったら、一瞬と言う時間の間に鳩尾を15回、

そして背中を蹴られて地面に叩き付けられた

これが超人の力か…

それにしてもあの決め台詞はなんだったんだ…

『僕の撲殺龍拳が織り成す『七撃』の打撃速度は、一瞬と呼ばれる時間に七度殺すレベルです。人はこれを瞬殺と呼びます。あるいは必殺でも間違いではありませんが』

本当に殺される所だった…

そして、勝利した神岡の出した条件は一つ

『僕の目の前で別れる！』

流石に無理だと答えれば

『じゃあ彼女の前で性癖を暴露しろ！』

どれだけ人の不幸を望むんだ、お前は…

と思ったが既に過去の話なので仕方がない

北河はその罰ゲームをやる必要があるが、私はやる必要はない、ふう、命拾いした

となど考えながら、宮田を寝かせてある部屋へ向かう

様子を見て来いだとの事だった

「入るぞ」

一応声を掛けて入る

まあ、恐らく目覚めてな

「……女性の部屋にノーノックで入るってどういう神経してるんだよう……」

超覚醒していた

そして尚且つ着替え中だった、というか、あれだった

まあ、とりあえず昨日何があったかを聞いてくれ、

無惨にも神岡に敗北した私は、彼女の異常に汚れた服＋下着類を脱がして洗濯して乾燥機にかけるといふなんとも罰ゲームじみた事をやらせられたんだ

抵抗はあった、抵抗はあったんだ

繰り返し言う、抵抗はあったんだ、

でも一応、短パン、トレーナー、下着、全部脱がせと言われて泣く泣く、泣く泣く！脱がして、洗って、乾燥機で一晩で乾かして

その後にだぞ！？女性下着コーナーに行つてだな！？買ったんだぞ！？下着！

しかも神岡に『青と白の縞パン買って来なければ死刑』と言われ、泣く泣く買ったんだ

実費で

無茶苦茶引かれた、凄く引かれた、

影で『マジキモーい……』とか言われたのを私は忘れない

絶対神岡は殺す

そして、だ、そして

一応下着類だけ着せて、な、トレーナー部屋の隅に置いて置いたんだなのに

この宮田は

律儀に全部脱いで自分のを着る途中だったんだ
つまり、生まれたままの姿だったんだ

一言で言えば

全裸

「うううう………」

「泣くな！私だって泣きたいさ！ううううう……」

同時に泣き崩れる私と宮田

「……どうせあなたが私の服脱がしたんでしょ？」

「……そうだよ」

「……ロリコン……」

刺さった

心に刺さった、ハートブレイクボウだ

心が碎けそうだ

凄い涙目で言われた

もう罪悪感に溺れ死にそうだ

「……ごめん」

私は謝りながらドアを閉める

すると中から物体の破壊音がした

私は驚き中を確認する

と、

中には何も残って居なかった

いや、正確には私が実費を出してまで買った、この一生使わないで

あろう

青と白のストライプの下着上下セット

「……！？」

よく見れば窓ガラスが割れていた

……

私の……せい……なのか？

……いや、違う、絶対違う

……

……

昼下がり、私は非常に気まずかった

北河と神岡がずっとこつちを見下した目で見ているのだ

酷い、酷すぎる、お前ら

お前らが命令した事だろうが……ッッ！！

とか考えていた矢先、玄関のチャイムの音がした

「出てきて、ロリコンクス野郎」

「クツ……！何時か絶対殺す……！！」

勝てる気は一切しないがな、化け物だし

仕方ないので、私は玄関を開ける

その瞬間

抱き付かれた

相手が誰だかは一瞬で分かった、速魅だ

普通なら、ここで感動や嬉しさを感じるだろうが私を襲ったものは

恐怖

後ろからの視線が痛い、痛すぎる

神岡の視線が痛い

「光二さん……！」

「……かかかかかかかかかかかかかかかかかかかか……！」

後ろで奇妙な声を発しながら一歩一歩近づいてくる神岡、

私の取った行動、それは……

逃走

速魅を抱き抱え、即行で逃亡する

「きゃっ！？ちよつと……光二さん嬉しいのはわかりますが……」

「少し黙ってくれ！よければ走ってくれ！後ろの悪魔に追いつかれ

たら死ぬっ！」

「じゃあ、あと三時間はこの姿勢でお願いします」

「攣るっ！」

結局その後、神岡は壁を四速歩行で走って追いかけて来たり

B級ホラー映画的な逃走劇を行うことになった訳で……

誰かこの悪霊を鎮める人間を呼んでくれ……

11・再会日<Restart>:(後書き)

まずい、グダった

まあ、何時もの事ですよね、

というより、今回は酷いな、本当に

次回、恐らく今までで最も典型的なキャラが登場します

12・宿泊日&1t・Rest> ; (前書き)

やりたかったただけだろ話シリーズ2

12・宿泊日< ; Rest & go ;

廃工場にて、ホースから流れ出る水を浴びている一人の影があった病的に白い肌、力を加えれば折れてしまいそうな程、華奢な体、脱色し、真っ白となった髪、そして爛々と輝く淡い赤い瞳をした少女宮田涼子であった

彼女は輝夜望に食され掛けた所を月山に救われ、その後北河邸から脱走し

その後はこの廃工場に身を置いている

宮田は気付いていた、囲むように何人かの男が潜んでいた事をその中から一人の男が歩み寄る

「おい、お嬢ちゃんこんな所でショーかい？」

宮田はホースを投げ捨て、一言

「食べものちょうだい」

「ああ？まだ自分の置かれてる状況が分からないワケ？こんなに見せつけやがってよオ！」

一人の男が手を伸ばす、そして宮田の肌の五cmほど上で急に逆方向に動き、関節が壊れる

「い…？いぎやアああああッッ！」

男はかつて腕であった物を抱えながら転がりまわる

「ば、化け物オおおおおッッ！」

また一人の男が突っ込んでくる、それに対し、もう一度宮田は言葉を放つ

「食べものちょうだい」

男は聞く様子も無く、鉄パイプを高く振り上げて宮田へと突撃していく

宮田は軽く左手を突き出す、すると男は吹っ飛び、後ろにあった鉄骨の山へと姿を消した

「食べもの、ちょうだい？」

：
廃工場の隅で震える影があつた、先程の集団の一人だ
彼が何に怯えているか、答えは簡単だ

自分の胸元へと届くかどうかの身長しかない中学二年生

宮田涼子だ

やがて、この男の下に宮田が近づいてきた

「ねえねえ、もうあなたただけだよ？食べもの、ちょーだい」

「こ、これをやる！俺の持ち金全部だ！」

そういつて男は皮製の財布を突き出す、だが、宮田は受け取らない

「…結局、あなたもくれないの？食べもの」

「じゃ…じゃあ何が欲しいって言うんだ！」

男がヒステリック気味に尋ねると宮田はんー、と考え始めて

こう答えた

「あなたの心臓！」

：
七月三十一日、自宅へと帰宅した私は、携帯に掛かってきた番号に
少しだけ驚いた
なんと、母親からの電話だった、久しぶりの会話なので、若干緊張
する

「もしもし？母さん？」

『光二、明日何の日か分かってる？』

「え？明日…ああ、集まる日だっけ？」

『そつだよお、今日中に来なさい』

「はいはい」

無論許可書は事前に申請してあるから大丈夫だろう

そんな感じの私に対し、速魅が質問してきた

「光二さん、まさか…私を置いて帰省なんかしませんよね？」

「いや、する」

「もう遠距離は懲り懲りですよ！…とか言いつつ、実は既に今日が帰省日だと言う事は私のメモ手帳に書き記されていました、私も許可が下りているんですよ」

馬鹿な…私に休息の時は無いと言うか…

とか諦め半ばで、妙案を思いついた

「お前は…ここに残ってユウカの面倒を見てくれ」

「ユウカさんですか？許可書、出てますよ」

「何故だああああああ！！！」

え！？

何故！？

クローンだろ！？

個人情報とか登録されて無いつてか誰からの許可書だ！

「フリーパスポート券は…拾った」

拾いやがったのか！拾う確立100%ってか！ご苦労様なこつたなあ！！

畜生！

「さあ、今すぐ親に電話して伝えるのです、彼女と彼女との子を連れて行くと」

「違う、どちらも外れだ、私の中でのお前は友達以上恋人未満って所だ」

その言葉に若干のショックを受けたのか、速魅は顔を抑え『ヴヴヴヴヴ』とか奇声を上げながら後ろに下がる

「まあ、それなら仕方が無いか…」

私は諦め、再び実家へと連絡する

『はいはい月山です』

最悪だ、何が最悪かと言うと

出た人物が最悪だ…

月山光一、まあ私の兄なのだが

普通は優しい兄だがこういう手の話になると以上に過剰に反応するんだよな…

「兄さん、私だ、光二だ、母さんか父さんかとりあえず誰かに変わってくれ、最悪ポチでもいい」

『よっしゃ、兄ちゃんが聞こうか』

因みにポチとは実家で飼っている犬だ

「いや、あれだ、兄さんが聞くとその場で喉を掻き毟って死ぬような話だから駄目だ」

『まかせろ、兄ちゃんは強い』

畜生、絶対変わる気が無いな？もういい、この兄さんに少し罰を与えよう

「今日、そっちに行くんだが」

『おうおう』

「彼女と彼女と私の子を連れて行く」

『ギイヤああああアアああアアああアアあああああ！！』
思わず携帯を投げ捨てる

人間の発する声じゃない、もつと…

剥ぎ取ったらブヨブヨした皮とか、アルビノ霜降りとか、電気袋とか、アルビノエキスが取れそうな化け物の声だ
不味い、本当に首を掻き毟ってるかもしれない

とりあえず携帯を拾い、訂正をする

「あー、兄さん、嘘だ嘘、彼女というか女友達一人とその妹を連れて行く」

『ハア…ッ！ハア…ッ！ハア…ッ！兄ちゃん、切腹するところだったよ…』

危ない危ない、廊下でR-18的光景を作成する所だった…

そして、私が電話を切ろうとした時

兄が突然女友達に代われ、と言ってきたので、代わる

「え？何ですか？」

「…兄がお前と話したいそうだ」

速魅は私から携帯を受け取り、突然とんでもない事を言い出した

「はい、光二さんから説明を受けていると思いますですが性癖無限露出

光二様専用淫乱愛玩奴隷変態淑女の風美丘速魅です、得意なのは口です、口、口がご達者なんです、はい、趣味は光二さんに罵声を浴びせられながら蹴」

「死んでしまえ」

そう言いながら私は速魅から携帯を取り返す

『お前……！もう兄ちゃんはどう責任とればいいのかわからないよ
おおおおおおお……！』

「いやいや……あいつは口ではそういつてるけど普段は普通に純粹……だ」

『その間が怖いよオオオ！』

とりあえず煩かったから携帯を切る

「で、何処に行くんですか？」

「ああ、親戚が全員集まるからな、海辺の旅館を貸切にして、そこに全員泊まるんだ」

「月山多ツツ……！」

「いや……月山は私の家だけだ、他は高田とか普通のだぞ、毒島^{ぶすじま}も居たか」

「普通じゃないですよ、その苗字……まあ月山よりは普通ですが……」

……
旅館わだつみにて

私達が到着したのは夕食時だった、いや、大変だった……まさか、もう一度女性下着コーナーに入る事になるうとは……

原因はユウカ、絶望的に衣類が少なかった

しかもだ……

海が近くにあると言ったたら水着買うと言っただぞ？

女性水着コーナー

絶対に入りたくなかった領域なのだが……

連れて行かれたんだ、抵抗した、抵抗したさ、抵抗したともさ！
しかも聞いてくれ、速魅、何買ったと思う？

旧スクール水着だぞ？

馬鹿じゃないのか？

しかもその上私に買いに行かせるとか、死んで欲しい

ユウカは普通に：

こっちもスク水だった、ふざけるんじゃない

結局、スク水はユウカの分だけで済んだが、結局何故か私が買いに行かされた

定員さんが凄い苦笑いしていたのを私は絶対に忘れない、何時か復讐する

どのような水着かは自己で想像してくれるとありがたいが

速魅はストラップレス型のを上に選んでいた

私には此処までしか話せない、後は貴方達の役割だ（キリッ
さて本題へと戻るか

とりあえず旅館主が食堂に全員集まつてると親切にも教えてくれた
だが、旅館主さんよ、その速魅を見てから私を見て更にもう一度速魅を見て頷くのをやめろ

：

食堂はもう凄い状態だった、何が凄いつてとにかく凄い、問い詰め
られると

ツンデレって何？って妹か弟に聞かれるぐらい答えずらいが
とにかく凄い状態だった

「おっ！新婚さんのお出ました！」

「いいねえ！若いモンは！」

：帰ろうかな

凄くはやしたてられている、何故ここまで過剰に反応するんだ：

「おーい光二ーこっちだー」

そう言いながら手を振ってきたのは私の父

月山 光弦（こうげん）だった

私は降り注ぐ黄色い声援の弾幕を華麗にチョン避けて避けながら親

の元へと急ぐ

難易度的には P H A N T A S M くらいだろうか、いや、何を言っているんだ私は…

とりあえず、私は久しぶり…といっても一年に一回はあるから去年もあっているのだが…

まあ、とりあえず父親に会った訳だ

「いやあ、光二、何年ぶりだ？三年か？」

相当酔ってらっしゃるようで、

「いや、一年ぶりです、飲み過ぎでは？」

「男にやー酔い潰れると分かっていても飲まなきゃいかん時があるのよー!!」

これはかなり酔っているな、もう真っ直ぐ歩けないレベルだ
そして速魅は高感度アップのタイミングを計っていたのか、父の御
猪口から酒が消えた瞬間

「ささ、お父さんもう一杯どうぞ!」

「おおつ、すまんねえ、気が利いていい子じゃないか!」

「お父さんって言うな、お前…」

コイツ…ここぞとばかりに媚を売る気だな?…まあいいか、好きな
だけ踊らせておくさ

「もう…光弦さんったら若い子にデレデレしちゃって…私みたいな
オバサンにはもう用はないのかしら?」

「なあにいつてるんだあ! 光穂^{みつほ}だってまだ若いさ!」

仲良いなあ…

その光景を羨ましそうに見る速魅

「…光二さん! 私達もあんな夫婦」

「黙れ」

お前の中では既に私は予約済みなのか

「ところで母さん、喉渴いたんだが…何か無いか？」

「ああ、はい、これ」

母はコップ一杯に何か赤い液体の溜まった物を渡してくる

…トマトジュースか？

「いつき！いつき！いつき！」

大学生グループがいつきコールをしてくる、このときに期待を裏切ると後で辛いので、やるしかない

まあ、所詮トマトジュースだから…

そう思つて、コップの中身を一気に飲み込む

……！？

トマトジュースじゃないぞ…？これ…

じゃあ一体…

「母さんこれ…」

「純度100%のすっぱん鰾の生き血よ」

「えらい健康的イイイッツッ！！」

オレンジジュースとかで割つてエエエッツッ！！

頼むから割つてエエエッツッ！！

…取り乱した、

「というより…ユウカは…」

「ああ、ユウカさんならあつちに…」

ユウカは普通に小学生グループに馴染んでいた

どうやら髪色はハーフで押し通すらしい、

どんなハーフだ

「おい！光二君！その隣の別嬪さんは誰だよう！紹介してくれよ！」

「おう、そうだ、そうだ、独り占めはするいぞー」

「は…ははは…」

こういうのは適当に受け流

「（行きますよ！光二さん！これで他者公認カップルですよ！）」

「（マジっすか速魅さん！でも行動が早過ぎるんじゃない！）」

此方の話など聞かず、私を立ち上げ、周りの注意を惹き付ける速魅先程まであんなに騒いでいたはずなのに一瞬で静まり、此方に全ての視線が集合する

ユウカのニヤついた目が凄く腹立つ、元がこれならクローンもコレ

か！

「あゝ…これが、風美丘速魅で…私の友」

「（彼女）」

怖ッ！後ろの速魅の声が以上に怖い、どのくらい怖いかというと、ジェットコースター乗ったらレールがガタガタ言っている時並みに怖いぞ

畜生、もうどうにでもなれ…！

「私の彼女です」

「うオおおおおおおおおお！！！！」

「うオおおおおおおおおお！！！！」

「ぎいやああアアアアああアアああああ！！！」

一つだけおかしな声が混じっていたが、まあ、気にすることじゃあ無いだろう…

ここで終われば良かったのだが、まだ終わらない

「光二さん！愛してます！」

意味が分からない、このタイミングでそんな事を言ったら…！

「ヒヤッホオオオオオオ！！おアツイねえええええ！！」

「もうお前ら結婚しろオオオオオ！！」

「ギュギヤギヤギヤギヤギヤ！！」

最後の悲鳴はおかしい、どうにかしてる…

ギュギヤギヤギヤって、どうなってるんだよ…

「はい、という訳で…速魅ちゃん！酒入れてくれー！」

「はいはい」

「こっちも頼むぞー！」

「少々お待ちを」

もう速魅は大人気だった、途中からなんか、着崩し大会（１）が行われ見事優勝した

勝者のコメントは「日頃の成果です」だった、何を日頃やってるんだ、お前は

等など言いつつ、楽しんでいた時、その事件は起こった…（キリッ

「うおい！光二君！もう一回これ飲め！」

出されたもの、純度100%鼈生き血（大ジョッキver）

待て、さっきは綺麗な赤色だったのに、なんか若干黒ずんでるぞ？

不味くないか？両方の意味で

「いや…これは流石に…」

「のーめ！のーめ！のーめ！」

飲めコールが凄いな、っていうか全員だろう

ユウカ…お前…！

（日頃から風波に売り渡されていた恨みだ…）

彼女の目はそう叫んでいた

ふざけるな！

売ってるのは速魅だ！私ではない！

まあ、この雰囲気は収まるものでもないので、一気飲み

血液独特のネットリとした食管が喉に粘つく

無茶苦茶気持ち悪い

思わず少しむせる、

飲み切った…！来た…！私の勝利だ！

…その後は特に何も無かった

ひたすら馬鹿騒ぎしてただけだ

とても愉快な一日だったと思う

それは、ここで終わればの話だったがな…

…

深夜の旅館わだつみ

「くっ………」

「大丈夫ですか？熱でもあるんじゃない…」

先程から目眩が凄く、速魅に肩を借りている

これは重症だ、体中が熱い、尚且つ意識も朦朧とする

「もうすぐ部屋ですから…」

「ありがとっ…速魅…お前って可愛いよな」

「いえいええええええええええ！？今なんて言いました！？」

「ふえあ？アンフェアだろ…畜生…スパナなんて使いやがって…」

「何言っているんですか！？スパナ！？」

速魅と触れている場所から速魅の体温、鼓動が伝わってきて、とても心地良い

これが生命の温もりか…

因みに部屋は粹な計らいで速魅と私は同室だ

「さあ、部屋に付きましたよ、大分ヤバイみたいですから十分に休んでください」

そういつて、速魅は私を布団に寝かしつけ、自分の布団に潜って行く

…若干の寂しさ…？待て、落ち着け、落ち着くんだ月光二

さつき速魅になんて言った？可愛い？可愛いって言ったか！？

え？私ってそこまでデレてたか！？…違う、…え？

落ち着け、落ち着け、……

よし

速魅は可愛いな

冷静に考えてみる、あのやや童顔な、純粋な可愛らしさを残した顔、微笑んだ時などは天使のようだ、そしてあの鉄板とも言える胸、お世辞にも大きいとは言えないが、まるで小動物のように可愛らしく、おそらく手にピツタリフィットするのだろう、楽しみだ、そしてあの腰の括れ、思わず前から手を回して、頬擦りしたい程だ、極め付けにはあの超魅力的な足、むっちりしていて、尚且つすらりとしているという意味の分からない感じで、偶然触れる機会があったから触れたが、やばい、あれはやばい、凄い弾力だった、もう、病み付きになりそうだったな

…

以上の点を踏まえて速魅は凄く可愛い

「なあ…速魅い…」

「な、なんですか…湿っぽい声出して」

若干困ったような声で答える速魅

その声さえも愛しい

「寒い、全裸で添い寝するか全裸でお互いの体を温めあおう」

「ちよつ！？真面目におかしいですよ！？」

何がおかしいのだろうか、いつもこんな感じだったと思うのだが……

ああ、速魅……

「実は随分前から思ってたんだが…お前の胸に頬擦りしたい」

「貴方実は風波聖徒ですね！？光二さんじゃないですね！？」

[illegible]

速魅速魅速魅

[illegible]

速魅速魅速魅

ああ、可愛いよ可愛いよ可愛いよ可愛いよ

今まで邪険に扱ってきたすまない

お前の魅力を全く分かってなかった

許してくれ

「速魅ツツ！！」

「ちよっ！？いきなりですか！？」

私は亜音速の速さへと突入したかと思われたぐらいの速度で速魅の布団へ潜り込む

そして、強く、優しく抱きしめ、心に思っていた事を全て暴露する

「速魅っ！今まで邪険に扱ってきたすまなかった！私はお前の魅力
を全く分かってなかった！許してくれっ！っ！」

「こ、光さん……」

期待させといて悪いが

覚えてるのは此処までなんだ、あとは自分で補ってくれ

朝が来た、異常に体に疲労を感じる

…それよか耳元で寝息が聞こえる

…は？

布団に侵入されたか？

速魅め…抜け目の無い…

左振り向けば目と鼻の先に速魅の顔

うん、いつ見てもやや童顔だな

つてか冷静に観察している場合じゃない、…あれ？

確か寝巻きって浴衣だよな…？なんでコイツの肩には布が…

あ？

少し布団を上げ、中を確認

…

速魅が全裸だった

いや、訂正しよう

私と速魅が全裸で向き合って同じ布団で寝ていた

…

…

！？

「なんじゃこりやああああああアツツ！！」

「うわっ…あ…光二さん……」

何故若干顔を赤らめて目を背ける！？

何があった！？

何があったんだよ！記憶には何も残ってらっしゃいません！

私の記憶という名のログには何も残って無いな！

「こ、光二さんって意外と大胆なんで」

「やめろ！やめろ！それ以上は聞きたくない！私は何も覚えていないんだ！何処までやった！？何処までやったんだ！？」

「あ、はい、全裸にはなってますがキスさえしてませんよ」

「不思議すぎるツツツ！！」

「ただ、光二さんのあの無茶苦茶湿っぱい褒め殺しに理性を保つのが無茶苦茶難しかったですね」

やってない、やってませんよ、月山さんはそんな事はしません
やってないんですよオオオオ！！

：

その後、食堂にて『超アマゾンの大魔王のエキス - 控えめなあの子を大胆に -』とか馬鹿げた薬を発見した

：

絶対殺してやる

内臓全部抉り出して市場に売り出してやる…ッ！！
せめて記憶に残って欲しかったわッ！！

12・宿泊日<Rest>（後書き）

着崩し大会とは

着崩し大会とは日本に置けるエクストリームスポーツの一種

競技内容は単純で、選手は和服を着用し、わざと着崩し、どれだけ審判者にエロスのイメージを与えられるかの試合である

尚、この競技は自然と胸が大きい選手が有利になることが多く胸がでかけりや勝てる、胸がでくなければ勝てない、という固定概念があつたために、人口はとも少なかった

しかし、この固定概念を打ち碎いたのが

風美丘速魅である、 - A A、むしろそこまで無いのではないかと疑われるほどの鉄板にも関わらず、三年間連続優勝を果たしているそんな彼女の一言は

『夢も態度も胸もデカけりやいいってモンじゃないんですよ』
という自信満々な一言だった、彼女も自信だけは大きいようだ

13・闇夜道<Accelerator>（前書き）

もうロリコンでいいやっ！ロリコンの何が悪いってんだいっ！
by友人にロリコンと指摘された私の嘆き

13・闇夜道<Accelerator>

七月三十二日第七学区の外れに存在する廃工場の夜

やはりそこには例の少女の姿があった

宮田涼子

彼女はタイヤに腰をかけ、これからの方針を決めていた

「んうー…あまり人肉って美味しくないなあ…やっぱりこれって、あれかな、雑草食べてるみたいな物なのかなあ？んうー…どしよ」
傍から見れば可愛く見える仕草で考える事は常人が見れば気絶は必須の事であった

彼女の最近の生活サイクルはこうだ

太陽が上がる、起きる

とりあえず水浴び

不良を捕獲

なんとか人肉を食せぬかの考案

思いついた調理法で人肉を調理

失敗

もうだめだ…以下ループ

「大体もう肉飽きたよ…旬の魚とか野菜とか食べたいよ…むうー、まともな食事をしている人間が妬ましい！死ぬべきだ！」

やり場の無い怒りを罪無き人間に擦り付ける宮田であったが、そんな彼女は名案（迷案？）を思いついた

「んん？そうだよ、無ければ買えばいいじゃない、買う為に必要なお金が無いなら奪えばいいじゃない…んん、何処から奪おうか…銀行？いやあ…スキルアウト？そうだよ、あんなゴミ共にお金を持たせるなんて勿体無い！私が持つべきだ！…いや…スキルアウトを全部ゴミ扱いは悪いかもなあ、随分前に奢ってくれた人居たしなあ、うん、ゴミ扱いは悪い、謝ろう、ごめんなさい」

自分で言った事を訂正し、そして尚且つ誰も居ない空間にペコリと

頭を下げる、傍から見れば一人漫才だが本人はいたって真面目だ
「んふふ、それじゃあ久しぶりに外に行くかぁー、シャンプー欲しいなシャンプー、あはは」

最早当初の目的を忘れた彼女は軽快な足取りで外へと進む

第七学区の夜道

宮田は相変わらぬ足取りで先へと進む、そんな彼女はよく知る人物の背中を見つけた

白い肌、白い短髪で中性的な身体の少年

この学園都市で頂点に君臨する人間

一方通行

普通の神経の持ち主ならばその姿を見ただけで恐怖するだろう、が、宮田には生憎普通の神経という物は備わってなかった

「ヒヤッハー！生きの良いロリコンだーッ！」

即座に小石が弾丸のような速度で飛んでくるが、宮田は小石を更に速い速度で反射する

それが一方通行へと触れた瞬間、小石の弾道が真下へと直角に曲がる、そして一方通行は自分をロリコン扱いした人間の顔を確認すると

一方通行の顔は怒りの表情から疑問の表情へと変わり、最終的には諦めの表情で落ち着いた

「ああ……………めんどくせエ、消えろ」

心底うんざりするような一方通行の声も気にせず、宮田は話しかける

「あはは、久しぶりい、……………えと、あの、あ…、あ！アクセロリッター幼女趣味！んふふ」

「動くンじゃねエぞ、マツハで蜂の巣にしてヤンからよオ！」

再び表情を怒りの表情へと変え、右手を振り上げながら声を張り上げる一方通行

それを宮田は頭を抑えながら地面に屈み込み、一方通行を静止させ

る一言を発する

「う、うわー！ロリコンに襲われるよう！」

「くっ…！てめエ…！背丈デカくなったら覚えてるよ…！」

「んふふ、何で殴れないのかな？チツチャイ女の子には手を上げられないのかな？あはは」

「チツ…うぜエ、純粹にうぜエよ…オマエ」

半分以上キレた顔で睨む一方通行、だが宮田は怯むどころかその顔をみてニタアという嫌な笑みを浮かべる

そして宮田は一方通行に話しかける

「くひひ、わたしはねえ…あなたに感謝しているんだよ？こんなに能力を向上させてもらって」

「そオカよ」

でも、と短く言い放ち宮田は今まで戦闘中に見せた事が無い、激しい憎悪を表情に表しながら言い捨てる

「同時に怨んでるんだよ？私をこんなバケモノにしてくれちゃったあなたに、一方通行という能力に」

さらに、と言い加えて宮田はより一層憎悪に顔を歪ませながら暗い声で言う

「唯一の弱点である精神面を元から狂わせる事で精神観応系能力を使用された場合には使用者が私の精神に支配されて八割が廃人が狂人になる、なんていう防御プログラムも埋め込まれたんだよ？」

「…そオカよ」

相変わらず変わらない一方通行の表情を見て宮田はつまらなそうに言う

「…もう、もつと怒り狂った顔をしてよう、つまんないの、ほら、デメエでやった事だろ！とか言って怒り狂いなよう」

「はア？意味わかんねエよ…相変わらず」

その言葉を無視し、宮田は人差し指をクルクル回しながら別の話を話し始める

「ねね、知ってた？実はあなたと数多あまたの方のきいはらくんがデキち

やっつてるといってお話が広がってるのさ」

「あア？……あア！？俺と木原クン……？ありえねエ……どういふ思考回路してたら、そんな話が広がんだよ……？まともな思考回路してる訳ねエか」

「いやーね、随分まえに見たんだけどさあ、あなたさあ数多の方のきいはらくんにさあ、意味有りげな笑みを浮かべてさあ、きいはらくんもさあ、意味有りげな笑み浮かべてたからねー、うん、その、ね」

宮田は一呼吸置き、言い放つ

「あなたはきいはらくんに色々と頭以外にも開発されちゃってるんじゃないかなーと」

「その話を広めた奴を教えろ、即行でオブジェにしてやつからよ」

「ごめん、私」

「てめエ……ッッ！！」

一方通行は殴りかかろうとするが、無意味なので行動を中止し、再び歩き始める

「あん時はよオ、木原クンの愉快なお友達が俺以上のバケモン作ってたって話をしてたんだよ」

「へえー、あなた以上のロリコンか……相当だね」

「マジ殺すぞ」

宮田は全く恐れずニタニタと嫌な笑みを浮かべている、一方通行はそれに不快感を感じ、更に怒りに顔を染める、よってその表情を見て宮田は更に笑みを深めるといふ泥沼状態に陥り、本当に自分が学園都市最強なのかどうかの疑問を持ち始めた所で、宮田が話題を振る「でさでさ、そのバケモンって何なのさ、ベクトル操作以上の能力でしょ？……んん、わからないや」

「なんだったかア……？確か希望代償とか言ってたかア？」

希望代償、その一言に宮田の体はビクンと反応し、笑みは消え、焦りの表情が浮かぶ

「あ？どうした」

「…なんでも…ない、輝夜望…希望代償…」

恐怖に若干肩を震わせる宮田を見て一方通行は怪訝な表情をする
劣化版とはいえ、そこら辺の能力には簡単には打ち破れない能力を
持ち合わせている宮田がここまで恐怖するバケモンとは一体何か、
その疑問だけが一方通行を突き動かす

「オマエがそこまでビビるって事は相当だなア、一体どんな能力な
んだア？」

「…能力自体はあなたなら勝てるよ、バケモンってのはアイツの能
力じゃなくて精神面だと思うな…」

暗い表情の宮田はゆつくりと喋りだす

「アイツはまず最初に人を人と見られない、次に感情が無い、最早
高い人工知能を持った機械だよ」

「はア…感情がねエから効率を第一にする、善悪を問わない、手
段も問わない、後悔の念も無い、躊躇も無ければ、油断も無く、戦
闘を楽しむ事も無い…ハツ…人間じゃあねえな」

でしょ？と答える宮田、そして直後、無感情な声が突然響く

「酷い言いようですね、一方通行、宮田涼子さん…そんな事言われ
たら私、悲しいです」

口では悲しいと言っているものの、その言葉にはなんの感情も無か
った

「『てめエは誰だ』輝夜望と申します『精神観応系か』いえ、これ
は私の能力の一部です」

「何…？また私狙い…？」

その質問に対し、輝夜は相変わらず無感情な声で答える

「いえ、私は一度逃したエサはもう食しません、もう貴女に手を出
すことはありません…：ちなみに一方通行さん、貴方も目的ではあ
りません」

「じゃあ何しに現れたンだア？」

その質問に対しても、また無感情な言葉で返す

「いえ、珍しい組み合わせだと思ったので、好奇心です」

「なんかさつきからヤケに感情があるような口ぶりをするね、何かいい事でもあったの？」

その言葉を聞き、望は若干顔を背けながら寂しそうに言う

「いえ……長らくお付き合いしている女性に告白したところ……」
「こんな感情の無い告白、始めてだわ」と言われたので……

一方通行はくだらない物を見るような目で、宮田は……あるえー？と言った表情で輝夜を見る

「オマエが言ったより人間的じゃねエかよ」

「……そうだね」

しかし、輝夜は相変わらず無感情な顔で二人を見、一言

「では、夕食の買出しがあるので失礼します」

「買出しっ!？」

そう言いながら輝夜は懷からメモを取り出し、歩き始める、よく見れば右手に専用のエコバックを持っていた

「……なんというキャラ崩壊……」

「……くっだらねエ……」

これが輝夜の最初で最後のシリアスブレイクだったとは誰も知らなかった……

……

二人は歩き続けて数分、この時間帯に騒ぎ出す輩、スキルアウトに囲まれていた

「あー、あーあーあーあー、あー？あー！そうだよ、私……スキルアウトからお金分捕る為に来たんだった！」

「じゃあ、このゴミ共は任せていいよなア？」

ゴミという言葉に反応した一人が一方通行に殴りかかってくるが、それより速く宮田がスキルアウトの一人の腹を蹴り飛ばす、するとそのまま男はノーバウンドで何メートルも吹っ飛ぶ、その様子を見て、混乱状態へと陥った他の男達は宮田に殴り掛かる、が同じ結果に終わる

一方通行はそんな光景を背後に暗い夜道を進む

13・闇夜道<Accelerator>(後書き)

もうシヨタコンでいいや、シヨタっ子かわええやろ？

by友人にシヨタコンと指摘された私の叫び

14・無表情<Poker face>;(前書き)

死ぬのってどんな気分なんだろうね、まあ、知ったら誰にもその
気分を伝える事は出来ないんでしょうけど

そういう意味では、死と言うのはなんか、そそられるってか、興味
がわくってか、でも怖くて手を出せないもどかしさってか、色々混
ざって、本当に魅力的ですよ

自殺する気は毛頭無いですけどね

14・無表情<Poker face>

皆さんに質問だ、私は今までに常人は絶対に遭遇しないような目に何度も遭ってきた

一、親友が超能力に目覚める

二、先輩に無理矢理意味不明な団体に所属させられる

三、先輩に部屋の壁を貫通させられる

四、奇妙な四速歩行のバケモノと戦闘

五、白いのに白くない人に『ぎゃおー！食べちゃうぞー！』されて
廃人化

六、目があ…！目があ…！目があああ…！！

七、白内障の馬鹿と超人狂人に遭遇

八、媚薬

そして…この伝説の項目に今一つ追加されようとしているモノがある
お披露目しよう

九、起きたら手に手錠で体は縛られ（何故か亀甲縛り）野山の中

：

もう、この場で舌噛み切ろうか

意味が分からない、今度こそは本当に意味が分からない

今まで数々の超展開、数多の超展開、そして多くの超展開を見てきた私でも理解できない

驚きすぎる、待て、落ち着け、落ち着くん

最後の記憶を思い出そう…

確か、朝起きたら全裸で…薬を押収して…外で泣き叫びながら走ってたら…

フツと意識が闇に落ちて…

コレだ

もしかしたら今まで私が経験して来た事は普通で、コレこそが…超展開なのかもしれない

ツサリと切り落とし…え？

「まゝまゝまゝまゝ！！待て！これ以上私を混乱させないでくれ！」

お陰で残念な感じになってしまった髪を彼女は丁寧に整え、見事なショートカットヘアへと変わった

「恋する乙女は変わる」

「誰に恋してるんだ！？地球！？」

「貴方」

「もう駄目だ、こいつ意味が分からない」

何だ、これ、どんな斬新な告白なんだ？…あれか、最近相手の目の前で髪を切り落として告白するのが流行ってるのか

日本終わったな

「まあ、いいか…とりあえず助けてくれ」

「それは無理な話」

今思えば、この少女…先程から表情一つ変えない、首の傾きも直さない

「…何故？」

「私が貴方を拘束したから」

「殺す、コイツは殺さないと駄目だ」

畜生、いつもなら微粒子化して目の前にミンチが出来上がるはずなんだが…今は学園都市の外だ

しかし…本当に意味が分からないな…

突然誘拐するわ拘束するわ、拳句の果てには髪を切り落として、告白…

意味が分からない

「安心するといい、私は貴方自信に好意を持っている訳ではない、私は誰となら最も理想的な子孫を残せるかの定義を解いた結果、貴方だったと言うこと」

うん、落ち着け、落ち着け、こんな可哀想な子、見たこと無い心の医者が必要だ、誰か早急に用意を…！！

「…簡単に言えば」

待て、落ち着け、落ち着け、待てよ待てよ待てよ、ふふ、あは、待て、落ち着け、落ち着け、私、ふふ、そんな事は絶対ありえないのだから…！！

落ち着いて目の前の少女から全速力で逃げて医者を呼ぶんだ…ッ
！！

「貴方と私の間に子を儲けたい」

畜生！畜生！甘かった！私が甘かった！このパターンは絶対に二次だけだと思っていたのに！信じていたのに！世間は何時も私を裏切る！

無表情な瞳はまるで獲物へと近づく蛇のようで、実際彼女も蛇のようによつくと歩み寄ってくる

「大丈夫、貴方は動かなくていい」

「はは、はははははははは！！普段から理性だけは無駄に鍛えられてるこの、月山、月山光二の最強防壁を崩せるのか！？貴様に！」

「貴様じゃなくて夜詩亜樹ようたあき、私にも名前はある」

「あ…はい、そうですか…」

何故このタイミングで自己紹介を入れるのだろうか、やはり少しズレている…

「確かに貴方の理性は中々崩せるものではない、でも昨日のデータから推測するに…」

昨日…？…昨日何かあったか？着崩し？違うな…

彼女は懷から小瓶を取り出したア…ッ！？

あのラベル、見た事がある…！朝押収した…！！

メテイスン
「薬物には弱い」

顔が硬直した

動けない、もう駄目だ

「…輝夜といい、コイツといい…最近こんなばかりだなあ…」

「…輝夜？」

奴…即ち夜詩は輝夜というキーワードに反応を示した

「…貴方は輝夜望を知っている？」

「知っているも何も被害者だ、お前も襲われたクチか？」

私の問いを聞いても相変わらずの無表情で夜詩は淡々と話し始めた
「違う、以前同じ研究所に居た」

…

どんな研究所だったんだ…？輝夜が居て、神岡が居て、夜詩が居る
狂人しか居ないな、おい

「…神岡って知ってるか？」

「…とてもユニークな人物だった」

ユニーク…か…？

…あれか、女子には優しい感じだったのか？

それともただ単に彼女にとっては面白かったのか…

「というか…お前達は何故集められてるんだ？」

「結論から言えば法則無視を排除できる能力者の作成」

法則無視、つまりそれは私の親友である御神光を示す

「光…を排除？」

「そう、御神光、能力は法則無視、基本的に明るい性格であり、勇敢であり、裏を返せば無鉄砲、しかし若干性格に難ありで、若干能力の使用に快楽を覚えている可能性がある」

私はその言葉について、反論する

「ありえるか！御神は自分の能力を忌み嫌っ」

しかし、私の言葉に被せる様に夜詩は言葉を発する

「月光二、能力は粒子移動、基本的には八方美人、自分を犠牲に
してでも御神光を守るケースが多い」

「お前…一体何だ？何故そこまで知っている？」

「それについては私の口からは喋れない、ただ一つだけ言えるのは
夜詩は相変わらず無表情な顔で此方を見下しながら一言

「データより頼りになる物は今後一生世界が滅びる日まで現れない」

私は山の中で一人の少女に出会った

それは輝夜とは違う凶悪な毒素を持っており
近くに居るだけで吐き気を感じる程の毒素だった

14・無表情< poker face > (後書き)

よっちゃんの登場でした、お疲れ様でした、いい加減月山君には学園都市に帰って欲しい

15・帰宅路&It・Coming home> ; (前書き)

此処が折り返し地点となります

15・帰宅路<Coming home>

私は学園都市へと向かうバスに乗っていた、車体は緩やかに動き学園都市へと走って行く、車内にはお互いに思い出話に耽る者、疲れの余り寝ている者、窓から当分見れない外の光景を目に焼き付ける者、私は窓から外を見ていた別に景色を見ていた訳ではないが、考え事をしていた、私の今までと、これからを……

私は一体どうすればいいのか、あの山中で会った少女、名前を夜詩亜樹と言ったか、彼女によれば光の能力、即ち法則無視は多くの副産物を残したという

そして、光は自分のデータから作成された物を全て破壊しようとしているらしい

私も手伝うか？しかし、私では力量不足だろう……

「なーに辛気臭い顔してるんですか？」

後ろから突然掛けられる声、恐らく速魅のモノだろう

明るいながらも人を落ち着けるその声に私は一気に現実へと引き戻される

「いや、な、今までの事を思い出していたんだ」

私は適当な事を言う、しかし、確かに今まで多くの事があった、ありすぎた

「なんか昔読みましたねー、そんな感じの話、主人公はバスに乗って今までの人生を振り返るんです」

速魅の話に若干興味を持った私は適当に相槌を打ち、それで？と返事を返す

「最終的には主人公が人生を通して見てきた物の結論が現れたんですよ」

「ヤマ無しオチ無し何も無し、って感じか」

「んまあ、そう言われればオシマイですがね」

若干苦笑し、人差し指で頬を掻きながら速魅は言う

相変わらず車体は緩やかに進む、先程よりは少々車内が静かになったのは恐らく眠りに落ちた者が増えたからであろう

「しかし…この夏休み、内容が濃すぎましたね…」

「まあな、初日から奇妙なバケモノには襲われるしな…」

「一番怖かったのはアレですね、神岡さんですね」

「ああ…あれはな…」

神岡、神岡司、私の知る限り最も常識を持っていない人間であろう彼奴は速魅と私の再会を祝うところか、呪いの言葉を放ちながら追いかけてきたのである、祝ってやる！ではなく、本当に呪ってやる！だった訳だ

「だが私は…アレだな、夜詩のが恐ろしかったな」

「まあ…あれは…」

私を誘拐し、拘束し、突如「貴方と子を儲けたい」等と言い放ってきた少女

まあ、結局その後兄に助けられたのだが…

正直、兄の方が怖かったかもしれない…

「全く、恐ろしい人間も居た物だ…」

「陰口は余り感心しない」

お分かり頂けただろうか

後ろの席に夜詩が居たのである

無感情な言葉で後ろから急に話しかけてきたのは、先程も言ったとおり夜詩である

無感情、と言っても輝夜のように完璧に無感情のではなく、若干の人らしさを残している

「…噂をすればなんとやらって奴ですかね」

「貴女が風美丘速魅、とてもユニークな人間だと聞いている」

隣で皮肉を交えあいながら会話する二人を他所に、私の意識は闇へと落ちていった

…

『準備出来てるか？美羽^{みづ}』

灰色のコンクリートで覆われた巨大な空間に一つの影があつた、如何にも科学の結晶と呼ぶのに相応しい軍用のゴーグルを付け、仁王立ちで佇む美羽と呼ばれた少女、彼女の背中には四枚の小型の翼のような物体が付いており、お互いにぶつかり合つては力チャ力チャと音を立てていた

「いいよ、何時でも」

『今回のテストは能力を応用しての飛行、そして三次元戦闘の訓練だ』

再び入る男の声に美羽は若干面倒くさそうに頭を掻きながらテストの内容の再確認を聞き流す

『もう一度確認するが、その背中の奴はお前の思考とリンクしている、お前が上に動きたいと思えば上に動くし、細かく飛行ルートを想像すればその通りに動く』

「はいはい、わかつてらあ」

その言葉を証明するかのよう^{よう}に美羽は翼を若干下に向ける、すると翼の先から殆どが白い炎が噴出され、美羽は一気に空中へと浮く、あまりの速さに美羽は若干焦つたが、即座に上の翼を上に向け、空中で静止する

「いやあ…結構推進力があるねえ…」

『まあ、そこらへんはお前さんの力加減だ…つつても無理か』

男の声を聞き、美羽は若干不機嫌そうな顔をしながらも、飛行の練習を続ける

そのうちに彼女は錐揉み回転を加えたり、中々アクロバティックな飛行を交えていくようになった

男はその姿を見て、こう思った、これが天才か、と

美羽、逆坂美羽^{さかさか}、彼女は生まれつきの天才であり、与えられた物は全て短時間で完璧にモノにして来た、そして彼女は^{イレイサー}その才能を学園都市に買われ、学園都市に引き取られ、そして、完全焼失という能力を手に入れた、この能力は極めて攻撃性の高い能力である、その

能力は超高熱のレーザーを放射するという単純なものだが、このレーザーは殆どが白い炎に見えるようになっており、正確にはどのようなエネルギーの塊なのかさえ判明していない、だが、この光熱線を防げる物質は地上には存在しないとも言われている、この能力は通常ならば使用者が真っ先に焼失するのだろうか、彼女は驚く程の能力制御能力を持ち合わせており、この膨大なエネルギーの塊を自由に操作することができる

といっても、自身を守るのに精一杯で攻撃や、飛翔時などの制御はできないようだ。

そして、彼女が今背中に付けている翼は、彼女の為に最近作成された試作品で、膨大なエネルギーを放射する事によって、飛翔を可能にするという物である

ゴーグルは彼女の攻撃時に起こる強烈な光から目を守る為の物である
『随分と魅せてくれるじゃないか、じゃあ、そろそろ三次元戦闘に入るぞ』

その言葉を聞いた彼女は再び空中に静止する

『H S A F H - 11、通称六枚羽を五十秒以内に落とせ』

「はあ！？六枚羽え？！一機二百五十億もすんでしょ！？馬ッ鹿じゃないの！？」

彼女は対峙する相手の危険性よりも撃墜する相手の金額を考える、このあたり、余裕があるのだろうか

『因みに実弾を装填してるからな、躊躇つてると蜂の巣だぞ、つか、お前の背負ってる翼は六枚羽の何倍もの金額なんだけどな』

「マジ？ヤツベエ、壊せないじゃん、これ…」

美羽はその言葉に顔を青ざめる、もしかしたらゴーグルもかなりの金額ではないのか…などと考えてしまふ、すると美羽はより一層顔を青ざめ、薄ら笑いをし始める

彼女が自分の背負っている金額の重さに戸惑っていると、話題となっていた六枚羽が投入された

六枚羽は美羽という標的を見つけると、的確に急所だけを狙った攻

撃をし始めたが

無意味だった、

というより遅すぎた

六枚羽が武器の狙いを定め終わる前に六枚羽は跡形も無く消え去っていた

『……はあっ……何の意味も無いよな、これ』

「いやあ……実弾入りでしょ？全力で対処しなくちゃあ……死ぬもん」

男は買ったアイスに口を付ける前に落としてしまったような気分になったが、何時もの事なので気にせず最後の台詞を言う

『……まあ、一応おめでとうと言って置こうか、これより君は自由の身だ、アパートの一室がプレゼントされる、そして、今は夏休みだが……終われば君は風波ヶ丘高等学校一年所属となる、後は青春を楽しみたまえ』

「よつしやああ……！やつとこの灰色からもオサラバかあ……！よつしやああ……！！ポーカーやるぞお……」

『ポーカー……？まあ、有頂天なところすまないが、君にはちよくちよく仕事が入ると思うよ、不良軍団の削除とかね』

男の言葉を聞き、美羽はこう一言

「そんなのは仕事じゃない、私の正義を世間に認めさせる為の布石さ、世の中は、いや、太陽系は全て私を中心に動いている、太陽とは私、私とは太陽、つまりそれは私が正義であり、正義とは私自身」美羽は人差し指を立て、その上に太陽系のようにエネルギーの塊を並べ、そして、と付け加え強く言い放つ

「太陽は膨張し全てを包み込み全てを一つにする、それは即ち世界の理と私の正義がフュージョンするって事」

美羽はそう言いながら中心の太陽の位置にあるエネルギーの塊を膨張させ、他のエネルギーの塊を飲み込ませ、満足そうな笑みを浮かべながら言う

そして、エネルギーの塊を消し、地面へと降り立つと大きく伸びをし、もう見る事はないであろう灰色の世界を目に焼き付ける

その姿を見て男はこう思う

白すぎる恐怖、人間を超えた人間、情報を全てとする無表情な奴、
そして最後には自分自身を正義と謳う二つ目の太陽

輝夜望、神岡司、夜詩亜樹、逆坂美羽、

この研究所は何個化け物を作ったら気が済むのかねえ、どう思うよ、
草の陰の如月さんよお…

15・帰宅路&It's Coming home>(後書き)

やった！第一章完！…んな物は何も無いですけどね、次からは再び夏休みライフを楽しむオハナシです

16・二日目< Bathroom > ; (前書き)

今回から何時もより、空気使い先生とのリンクが強くなります、なので、あちらを読まないという意味不明な話かもしれませんが、まあ、此方だけ読んでいる人が居ると思えませんが

16・二日目< Bathroom>

初日 深夜 人口海にて

「あれ？」

上矢が目を開けてみると周りは真っ暗だった

ここは一応屋内なのだが気温や風の動きで多少は時間帯が解る
いまは目測、深夜二時。

砂浜が舞い上がった時の衝撃で気絶していたようだ。

「つか、この時間では宿舎は入れなくね？」

人口の月が優しく、上矢のピュアハートを包み悲しい風が砂浜に響く
そんな彼に突如声が掛かる

「おい、その君：こんな時間まで何やってるんだ？何？死にたいの？今すぐ死にたいの？楽にしてあげるよ？今なら骨も残らず完璧に、完全に、完全焼失してあげるよ？」

内容通りの殺意の若干籠もった声だった

その声に上矢は若干の恐怖を覚えたが、声の方向を見た事で、その恐怖は若干和らいだ、理由は単純、声のした方向には華奢な体つきの少女が一人立っているだけだったからだ、右足に重心を置き、右手を腰に当て、ジト目で上矢の事を睨んではいるが、整っている顔立ちで、一般的には美しいという分類に入るだろう、若干小さめな制服は、その若干大きめな胸の所為で若干苦しそうだった、そして、制服の腕には見慣れない模様の勲章を貼り付けており、右手には軍用ゴーグルのような物を握っている

そんな彼女、逆坂美羽は後頭部で一度まとめ、後は自由にしている髪を風に靡かせていた

「よっしゃ、こい、殺してみろ！」

上矢はバツと立ち上がり、まるでサッカーのゴールキーパーのように両手を広げ、逆坂を挑発する

すると、逆坂は右手の軍用ゴーグルを掛け、右手を肩の高さまで持ち上げ、手を開き、軽い掛け声をかける

「そりゃ」

軽い掛け声とは裏腹に上矢の僅か数cm先の砂浜に大きなクレーターが出来上がる、その場の砂は飛び散ったのではなく、溶けてしまい、その証拠に砂のクレーターの面は硝子と化していた

「は……？ははは……」

突如圧倒的な力を見せられ、上矢は笑い声を漏らす、逆坂は先程より真剣な声で付け加える

「ちなみに外れたんじゃないよ、外したんだよ、それと逃走も無意味だから、どうせ貴方の動きなんて一々見てないし、不審な動きを見せた瞬間に貴方も硝子細工オフジエの仲間入りだよ」

上矢は激しく後悔した、甘く見すぎていた、昼間の人間離れたフラッグレースを見て、これ以上の女子など存在しないだろう、等と考えていた

だがそれは間違っていた、

彼女は一瞬で砂場の一部を硝子と変えた、しかも威嚇射撃と言う桁が違った、以前自分に致命傷を負わせた黒い死神でさえこのような事が出来たかは怪しい、等と上矢は考えながら逆坂に質問する

「おいおいおい！どんな神経してんだよ！？一歩間違えばホントに硝子細工になるぞ！？」

上矢の恐怖に引きつった顔を見て逆坂は腹を抱え笑い出す、その行動に上矢は怪訝な顔を見ると、逆坂は馬鹿な人間を見た、といった感じに笑い声を交え、言う

「あははははっ！ば、馬鹿だ！馬鹿がいる！ははははっ！」

上矢が逆坂の急な意味不明な言葉に困惑していると

若干涙目になり、声を震わせながら逆坂は言う

「ジョ、ジョークだって！ジョーク！」

さっきの表情とは一転しキョトンとした表情に変わる上矢を見て、

逆坂はより一層大きく笑う

上矢は一気に緊張から解かれようと、したその瞬間
その出来事はあまりにも突然に起こった
場に響く水へと何かが高速で激突した音

その音の原因となる正体を上矢は奇跡的にも捕らえた、そして思わず呟いた…

「デストロイ山スピニングスプラッシューギガオールドブレイザー……!!」

「デ……デストロ……？え……何？」

上矢の意味不明な叫びに対応できない逆坂は怪訝な表情を浮かべていた

-
-
-
-
-
-

「あ
あ
あ
あ
あ
あ

や
み
い
い
い
い
い
い
い

い
い
い
い
い
」

説明しよう！デストロイ月山スピニングスプラッシュァーギガオールドブレイザーとは私自身よく理解していないのだが、

とりあえず激怒すると体が自然に動いて速魅を撃破に向かう、というこだけは言える

そして、もう一つ説明しよう！

速魅が風呂を覗いてたんだ、鏡に映ってたんだ、死ぬほど驚いたんだ、よってこの状況なんだ

「光二さんは何を怒ってるんですか！？合宿といえば覗きでしょう！常識的に考えて！」

「常識的ではない！そして！一歩差し置いたとして！普通は逆だろ
う！」

私はそう言いながら右手を粒子化させ、速魅の右手を狙う、が当たらない

「だって、光二さん…覗かないじゃないですか」

「覗いて欲しかったのか!？」

まあ、こんな深夜だ別段誰も聞いてないだろう

「ええ、まあ」

「ええ、まあ、じゃねえええええんだよおおおお!そういうキヤラじゃねえから!私!」

先程から執拗に攻撃しているんだが掠りもしない、本当に回避率が高い…

私の命中率が低いのか? いやいや…それはないだろう…

というより、目に見えないのに何故避けられる

「もしかして…光二さん、私の体に興味がないんじゃない?」

「無い事はない、ただお前の態度が気に入らない!」

いやあ、深夜でよかった、誰も聞いてないしな…

「それもそうですよね…何気にこうやって水場に誘うことによって…服を透けさせようとは…策士」

「違うからな、落ち着け、違うからな? 誰得だ? お前のブラ透け」

深夜で本当によかったと思う、本当に

「んう、まあ、あちらの上矢君とか…」

「は? 上矢? アイツ…死んだんじゃない?」

速魅が指差す方向には、上矢と見知らぬ少女が突っ立っていた
驚愕である、どうやら私の人生は終わってしまったらしい

「が、…月山…」

「上矢アアアアアアアアアアアアアアアッ!」

私は即座に上矢へと飛び掛る、目標は上矢雄一の記憶の抹消、不可能なら殺害してもいい、私が今決めた

即座に空へと飛び上がり、そのまま上矢へと錐揉み回転を加えた蹴りを放つ

「ごうつはあッ……! なんで…俺ばかり…」

上矢は軽くかなり吹っ飛ぶと(この表現が正しい)後ろで何故か後ろで構えていた速魅が即座にミドルキックを放つ

「凝視しないでくださいよ! 変態ッ!」

「眼福ツツ…！」

更に軽くなり吹っ飛ぶ上矢、そして、かなりの地面を引きずられ、人口の砂浜に一本の線ができていた

「速魅…どんぐらいの強さで蹴った？」

フルパワー
「全力ですよ！」

自慢げに言う速魅、まあ…別にいいか

「風美丘速魅に月山光二…だよね？」

急に名前を呼ばれたので、本日何度かめの驚愕、そういえば…上矢の隣に誰かが居たな…

声のした方向には華奢な体つきの少女が一人立ってた、右足に重心を置き、右手を腰に当（以下略

「…そろそろ、宿舎に帰ってくれないかな？私が仕事をサボってるみたいだからさ…」

その言葉に自分を取り戻し、私と速魅は同じ方向に歩き出…

「おい速魅、お前三年だろ…」

「嫌ですよ…粘着質の男がいるんですよ…私の部屋に、ずっと…視姦してくるんですよ…」

ハア…シカンっすか…と適当に答えたところ、その夜、結局速魅は私の部屋に泊まっていった、選択肢を間違えたのか…

いや、選択肢を間違えたのは速魅だった、何故なら…私のルームメイトは…

…

…

…

風波だったからだ…

結局、その夜…騒ぎすぎて生徒会長に殺されかけそうになったが、

全て風波に責任を押し付ける事によって生き延びた

その後、風波を私は見なかった、どうやら外でナニカサレテイルヨウダ（変換間違ではない）った

後で風波に何があったか聞いてみたところ…

「うん、間接が全部逆向きになったので、お前らをぶち殺す」
何故死さない!?

二日目 朝 自室

『おはよう！僕ドロクロ！朝だよ！起きろ〜〜〜〜！』

「ばだめぐなじゃこりゃあ！！」

意味不明な叫び声で私は叩き起こされた

というより、風波が起きる為に仕掛けた目覚まし時計に反応して即座に大声で叫んだ声だった

「ば…ばだめぐなじゃこりゃ…？何処の言葉…？」

「ああああッツ！！…なんだ、まだ朝じゃないか……たく…誰だよ、目覚まし時計の設定ミスったの…ブチコロシカクテイダ…」

「お前…午後六時にでも設定したつもりだったのか…?!」

「んあ!?!がちたん…違うよ、午後八時だよ」

もういい…疲れた…光とか、慣れてる人間に任そう、…いや、やはり、ルームメイトの私が責任を持って…

そう思つて、私がベットから出ようとした瞬間

思いっきり足を掴まれた

「ぬうひやぎやむいえふつふほんふあああああああああ、はあああああああああああああああああああああああああ!?!」

「うわあああああッ！光二さんが壊れたァー！」

…ふう、落ち着こう

そつだ、思い出せ…

昨日、速魅は私の部屋で泊まったんだつたな、うん

「速魅イツ！」

私が即座に布団を投げ飛ばすと布団の中に住む悪魔を見つけた
夜詩だった

「残念ながら風美丘速魅ではない」

「なんじゃごりやああ……」

い、意味が分からない……夜詩は間違いなく……我校の生徒ではない……なら……何故此処に……

というより、先程背後から速魅の声したしな、光二さんが壊れたって……

「誰っ！？誰なのっ！？大人しめショートカットでイイ女！嫌いじゃないわっ！！」

嫌いじゃないのか……というより、何故か急速に覚醒した風波は食いつくように夜詩を見る

「風波聖徒……ユニークだとは聞いていた……」

「ほう！僕の事はご存知かいっ！ならば話は早い！やらないか」

「お断りしておく、私にとってマイナスでしかない」

ふう、落ち着け、カオスが今頃なんだと言っんだ……私はこの程度で壊れる人間じゃないだろう？

よし、深呼吸深呼吸……不味い、息が吸えない……っ！？何事！？

「光二さんっ！息苦しそうですね！人工呼吸を！」

速魅が即座に飛び掛ってくるが、私は華麗な回避を行う

「つか、どうやって……入った？」

風波がようやくまともな質問をした

すると、夜詩は相変わらず表情を動かさずに答えた

「私の能力は無意識者、私という存在を呼吸や瞬きと同等にすれば他の人間に感知する事はできないし、心臓の動作を意識して操作しないと出来ないようにすれば、相手は高確率で死ぬ」

……？チート？

「まあいい、朝食だ、とりあえず……朝食を取ろう」

……
ということもあり、食堂、ここでは一年から三年がまとめて朝食を取る事になっている

なので、私は普通に朝食を食していたのだが、普通に向こう側の席に速魅が座っていた事や、その三つほど右の席に夜詩が居た事は無視しよう

等と考えていた所、急に食堂に生徒会長の声が響いた、どうやらマイクを使用しているようだ

「皆さん注目してください、今日から、私達を警護してくれる五人組が到着しましたので、紹介します」

「あぁん！？ホイホイチャーハン！？」

「最近だらしねエな！」

上矢と風波が意味不明な返事をする、超高速でフォークが飛んできた

そして、生徒会長は押し殺した声でこう言った

「黙れ……一年の恥だ……！」

正直少し怖い、おかしい、マイクを切っているのに耳元で言われたような感じた……

未知の恐怖を感じた……

「……とりあえず、お入りください」

その言葉と同時に全員の視線は朝食のドアへと向く

「おいおいおい……絶対全員見てるよ、ヤバイって……ヤバイって……無理、吐く、吐くわ……」

「落ち着きなよ、大丈夫だって……うん、少し変わってる人が一年に何人か居ただけ……」

「三年生にも結構変わった人達が居ましたけどね」

ドアの向こうから声は聞こえても姿は見えず……

正直若干の苛立ちを覚えたが、動けば生徒会長に殺されるからな……

「よし……落ち着いた、開けるぞ、3、2、1………！」

ガツという音と同時にドアが若干斜めに動く

立て付けが悪かったのか、ドアが綺麗にスライドせず、レールから外れ、動かなくなったのだろう

「……3、2、1………！」

気にせず即座にカウントしなおしたと思えば、同時にドアが物凄い勢いで吹き飛ぶ、

そしてドアは一直線に生徒会長の方向へ、しかし生徒会長の目の前で急に曲がり、上矢の方向へ

…ありえないなあ…どんな変化球だよ…

「ちよつ…！まゝ（即死攻撃）」

見事に命中した、死は逃れられない

…

しかし、上矢は力強く立ち上がる

「凄い傷だが大丈夫か？」

「大丈夫だ、問題ない訳あるかあああああつっ！！」

奇跡的にも軽傷だが、どうやら精神へのダメージが大きかったようだ
暴れる上矢を他所に、昨日上矢の隣に居たであろう少女が自己紹介を始める

「…気を取り直して、とりあえず自己紹介と行こうかな、私の名前は逆坂美羽、主に夜間の警備を担当してるよ、四日間よろしくね」

逆坂美羽、というらしい…聞いた事が無い名前だな、ジャッジメント風紀委員だろ

うか？

そして、次は逆坂に変わって、爽やか系の男が前に出る

「永井大輝ながい ひろきです、どうぞ宜しく、基本的に一年の警備を担当します」

身体は無駄なく鍛えられ、その涼しい笑みは何人もの女生徒＋ソッチ系の男子の心を力強く掴むだろう

別に妬ましくは無い

そして、次の人物の紹介、先程が涼しい系の美男子だったのに対し、今度は熱血系っぽい、たくましい男が前にでる

「ア…ア…エ…オ、オデノバエバ…ヴィガワカツヴィ…デイス…オレアオボルザアンベンドゲイゴオ」
「タンドウルジバス！ヨドジグオベガイジバス！」

何語だ…？朝のばだめぐなじゃこりゃあ、とか、今回の言葉やら…
どうやら言語が不安定な人間が少々いるようだ

そんな言葉の解説に勤しむ私を他所に、風波は驚愕と感心を混ぜたような表情で囁いた

「ば…馬鹿な…あの言語…まだ滅んで無かったのか…！？天然か…いや…人工的か…？しかし…常人には…あの言語はクセが強すぎる…！あの男…できる…！」

此方も何を言っているのか分からない…しかし、様子からして知っているのだろうか…？

聞くは一時の恥、聞かぬは一生の恥…か

「なあ、風波、あの言語…知ってるのか？」

「あ…ああ、あれは…2004年に急速に世界中に回った活舌がありえないほど悪くなる奇病によって発生した特有の言語だ…もう消えたと思っていたが…！まだ、生き残っていた！」

…随分とアツくなっているようだ、基本的に掴めない性格なのだが…彼には何かティンと来るモノだったようだ

「因みにコレより一年前には謎のマザコン奇病が発病し、二年後には急にやさぐれる奇病が発祥し、更にその二年後には服のボタンを無性にむしりたくなる奇病や、二年前ほどではないが、急にやさぐれる奇病も発祥し、更には自分を正義だと信じて止まなくなる奇病も発祥した…！その中のマザコン奇病は余り長くは続かなかった、そして、活舌障害奇病は最近では沈静化しているし、やさぐれる奇病は最初の発病者が行方不明となる事で沈静化し、やさぐれ奇病第二波は気が付けば沈静化し、ボタンむしりと正義奇病はおよそ一年で沈静化した…！まさか、ここでその中の一つである活舌障害奇病が見られるとは…！！感動だ…！生きていてよかった！」

「そーなのか…で、なんと言っていたんだ？」

先程まで埋もれていた宝を発見した子供のような表情をしていた風波は一気にテンションダウンし、玩具を取られた子供のような顔をしながら答えた

「あ…あ…え…お、俺の名前は…みかわかつみ…です…俺は主に三年生の警護を担当します！よろしくおねがいします！…と、い

った感じでござんす」

それだけ言うと、風波はつまらなそうに頭の後ろで手を組み、足を組んで椅子を揺らしていた

先程の未知の言語の男の自己紹介が終わり、四人目が前に出る

その容姿は、どちらかと言うと物静かなイメージで、個人的には二
ーソックスが評価できる

「寒咲^{かんさき}夕美^{ゆみ}です、主に二年生の警護を担当します、……優しくして
くださいね？」

分かった、一瞬で分かった

コイツはアレだ、純粹な感じで忍び寄ってガブリと行くタイプだ
所謂、怖い女って奴だ

… 待て、今までの役割は

夜間警備

一年警備

二年警備

三年警備

…

もういらなくないか？五人目…

等の疑問を持った私の事など知らず、五人目は前に出た

「どうも（クチャクチャ）、生徒間の問題が起きた場合に（クチャ
クチャ）対処する（クチャクチャ）迷道^{まよいみち}誘^{さう}です（クチャクチャ）ど
うぞ宜しく」

ガム食ってやがる…！ガムを食ってやがる！こいつ…！馬鹿にされ
てるのか…？

そんな疑問と怒りをほぼ全員が覚えたところで、生徒会長が苦虫で
も？む様な顔をして、説明を加えた

「あー…迷道さんは口腔内に何かを入れてないと呼吸困難に陥るん
だ、私も見せてもらったが…、疑った自分を後悔した」

あの時の生徒会長の顔は忘れられない、まるで完璧な屈服をしたよ
うな顔…

あの生徒会長にあんな顔をさせる迷道に少しだけ憧れを抱いた…

…
というのも今は昔…

今はリゾート施設の南西に存在する大浴場にて（当たり前だが）男女で分かれて入浴中だ…

ああ、何時見ても惚れ惚れするな…光の肩甲骨とか…腰のラインとか…

随分と成長したなあ…見ない内に…

「…光二い…余り見ないでくれるか？…いくら…親友とは言えど…少し恥ずかしい」

「気にするな、光、昔は二人で一緒に風呂に入ってたじゃないかあ

……」

ふふ、今となつては黄金に輝く私の思い出…

ああ、ああ…ああ！なんて素晴らしいだろう！

「月山つて…ソツチ系？」

上矢の失礼な質問を私は華麗にスルーし、浴槽に浸かる

今までの疲れが一気に抜けた感じだ…昨日は速魅の所為でゆっくり入れなかったしな…結局冷えたし…

個人風呂より、此方のほうが…安心できる…

「……なぜ混浴ではないのかああああああああああ……」

……」

まるで溺死体のように浴槽の淵に伏せている生気を失った風波はそんな馬鹿げた事を言う

「……確かに、同感だ、風波い……」

「フツ…盟友…分かっているじゃないか…こうなれば…起こす行動は一つ」

「「覗こう」」

エターナルフォーススプリザード
場の空気が固まった空気凍結だ、私達の空気は死ぬ

「…覗こう、じゃねーよ……馬鹿か…お前らは…、光二もそう思う

だろ？」

「いや？行こうじゃないか、光…夢の楽園へ」

「ハハハ、だよな……あ？…光二iiiiiiiiiiii！！目を覚ませええええええッ！！」

突如光は絶望と驚愕に彩られた表情を浮かべ、私の肩をゆする

「目を覚ますも何も……ないだろう？光？」

「ばっ……！馬鹿野郎！こんな変態共と同じにされていいのか!？」

その光の言葉に私を含め、風波と上矢は見事に同じ台詞を吐きながら、見事に光を同時に殴った

「……男が変態で何が悪いッッ!」「……」

「どっふえ……！ほ、本当に裏切ったのか…光二イ……」

直後に倒れる光、どうやら気を失ったようだ…

まあ、いいか

「…不味いな、主戦力の一人が減った…、コレじゃ三対六だ…勝ち目は無い」

風波の敗北を認めたような声でそんな事を言うが、私はむしろ、コレを利用しようと考えた

…

今、全ての生命を掛けた（あながち間違いではない）…男達の戦いが…始まるうとしている…

- 女風呂 -

此処では、何故か一年の入浴時間に入浴している風美丘への尋問が生徒会長こと夏日によって行われていた

「風美丘先輩、貴女は自重という言葉を知ってますか…?」

「ええ、知ってますよ？だが私は自重しない」

先程からこんな会話の繰り返しである、他五人の一年生と、運悪く

居合わせた他の客二名はかなりうんざりしていた…自分達に迫っている恐怖の足音にも気付かず…

「はふう…メンドくさいねえ…学校って、そう思わない？とうこ？あはは」

「んう…？そうかしら、組織に属するって事はそれだけ後盾が出るって事よ？」

浴槽の端には、全体的に真っ白、そして淡い赤色の目だけが輝く少女と、同じく白髪の童顔の少女が話していた

「んふふ、組織と言えば…おにいさん元気い？ふふ、サークルかあ…懐かしいなあ、うふふ」

「んあ、ハル兄は元気だよ、何時も通りね、それと…宮田の代わり絶対逃亡って奴が入ったね、最近」

「んあ？絶対逃亡、知ってるよ…人間GPSでしょ？面白いよね、あの能力、んふふ」

「…ねえ、最近どんな生活してるの？」

「ん！不良とかからお金巻き上げてるよ？こう…パパツとね、あひや」

- 男子更衣室 -

「さて、作戦を確認しよう…作戦は74通りあるから…どれを使えばいいか…確か…最初に思いついた作戦は…突撃」

「よし、それで行こう」

月山の提案に乗る上矢と風波、彼らは既に人間ではなかった…

「生徒会長への対策は、この気絶した光だ…光を身代わり人形にして、生徒会長の動きを止める…そして、恐らく居るであろう速魅は…気にしないでいい、そして、他の五人は気にするほどでも無いだろう」

月山は絶対の自信を持って作戦を説明する、脳内で何度もシミュレートしたが、成功率は100%であった！

そして、月山は予め用意していた学園都市製デジタルカメラを二つ出し、二つとも上矢と風波に渡す

「お前の分は？」

その言葉に対し、月山は薄く笑い、人差し指で軽く自分の頭を、トン、トン、と叩く

「脳内記録、だ」

（（カッケえ…））

光二が光を背負い、移動し始める

「さあ！行くぞ…！」

「『『我らが戦場へ！』』」

・女風呂・

余りにもそれは突然に起こった、一瞬の間だったのだ

「突撃イイイイイイイツツ！！」

その掛け声と共にジャージ姿の四人の男が女風呂へと突入した

正確には一人気を失っているので三人

場が完全に凍結した

のも付かぬ間

「き、貴様等アアアアアアアアツツ！！二度と太陽を見れない身体にしてやるウ！」

最初に動いたのは生徒会長、化け物じみた運動能力を生かし、ほぼ一瞬で距離を詰めようとした、が

「そおら！光だア！取って来い！メス犬が！」

光二は火事場の馬鹿力で光の身体を投げる、綺麗な放物線を描いた光の身体はこのまま行けば確実に地面に激突し、死ぬだろう

「なっ！？……あ、光あッ！卑怯な人間め！」

それを即座に察知した生徒会長は急にUターンし、光の方向へと走り去って行く

その後姿を見ながら月山は高らかに勝利を宣言する

「卑怯もラツキヨウも大好物だぜえー！ーッ！ーッ！」

その姿に他の生徒＋客は口をそろえて言った：（風美丘を除く）

「凄い変態だ…！」

「ダーク光二さん超輝いてる…！光二さんマジ最高…！」

そんな月山を他所に、上矢と風波は影に潜み、奇跡の秒間43連打でシャッターを切っていた

二人は各々の最高のアングルで高速撮影を終え、撤退を開始する所だった

「撤収ーッ！マッハで逃げるぞ！死ぬ気で走れ！走るんだあ！喋るより！走れエ！」

その言葉で男は出口へと走り、生きて返さまい、と生徒会長と風美丘を除く生徒＋客も走り出す

「皆さん急いで！絶対に助かりますよオ！」

月山が出口のドアを開き、男達に急げと告げる

「ハイ！月山様！」

（とは言っても…このままだと辿り着けるかどうか…）

風波は軽く完走し、ドアの先の廊下へと消える

そして、次に上矢が走るが…

彼は知らなかった、普通の訓練されていない走り方では風呂場では絶対に転ぶと

「ああん？アシクビヲクジキマシター！」

盛大に一回転半して、転んだ上矢は、月山に助けを求める足首を挫く前の声は気にしたら負けだろう

「おやあ？そうですか…では…ここまでですね」

鋭い蹴りが上矢の右肩を貫き、上矢は一気に追いかけてきた奴らの足元まで吹き飛ば

「力なき物に…イキノコルカチハアリマセン！」

そう台詞を捨て、月山はゆつくりと出口へと消え、上矢は>奴ら<の餌食となる

「う、うわああッ!!」

「んふふ…覚悟は出来るてるよねえい？」

「な、なんの覚悟でございましょうかつ！」

「死ぬ覚悟だよ？」

ギリギリと、追い詰められる上矢、そんな彼は不意に思いついた言い訳を試す

「ま、待ってくれ！降参だ！俺はアイツらに指示された通りにやっただけだ！アイツらが居ないんじゃアンタ達と戦う意味も無い！それに俺のカメラはもう壊している！ノーカウントだ！ノーカウント！…なあ？分かるだろう？同じ人間じゃないかあ…！」

しかし、意味も無く、むしろ相手を逆上させるだけだった：

「ねえ？ねえねえねえねえ？私とお前が同じってえ…！どいう事かなあ？ねえ？」

「全く笑えないよう？そのジョークは…？」

「我、貴様殺す、故に我あり…」（風美丘の悪ノリ）

「くそがつ！ついてねえ！ついてねえよお…！」

そして、上矢は生死の境を彷徨ったそうだが、向こう側に死んだ両親が見えたらしい

「…アイツ等…絶対に…！殺してやる、殺してやるッッ…！」

恨みを全て吐き出す生徒会長こと夏日

そんな夏日の腕の中には光が居た、先程から処置に困っているらしいしかし、光は徐々に覚醒していき、遂に目覚める

「ハッ！？…ん？生徒会長？なんで生徒会長が俺抱き抱えてるの？」

「ばっ！違っ！」

勢い良く手を離す夏日、よって光は思いっきり床に頭をぶつける

「痛あッ！…！異常に痛い…！！」

「あ、す、すまない…！」

あわてて弁解する生徒会長と痛みにもかく光の姿がそこにあつた…

（まあ、いいかな…）

そして生徒会長は考える事をやめた

…

それからどれ程時間が経つただろうか…

女風呂には死に掛けている上矢の姿があり、今、覚醒したように見える

「ああ…もう死のうかな、こんなんなら…」

そんな上矢は浴場内の時計を見る

その時刻は明らかに次の二年生が来る時間を示していた
というより、脱衣所から声が聞こえていた

「…くくくっ！いいぜ…来いよ！来いよおおおおッ…！」

上矢の最後の戦いが始まる…！！

16・二日目<Bathroom>；（後書き）

疲れました、疲れてしまった

空気使い先生、大浴場ネタ、ありがとうございます

もうお嫁にいけない

どうやら法則無視で人気キャラアンケートが開かれているようですが
皆さん、かざみんに投票しましょうよ、ね？

17・四日目<Three fears>（前書き）

月山君のモトネタと最近戦ったら全く勝てなくてワロタ

レイブンとして仕事をしすぎたか…、ネクストに全くついていけませんでした…

え？どうでもいいって？そんな悲しい事言わないでくださいよ

何も書くこと無いから書いてんですから…

今回みよんな事を思いついたので実践してます、挿絵表示をONにしてご覧くださいませ、（別にいきなり私のトラウマ絵が表示されるとかそんなトラップはないですん）

17・四日目<Three fears>

気持ちのいい朝がk

>i12358—1554<

来なかった、出オチにも程がある…っ！

白黒…？何がしたかったんだろうか…

「ハッ！？今日は水玉ッ！」

勢い良く起き上がったのは速魅様だ、心が太平洋のように無茶苦茶
広い風美丘速魅様だッ…！

「お前は起床早々何を言っているんだ…」

「おや、まだ生きてたのかね？ゴミムシ君よ…いや、駄犬だったかね…？まあいい、私の飯の余りを分けてやるから死にたまえ」

「誰がゴミムシだ」

「ほう！女湯を覗いておいて…よくそんな事がほざける物だ！バラ
バラに引き裂いてやろうか！」

反論ができない、なんて悲しいんだ、私…

説明しよう、私は一昨日、超ハイテンションの余り女湯に突撃した
別に興味があつたワケじゃあない

ノリだよ、ノリ…つか、こんな寸胴ぼでー見ても誰得だつて話よ…
とか考えてるのに自然と目から液体が…あれ…？おかしいな…

「血だあ…！」

「ちよ、何で目から血が出るんですか？！だ、誰か…ッ！この中に
お医者様は…いませんよね、諦めましょう」

見捨てられてしまった…ざんねん！わたしの ぼうけんはこ
こで おわって しまった！

いや、涙だと思っていたら赤い液体だった訳で…病気だろ、絶対…

「ぎゃ、ぎゃああああ…っ血が、血が止まらないっ…！痛い！痛い
！肘が痛い！し、死ぬっ！」

「こ、光二さんが呪われた…ああ、南無阿弥陀仏…南無阿弥陀仏…」

不味い、本気で呪われた…！何事！？

「ごぼあっ…！遂に口からも…！このままでは本気で死んでしまうん…お医者さん呼んでーな…」

その直後だ、突如ドアを勢い良く開け風波が入り込んできた、飛び込み前転で

つか、この状況でまだ寝てられる光と生徒会長が凄いな…

普段からこのような状況なのか…あー…状況といえば、私の体の状況も教えて欲しい…

「C u c u m b e r（キューカンバー 訳：きゅうり）は何処だ！？」

「急患馬鹿（キュウカンバーカ 訳：光二）なら此方にありますよ！」

「何だつて！？吸汗馬鹿（キュウカンバーカ 訳：風波でえ…いいんじゃないかな）！？何処だ！ゆるせん！そんな変態！羨ましすぎるわっ！」

なんてハイテンションなんだろうが、こいつ等は…私は遂に目眩がし始めた、なんて失血量だ…
生きてる心地がしない

「おおう！吸汗馬鹿でもなくC u c u m b e rでもなく屍人が居たぞ！？こいつあすげえや！」

「つか…助けてくれないのか…盟友…」

というか、絶対免許もって無いだろ…医者なワケない、コイツ…とか思っていた矢先、風波は自信満々に言い放った

「俺は一応天才だ！応急処置どころか人工呼吸まで喜んでするぞ！主に女性！」

世の中ではそれを変態と呼ぶ…

なんて事も考える隙は無く、風波は一瞬で診察結果をサラリと言ったのけた

「はい、手遅れだね、このスーパードクターこと風波様様様でもどうにもならないね！ハハッ」

「ネズミーランドに訴えられますよ！」

「そんな事はどうでもいいッ！次はかざみんを診察しちゃうぞさあ脱ぎやがれ！俺の予知能力が正しければお前は今日白黒パンティーだ！夢のお告げでそうあった！さあ！さあ！」

：

いつそ死んだほうが楽かもしれない

こんな血流れてるのに何故死ね無いのだろうか…、何か補正掛かってるか？私

あ、奴隷補正か…やだなあ、これから一生速魅様の奴隷か…でも逆らうとブタ箱行きだしなあ…

そんな、混沌としていた状況を

いや、私達が住んでいた空間を

見事にぶち殺してくれる事が起こった

それは生徒会長の一言

「んうう…光あ…なんでそんな所ばかり…」

硬直した、硬直してしまった、いや！せざるを得なかった！

「カカカ…光め…こ、殺してやるっ！」

怒りと嫉妬に囚われ、目を深緑に彩らせた風波は二人の愛の巣へと特攻を仕掛けた、が…

空間自体が切断されているらしく、それ以上先には身体が動かず、

風波は地面へと激突した

…、と思った矢先、私の出血が止まった、一体なんだったのだろうか…

呪いか、それとも…恐らく、生徒会長が私が全身から出血し、死亡という確率を100%にし、それを哀れんだ光がいくら出血しても死なないという想像を加えてくれたのか…？分からないな…

まあ、いいか！生きてるしね！（後日振り返ると本当にこの時はどうにかしていたと思う、本気で思う）

…
朝食を取り終え、昼食を取り終え、速魅様を速魅までランクダウンし、前生徒会長に昨日のデザートを分け与える事で買収し、私は無罪となった

勝った…！コレで全ての責任は風波と上矢だあ…きゅへっ

なんて浮かれていたら、ふと、私は声を掛けられた

「あのお、少しお時間を頂いてもよろしくて？」

まるで鈴のようなその声は、私が今まで聞いてきた声の中でも恐らく一番、絶対に透過通った綺麗な声だっただろう

振り向いてみれば、そこには如何にも涼しいといったイメージを持たせる白い薄着に、麦藁帽子

炎天下の中でもその肌は全く焼けておらず、病的…とまではいれないが、一歩手前位にまで白かった

私は思わず数秒硬直してしまった、まるで別の生命体を見た感じだ、というより、住む次元が違うような感覚…？いや、違う…

生まれた次元が違う、いわば、愚民と貴族、人と神

階級の差ではなく、人として、人類としてグレードが違う感じだ

私達が1・00なら、この女性は恐らく7・25、といった感じだ私が硬直していたため、不安になったのか、若干不安そうな表情をしながら女性はもう一度聞いてきた

「あのお、少しお時間を頂いてもよろしくて？」

私は一気に現実引き戻され、少々焦りながらも通常の対応をする「あ、はい、なんでしょうか？」

私が軽く返事をする、女性は若干バツの悪そうな顔をしながら言う

「実は…人を探しているますの…でも、全く見当たらず…私、こういう場所、余り来ないものですから…」

余程の箱入り娘なのだろうか、等とついつい考えてしまうのは私の悪い癖だろう

私は一瞬迷ったが、別にやる事も無いのでとりあえず一緒に探すことにした

「ええ、いいですよ、どうせ暇ですし」

「まあ！本当ですよ！？ありがたいですわ！ここは優しい人がたくさんいますのね、先程も何人かの男の人達が案内してくださりましたし」

不味い、相当な箱入りだ

ナンパを良心だと勘違いしてやがる…

まあ、よくあるパターンだろう

なんて事も若干考えつつ、とりあえず目標の人物について私は聞く事にした

「で、その人…何か特徴とかは…」

私の質問に対し、若干困ったような素振りを見せたが（魅せた、でも間違いいではない）何か思いついたのか、人差し指を立て、明るい笑みを浮かべながら、自慢げに話す

「そういえば、何時もメイド服を着てますわ！それと、ちょっと天然というか…何かズレてますわね、人として」

アンタも結構ずれてるよ、というのは恐らく禁句タブーだろう
という訳で人探しが始まったわけだが…見つかるのか？

S i d e K a z a m i g a o k a

いやあ、今日は慌しかった…などと若干干渉に浸りながら私は視姦はく魔らいから逃げる為に海岸を歩いていました

何か無いかなあ、とか思いながら…ね

とか思えばあつたんですよ、物凄い光景が

まずですね、何故か人口海の砂浜にシュモクザメが打ち上げられていました

凄いいませんか？というより、ここ絶対淡水でしように…海水じゃありませんもん、この人口海

そして、それより物凄いののは、その打ち上げられたシュモクザメのそばに座り込む少女ですよ

しかも…

学園都市第三位の超電磁砲^{レールガン}……の、クローンですかね

以前見た光景は凄かったですよ…超電磁砲が二人居て、お互いに話し合ってるんですもん

気絶するかと思いました

そして分かった事は…超電磁砲は…ああいう奇抜な行動には走らない、という事…

しかし、私も一応こういう事には余り首を突っ込みたくは無いのですが

不可抗力なので突っ込むんですよ

「何をやってるんですか？」

沈黙

気まずい沈黙

光も感情も無い目で此方を見つめてくるんですよ、正直怖い
そして、彼奴の口はゆっくりと開かれ

「ミヤ

」

神は言っている

あまり関わらないほうがいいと

帰ろう、帰ろう、こんな異世界に何時までも残るつもりはありませんし…

といつても、とてつもなく好期会なので、帰りません

Mya…?…M Y A ?…マヤ!？マヤ文明ですね！わかりませんよ、畜生

「……と、鳴く四速歩行の生物がピンチだった事があったな、……とキリサメは昔話を語り始めます」

…キリサメ?…というより、この会話は確か…一度だけ聞いた事があるオリジナルとクローンの会話の際の台詞…だったはずですよ、なら…これは…同一人物?しかし…私の目の前で死んだよーな…

「この巨大な魚は食用でしょうか、……とキリサメは自分の語尾に嫌気が差してきた事を暴露します」

「……キリサメ？ミサカじゃないんですか？」

私が以前あったときにはキリサメなんて名前を使っただけではなかった……そして何より、語尾の形状こそは同じでも内容が違っ、以前なら語尾は自分の心理状況を伝えるような内容だったはず……

等と考えていると、キリサメ？は先程までシュモクザメに向けていた目を此方に向けてきた

「確かに、キリサメは以前検体番号十四号として生活していました……とキリサメは王道的な引き伸ばしを活用します」

一つだけ分かった事があります、大発見ですよ

すげえ、性格悪くなってる、コイツ

いや、詳しくは知りませんが……前は少なくとも普通でしたよ、多分

会話を聞く限りでは……ね

「さつさと教えてくださいよ、気になるじゃないですか」

「機密事項です、という言い訳を使いたいのですが……残念な事にキリサメには特権などはないので素直に話すことにします」

その直後、キリサメ……はシュモクザメに一発蹴りを入れてから此方に歩み寄ってきた

……何故殺したし……

「とりあえず近くの喫茶店でも入りましょう、無論全てあなたの奢りと決めつけ、喫茶店へ向かう足を速めます」

「待て！待ってください！なんで私が奢るんですか！？というより、この場合喫茶店というより海の家」

「情報料です、……とキリサメは最も合理的な手段で経費を減らします」

神に従っていれば……良かったかもしれない

とか思いつつも、此処まで来たら引き返せないの、仕方なく店内へと足を運ぶ……

そして、席に腰を降ろし、いよいよ本題に入ろうとした瞬間

「……メニューにある物を全てください、……とキリサメは奢りをい

い事に一度やってみたかった事を実」

「死んでしまえ、お前なんか死んでしまえ！」

思わず右手が出た、人間なら普通だと思います

思いませんか？思ってるんでしょう？

しかし、叩かれたキリサメは若干理不尽だ、とでも言いたそうな顔をしながら言う

「…親父に打たれた事も無いのにーッ！……とキリサメはチャンスを逃さず発言します」

「よっしゃ、それはもう一発叩いていい、という事ですね？」

「それなら今回の話はナシの方向で…、キリサメはこういう人類が一番苦手です、死ねばいいのに」

そこまで言うんですか…

なんて感じて私が本題から逸れそうになった瞬間、キリサメは急に話し始めた

「キリサメは以前、実験で死に掛けました、それはそれは無残にも

…今思うと一位はリヨナ、略さずに言えば猟奇的n」

「その話はいいです、さつさと次を話してください」

「……話の腰を折られるのは相当に気分が悪いものだ、と、キリサメは改めて実感します…、殺されかけたキリサメ…あの頃はミサ力ですが…助けが入ったのです、直後にキリサメは誘拐され『やめろ！ショッカー！やめろお！』状態へとなり、見事キリサメへと通信交換で進化したのです、めでたしめでたし」

…駄目だ、今の私には理解できない

そんな事を考えてもう、どうしてもよくなりそうになった時、突如携帯が騒ぎ出した

携帯画面を見てみては、月山光二の名前が出ていた

「ちよつと失礼…：もしもし？光二さん？恋しいんですか？」

『ああ、チヨコが恋しいな、アーモンドチヨコ、最近食ってないしな…それより、キリサメって奴を探してるんだが…見つける』

思わず思いましたよ

…
何故疑問系じゃないんですか？

Side out

「見つける」

奴に疑問系は必要ない、ということで、速魅に電話を掛けている理由は簡単、見つかりそうにもないからだ
まあ、速魅なら即座に見つけてくれるだろう…
と思った私は甘かった

『ああ、目の前に居ますよ』

「予知能力!？」

予想外だ、完璧に…探すどころか、もう既に見つけていた…!？

「まあ…今から行く、何処だ？」

『あー…シーハウス【リユウグウノツカイ】に居ますよ』

それだけ聞くと、軽く返事をして電話を切る

「…見つかりましたよ、キリサメさん」

みかさなりかなえ

私の言葉を聞いて、彼女…三重神苗さんは、明るい表情を浮かべ
「本当ですよ!？助かりましたわ!なんとお礼を言ったらいいか…」
「いえ、結局電話しただけです…さあ、行きましょう」

私紳士

…

現地に到着すると、見事に速魅と…キリサメ?が居た

化粧もいらない程に整った顔立ち…だが、何故か若干ゴスロリっぽいメイド服を着こなしている

暑いだろうに…

「キリサメ、どこほつつき歩いてたんですの?心配しましたのよ!？」

「申し訳ありません、シュモクザメに気を取られていました、……」

とキリサメは今思えば結構に黒歴史な事実を打ち明けます」

そして、それとほぼ同時か、店内に新しく二つの影が増えた…

それを見た瞬間、私は何かの錯覚でも見たのかと思った

何故なら

同じ顔が三つあるのだ

「あら、^{かなえ}鼎に^{かなえ}香奈枝、お買い物は終わったのかしら？」

「ええ、とても有意義な時間を過ごせましたわ、神苗」

「か、かなえ…？全員かなえなんですか？」

速魅は驚いたように質問すると、彼女達は自然に声を重ねて話し始めた

「…ええ、そうですね、見分けがつかないでしょう？うふふ、結構困りますのよね、これ」

何か、生理的嫌悪を私は感じた…が、そんな私の事を無視するかのように、彼女達は別れの言葉を言った

「…暦プロジェクト、最上位、睦月の三重鼎（神苗）（香奈枝）ですわ、以後、お見知りおきを…」

同時に微笑む彼女達の笑みは、並ぶと、美しいを通り越して、奇妙であつた…

17・四日目<Three fears>（後書き）

ミカサナリバー三姉妹については、そのうち説明すると思うので…
まあ、ソックリ三姉妹と考えてください

ネタ提供してくださった空気使い先生ありがとうございます、もう
死にたい

追記：キwwwwwwリwwwwwwサwwwwwwメwwwwwwお前
wwwwww時空超えてらっしゃるwwwwwwマジ勘弁wwwwww
w

18・早朝戦&1t・Early morning> ; (前書き)

かざみん人気高すぎでしょう…生徒会長ゼ口票って…どんだけかざ
みん好きなんですか…

そんな輩に一言いいたい

私の方がかざみんを愛してる…!!

18・早朝戦<Early morning>；

暦プロジェクト：昨日、三重が残した単語

香奈枝だか神苗だか鼎だか：いや、全員がそう言ったのだ

『暦プロジェクト、最上位、睦月の三重鼎（神苗）（香奈枝）ですわ、以後、お見知りおきを…』

私の知らない所で何かが動いているのだろうか、こう、とてつもなく強大な悪意：とかが

等と考えたベツトの上

隣で速魅熟睡、隣のベツトで光と生徒会長熟睡

朝：というより深夜三時の出来事だった

全然眠れないのでバルコニーにでも出て月でも眺めるとするか、そして翌日私の死体がバルコニーで見つかるのだ、寝オチという奴だな私は隣にいる速魅ミッドナイトデーモンを起こさずにベツトから脱出するバレれば即座に手足の自由を奪われるだろう…

そして、私は眠れる獅子達を起こさぬように一步一步慎重に歩き、慎重にドアを開け、巡回する悪魔に見つからないように慎重にバルコニーへ進む

正直こんなに心臓に悪い事する位なら部屋で大人しくしていればよかった

しかし、苦勞した分だけすばらしい報酬が与えられるのだ…、そう、いざ開かん新天地バルコニーへの扉！

今夜は月夜を独占だ！とか妙にハイテンションでバルコニーの椅子に座って月を見ていた時

突如声を掛けられた

「隣、失礼させていただきます…とキリサメはアンタの幻想空間ぶち殺す！」

「ああ、どうぞ、どう…？……KIRISAME？どこかで聞いた単語だな…犬種だったか？」

私は硬直しながらも声の方向向けば、そこには昼間、正確には昨日見た顔が

「ワン」

神は言っている

あまり関わらないほうがいいと

W A N ∴

W ∴ 私は

A ∴ あなたの

N ∴ 肉奴れ ∴

私は何を考えてるんだ ∴

「なるほど、獣メイドですか ∴ キリサメは貴方の思考回路に何かの問題があると診断し、すぐに最寄の病院へよる事をおすすめします」
反論できん、悲しすぎるな、私

「で、何か用でもあるのか？」

「殺しに来ました」

「解せぬ」

そんな ∴ 一狩り行こうぜ！見たいな感じで討伐されては困る

本当に困る ∴

「 ∴ 詳しく言えば、貴方を今度見かけたら連れて来い、と鼎お嬢様に言われているのですが ∴ 」

どうやったらそれが殺しに来た、と繋がるのか誰か説明してくれ

「貴方の身を考えて ∴ ここで半死になってもらいます、とキリサメは驚愕の事実を大公開します」

な、なんだってー

と、驚きたい所だが ∴

「随分と自身があるんだな ∴ 確か、速魅の話では ∴ お前はレベル2程度、高くてレベル3だと聞いたのだが？ ∴ 私は仮にもレベル4、

そう簡単には殺せない ∴ 」

レディオノイズ

「欠陥電気だったのも今は昔 ∴ 今では帯電光刃 ∴ 勝ち目はキリサメ

ボルトテッカー

にも十分にありますが、貴方は理解していません復活したキャラは大

体強化されているのですよ」

その瞬間、キリサメの両手から外側に弧を描きながら所々から刃のような物が飛び出している青白い光が手首から肘の横まで展開され、手首の横からさらに一直線、手と平行に一本の刃が飛び出している……明らかに発電能力じゃない、見た事が無い……あんな能力

「待て、明らかに発電能力じゃないだろ……！？それ」

「ええ、私は香奈枝お嬢様に魔改造された際に若干能力を改変され、このように若干の強化を施されたのです……とキリサメは好き勝手に身体を弄くられた事を思い出します」

キリサメは喋り終わるかどうかの前に光刃を突き出しながら襲いかかってくる

私は即座に後ろに下がり、避ける

「いきなりかつ……！卑怯な……」

「喧嘩にルールはありません……とキリサメは正論を述べます」

そんな屁理屈を言いながらも、連続で光刃を突き出してくるキリサメ私はギリギリの所で回避し続けるが、突如キリサメは動きを変え、足払いを仕掛けてきた

私は対応できず、思いつきり地面に背中を打ち付ける、そしてそこへ間一髪入れずキリサメは胸を狙い大きく踏み込んでくる、即座に粒子化し、攻撃を回避する

キリサメは此方へと視線を向け、もう一度姿勢を構えた瞬間

介入者が現れた

「そこまでですわ、キリサメ？一人で楽しまないでくだらない？」

月をバックにして宙に浮いているのは

三重

はたまた、神苗か、それとも香奈枝か

「……鼎お嬢様」

「まあ、いいですわ、それより……月山光二様、今から私とお手合わせお願いできるかしら？」

三重の提案に対し、キリサメは反論を述べる

「しかし、その戦闘を行った場合、最悪の事態ですと、月山光二の生命活動が停止します……とキリサメは若干不安を表情に浮かべ、報告します……やはり、キリサメが戦闘したほうが……」

「いいえ、私は手加減ができますもの、他の出来ない奴とは違って、私は最高位ですもの、そして何より……貴女はそちらの方のお相手を頼みますわ」

宙に浮かぶ鼎の指差す方向には

怒りを露にした逆坂の姿があつた

「悪いけどさあ、ここは私の管轄よ？……出て行つてくれる？」

「あら、排他的なのはよくないですよ？最下位の逆坂美羽さん」

最下位、という言葉聞いて逆坂は若干笑い、三重を睨みながら一言「最下位……ね、でもあなたは殺せる……細胞の一つも残さない測定不能の炎で焼かれて死ね！」

そう言い放ち逆坂は右手を鼎へと向け、白に限りなく近い炎のような何かを発する

その炎は、鼎に達する前に何かの壁でもあるかのようにあたりに散らばり、無効化される

「あら、測定不能の炎も私の前では意味がなかったようですね、キリサメ、そちらの相手は頼みましたわよ」

「……少々キツいかもしれませんが……とキリサメは愚痴を言います」そんな事を言いつつ、キリサメは逆坂と戦闘を開始する

「月山光二様、私達三姉妹の内、私を見分ける方法を教えますわ」鼎は若干微笑みながら、私の方向へと目を向け

「能力を使うときに私の目は黄金に輝きますの」

「アイツの目を見ないで！見た瞬間に精神を破壊されるよ！」思わず見ようとしていた目を私は急いで防ぎ、目の直視を防ぐ

「あら、逆坂美羽さん……ネタバレは関心しませんわよ？」

「逆坂！アイツの能力はなんだ！？」

私はあの能力の正体を逆坂に問う

正体の分からない能力と戦うなんて冗談じゃない

私の問いには逆坂ではなく、三重が答えた

「私の能力は絶対順位、強力な念動能力に加え、精神感應能力、念話能力、読心能力を全て兼ね備えた、…まあ、盗賊の七つ道具と考えてくださいませ」

勝てる訳がない、精神感應能力で精神面から破壊され、読心能力で行動を読まれ、念動能力で止めを刺される…非の打ち所がない
更には念動能力による厚い壁もある

「…まあ、日が昇るまで貴方が立っていれば勝ちでいいですよ」
日が昇るまで、あと三分も無い、…一体何処まで自信があるのだろうか？

「さて、手加減してあげますから、本気で掛かってきてくださいませ！
せ！」

言い終わった瞬間、私は右肩に重い衝撃を感じた、即座に右肩から下を一度粒子化し、元に戻す

「くっ…弾道が見えない…っ！？というより弾道があるのか！？」

「やっぱり打撃にはお強いんですね、では斬撃では？」

三重は、恐らく目の前に薄い念動力の刃を作り、切断の準備に入っているのだろう

「人を実験動物扱いしやがって…っ！」

しかし、どうするか…相手の攻撃は弾道が見えなく、威力は凄まじいそして、目を見れば精神が壊されるらしい

攻撃しようにも念動の壁は超えられない…やはり、耐え切るしか無いのか…？

私がそんな事を考えながら、第二波の攻撃を回避し、次の攻撃に備えている時

突如私の身体は動かなくなった

いや、強力な念動力で空間に固定された

「これなら…避けられませんでしょう？」

そんな事を言った後、恐らく地面に降り立ったのだろう、目を見るなど言われていたので何も見えないが…

とりあえず、足音と感覚で分かる、一步一步近づいて来ている、確実に

足音が止まったと思えば、直後に感じる横腹への強烈な痛み
「ご存知ありませんの？相手を蹴る際に足を念動力で動かし、足の周りに柔らかい念動力のクッションを作る事によって、簡単に殺人級の蹴りが繰り出せますのよ？」

口に広がる血の味、吐き捨てようにも口まで固定されている
「ただ固定するんだよ」

「さて、後何発耐えられるのかしら…？」

「鼎お嬢様、時間切れです……とキリサメは逆坂からの猛攻を軽く回避しながら通告します」

時間切れ…長い三分だった……

待て、この勝負で私が勝って何か利点はあるのか…？

無いよな

…

殴られ…損か…

体の固定が解かれ、目には太陽光が思いつきり入り込んでくる

これが引き籠もりが久しぶりに外にでた気分か…

「此処からが楽しみでしたのに…まあ、構いませんわ…では、また、後に」

やっぱり何もねえのかよおーい！！等と心の中で叫ぶも疲れのが大きいので言う気にはならず

そんな私の気持ちの代弁者が現れた、ご存知の逆坂だ

「こんだけ好き勝手しておいて…何も無いの？それっておかしくないかなあ？」

直後、三重の右腕が吹き飛ぶ

派手

派手だなあ

マスパ？

とりあえず限りなく白に近い炎が右手を焼き尽くした、だろうか

だが、次の瞬間、三重の右腕が細い骨に肉付けされるように再生していく

…再生能力も持っているのか…？

しばらく三重は硬直した後、此方を振り向く

その顔は硬直した笑みで、まるで能面のようなイメージだった

そして、三重の目は純粋な黒から段々と金へと染まり、完全に染まった瞬間、逆坂の動きは固定される

「…逆坂美羽さん？いくら不死に近い身でも…痛覚は残ってるんですのよ？」

三重は、まるで滑る様な動きで逆坂へと急接近し、膝蹴りを鳩尾に食らわせ、固定を解き、

壁に倒れこんだ逆坂の右肩を踏みにじる

「があっ…！？くっ…！」

「最下位の貴女が私に手を出すなんて…、浅はか愚かしい、生かして貰っている実験動物風情で…：まあ、いいですわ…：次は無いと思っ

てくださいまし」

逆坂は俯き、右肩を左手で押さえ、硬直している

「それと、月山光二様、さすがに今回ばかりは私にも若干負がありましたわね」

「…これは？」

「ある男の電話番号ですわ、恐らく…貴方の知りたい事を全て知っている男ですわ、三重鼎の紹介、と言えば素直に情報を渡してくれるはずですわ」

…
私の知りたい事が…

…
…光？

違うか、暦プロジェクトか…

「…何故私に？」

「期待しているから、ですわよ……くれぐれも…頼みましたわよ」

…
何事？

何を期待されているんだ…？まあ、追々分かっていくだろうからな…

「キリサメ、行きますわよ？」

「成る程、これは傍から見れば明らかに月山光二様が暴力を振るつた、という事になるでしょう……とキリサメは名探偵張りの推理をします」

… 眞実はいつでも一つ！

中の国を除けば…

そんな事を言つて、散々やった拳句に消えた三重コンビ…出来ればもう会いたくない

というより、先程から硬直している逆坂が怖い

… が、一応にも声を掛ける

「大丈夫か？逆坂…」

「…まだ…私の正義は完成していない…正義は…正義…」

様子がおかしい、と思う前に逆坂はゆらり、と立ち上がり、ふらつく足取りで何処かへと消える

そのときに発している言葉は、どれも正義、という単語の繰り返しだった

「まだ…まだ…足りない、私の正義の方程式は完成していない…」

日頃は割りと明るく、明るい学級委員とかそんなイメージだっただけあり、一層不気味だった

…そして、これからどうするかと考えると、どの未来も不気味だった…

「……よし、この場で寝るか」

目を閉じたら三秒で熟睡できた、び太くん並みだったと思う
起き上がったら永眠する事になるんだろうか

18・早朝戦<Early morning>；（後書き）

美羽「マスタースパッツ……」

美羽「Meliiiiiiiiiiiiing!!」

美羽「正体不明の完全焼失に怯えて死ね！」

美羽エ…

19・五目<lt;Movement>gt;(前書き)

キャラ人気投票かざみん独走しすぎワロタ

生徒会長エ……第二のメル……いや、なんでもないです……、きっと何処かの春夏秋冬の三番目の姉妹みたいに人気がそのうちでますよ、きっと

今回短編集とかそんなアレです

19・五日目<Movement>;

真昼、今回ある意味一番の被害者であろう上矢雄一は生命活動の停止宣言を食らっていた

「おいイ？上矢、お前…あれだろ？逆坂…？と仲イイんだろ？なあ、あれ…なんとかしてくれよ…」

男子生徒一名の無情な言葉が上矢へと突き刺さる、男子生徒が指差す方向には

『関係ねえよ！！カアンケイねエエんだよオオオ！！何が最下位だ、何が最上位だ！！手足がもげようが内臓が潰れようが、私がお前を倒せるって事実はひっくり返らねえ！これが私の正義だ！なにが最下位の『逆坂美羽さん（笑）』だ！！つけ上がってんじゃねえぞ世間知らず。テメエら最上位^{みかさなり}なんぞ、指一本動かさなくても100回ブチ殺せんだよオオオオオッ！！』

とか、

『最上位つってお嬢様生活しやがって妬ましい妬ましい本気で妬ましい
しい

補助金 豪邸 従者 決定権

私にや一つもありやしない！

圧倒的な勝利？優雅な戦い？ハッ！

そんなの経験した事ないわ！

「頑張ってるねえ、最下位（笑）」とか

比較する相手を間違ってるだけだばかやろう！（以下略）

とか…いや、もういい、これは彼女の黒歴

「そうだ！アイツの豪邸ごと消し飛ばせばいいんじゃないかな！？
ヒヤアッハアッ！」

…黒歴史だろう

そんな逆坂を止めるように言われた上矢は若干半笑いで涙目になりながら反論する

「ハハハ、冗談だろ？死ぬって、あれ、死ぬよ、そのうち「クツクツ黒マテリア」とか言い出すって、絶対、見てるよ？カミヤ様の予感**は**百発百中だぜ？なんならお前の未来を占ってやるうか？フツ、今後百年以内に死ぬ、確実にな！…さて、そんなに殺気立つな！指の骨を鳴らすな！エモノを取り出すな！落ち着け！お米食えよ！んじゃ、あれだ！某白黒の黒歴史の真似すつから！うふふ俺まゝ分かった！逝く！逝けばいいんだろ！？だからその不吉な黒いブツをしまえ！つつか何処からもって来たんだよ風波イイイイツツ！！裏切り者オオオ！！」

カワイソウ（笑）な上矢…

きつと彼は…跡形も無く消えるだろう、クツクツ黒マテリア状態の逆坂は極めて危険だ、…ろうな、多分

若干なんとなく…上矢はイヤツだったな、なんて事を考え始めた時

「きいーみいーがーあーよーおーおーはあー……」

誰かが国歌を歌いだすんだな、これが

正直驚いた

が、その場の全員が次々と国歌を歌い始める

その歌声を聞いて上矢は此方を振り向き

「やめろつての！危険な状況でそういうゆつくりテンポの曲流れるとか！完璧フラグだから！まだ死なないからな！？俺！クソツ！やめろよ！やめてくれ！やめてくださいお願いします！歌声凄いですね！凄いよ！凄いな！合唱でもやってろよ！畜生！俺に関わらないでくれよ！もう放つて置いてくれよ！畜生めえーツツ！！」

一体どうするとうのだろうか…

結局この数秒後に光が逃走し、その事態を聞いた逆坂は闇の世界から抜け出して元気に飛び出していった

しかし、結局光は発見されることは無かった、そして尚且つ逆坂の

テンションは最高潮に達し、能力の乱射を行い

結果、三十人ほどの負傷者が出た

その中で唯一上矢が重症だった…が、上矢が平気だと言い張り、診

察さえ受けなかった（恐らく逆坂がワリと気にしていたからだろう）
バスが血の匂いで充滿したのは言うまでもない

一方何処かの豪邸では

一つのテーブルに対し、三つの同じ顔が向き合い座っている、そして、そこから二歩程離れた所には従者らしき人物が立っている

異様に明るい光を放つシャンデリアは、灯された炎を揺らしている

「鼎、粒子移動はどうでしたの？」

「まあ、今は放って置いても大丈夫だと思いますわ、……本当に仮想世界の推測は当たってますの？」

首を傾げながら問う鼎に対し、香奈枝は自信満々に答える

「大丈夫ですわよ、何せ仮想世界は樹形図ツリーダイアグラムの設計者の無い今では世界最高のシミュレーター……」

仮想世界エミュレータ、世界の法則、生物の情報、あらゆる物を完璧に再現し、現実と大差ない、ある一種の世界を脳内に作り出す能力

彼女等はこの能力を利用し、「学園都市を破滅させる可能性」を見出し、その中に月山光二の名前が存在したのだ

「まあ、確率は0.1%にも満たない……最も、この確率に確率変動ランダムが気付きでもしたら大事ですわね」

「はあ……確率変動……夏日優火ですわね……まあ、消すという選択肢もありますわね、でも、その場合……法則無視がどうなるかは……安易に想像できますわね」

「……学園都市の崩壊」

三人が深く悩み、そろそろお開きムードが流れ始めた頃、突如、待機していた従者が話を切り出す

「先程、仮想世界から三日後程に来て欲しいとの伝言があった事をキリサメは頃合を見て発言します」

キリサメ、死亡されたと思われていた妹達シスターズ検体番号14号を輝夜望が回収、

…？」

一般的に板金鎧、またはプレートアーマーと呼ばれるものがそこにあった

一つの剣の側面から、二対の剣が飛び出している大型の奇妙な剣をつま先の前の地面に指し、直立している

「……何？この不思議空間…あは、意味不明…」

苦笑いしながらもひたすらに甲冑を見続ける宮田

宮田がこの甲冑を理解しようと考えている時、突如声を掛けられた

「おうーい、その君！その甲冑に触るんじゃない！」

「んあ？誰かなあ決め事知らずのお馬鹿さあ〜んう」

宮田が嫌悪を相手に抱かせる笑みを声の方向に向けると声の主は

このクソ暑い夏、しかも湿気の多い路地裏だと言うのに冬服を着ている宮田を心配したのか、指差しながら質問を返す

「えあ……その服…暑くない？」

「質問してるのは私だよう！答えないと今夜のオカズにするよう！
食物的な意味で！」

「ひい食人鬼！？ま、不味いぞ！俺は不味いからな！？」

両手を前に出して、いやいやと手を振る男は明らかに染めた人工的な金髪に、絶対カラーコンタクトの白と黒のオッドアイ

そして、絶対そこから取ってきた学生の夏服

恐らく本人は溶け込んでいる気なのだろうが、無茶苦茶目立っているしかも、右手に持った本は何故か皮のベルトで十字型に縛られている

「…うつわ、ここまで悪趣味な奴を私は見た事がないよう！気持ち悪すぎる！ありえない！もう三週ぐらいして結局気持ち悪い！」

「ボロクソ言うなあ！オイ！完璧な変装だろ！これ！今の日本人は金髪でオッドアイが普通だろ？今の所そんな人間を見た事がないけどな、…ここって日本だよな？」

「あなたの常識に私の常識は通用しねえ…」

あれ？おかしいな？等と言っているよく分からない奴を宮田は軽蔑した目で見ながらも、暇つぶしに質問する

「てか、何処でそんな情報拾ったんだよう、間違ってる…」

「ええ！？……チャンと日本人に教わったんだけどなあ…」

「誰だよう！？その日本人ってのは！？それは日本人じゃなくて二ホンジンっていうエイリアンじゃないかな！？」

「えつとな…ツチミカドモトハルって奴なんだけど…」

宮田は決心する、見つけたら殺そう、と

一方学園都市第十九学区の地下では

仮想世界は自分を補助する装置に繋がっていた

その補助する装置は仮想世界を十字に貼り付け、其処から何十本ものパイプが天井へと伸び、コブラの頭のような形をした胴体からは強靱な三本の指がそろっている腕が四本ほど伸び、それも壁にちょうど、手の平を当てる感じになっている

仮想世界の行う演算はとも人間一人の脳で処理できる代物ではなかった、よって補助装置の装着を提案された

しかし、此処で補助装置と同時に彼の火力不足を解消しよう、という事で動く要塞を補助装置に付け加えた結果

生まれたのがこの同調型演算処理装置、電力喰い^{イターマシ}

緊急時には四本の足を出現させ、地味に速い速度での移動が可能…らしい

更にはコブラの頭のような胴体の中には大型スナイパーライフルが左右に一つずつ収納されているらしい

そして、重力フィールドを展開し、弾丸などを空中で停止し、逆に相手に返したり^{シャットアウト}

仮想世界を完全防護膜という妙な膜で包み込んでみたり

指が開けば火炎放射器や、濃硫酸を振り掛ける対生物用兵器や、あまつさえには爆薬で鉄杭を高速で射出するパイルバンカーが顔を出したり

さらに、大型のバッテリーを収納しており、三日程は動き回れる…

など

完全にロマンを詰め込んだ一品だ

しかし、こんだけ詰め込んでも仮想世界自身が動く気がないので無意味だとか…

そんな彼の元に一人の来訪者が来ていた

「おや、珍しいですね…輝夜さん」

「仮想世界…貴方に頼みたい事があるので」

嫌悪感を覚える白すぎる白、輝夜望はこの、仮想世界を訪ねていた「私が人類を救済できる可能性を…」

「既に検証済みです、この日、貴方が訪問する可能性は極めて高かった、そして、貴方の目的は完全に一致していた、…さて、検証結果ですが…0%です」

0%という言葉聞き、輝夜は表情を変えるでもなく、そうですか、と短く返す

そんな輝夜に仮想世界は提案する

「諦めてはいかがですか？忠告させて頂くと、貴方が人類を救済できる確率は絶対に0から動いていません」

輝夜はその言葉を聞くと、また来る、とも、諦める、とも言わずに、さようなら、とだけ言い残し、消える

「……あーマジ疲れますねー…あの人の相手つつか、なんつか、つか…サッカー見てえー！…でもな、今日はクソつまんね試合だった分かつてるし…つか、こんな一人言言っている自分むっちゃ可愛そうな人…」

先程までの堅苦しいイメージが完全に崩れずよく分からない感じで愚痴を言い続ける仮想世界

そう、彼にとって予測できる結果をもたらす物は全て退屈なのだ

「あーあ…三日後には上の電力発電所強襲されますしね……一億個のサイコロが同時に同じ目を出す確率でも計算してますかね…」

一体ソレはどれだけ0を増やせば気が済むのだと

彼しかない仮想世界ではそんな事突っ込みを入れる人間も居な

61

19・五目<math>\text{Movement}>；（後書き）

一億個のサイコロ同時に同じ目を出す確率を計算してくれる人を募集です

20・暦計画&1t;Attack> ; (前書き)

不思議を探して幻想郷歩きまくってたら遅くなりましたん、アニメの大覇星祭が楽しみすぎる

20・暦計画&1t;Attack>

暦Project：分かっているだけでも関係した人物は逆坂美羽
：そして三重三姉妹だろう

そして三重三姉妹が最上位、逆坂が最下位：なのだろうか
だとすれば恐らく、三重三姉妹は本気を出していなかっただろう、
攻撃の間隔が長すぎた

と、バカみたいに推測してみたが、ソレより簡単に解決する方法が
私の手の中にある

誰かの携帯の電話番号

地味に『非通知では掛けるな』と注意書きが書かれている
ちなみに速魅は外出した、ユウ力を引き連れて

とりあえず、携帯を取り出しメモに書かれている番号に発信する
二秒ほど待機音が流れた後、聞き覚えのある声が聞こえた

『……なぜ貴方が私の番号を知っている……？ストーリーカー？』

見事に夜詩だった、畜生、なんだ……？本当に赤い系か何かで繋がっ
てるのか？断ち切りハサミをくれ……

『いろいろと言いたい……三重から受け渡されたメモに書いてある
電話番号に掛けたらお前だった』

『食らえ、ストーリーカー撃退用ハウリングボーイs』
ガカーッ

言い終わるかどうかの時点で耳を劈くような音が見事に聞こえた
鼓膜を破る気が、コイツ

「畜生、この可能性はあったはずだ……お前は輝夜と同じ研究所に居
たって言うていたしな……」

『……とりあえず三重鼎に確認を取ってみる、折り返し電話するから
待っていて』

「ただだけ私の事警戒しているんだよ！？」

『……以前ストーリーカーの容疑が掛かった事があるから……』

「ないからn……切りやがった……」

大体五分後

夜詩から掛かってきた

『正直ごめん、貴方をあまり信用していなかった』

「分かつても許さん：それよか暦Projectについて教える」
しばらくの無言の後、夜詩は遂に喋りだした

『暦Projectは、法則無視：つまり、御神光を消す事の出来

マッドサイエンティスト

る能力者を作成する計画：十二人の優秀な科学者を集め、作成できた能力の強弱順に睦月から師走までの名前を付けられる：これで全部、分かった？じゃあ、機会があれば』

「オイ、待て、根本的な解決にn……切りやがった！」

大した答えは得られなかった！騙された！

私が、くそう、くそう、くやしいのう、くやしいのう、と頭を抱えていると突然ドアを叩き付ける音が聞こえた

風波だろうか、だろうな……

等と思いつつドアを開けてみれば大体二十台後半ぐらいの男が立っていた

「……どちら様ですか？」

「君が月光二……粒子移動だな？……頼む！美羽を助けてくれ！」
物凄い形相で思いつきり肩を掴まれた

「ちょ、落ち着け！落ち着け！」

よく見れば男は肩を激しく上下に揺らしている、走ってきたのだろうか……

「と、とりあえず上がってくれ、落ち着いてから話を聞こう……」

大体五分ぐらい経っただろうか、男は幾分か落ち着き、冷静に話が出来るくらいにはなった

という訳で話を聞く事にする

「……美羽の事は知っているだろう？この間の夏期講習で会ったはずだ……、アイツが今……狙われている」

「話が飛びすぎて分からないんだが」

「そう、美羽に支給されていた数々の兵器……何かおかしいと思って

たらアイツら…徐々に美羽を支配しているんだ…！実際に美羽は既に若干精神が安定していない…！くそっ！」

「ちょ、おま、勝」

「なあ！頼む！美羽を救ってくれ！あんたなら勝てる！粒子移動の本領を発揮すれば！いや、後数cmでも深く潜ってくれば！」

「人の話」

「おお！やってくれるか！ありがとう！本当にありがとう！十九学区にある『十二段階分解式完全能力者開発研究所』の大実験室Aに居るはずだ！頭部についている装置を破壊してくれ！頼む！」

「人の話を聞けエエツ！！」

思わず右ストレートで殴ってしまった

「がはアっ?!」

「もう一度、私にも分かるように説明しろ」

「…美羽は、暦計画の最下位だ、だから、ソレを補うように特殊な装置を装備している、俺はソレを普通の装置だと思っていた！だが実際には違った！その装置は美羽を邪魔者を排除するためだけの道具にする悪魔の装置だったんだ！頼む！装置を破壊してくれ！」

どうやら、逆坂は他の能力者との差を埋める為に装置を装着しているらしいが、ソレに何らかの仕掛けがあり、美羽の自意識を無くし、遠隔操作を可能にするようにしているらしい

「よし…分かった、とりあえず破壊する部位を教えろ」

…

とりあえず、私は男から完全に理解するまで聞き、助っ人が必要と思ひ、人を待っていた

「おい、月山、用事って何だ？」

両手を超振りながら歩いて来るのは上矢雄一、以前逆坂の被害に遭った人物だ、そう彼こそが助っ人だ

「…逆坂が危ないらしい、色々と手伝え」

「…すまない…意味が分からないんだが…」

言葉が足りなかったらしい、ので、一応付け足す

「ああ、すまない…詳しく言えば、逆坂の体が科学者達に散々弄繰り回され、色々と逆坂の中で壊れてしまつて今じゃもう人形らしい」

「なんだと！？美羽の体が（変態）科学者達に散々（性的な意味で）弄繰り回され、色々と美羽の中で壊れてしまつて今じゃもう（性処理するしか能がない）人形だ！？その科学者達を殺すしかねえ！」

「いや、科学者達を殺す必要は無い…、逆坂の頭部に装着された装置を破壊するだけでいいらしい」

「…あ？装置？何の話…？」

…どうやら理解しているようで理解してないらしいが…まあいいか
「という訳で行くぞ、とりあえず逆坂のこめかみ辺りに着いている製波装置を破壊すれば終わりだ、協力しろ」

「よっしゃ、全然分らないがとりあえずフラグ立てるために行くぜ！……死なないよな？」

「結構危ないかもな」

「…構わん、一生一人身で死ぬよりはフラグが立つ確率のある戦場で死んだほうがいい！」

馬鹿なんだなあ、ととりあえず思うが結構強力な助っ人だろう、コレは

…

そして、とりあえずバスを經由し、十九学区へと到着した

「なあ…俺、何処に向かつてるんだ？」

「地獄、だ」

適当な事言いながら、若干顔を引きつらせている上矢を引きつれて、バス停から歩いて五分の『十二段階分解式完全能力者開発研究所』へと辿り着いた、というより近すぎるだろ…

「十二段階分解式完全能力者開発研究所…？名前長すぎるだろ、略

称とか無いのか…？」

上矢がどうでもいい事に頭を悩ませていると、声が突如響く

「略称ならある、十二研…覚えておくといい」

最初に落ち着いた感じの音が右上から

「はあ？覚えてなくていいだろ？どうせ此処でお前等ゲームオーバーだし？コンテニューさせねえし？」

次に左上から人の神経を逆撫でするような声

そして、二つの影が同時に地面へと降り立つ

「悪いが此処からは立ち入り禁止だ、引き返しなさい」

落ち着いた感じの声の持ち主は、精錬された肉体、勇ましい顔つき、というよくありそうなヒーロー像をそのまま映した感じの姿の男に逆撫でする感じの声の持ち主は、鍛えられてはいないが、それなりに引き締まった体、ビジュアル系と言われそうな顔の持ち主の男

「まあ、そういう事だよ、さつさと帰った帰った、じゃないとバツトエンドルート突入だぜ？」

手で追い払うような仕草をしながら馬鹿にする口調で此方を挑発してくる

まあ、こんな挑発に誰が乗

「おい！お前！お前だろ！美羽に手を出してんの！やめろよな！？俺！あの場で思いつきでトンデモない約束しちまったんだから！約束破ると後が怖いんだよ！」

乗りやがった、と言うより何を約束したんだ…、まあ、確かに黒マテリア状態だった逆坂が戻った後は何か若干、上矢見るたびに頬染めて視線そらしてみたり、惚けて見たりしてたけどな、そして上矢も呼ぶときに逆坂から美羽に変ってるしな、…

何を約束したんだ？

「ああ、分かった、お前…あれだろ、逆坂…つつか、最下位にフラグ立てた奴だろ？ははん、それで勇者様はお姫様を助けに来たって？はは、古いねえ！重火器が登場した時点で剣と魔法のファンタジーは終わりを告げたんだ…」話だ、今じゃミサイル一発魔王城に

ぶち込んで終わりだよ」

「成程、君が美羽君に手を出している男か…汚らわしい、男女の不純な交際は私が最も嫌うものだ、此処で燃え尽きなさい」

「あれ？なんか、いつの間にか戦闘モード突入してるんだけど？！何事ッ！」

上矢が馬鹿な叫びを上げる、それとほぼ同時に敵方二人は役割を決める

「んじゃ、俺はあの馬鹿そうな奴をリタイアさせてくつかな、アンタはあっちの奴やれよ」

どうやらアイツは敵味方関わらず馬鹿にするような口調で喋るらしい…嫌な奴だ

「そうさせてもらう、では、頼んだぞ…私の名前は戦神慶祐いくさがけいすけ、覚えて置きなさい」

「おや？この場に及んで自己紹介つかあ？まあいいや、俺の名前は四雲柴輝よぐもせいかほだ、覚える必要は無いぜ？どうせ足掻いてもお前の人生ゲームオーバー、詰んでるんだよ、既に」

直後私の足元が爆発を起こす、が、粒子化し、回避する、そしてそのまま肩を狙って槍状に形成させた粒子を飛ばすが、かなりの大きな動きで避ける、見えないから攻撃が来そうな範囲から外れる…わりと有効な回避方法かもしれない

「私の能力は君にも通用する、君に『粒子』という形があるならば」私はとつさに身の危険を感じ、粒子化を解く、と、先程まで槍が留まっていた場所で大規模な爆発が起きる

「奇妙な能力だな…発火能力か…？」

「実に惜しい、中正解…と言ったところか、65点、正解は状態変更バリエーション、物質に置ける状態を変化させる能力だ、たとえば先程からの爆発攻撃なら…その物質の状態を可燃性ガスと支焼性ガスが一定割合で混ざっている状態へ変更…そしてその近くの物質の状態を炎上にすれば、めでたく爆発という訳だ、覚えて置きなさい」

そんな事を言いながら今度は足元のコンクリートの状態を変えたの

か、バターでも削るように蹴り、かなりの量のコンクリートの波を起こす

「…濃硫酸か！」

予想を信じてコンクリートの波を避ければ、元々居た場所は大きく削られている

「…まだ、回避能力しかチートではないか…なら、今の内に片付けるしか無いか……、これが俺の遊び心だ」

そう言いながら戦神は空中に手を這わせる、と空中に薄く、空気に滲むような緑色のラインが走る

「物質はこの世の何処にも存在しない状態で無理矢理固定するとどうなるのか…知りなさい」

直後に緑色のラインは凄まじい光を発すると同時に痛々しいほど明るい光線が当たり一面にばら撒かれる

どうやら操作は出来ないらしく、標準は定まってないが、その光線がコンクリートや何かに当たるたび、当たった部分は一度激しく発光し、まるで捻り潰されるように潰されていく

「この世に存在しない状態で固まった物質は全ての物に拒否反応を起こし、密度を滅茶苦茶にする…そう、粒子化した君でさえ勝てないだろう」

その光線の一部が、私の肩に触れる、直後私は触れた部分だけを粒子化し、切り離す

同時に意識を根こそぎ持っていくような痛みが肩に生じる

「ぐあ…ッ！？これは…！」

私が肩の痛みに怯んでいると、戦神は更に空気中にラインを書き加えていく

「何故そこまでして…美羽君の邪魔をするのか…理解できん」

…邪魔？

こいつ等にとっては洗脳が逆坂にとっての一番の改良策だと考えているのだろうか？

違う、それなら逆坂の邪魔にはならない…、何か勘違いしている…？

「邪魔をするに決まっているだろ…、一度関わった人間が人形になるのは気分が悪い」

その言葉を聞いた戦神は怪訝そうな顔をし、ラインを描く手を止める
「…人形？何を言っているんだ…？」

…つまり、コイツは騙されていたか、真実を伝えられていなかった、のだろうか

「知らないのか…？逆坂は今、その研究所の中で洗脳されているはずだが…？」

「デタラメを…第一誰がそんな事を君に教えるのかハッキリしていない」

「師走、だ、私に助けを求めてきた、逆坂を洗脳から救ってくれ、と」

一種の賭けに出た、夜詩の説明が正しければ最下位の美羽担当のあの男は恐らく師走という名前でいいはずだ、その結果は

「師走さんが…？……それは本当か…？」

見事命中だった

師走、という言葉が聞いたのか、戦神はラインを消し、問いかけてくる

…わりと扱いやすい人物だな…

「本当だから力を借りさせろ、まだ人数が足りないからな」

20・暦計画<Attack>（後書き）

次回「四雲VS上矢」疾走する本能の果てに」

ご期待ください（タイトルはフィクションです）

21・自動化<Automatic operation>>（前書

正直、前書きに書くことも無くなってまいりました、と、思いきや、
空気使い先生が美羽にすばらしい愛称をくださいました、みうみう、
だそうです

逆坂美羽の生まれはそれなりに裕福であった、何一つ不自由ない生活、何一つ不満無い生活

全てが満たされていた

しかし、満たされて無かったのか

違う

満たされていたからこそ

新しいものを求めた

『学園都市』

逆坂は激しく望んだ、学園都市での生活を

親はそろそろ一人立ちしてもいい頃合だ、と、逆坂を見送った

昔から逆坂には才能があった

与えられてきたものは全て完璧に習得してきた

無論、能力に関する才能もあった

そして、彼女は若干十四歳にして、ある研究機関から誘われた

『十二研』そう呼ばれる場所だった

逆坂は天から与えられたチャンス、そう思い、研究機関へと進んだ
十二研で行った事は実際、逆坂にとって苦痛ではなかった

少しだけ制限された生活の代償として

逆坂の能力は飛躍的な進歩を遂げた

レベル3程度だった発火能力は、物質の特性などを無視し、焼き尽くす物質を作り上げる能力に

この時、逆坂はとても満たされていた

逆坂が見て、怒りを覚えた最初のもの

それは努力もせずに墮落し、ソレを世の中が悪いから、と主張する無能力者達だった

彼等は同じ無能力者の気弱な人間、力なき人間から生きる希望と財産を奪い去っていく

逆坂が感じたものは、嫌悪感、怒り、そして

絶対に揺るがないと信じれる『正義』であつた

どれだけ荒唐無稽な正義でも、自分はその正義を貫き続ける、そうしなければ

自分は奴等と同じになってしまうから

：

月山が戦闘を行っていた場所の反対に位置する場所では四雲と上矢が戦闘前の硬直状態で止まっていた

「あー、マジグダるわ…風力使い同士の戦いとかさあー…なんの価値もねえーよ…、はあ、さつさと終わらせつかない……ったく、最下位なんかの為に何で俺が動かなきゃならねえんだっつーの…マジ意味分かんね」

人を馬鹿にするような口調で喋っていた四雲は愚痴を言いながら、何かの演算を始める

それと同時に四雲の周囲に暴風が発生し、それは徐々に空の雲をかき集め、雷雲と化し、瞬く間に巨大な、まるで空に壱とくろを巻く大蛇のような、巨大な雷雲が出現する

その雷雲はランダムに落雷を起こし、無差別に巨大な雹ひょうを落として
いる

災害クラス間違い無しの攻撃だった

「っ…！？スーパーセルか…！」

上矢は巨大な雷雲を睨み、苦悶の表情を浮かべ、叫ぶ

その表情を見て四雲は満足したのか、若干口の端を上げ、馬鹿にするような笑みを浮かべる

「ご名答、わりと頭はいいんだな……まあ、死んだらそんな関係ないけどな」

四雲は宣言し、空に浮かぶ雷雲へと手を伸ばし、次に上矢に向かい、手を振り下ろす

直後、何十発という落雷、そして何百という雷が上矢を襲う

「うオオオいッ！これは死ねるだろお！」

無情にも全てが上矢を一直線に狙う、四雲は確信する『殺った』と

「はい、ゲームオーバー、コンテニユーは効かないぜ？」

そういい、四雲がその場を離れようとし、背を向けた瞬間、四雲の肩を鈍痛が襲った

「なっ……！？……ぐアッ……！」

二バンドして、訳三メートルほど吹き飛ばす四雲

四雲は痛みに耐えながらも後方を確認する

「コンテニユーなんて要らないぜ？……それよか、背中がガラ空きだったぞ？」

上矢が立っていた、消し去った筈である男、上矢が

「お前……ッ！なんで……？！」

確実に消したはず、そう四雲は思い、より一層混乱する、認められない、自分の攻撃が回避されたことが

「そりゃあ……避けたからに決まってるだろ……？」

「避けた？雷撃を？目視してから？くはあッ！最高に意味が分からねえよ！！しかも痛え……痛えぞ？肩、どうしてくれるんだ？」

「どうしてくれる、って……そりゃ、戦いなんだからなあ……仕方ないだろうよ」

四雲は今まで一度も傷を負った事が無い、全ての敵は完膚なきまでに叩き潰してきた

『殲滅屋の四雲』なんて身内で呼ばれることがあった程だ

「はあ？戦い？寝言は死んでから言えよ？テメエは所詮一般市民、

俺は十二研第三位、こんな差があるのに戦いなんて起きていい訳がねえんだよ、テメエは馬鹿みてえに地面這い蹲って犬みたいにハアハア喘ぎながらゴミみたいに助けを求めながらクズみたいに涙流しながら害虫みたいに生きる事に執着しながら決して届かない反撃を出来ないプログラミングみたいに繰り返しながらぶっ壊れたレコーダーみたいに何度も許しを請って俺に殺されるのが世界のジョーシキなんだよ、そんな常識も知らねえテメエを俺はどうしたらいい？本気でマジでガチで阿呆みたいに全力出して流れる血汗涙をそのままにクズみたいに暑つくろしい戦いをすりゃいいのか？ああ！？んとか言えよッ！！生まれつきの産廃がッ！！」

半狂乱で、目を見開き、怒りや憎しみを前面に出した顔で怒号の如く叫ぶ四雲を上矢は見据えながら

「んあー…まあ、なんだ、とりあえずな…少々うるさいな、お前」
上矢の反応に四雲の怒りは留まる所を知らず、ひたすらに増幅し続ける

「なん……だよ……てめえは……そこまでスクラップにされてえか……？見るも無残なジャンク肉人形にされてえか……？……もういい……てめえは殺さねえ、一生俺に植え付けられるトラウマに怯えて衰弱死するのが似合いだ……くは、喜べエえ！！この第三位『四雲柴輝』が一般人なんぞに本気を出すなんて二ホンオオカミの出産シーンより貴重だぜエ！！しっかりとその出来ない網膜に焼き付けな！」
直後、スーパーセルは消滅した

いや、正確には

四雲の背に移動した、その姿はまるで六枚の翼のようであつた一枚一枚が雷雲を無理矢理固めたような形で、まるで炎のように形が揺らいでいる

「そらよオ！『学園都市』第三位と『十二研』第三位の実力差をまズテメエに魅せてやるよオ！」

四雲は背中の翼を乱雑に動かし、周りの地面、壁等を削り、その中から金属だけを選別し、翼の中に取り込む

直後、四雲の翼が青白く激しく発光し、次の瞬間には地面に先程取り込んだ金属の破片が上矢の足元に刺さっていた

「……？連射式……超電磁砲……？ッ！」

上矢は目の前の出来事を把握した瞬間、能力を使用し、高速で動き回る

上矢の後を追うように何十という金属の破片が刺さっていく

「何故だア……！何故当たらない！？」

一発も命中しないことに不満を覚える四雲に対し、上矢は回避しながら答える

「そりゃ、お前……レールガンは名前の通り、レールを作成してから其処に弾を通すことによって高速で射出する武器だ、高速で動き回る物体に当たる訳がないだろ？」

そして、そのまま上矢は四雲に向かいながら飛行し、徐々に速度を上げていく

四雲は自分を守る為に翼を結集させて壁を作る、がその壁は簡単に破られ、四雲の腹部に蹴りは直撃した

「ごオ……ッ……！……てめ　絶た　い　殺」

四雲はそのまま吹き飛び、意識を落とした

その姿を見ながら上矢は一言

「最後にネタばらしだ、俺の能力は『風のベクトル自体を操る』能力だ、だから……お前がその風で操作している翼で壁を作っても、無意味、ゲームオーバーするのはお前だったな……まあ、運が悪かったんだ、お前は」

上矢は意識を失った四雲にそんな事を言いながら、月山と合流すべく、十二研へと戻る
約束を果たす為に

…

十二研内、飛び込んでみて、どんな怪物が顔を出すかと思っていれば

見慣れた顔が出てきた

「…月山…？…どうしてこんなところに居るんだい？」

神岡、以前輝夜に襲われ、廃人状態に陥った際に面倒を見てくれた『超人』だ

そういえば輝夜と同じ研究所に居た、という話だったような気がする

「お？月山？…久しいなあ、…つか、本当に何でこんなところに…」

そして、北河、神岡と同じく廃人状態に陥った際に面倒を見てくれた『白内障』の人間だ

神岡が居るなら、こいつも居るか…

しばらくの沈黙が訪れた後、神岡は「ああ…」と沈んだ声を出す

「侵入者って君か？」

先程までの友好的な視線とは違い、異物を見るかのような眼差しを向けてくる

「…だとしたら？」

私の答えに神岡と、北河はより一層暗い顔をし、次には無表情になる

「友人として行かせてやりてえが…そうも行かない、此处でしばらく寝ててくれ」

「はあ、仕事とはいえ…友人に殴りかかるのは気分がいい物じゃないねえ…」

北河は懷から軍用ゴーグルのような物を取り出し、装着する

神岡は腕の力を抜き、垂れ下げた状態で、猫背になり、普通とはかなり違う、かなり低めの状態で構える

二人の様子を見て戦神はこう一言

「気を付けなさい…北河のあのゴーグルは敵の若干の動きを直接脳に伝える事によって驚異的な反射神経を得る事が出来るシロモノだ、時間制限があるらしいが…、神岡に至っては別格だ、奴にとって俺達の一秒は十秒だ」

戦神が説明し終わるか、終わらないかの境で、神岡と北河は動き出した

神岡は残像が見えるんじゃないか、と疑える程の速さで私に接近し

てくる

北河は戦神の攻撃を全て避けながら、右手から強烈な閃光を発し、戦神の目をふさいでいる

私が神岡の高速移動に驚いていると、ふと、神岡の拳が握られた気がした

が、直後には私は一瞬宙に浮いたかのような感触を覚えたかと思えば、地面に叩き付けられ、胸元を踏まれていた

「があッ…！？…何が…！？」

とりあえず私は粒子化し、拘束攻撃から逃れる

「別に能力って訳じゃない、色々と薬物やら何やらを投与しているんだよ、僕は…そう、究極的なドーピングを常にしている、と考えるてくれ」

そう言いながら、神岡はもう一度先程と同じ体制を取る

「くそッ…！こっちにきなさい！」

戦神はどうやら、地形を利用して戦うらしく、何処かへと走り去るそして、それを追い北河は走る、どうやら脳内に情報が伝わる事で日頃より正確に動けるらしい

神岡は先程と同じく、かなり低い姿勢を取り、音速の如く、距離を縮めてくる

また一発貰うのが確定したか、と考えた矢先

神岡の攻撃は止まった、いや、防がれた、というのが正しいか

気が付けば目の前には巨大な錨を盾代わりに構えている一つの影が身長は大体速魅より少し上か、同じぐらいだろう

「おい、君…さっさと行かないか、私の気が変わる前に」

体のラインから地味にそうじゃないかと思っていたが、どうやら女性だったようだ

しかし…そこらの学校の制服+錨…セーラー服と機関銃ならぬセーラー服と錨だ…

とか、言っている前にチャンスなので一応軽く礼をして、走り去る

：

「どつという風の吹き回しだい？ 曆計画元第三位：クルーティアンカー 激突消沈：ひさめ 緋雨津波！ 行方を眩ませたと思つたらこんな時期に突然姿を表して…」

神岡は錨を蹴り、距離を離す

緋雨は光の全くない目で神岡を見つめ、単調な感情のない言葉でゆつくりと話す

「別に、私の自由だろう？ 一年間で随分とこの学園都市の闇を見てきたよ…ここはゴミ溜めだな」

軽い様子で自分の身長と同じ程の大きさがある錨を容易く持ち上げ、床に突き立てる

神岡は緋雨の動きに注目し、戦闘姿勢のまま話を続ける

「ハハッ、上手い比喻表現だよ、それは…でもねえ、僕みたいに『ゴミ溜め』で生まれて『ゴミ溜め』でしか生活できなくて『ゴミ溜め』で朽ちる奴も居るっていう事を忘れないでくれよ？」

「…そうか、この一年間で私は全てと決着を付けてきたよ、もう涙も枯れ果てたし、感情を起こす方法さえ忘れてしまった、…アイツは元気か？」

「アイツ…、四雲柴輝の事かな？ 元気だよ、有り余ってる感じ」

神岡の返答に対し、緋雨はそうか、と軽く答え錨を担ぎなおす

「それじゃあ、そろそろ始めよう、私も彼の後を追う」

「彼…ねえ…なんで其処まで十二位の強化計画を崩そうとするかな、君達は…まあ、分からなくも無いけど」

しかし神岡は動かない、

激突消沈、能力の実体は自分の周りに『確かに其処にあると仮定してもいい物体』を展開する物、だが、その物体は存在自体が不安定であり、しかし、確実に其処に存在する、この奇妙な物質はほぼ全ての物質を有害、無害のフィルターで分け、有害な物はシャットアウトする

つまり、神岡が緋雨に触れた瞬間、触れた部分は削り取られる

神岡は動かない、のではなく、動けない

最高の頭脳を持っているならば、感情に支配された動きは絶対に出
来ない

最高の身体を持ってしても、目の前の大きな壁には激突しても潰さ
れる

何時までも動かない神岡を他所に緋雨は再び淡々と喋り始める

「神岡、私は君にすまないと思っっているんだ、実は君の家族は自殺
では無く…私が処分した」

その言葉を引き金にし、神岡の中の安全装置は完全に粉碎された

「やっぱりね…！そうだと思っただよ…！！僕の家族達は絶望な
んてしていなかった！生きる希望を持っていた！約束したんだ…！
こんな監獄から何時か外に出て！幸せに暮らそうって…！皆で…！
作られた人形らしく夢を抱いてたんだよ！それを…！！」

神岡は目を大きく見開き、自分の歯を粉碎しかねないほど噛み締め、
あふれ出した感情をそのまま涙という形で表現し、叫ぶ

その姿を見て緋雨は言う

「だからすまないと言っている、本当にすまなかった、私も良心が
今だに痛いよ、私、そういう顔してるだろ？」

相変わらず単調な口調で、無表情のままそんな事を言う

「いいや…！！無表情だね！この世で一番不気味で冷酷で残忍な無
表情だ！」

続けて神岡は言う

「返してくれよ…！タツヤをミシマをノガミをニツタを…！！……
あかね
朱音を…ッ…！」

「すまない無理だ、代わりに謝罪しよう、すまなかった、本当に、
すまなかった」

そう言いながらも、泣き崩れる神岡の横を通り過ぎて行く緋雨

神岡は、自分の弱さを呪うしかなかった

…

一方大実験室Aでは

既に二つの影が存在した

一つは先程四雲を撃破した上矢の者

もう一つは、身体には肌とほぼ同化している黒いスーツにプレート
を足したようなスーツを身につけ、

背中には四枚の機械の羽、両手は技術の結晶と呼べるであろう籠手、
頭部はフルフェイスのマスクで、赤い光が必要以上に強く光っている
「美羽：か？…どうしてこんな事に…」

まるで上矢の言葉に対応するかのように、プレート部分が若干持ち
上げられ、水蒸気が発せられる

上矢が見えない視界に戸惑っていると、水蒸気の向こう側から高速
で逆坂が突っ込んでくる

上矢はギリギリで回避し、逆坂を目で捉える

逆坂は空中で静止し、右手を上矢に向ける、そして、次には能力に
よって作成された炎弾の連射、上矢はそれを高速で移動する事によ
って回避する

が、次には上矢の目の前で爆発が起こる

「設置型！？」

上矢は大きく上に動くことによって回避する、が直後、逆坂の鋭い
蹴りが脇腹を狙い飛んでくる

「くそッ！ホントに美羽は最下位なのかよ！？明らかに三位より強
えぞ！？」

上矢は仕方が無い、と自分に言い聞かせ、風のベクトルを操作し、
作り上げたハンマーで打ち落とすのを狙う
が、無効化された

風によって作成されたハンマーは空中分解してしまった

「なっ！？…能力解除フィールドってか！？卑怯だろ…！」

次の瞬間には上矢の脇腹に鋭い逆坂の蹴りが突き刺さる、そして上
矢は墜落する

上矢が何とか体制を整え直した時、戦場に新しい影が一つ増える
「上矢！生きてるか！」

月山は息を若干荒げながら叫ぶ、上矢はその問いに答えようとしたが、

それより前に逆坂の放つ炎弾が上矢へと近づく

「まともに話もさせてくれねえってか！」

上矢が身体を右に反らし回避すると、逆坂はバーニアを使い上矢へと急接近し、もう一度脇腹に鋭い蹴りが刺さる

「ごオツ……！？」

上矢はそのまま吹き飛び、壁へと叩きつけられる

先程の衝撃でどこかの器官が狂ったのか、上手く呼吸が出来ず、上矢は何度も荒い呼吸を繰り返すが、酸素が取り入れられない

（あ……俺、ここで死ぬのか……？）

そう思った上矢の脳裏に浮かぶのは夏期講習最終日の約束

引き上げられない状態へと落ちた逆坂に一つの約束をした

『俺はお前が正義の道から外れないようにずっと傍に居てやる、もしも、お前が正義の道から外れるような行動に出たら死んでも止めてやる』

我ながら大変な約束を後先考えずした、と上矢は思うと同時に、覚悟をする

（そうだ……俺はここじゃ死んじゃいけねえ……ここで死んだら次こそ美羽は一生立ち直れない……）

気がつけば目の前には逆坂が見下ろすように立っていた

能力解除フィールドで能力は通らない

殴るうにも、この硬さではダメージは通らない

こんな絶望的状况で上矢が取った行動は一つ

覚束無い足で力強く立ち上がり、両手を逆坂の首に通す

間違いなくそれは、抱きしめる体制だった、そして、上矢は届くかどうか分からない言葉を逆坂の耳元で囁く

「美羽……約束、覚えてるだろ？俺はお前を止める、だけど、自分を

助けるのはお前自身だ、そんな機械なんかに負けてないで、戻って来い、美羽」

言葉が終わって数秒、逆坂は上矢の腕から逃れ、鳩尾へと蹴りを入れる

そして、右手をかざす

「戻って来い！美羽ウウウウッ！」

逆坂の行動は再び硬直、そして、右手を頭部の装置にあて、力強く掴み

引き剥がした

そして、そのまま逆坂は頭部のフルフェイスのマスクを投げ捨てる

「私は操り人形じゃないっての……！」

荒く呼吸をしながらも、勝ち誇った笑みを浮かべ、言う逆坂

「……美羽、お帰り」

上矢はもう一度強く立ち上がり、逆坂の元へと歩み、先ほどと同じく逆坂を抱きしめる

逆坂は物凄い勢いで顔を赤く染め、かなりの焦った様子で言う

「あ、あ、あ、あ、のっ！、雄一君！あ、あのね！お、落ち着いてそのまま離れて欲しいんだけど……っ！」

「ん？嫌か？」

「い、嫌じゃないけどさっ！」

「じゃあいいだろ、俺だって頑張ったんだから、こんくらい報酬としていいだろ？」

「……っ！……ま、まあ……いいけどさ……いいんだけどさあ……（言えない、絶対に言えない、この下は素肌で、しかもかなりの密着度で、ほとんど裸の状態で抱きしめられてるも同然なんて……）」

上矢は幾分か落ち着き、そして気がつく

「……？そっいや、月山何処行っただ？」

21・自動化<Automatic operation>>（後書

次回「月山光二に立ち塞がる親しみ深い顔、何故お前が此処に!？」
ご期待ください（タイトルはフィクス（ry）

22・裏人格<Frantic>（前書き）

まさかの四話構成だった十二位救出編も次回で最後です、次からはまた何時もどおりな感じです

22・裏人格<Frantic>

永井大輝の生まれは庶民であつた、完璧ではなかったが、幸せな生活だつた

全てが満たされていた

しかし、悲劇が彼を襲つた

そして、彼は乾いてしまった

だから、満たされたいからこそ

給水所を求めた

『学園都市』

永井は望んだのではない、な……つてしまつたのだ
流れるままに生活する彼は流れる事しか出来ない光のようであつた

昔から永井は努力家だつた

足りないものは努力で補つてきた

そして、能力に関しても努力した

彼は十六歳にして、ある研究機関から誘われた

『十二研』そう呼ばれる場所だつた

永井は努力が報われる、そう思い、研究機関へと進んだ

十二研で行つた事は実際、永井にとって苦痛ではなかつた

少しでも制限された生活の代償として

永井の能力は飛躍的な進歩を遂げた

レベル3程度だつた光学操作系能力は、光をある範囲に留め、固体化させる能力に

この時、永井はとても満たされていた

永井が見て、悲しみを覚えた最初のもの

それは確率変動、

彼女達は同じ能力者で、同じ顔、それなのに殺しあっている『自分』
を作り上げる為に

永井が感じたものは、嫌悪感、悲しみ、

そして、彼はある命を受ける

『夏日優火のクローン、及び、本人を可能なら始末しろ』

：

廃工場

何時もとは違い、四つの影があつた

一つは病的に白い肌、力を加えれば折れてしまいそうな程、華奢な
体、脱色し、真っ白となった髪、そして爛々と輝く淡い赤い瞳をし
た少女

宮田涼子

もう一つは、明らかに染めた人工的な金髪に、絶対カラーコンタク
トの白と黒のオッドアイ、そして右手に持った本は、何故か皮ベル
トで十字に縛られている

そして、もう一つは相変わらず地面に、一つの剣から四方向に剣が
飛び出している黒い剣を地面に突き立てている甲冑

そして、最後の一つは、金髪蒼眼で、白いノースリーブのワンピー
スを着用している十歳ほどの少女

「よし、自己紹介と行こう、俺の名はラヴィ・ヴェゲナー：んで、
こっちのかわいこちゃんが、クレア・エメス、んで、ソッチの突っ
立ってる鎧が自律型甲冑：『Nakada』」

「うん、色々と言いたいけど、ナカダって何だよう、思いつきり日
本名じゃないかあ：、ラヴィ、クレア、ときて、ナカダ？ふざける

のも大概にするんだよう」

ラヴィの意味不明なネーミングセンスに遂にキレた宮田は的確なツッコミを入れる

「いやさ、日本の名前って最高にクールじゃん？それと、く氏って付けるのが俺、好きなんだよ……だからさ、こう……ラヴィ氏とか、クレア氏とか、Nakada氏とかさ、ほら？格好よくないか？」

「残念、それはただの卑猥な単語だよ」

無自覚なのか故意なのかは分からないが、先ほどから頭の悪い発言ばかりをするラヴィに若干イライラし始めた宮田、そして、遂に食ってしまおうか、という時にラヴィは本題へと入る

「……そうだ、ここら辺で人を探してるんだ、……誰だっけ？エメス、覚えてる？」

ラヴィは先ほどの金髪蒼眼の少女の方向を向き、問う

問われた当の少女、エメスは突然の出来事に若干慌てながらも答える

「あ、えっと……たしか、ミヤタリヨウコさんだったと思います……よ？」

タイヤの上に座り、人形のように愛らしい顔を若干困らせながら答える姿は不良達に軽く襲われるレベルだろう

「えあ？私？私は高いよ？その気弱そうな奴みたい簡単にには買収できないよう？んふふ」

宮田が幼い顔に似合わない邪悪な笑みを浮かべながら答えると、ラヴィは即座に簡潔に答えた

「いや、買収ってか勧誘、俺達の暗部に入ってくれないか？暗部、『アナザー』」

暗部、という言葉聞き、宮田は顔から笑みと一切の感情を消し、問う

「メンバーは？」

宮田の急変に若干驚いたのか、ラヴィは若干言葉を詰まらせながらも、答える

「あ、ああ……俺に、夜鳥命^{やどりめい}……、狡兔零船^{こうとれいせん}……あ、このままじゃ分から

ないか：えつとな」

「分かるよう、夜鳥命、アンノウンオブシエクト『幻視物質』、狡兎零船マインドシエイク『乱雑心理』：この気弱そうな奴は数に入らないのう？」

宮田の問いに、何故かラヴィは自慢げに答える

「ああ、エメスは俺の一部：と、言っても間違い無いからな、あいつは俺の作り出した人形：まあ、人形と言っても…」

ラヴィは先ほどから若干眠そうにしているエメスに向かって、一言「おい、エメス、ちょっとこっち来い、逆向きの肩車してやる」

「い、嫌です！：というより、ただの変態です！それ！」

一気に意識を覚醒させ、顔を一気に真っ赤にして、エメスは答える「このように表情もあるし、感情もある、生きてるみたいだろ？俺は生きてると思ってるけどな、それとエメス：その程度で変態って言われたら俺はお前を作った時点でかなりの変態じゃないか、今更そんな事を言うなよ、お前の体系とかさ、全部俺の趣味なんだから限りなく真面目な顔で、しかもキメ顔で言われた当の少女、エメスはより一層顔を赤く染め、俯く

という茶番を宮田は華麗にスルーし、一番の謎について、問う

「あはは、くだらない茶番だよう、で：どうやって作ったの？クローンかな？んふふ」

ラヴィはその言葉を待っていた、とばかりによし、と軽く言い、立ち上がる

そして、

「お前に特別の情報だ、その情報とは『魔術』、荒唐無稽でも信じるよ？物的証拠としてエメスが居るしな」

「はあ？」

：

人通りは少ないが、若干広い裏道、風美丘はユウ力を庇うように立っていた

「申し訳ないですが…どいて貰えませんか？僕はあなたと戦いたくないです」

対し、爽やかな笑みを浮かべているのは永井大輝、夏期講習にて、一年警備を勤めていた男だ

「どいたら…殺しますよね？絶対」

「……仕事なので」

表情を全く変えず、淡々という永井を他所に、風美丘は指示を出す「いいですか、ユウカさん…私が時間を稼ぐので、逃げてください、光二さんの部屋まで戻れば光二さんが暇を持て余している筈です、そしたら状況を説明してください」

「で、でも！それじゃ風美丘が…！」

「はは、私は死にませんよ、光二さんへの愛がありますからね」

風美丘はユウカに笑いかける、すると、ユウカは勢い良く走り出すその様子を見て、永井は一言

「…無駄に戦闘は起こすな、という話だったんですがねえ……仕方が無いか」

永井は、そんな事を言いながら右手を一瞬風美丘の右肩に向けたと思えば、次の瞬間には風美丘の右肩から勢い良く血が噴出し、風美丘は痛みの余り、地面に倒れこむ

「…ッ！？いッ…！！があッ！？何が…！？」

状況が全く飲み込めず、ただ、襲いかかる痛みを耐えることしか出来ない風美丘

その様子を見て、永井は軽い説明を加える

「僕の能力は『固定光線^{ライトニング}』です、光を固体化させる事の出来る…妙な能力ですが、固体化される光線は、一瞬で構成され、光が続く限りの射程を持ち、かなり鋭利です、つまり…僕とあなたでは勝負は成り立たないんです」

しかし、永井の説明など聞きもせず、ただ脳内で同じ言葉を繰り返していた

殺される

このままでは殺される

私だけが？違う、ユウカさんも殺される
殺されたら光二さんに二度と会えない

あのたまに見せてくれる笑顔も見れない

嫌だ

死にたくない

光二さんと離れたくない

これ以上何も失いたくない

嫌だ

嫌だ

嫌だ嫌だ嫌だ嫌だいやだいやだいやだいやだいやだいやだ
いやだいやだ

イヤダ

本当に

私は

ここで

死ねるのか

本当に私は私か

私の名前は風美丘速魅

私はどういう人間か

明るくて、若干テンションが高い人間か

違う

私は

こういう人間だ

「…まあ、殺しはしませんが…ユウカさんは始末させていただきま
す、すみませんね」

永井が横を通り過ぎようとした瞬間

「く…くくく…くき…」

先ほどまで倒れこんでいた風美丘が急に奇怪な笑いをする

「くきき…くく、くはっ…あは、あははア…ッ！馬ツツ鹿じゃね
えええええええのオオオーッッ！！？逃げてください？ふざけ
ないでくださいよ！この身体は私のモノです、あなたの一存なんか
で勝手に壊されていい訳が無いんですよ？そもそもあんな醜いクロ
ーンなんてなんで生き残らせる価値があるんでしょうかねえ！？こ
の、風美丘速魅の肉体を滅ぼしてでも生き残らせる価値が！？あんな
薬品漬けの醜いクローンなんか、しかもあの生徒会長のクローンの
為に！！馬鹿馬鹿しい、馬鹿馬鹿しすぎますよ！！私が眠ってい
る間に好き勝手やってエ…私の光二さんにまで手を出して…ええ？
分かってるんですかねえっ…！？しかも死にそうになったら勝手に
私の身体を放棄しやがって…まあ、そのお陰で私が出て来れたので
良かったですけどオ…！」

突然の豹変に永井は怪訝そうな表情を浮かべる

「ああ…？何見てるんですか？ハハ、血に濡れたオンナノコが好物
なんですかねえ？んくははははッ！！一回食ってみますかア？私は
痛がる演技をしますよ！馬鹿みたいに『いやあ！やめてください！痛
いです』ってねえッ！！………それとも、死をお望みですか？」

直後、風美丘は永井に足払いを掛け、倒し、馬乗りの状態になる

「なっ…!？」

急に起こされた行動に永井は抵抗できなかった

それを他所に風美丘は憎悪と狂気に満ちた、以前なら絶対にありえない表情を浮かべながら狂ったように笑い、そして永井の顔を覗き込む

「ははッ!…どうですかあ!？この重圧!興奮しませんか!？騎乗位つてのはですねえ!女の攻撃性、猟奇性を一番表す体位なんですよオ!！」

どう動いても逃げれない拘束を終わらせる為に永井は攻撃を放つしかし、それは風美丘の頬を掠めるだけに終わってしまった

風美丘は、切れた頬から滴る血を腕で掬い、腕に付着した自分の血を舐め取る

「くくっ…本当に最高ですよオ!この体は!ああ、!分かる、!自分の中をこんなにも上質な血が駆け巡っている事が!」

次に風美丘は永井の右腕を左足で押さえつけ、右腕の手の平を思いつきり殴る

「ぐあッ…!？」

永井は痛みに顔を歪ませるが、風美丘はより一層楽しそうな表情で永井に何度も問う

「痛いですか?痛いですよね?どの様に痛いですか?」

風美丘の狂った質問に、永井はゆっくりと答える

「…骨が…砕けるように…痛い…!」

「ハア?骨が砕けるように?その程度ですかア…?残念ですね…んじゃ、次は折られる痛みを経験しましょう」

風美丘は左手で永井の左手を押さえ、右手で人差し指を掴む

「ッ!??や、やめ…ッ!」

「そりゃ、」

ゴキリ、という嫌な音が体内に響き渡ったかと思えば直後には強烈な痛みが永井を襲う

「ぐあ……あ……？ぐああああああああ！？」

絶叫する永井を他所に、風美丘は次々に指をありえない方向へと曲げていく

そのたびに永井の絶叫が響き、風美丘の心を埋めていく

そして、全ての指がありえない方向へと曲がつた頃

「痛いですか？痛いですよねえ……？はあ……はあ……いいですよねえ……！本ツツ当にいいですよねえ！もう私又れ又れですよ？上手ですよねえ、貴方、もう私、全身鳥肌たってますもん……あぁっ！もう我慢出来ません！最ッ高です！はぁッ！はぁッ！貴方でこれなら月山さんの声はどれだけ気持ちがいいんでしょうね……？……はあ、はあ、とりあえず、最後……イきましょう？」

そう風美丘は永井に笑いかけ、見たく無くなるような形をしている永井の指を内側へと曲げ、無理矢理拳を握らさせる

「……ッ！かッ……！」

想像を絶する痛みに永井は声さえ上げられず、身体をガクガクと痙攣させる

「はあ……はあ……いいッ……ですよぉっ！その細かな動きッ……！も、もう……！気持ちよくて死にそうッ！」

永井の上の風美丘は、口から下を垂らし、顔を赤らめ、欲情した眼で永井を見つめる

が、それはとても一方的で、猟奇的であり、残虐だ

「くあああ……っ！もう駄目です！ッ」

「……で、くれ……」

風美丘は在ろう事か絶頂を迎えようとした瞬間、永井は声を絞り出した

「助けて、くれ」

「……はあ、そうですか、では、此処までですね」

風美丘は、ゆっくりと立ち上がり、去っていく

最後に永井の肩を踏み潰して

この後、永井は他の十二研のメンバーによつて救われるが、心を病んでしまつたらしい

その張本人である風美丘は

「があゝちやゝまさあゝん 今行きますからねえ」

そういい、十二研へとゆつくりと、足を進めていった

22・裏人格<Frantic>（後書き）

今回、あまりにも生徒会長の投票結果が酷い事になっていたのが、
かざみんファンを減らす為、狂わせてみました

本人もびっくりするほど狂っちゃったよ！！

23・風力使<Wind> ; (前書き)

今回でやっと十二位救出編も終わりです、次からは明るい話です、多分

23・風力使<Wind>;

風美丘の部屋、そこには一つの影がある

この部屋の主である影、風美丘速魅だ

彼女は十二研へと向かっていたはずだが、途中で何かに気がついたらしく、自室へと戻り、部屋を荒らしている

「はあ…はあ…ク、クスリは何処に置きましたっけ…？く、くきき…こ、このままでは光二さんを見ただけで殺してしまいます…くききかか…あはっ、か、は、さっさとクスリを…」

眼を大きく見開き、歯を食いしばりながらも、口の横から唾液を垂らし、時折息を大きく吐き、その度にまるで犬のように舌を垂らす傍から見なくても異常な光景であつたが、突如、風美丘は喜びの声を上げる

「あ、ありました ありました へあ、うくくく…私はこのクスリが無くちゃ何にも出来ませんからねえ…っ、このクスリが無くちゃあ…すぐに人壊しちゃいますもんねえ…！学校に行く事すら難しいですもんねえ…っ！」

そう言いながら、風美丘は針が無い圧力注射器を太股へとあて、薬を打ち込む

「あ、ああ、っ…！分かる…！体中に薬が回っている…！それに…私は自分で自分自身を傷付けているっ…！こんな美しい体を傷つけているんだあッ…！も、う、本当に…最高ですねえ…！この体は…」
風美丘は荒く息を吐き、空中に眼を泳がせながら、体内を駆け巡る薬品の感触を実感する

注入した薬品はかなり強力な精神安定剤、これを服用する事により、彼女は若干の攻撃性を残すも、大方マシになるのだ

「…ふう、大分落ち着きましたかね、では…行きましょつかね…、光二さん、待っていて下さい、今から行きますからね」

：

十九学区に存在する発電所の地下、そこには四つの影があった
一つは巨大な影、電力食い、そして、他の三人の姿は完璧に一致している

「風美丘速魅の能力は超速反射ではない？」

三重の一人が言葉を疑問系にし、繰り返せば、仮想世界は丁寧に説明する

「はい、正確には…超速反射の能力は身体の上では…ではない…でしょうか」

その言葉に三重は怪訝そうな顔をする

「それはありえませんか、あれが能力じゃなければ…化け物でしょう？」

その言葉にも仮想世界は丁寧に説明する

「いえ、あれはむしろ能力です、しかし、彼女の能力は身体向上系では無いのです」

先ほどからまるで、答えを遠まわしにしているような仮想世界の回答に三重は若干苛立つ

「ああもう！焦らさないで教えてくださいださらない！？ぶち抜きますわよ！？」

「見分けがつかしましたよ、あなたは絶対破壊、三重神苗ですね？」
「何故私だけ能力を使わなくてもバレルのかしら…」

確かに彼女達は全く同じ容姿、思考だが、能力による若干の性格の違いはある

三重鼎は、常に自分（他の三重も含む）以外をさり気無く見下している

三重神苗は、その能力の強大さに、自分の思い通りにならなければ気に入らないし、短気である

三重香奈枝は、その能力の故に、恐怖を知らず、妙に好奇心が強い
「…で、そろそろ本題に入りますが、風美丘速魅の能力、それは、

『身体能力の向上』ではなく『結果までに到達するまでに掛かる時間を調節する能力』です」

「…では、日頃の身体能力の向上の理由は？」

「簡単です、走力なら『100m先に到達するのに、一秒』、跳躍力なら『跳躍し100m先に到達するのに一秒』、回避なら『攻撃を避けるまでの時間に一瞬』、こう設定すればいいのです」

そして、仮想空間はしかも、と付け加え説明を続ける

「この能力の本質は結果として身体能力の向上をしていますが、能力の本質はそこではありません…この能力の本質は『結果さえ定めてしまえば過程はどうあれ、絶対に指定した時間には結果に辿り着ける』という事です、しかし、この能力は身体を武器とするしか在りませんから…身体に極端な負担が掛かるわけです、しかし…彼女は見ての通り特異体質…しかし、この特異体質も彼女の能力です『自分の能力で受けた反動をゼロにするまでに一瞬』これで全ては解決な訳ですが…、新風美丘は自分の能力は身体向上形能力と信じきっていますので、能力を自由に操れない…という事なのでしょう」

突如の出来事に、三重達はそろえて驚愕の表情を浮かべる

「た、確かに…月光二による回避不能に限りなく近い粒子レベルの見えない攻撃も全て少しずつだけで避けていました……予め設定されていた設定は記憶が無い状態でも稼動するって事なのですね

…」

一人がそう言い、もう一人はこう言った

「それって…間違いなく…Level5.5じゃ…」

「はい、間違い無いでしょう…彼女はLevel5.5でしょう…

何せ、『一方通行を撃破するまでに一瞬』で、どんな芸当を見せるかは分かりませんが…撃破が可能です、エミューレートした結果では…よく分からない体術で上半身を吹き飛ばしました、恐らく自動設定の反射のベクトルを利用しての攻撃でしょう…耐え切った場合でも『一方通行の状態を把握するまでに一瞬』という設定で能力の抜け目を狙う戦法で完封していました…しかし、彼女のこれほど強力

な能力が研究者の手に落ちていないというのは……やはり……全ての研究者達の目を潜り抜けてきたのでしょうか……彼女の能力は隠蔽性が高いですし、彼女は身体向上方面でしか能力を使用していませんし、『自分の能力の本質が暴かれるまで無限に限りなく近い時間』と決めてしまえば同じ時間だけ暴かれないでしょう……しかし、この能力は間違いなく……Level 5 最強でしょう、現在最強の空間制御でさえ『全ての行動を掌握し、消し去るまでに一瞬』という設定で勝つ結果が出ていますから」

三重は先ほどから暴かれる真の化け物の正体に怯えながら問う

「……では何故……？ 貴方は暴くことができたんでしょう？」

「はい、恐らく……風美丘はもう少して、いえ、もう既に無くしていた記憶が一時的に回復する、という結果が出ています、その時に何かエラーが起こったか……それとも、故意に解除したのか……何にせよ、彼女はこの学園都市の最後の最後まで全てを見通している気がします……彼女にとつて、運や確率なんて物は存在しないんです、彼女の決めた事は時間内に絶対に実行され、終了するんですから……」

：

前生徒会長こと晴査凌^{はくわい}は、知ってか知らずか十二段階分解式完全能力者開発研究所、十二研の入り口に立っていた

晴査は後ろに存在する影に気がついたのか、後ろを振り向きながらも、影の名を呼ぶ

「やあ、こんな所に珍しいね？ かざみん……この間の事だけど、さすがに僕も敵しすぎたかな、気にしてるならごめんよ」

人に好感を与える笑みを浮かべながら振り向く前生徒会長
普段の風美丘が相手なら平穏な時間で終わっただろう、

普段の風美丘なら

「随分と馴れ馴れしくなったもんですね……？ 晴査君？」

そう言いつつも、圧力注射器をもう一度足に打つ風美丘

「……おっ！？記憶戻ったの！？……不味いなあ……」

笑顔を曖昧な感じにし、頬を掻く晴查の様子を見て、風美丘は露骨に舌打ちをし、圧力注射器を胸のポケットにしまう

「ああ、イライラしますよね、その態度、その余裕、全てが苛立つ、全てが気に入らない、……うくつ……うくくくくく……そ、その余裕は……私があなたに絶対に勝てない！？……馬鹿だ、馬鹿ですよ、え？馬ツツ鹿だなアアアア……！！いつまでそんな夢見てるんですか？お？いい加減目を覚ましてくださいよオ！あなたでは……あなた如きでは……私の足元にさえ及びませんよ？」

明らかに平常ではないその様子に晴查は不自信を持ち、怪訝な表情をする

「……本当にかざみんか？……いや、先程の薬か……？」

「ああ、あの薬ですか……？あれはですねえ……一種の媚薬ですよ、媚薬と言うと調教とかにしか使えないようなイメージがありますが……私のような人間にとっては戦闘意欲を醸し出し、五感を最高潮に高め、自分の能力を最高に引き出せる薬ですよ、私は三度の飯より戦闘コッテの方が好きですしね」

よく見れば風美丘は顔を赤く染め、肩を激しく上下に揺らし息を荒く吐いている

まるで、獲物を見つけ、狩獵を始める前の狼のように

「……？でも、所詮かざみんは超速反射、超絶インストル反応には敵わないよ」

その言葉を聞いた直後、風美丘は晴查の背後に立っており、晴查の耳元で囁く

「はあ……はあ……晴查君の声はどれ位の声ですかね？私に生きる実感をくださいよ」

直後に晴查は鋭い裏拳を繰り出すが、風美丘は軽くその裏拳に手を添える

それだけで晴查の手首は砕け散る

「ぐあっ……！？……な……ッ……！！」

「手首を砕くのに、一瞬」

そして、次の瞬間には再び晴査の背後に回っている風美丘

「右肘を壊すのに一瞬、左肘をありえない方向に曲げるのに一瞬」

次々と痛みが追加され、処理が落ち着かないまま倒れこむ晴査

「こんなの…ッ！身体能力を向上させただけで可能なのか…!?」

「……つまらないですねえ、何処からそんな余裕が沸いてくるのか

…それにあなた、再生能力もありましたよね？……まだあなたには

余裕が見えます、底知れぬ余裕が…、はあ、…ああ、この火照った

身体をどう冷やしましょうかね…？…、仕方ありませんか、少々

…早いですが、光二さんを頂きますか、もう少し歩いて見たかった

ですけど」

風美丘はそう言い残し、立ち去ろうとするが、晴査が呼び止める

「待て！！それは本当に身体能力向上系かと聞いているんだ！」

その言葉に風美丘は気だるそうに振り向き、答える

「身体能力向上系ですよ、あなたにはその位のレベルで手加減しな

いと殺してしまいますから、殺すと壊すは違うんです、楽しむ為

にあるのが壊す、消す為にあるのが殺す、です」

…

大実験室Aでは相変わらず、二つの影があつた

「ねえ、雄一君…？そろそろ行こうよ」

「ちよ、……マジ無理や、…わいマジで疲れたで……あ、アカン死ぬ！」

緊張が解けた所為か、上矢は体中の色々な所が急に痛み出して思いつきり横になっていた

ついでに何故かエセ関西弁になっていた、逆坂はその横で屈み込み、心配そうな顔で見下ろし、時々身体を若干揺すってみたりしていた上矢は物凄く幸福の絶頂を向かえていた、自分の横では心配そうな表情で屈み込みながら見下ろしてくれる逆坂、そして何より何の疑いもかけられなくローアングルを堪能できるからだ

ただの変態である

「あ、…でも、すぐに動ける方法があるぞ、一個……」

「え？何？出来る範囲ならやるよ」

先程とは違い、明るい笑顔で聞き返してくる逆坂

上矢がこの後言おうとした事、それは

『お前の生命力を口移しで俺に分けてくれ』

（こんな純粋な表情で言われたら言える訳ねえっての……）

上矢は今すぐ土下座して謝りたい気持ちになったが、物凄く期待している顔を見ると、どうしても言わなくてはいけない、という一種の脅迫概念に襲われた

「え……あ……いや……うん」

「……？どうしたの？私、雄一君為だったら大体の事は出来ると思うけどな、頑張るよ？」

頑張られちゃう！等と上矢は心の中で叫び、いよいよ、覚悟を決めて言う

「……お前の生命力を口移しで俺に分けてくれ（キリッ）」

「ひゃっ……！？え……？あ……、う、うん……頑張るよ……」

「ハハハ、やっぱそうだろ、無理だよ………え？頑張っちゃうの？そこで！？」

眼を閉じ、顔を近づけてくる逆坂をどう対処しようか上矢が迷っているうちに、ノイズと共に大実験室A内に拡声機による声が響く

「おい、お前え……随分勝手にやってくれてんのな？」

明らかに殺意の籠もった声の方向を見れば、そこには顔の半分に火傷の跡があり、片目は潰れている男

その姿を確認した瞬間、逆坂は顔を青ざめ、首を小さく振りながら
呟く

「……あ……いや……来ないで………」

上矢は即座に逆坂の異常な状態を確認し、男の動きを観察する

「おい、メス犬……てめえ、あのスーツ、いくらすると思ってた？少なくともてめえの身体を売り捌いた値段の五倍は軽くあんど？」

相変わらず拡声機を使用しながら声を荒げる男、その男の声に逆坂はただ怯えるだけで、何も答えない

「何とか言ったらどうだ…？ ああ！？ 口も聞けなくなったのかよ！」
男は更に声を荒げる、すると逆坂は大きく身体を縮ませ、慌てた様子で答える

「ひつ…ごめんなさい！ 許してください…！ お兄…ご主人様…！」
その返答の何が気にいらなかったのか、男はあからさまに舌打ちをし、声を更に荒げる

「おい、メス犬…てめえ、また俺のことお兄ちゃんって呼ぼうとしたか？ ふざけんなよ？ お前みたいなメス犬が俺の妹な訳ねえだろ！」
拡声機を投げ捨て、苛立ちを隠さずに表す男

その様子を見て逆坂はただひたすらに謝罪の言葉を述べ続ける
「いい加減にしろよ！」

上矢は突然声を上げ、逆坂を庇うように立ち上がる
その姿を見て、男は更に苛立ったように声を荒げる

「おい、お前え…そいういや、お前の所為で俺のメス犬は調教失敗した訳だ…、責任取れよ？」

男は無表情の上にただ苛立ちだけを乗せ、吐き捨てるように言う
直後、上矢は地面に衝撃を与え、空気中の塵の動きをループさせ、風圧の槌を作り上げ、殴りかかる

男はその動きをただ見つめ、自分に当たりそうになった瞬間、白い壁を展開させ、風圧の槌を消失させる

「なっ…！？」

スペースキー

「境界切断、便利な能力だ…攻撃防御…どちらもバランスが取れていて、扱いやすい」

直後、男の両腕から白い剣が放出される、上矢はその剣の動きを読み、避ける

と、横から

「切断した境界は出口を設定すれば、そこまで瞬間的に移動することが出来る、こんな感じにな」

上矢が動いた方向には男が立っていた、そして、男は上矢の左手を掴み、関節を無理な方向に曲げる

「があっ……！？ぐあああああッ……！」

上矢は痛みの余り絶叫する、次には右膝を裏から蹴られ、転倒する
「おい、お前え……こんな程度の力で俺に挑んだのかあ？信じられねえ、狂気の沙汰すぎるぞ？」

次に脇腹への蹴り、等、次々に暴力は加えられていく

そして、思いつき右肩を蹴られ、上矢は転がり、逆坂の元へと帰る

「おい、メス犬……お前の所為でこんな痛々しい姿になっちまったぞ？」

逆坂の足元に転がる上矢を指差し、男は不適に笑う

そして、逆坂は足元の上矢を確認し、意を決したように上矢に笑いかけ、一言

「……雄一君、短い時間だったけど、楽しませてもらったよ」

逆坂はそう言くと、上矢を乗り越え、上矢を庇うように両手を横に広げ、上矢の前に立つ

「おい、てめえ……何の真似だ……？」

「……まったく、コッチが黙ってればメス犬メス犬うるさいなあ……アンタは犬フェチかつっの……マジそこの野良犬とワンワンスタイルで楽しんでるばあ？」

あ、これは……もう……血なんだね、と、上矢は場違いにも程がある事を想像する

なんて感じに上矢が馬鹿な事を考えていれば、男は不機嫌の頂点に達したのか、今までとは違う、危険な笑みを浮かべる

「……いいぜ、てめえからにしてやるよ、まずお前に主従関係つてのを脳裏に刻み込んでやる」

直後、両手から境界切断による剣を作り出し、次に入り口と出口を設定し、逆坂との距離を一瞬で詰めてくる

その行動に逆坂は即座に反応し、何かの暗号を発する

「A-005「Finger nail」！」

逆坂が頭部を破損させたとはいえ、マニュアル操作で『Awakening（起動）』と、該当する武器番号と名前さえ音声入力すればスーツの機能は正常に起動する

直後に、両手の籠手から二本の鉤爪が出現する、その鉤爪は高周波振動発生器を取り付けており、ヴァイブロブレード振動剣となっており、通常の切断武器とは比べ物にならない鋭利さを誇るらしい

男はその威力を知っているため、即座に足元に境界の入り口を作り、しばらく離れた場所に出口を作成する

「A-025『Wing』！」

次に逆坂は背中の翼の根元から能力を使用した翼を作成し、一直線に男の元へと突っ込んで行く、男は境界の光線を放つも、全て避けられる

「A-012『Heel Tonfa』！」

直後、逆坂の踵部分のプレートが上方向にずれ、中から鉄の棒の中心部分のみがカーボンスチール製となっている物が現れる

Fingernailとは別に相手の骨や内臓を『潰す』ために作られた武器

逆坂は左翼からの能力の噴出を故意に止め、高速回転をしながら右足での回し蹴りを放つ

「ぐっ…！？」

男は即座に両手で顔を庇うが、その両手の骨は砕け、数メートル吹き飛ば

左翼からの噴出を再開し、空中で姿勢を整える、

男はゆっくりと立ち上がり、笑いながら言う

「…やっぱりお前は甘いよ、甘すぎる、家族だ、とか、殺すべき人間じゃない、とか…適当な正義かつ下げて…俺さえも殺せねえんだよ」

砕けた両手を自由に振りながら、男は今までは若干違う表情を見せ、言う

その様子を見た逆坂の顔からは戦意は喪失していた、その代わり、

歯を食いしばり、何かに耐えるような表情をしている

「……それはお兄ちゃんも同じだよ……」

その言葉を男は鼻で笑い、返答する

「ハッ……同じ……だと？これでまだ甘いつてなら……何処まで俺にやらせる気だよ？第一何を根拠」

「だって……！だって……！あの制御装置！まだ自分で強く意識すれば自分の身体を動かせる余裕があつたし！それに！私を戦闘兵器に変えただけなら洗脳系能力者使った方が速いし、確実だし、コストも掛からない……！それなのに……！」

男は口を閉じ、何も言わず、佇む

逆坂の瞳には涙が浮かんでいた、そして次の言葉を発する

「……ねえ？もうやめよ……？無駄だよ、こんなの……私はお兄ちゃんを殺せないし、お兄ちゃんを私は殺せない……二人で明るい所で暮らそう……？昔みたいに……」

逆坂の必死の説得を聞いて、男はようやく動く

内部の全てを吐き出すように

「……黙れ、黙れ……ッ……！黙れ黙れ黙れッうるっせえんだよオオオおおおおおおッ……ッ……ッ……」

直後に放たれる無数の白い刃、全てがありとあらゆる物の境界を切断し、襲いかかる

しばらくした後、場に残ったのは瓦礫、大実験室Aは大半が破壊されていた

男は荒い呼吸を整え、確認する

二人とも消せたかを

「……ッ……ッ……」

突如、舞い上がっていた砂煙は全て晴れ、二つの影が現れる

一つは逆坂、そしてその前に立つ姿は上矢

「んだよ……なんだよ……」

よく見れば、逆坂の前に立つ、いや、浮く上矢の背中には六枚の翼
空気中の塵などが集められているが、全て翼内でループする台風並

みの風の摩擦熱によって、赤く変色し

溶解した鉄で作ったような、赤い翼となっていた

「その翼は…！？」

「…てめえに一つ言いたい事があるだよ…」

まるで男の問いなど聞こえていないように上矢は言う

「美羽がお前を殺せないとか、お前が美羽を殺せない、とか…正義とか約束とか何も関係無しに…っ、俺は美羽を守りたいんだ…！上矢雄一は一個人、一人の人間として、一つの生物として、この世に存在する物として、全身全霊を掛けて、この身を砕いてでも美羽を守りてえんだ！」

直後、上矢は背に出現した翼を地面へと打ち込む、そしてほんの僅かの静寂の後

地面から吹き荒れる暴風が発生し、地面は抉れ、空へと舞い上がった大地が今度は降り注ぐ

「クソ…がッ…！！逃げるしかねえじゃねえかよ…ッ！！」

男は境界の出口と入り口を設定し、場から離れる

徐々に吹き荒れる暴風は強くなり、完璧に十二研を破壊した

その場の物、全てを破壊する勢いで

ただ、上矢の後ろに存在する逆坂を除いて…

23・風力使<Wind>;(後書き)

次回「終息!!十二研跡地にて」

ご期待ください(タイトルはフィクス(ry))

24・戦闘中<unknow>（前書き）

爆破オチとかコントかよ、って感じの話です、後は月山君の行方とか

24・戦闘中<Unknown>;

緋雨津波の生まれは孤児であった、偶然通りかかった夫婦に拾われ、養子として育てられた

満たされていた訳ではないが、不自由ない生活だった

しかし、彼女はいずれ、学園都市へ行きたいと親に願った
『学園都市』

己の監獄となることも知らずに

昔から緋雨はそれなりの努力家だった

足りないものは努力で補ってきた

そして、能力に関しても努力した

彼女は十七歳にして、ある研究機関から誘われた

『十二研』そう呼ばれる場所だった

緋雨は怪しんだが、能力関係の塾のような物だと聞き、通うことにした

十二研で行った事は実際、緋雨にとって苦痛ではなかった

制限されず、能力は向上し、学校での成績も上がった

緋雨の能力は特異的な進歩を遂げた

レベル3程度だった念動能力は、

自分の周りに『確かに其処にあると仮定してもいい物体』を展開する物へと

この時、緋雨はとても満たされていた

緋雨を襲った衝撃、それは緋雨の得意な演算パターンが盗まれていた、という事だ

彼女は元より正式な十二研のメンバーとして向かい入れられた訳で

はなかった

布石だったのだ、四雲柴輝の能力を空力系能力者のレベル3から雷光爆風へと進化させるための

そして彼女は、行方を眩ませた、という建て前の下に追われる身となった

そして、彼女は気付く

『これが、学園都市……腐った科学者共の……ゴミ溜めだ』

…

十二研跡地

ありとあらゆる物が吹き飛んだ十二研跡地、そこには無理な演算をした所為か、大の字に身体を広げて寝転び、荒い息を繰り返す上矢と、その傍らに座り込んでいる逆坂の姿があった

「……だ、大丈夫か？美羽……」

「雄一君こそ……でも、凄かったよ、ホントにレベル4なの？」

「どうだか、な……」

上矢は荒い息を何とか整えようとするが、上手く行かず、無駄な呼吸を繰り返す

「それより、ごめんな、俺……つい、カッとしちまって……お前の兄貴、殺す気で攻撃しちまった」

「……いいよ、別に」

明らかに作った美羽の笑いを見て、上矢は思う、迷っているのか、とそのとき、突如、瓦礫の山が沈み、中から一人の少女が姿を表すその少女は、拍手をしながら、ゆっくりと前に進んでくる

「お見事、暦Project発案者であり、逆坂美羽の実の兄である逆坂暦をあそこまで追い詰めるとは」

瓦礫の山の中から出現した少女は

緋雨津波

「……津波？最近…見なかったけど、何処行つてたの？」

逆坂は久しぶりに見る友人の顔をきょとん、とした表情で見ている

「別に」

緋雨は答えると瓦礫の山の中から錨を引き出し、何処かへと去っていく

「…知り合いか？」

「うん、まあね…随分前は結構明るかったんだけど…急に行方を眩ませちゃってね」

上矢と逆坂は緋雨の背中を見つめる事しか出来なかった

…

「ぐ…あ…げほっ！…っ…！…ア…」

神岡は地面に打ち付けられた体の痛みには耐えながら何が起ったかを確認する

（何が…急に地面から強風が吹いたかと思えば地面を全部抉って…

…駄目だ、分からない…）

「あ、おおい！神岡あ！」

声の方向を向けば、戦神に肩を貸して貰い、此方に手を振っている北河の姿があった

「ちよ、なんで戦神といるんだい！？」

「え、だつてさ…十二研ブチ壊れたし…もう敵じゃないだろ？昨日の敵は今日の友、ってな」

北河は、な？、と戦神に笑いかけるが、華麗に無視される

「やめなさい、馴れ馴れしい」

「くそう、ガード硬え…軟らかくても困るけどな…」

北河は軽く冗談を言い、そして、真剣な表情で神岡の方向を向く

「…さっきの爆発、何だと思う？」

「爆発、というより…地面の下から馬鹿げた風が吹き上がった感じだったけどね」

しばらくの沈黙の後、戦神は思い出したように言う

「…！他の十二研のメンバーは…！？今日は逆坂君の新装備のテスト、という事で全員集まっていたはずだが…」

その言葉を聞き、神岡は冷静に答える

「全員集まってるなら…平気だろうね、輝夜は空間転移能力を持ち合わせてるし…」

…

一方学園都市第十九学区の地下では

「畜生、アンタ等ですね…ここは不良の溜まり場じゃあないんですから…」

突如、空間転移で現れる輝夜、またお前か、と思っていれば十二研のメンバーが次々と転送されて来る、理由を聞けば『十二研が潰れたから』全く意味が分からないし、仮想世界にとっては大変迷惑だった

「いいじゃねえのよ、愉快になってよ…ほい、ロイヤルストレートフラッシュ（スピード）」

ポーカーをやりながら答えるのは暦Project第十位、深川勝海その勝海の隣に座る暦Project第八位、迷道誘は怪訝な表情をしながら答える

「おい勝海…バレてんで、おら、ロイヤルストレートフラッシュ（スピード）」

その行動に、更に隣にいる暦Project五位、ひらたけ平平甲が素早くツッコミを入れる

「ちよいちよいちよいちよいッ！てめーら二人ともイカサマじゃねーかよ！ういつー！ロイヤルストレートフラッシュ（スピード）！！」

勢い良く手札を叩きつけ、豪快に笑う平平を余所目に、このポーカ
ーメンバーで唯一の紅一点、暦Project第四位、夜詩は鋭く
言う

「……あなた達全員イカサマとは……関心しない、そして何より人間の
クズ、ロイヤルストレートフラッシュ（スペード）」

まさか、参加者全員がロイヤルストレートフラッシュ（スペード）
を出せるわけが無いので、この中の一人以外は全てイカサマだ、
その真相を確かめるべく、一人の少女が立ち上がった

暦Project第六位『まがりねえみ曲音絵美』

彼女は山札のカードを一枚ずつ調べて行く、というより、開始早々
の手札にロイヤルストレートフラッシュが揃っている時点でおかし
いのだが……

「……」

曲音はカードを全て見終わった所で、曲音は心底呆れた顔をし、言う
「あなた達……全員イカサマじゃない」

見事、

山札にはスペードの10、J、Q、K、Aが揃っていた

「……」

四人は沈黙し、何だよ……全員イカサマかよ……真面目に誰か一人ぐら
いやれよ……等と考えている時

「……人間のクズって言った奴、誰だっけ？」

その曲音の問いに夜詩が答える

「確か、平平」

「お前だよッ！！」

責任を押し付けようとした夜詩を素早く深川が制する

その姿を端から見ていた第三位、第二位、第一位の五名は冷やかな
視線を送りつつも、車椅子に座っている永井の姿を捉える

「……永井、マジで壊れちゃったワケ？……所詮十一位……か、マジ駄目
だな」

暦Project第三位、四雲は両手を肩の高さまで上げ、心底馬

鹿にするような口調で言う

「希望も何も見えません、本当に彼の心は死んでしまったのでしょ
う、哀れなものです」

暦Project第二位、輝夜は相変わらず色の定まらない瞳を不
気味に光らせながら言う

そして、暦Project第一位、三重の一人が四雲を指差し、言う
「駄目、と、言えば貴方もですわよ、四雲…貴方の能力は開花した
後には莫大な力を得る、だからその地位なのですわよ？本来なら十
二位にもなれませんか、番外もいい所ですわよ」

三重の言葉に四雲は舌打ちをし、睨むような視線で言う

「わかってるっつーの……俺の能力『雷光爆風』が『無限回路』に
変化してこそ…俺は本当の三位となる」

…

月山襲撃前『窓の無いビル』内部にて

「……ここは君の家ではないのだが？」

「学園都市は私の庭、ならば此処は私の家で問題ないわ」

緑色の手術衣を着て、赤い液体に満たされた巨大な円筒器に逆さま
で浸かっている、男にも女にも、子供にも老人にも、聖人にも囚人
にも見える人間

そして、その円筒器に手を伝わせている一人の少女

「私にはハッキリとした物が無い、あるとすれば、この肉体、そし
て精神、思考…それ以外は全て正体不明……父親、母親さえも」

少女は伝わせている手を止め、一直線に手術衣の人間を見据え、言う
「ねえ、クロウリー……」

少女は若干涙ぐんだ声で言う

「学園都市が私の母親として、……貴方が私の父親では駄目なの？

……私は、私以外に関わりある物が欲しい」

「……」

クロウリー、学園都市統括理事長…アレイスター「クロウリーは少々間を置き、言う」

「…無理な話だ、それは君が一番理解しているだろう」

「まあ、冗談なんだけどね、何そのキャラクター………気持ち悪い、大体親父がこんなビーカー人間なんて嫌だなあ……」

先程の涙ぐんだ湿っぽい声は何処に言ったのか、嫌悪感を前面に出した表情で少女は言う

「……何しに来ているんだ？夜鳥命………君は……」

「暇潰し」

「帰れたまえ」

アレイスターの返答に夜鳥は冷静に、まあ、落ち着きなよ、と答える

「はあん…そんな事言っちゃうか、君はあ…？ふうん…面白い情報を持って来てあげたのになあ……」

「面白い情報……？」

アレイスターの僅かな反応に夜鳥は満足したのか、意地悪い笑みを浮かべながら言う

「御神光、この名前をよく覚えておくといいよ、後は…アンダーライン滞空回線ばつかに頼って無い事だよ、とある物語では宇宙船を支配したマザーコンピューターを持ち込みされたゲーム機からハッキングするって言う事もあるしね」

「それは一体どういう……」

アレイスターが物事の真偽を確かめようとしていた時、直後に携帯の着信音が響く

「ろおつとお！？…仕事の電話かな………もしもし？ハロー？…Oh…
．Well Well．．なるほど、月光二の護衛ねえ…他の人に回せない？…ああそう」

夜鳥の会話にアレイスターは若干の反応を示す

「月光二の護衛、相手は恐らく風美丘速魅だろう……」

アレイスターの反応に夜鳥は満足そうな笑みを浮かべ、言う

「私のサポートが心配かな？……大丈夫、私は学園都市頂点に君臨しているから」

直後、夜鳥は姿を消す

：

全自動化美羽戦中月山視点

「上矢！生きてるか！」

月山が大声で呼ぶも、何の反応もなく、ただ、砂煙の中で爆音が響くその時だ、月山に突如声が掛かったのは

「光二さあー……………あああああん！！」

日頃とは確実に違う声色、狩る標的を見つけた猛獣の雄叫びをも連想させる声は月山の思考を遅らせた

そして、次の瞬間には風美丘は月山の目の前まで接近し鋭い右フックを繰り出す

そのフックがまさに月山の首を刎ねようとした瞬間、その動きは細い腕一本挿んで止まる

「体験版は此処までとなります、此処から先は自分の頭の中の妄想でお楽しみください、又は、売店などで製品版をお買い求めください」

「……？誰ですか……？……邪魔ですよ……？」

風美丘は右腕をそのままに妙なものを見たような表情で首を傾げる間に割って入った少女、夜鳥命は右手から青白い閃光を集めて生成されたような刃を作り上げ、言う

「私が誰かって？ふふ、誰だと思う？答えは秘密、私を知っている人間は数少ない、名前だけ知っている人間でも指で数えられる程、姿を知っている人間なら、貴方達を新しく加えても五人かな」

夜鳥は左手から新たに今度は赤い溶解された鉄を型に流し込んだような形をしている日本刀のような物を作り出し、容赦なく風美丘の

右手を切り落とす

「ぐあつ…！？…ふふ、くくくく…くき、…かか、ふふ、あは、あはははははははッ…！」

しかし、風美丘は痛みに顔を引き攣らせるところか、狂ったように笑う

「…はあ、最高に狂ってるね、賞をあげたいよ」

夜鳥は呆れつつ、そんな事を言う、それに対し月山は急に現実に戻されたような表情で夜鳥に言う

「お、おいッ！…お前…：今…速魅の手を…」

慌てる月山に夜鳥は更に呆れた顔で言う

「馬鹿だねえ、君も…」

「どつという意味だ！？」

月山は理解できない状況に戸惑っていると、突如、風美丘はなくなつた右手があつたであろう場所に左手をかざし、こつ呟く

「右手の回復に一瞬…」

その言葉が言い終わつた瞬間、一瞬で風美丘の右手は再生していた「なつ…：…！？速魅の能力は超速反射じゃ…」

月山は再生した右腕に驚いていると、夜鳥は不適な笑みを浮かべて言う

「情報が古いねえ、君も…アイツの能力は超速反射なんて小さい物じゃないよ、アイツの能力は…完全遂行^{オルクリア}つて所かなあ、…まあ、アレを使うのは今の所旧風美丘のみだけだね」

旧風美丘、という台詞に月山は素早く反応する

「…なにを…？あいつは記憶喪失じゃ…」

「恐らく一時的に記憶が戻つたんじゃない？まあ、あそこまで狂つてるとは思わなかつたけど」

夜鳥はいまだに笑い続ける風美丘を眼で捉えつつ言う

そんな夜鳥に新世界の神よろしくな笑い声を上げている風美丘は急に笑つのを止め、言う

「退いてください、今すぐに」

風美丘の声に夜鳥は怯むわけでも無く、ただ言い返す

「退いてやつてもいいけど、お前の態度が気に入らない！！！」

直後、風美丘は微笑すると両手を大きく広げ、意味が分からない、といったポーズを取る

そして、直後風美丘は二人、正確には夜鳥を明らかに殺意の籠もった眼睨む、そして、月山は夜鳥に問う

「どうするんだ？」

「逃げる、勝率はあまり安定して無いし、アンタを守りきれるかも分からないしね」

直後、月山と夜鳥を黒い霧のような物が包み、霧が晴れたときにはそこには何も居なかった

その様子を見て、風美丘は携帯で誰かと会話を始める

「作戦開始です、動いてください、月山さんは致命傷にならない程度になら攻撃してもいいです、もう一人は『殺してしまつて』構いません」

風美丘はそう言いながら十二研の出口に向かって歩いていく

『了解、風美丘様……、これが終わったら一緒に食事でもどうですかね？報酬いらないんで』

「じゃあ貴方が奢つて下さいよ、峰織刻深さん」

『はい喜んで！ヒヤッホウ！！おい！深谷！俺達、この戦いが終わったら風美丘様と食事会だぞ！』

電話の相手は死亡フラグっぽい事を言いながら電話を切り、風美丘は再び目的地に向かって歩き出す

…

廃工場

「…デュアルスキル
多重能力か？」

風美丘の右腕を切り落とし、更には空間転移までやって見せた夜鳥の能力

それに疑問を持った月山は問いかける

「んー、教えてあげたいけど…すぐに正体が分かっちゃつまらないでしょ？」

夜鳥はジト目で嫌な笑みを浮かべながら月山の顔を除きこむ

月山はいい加減、理解できない現状に頭を抱えそうになった時、突如の爆音と共に二人組みの男が工場内に入り込んでくる

「ククク…貴様等、葬儀屋の手配はすませうえほっ！ゲホッ！ゲホッ！土煙が！すげえ土煙がッ！！」

「落ち着け、兄者…アタシ等は奴等をぶちのめして無事に帰還して風美丘様とお食事会ぞよ！トウーエッヘッヘッヘ」

「また奇妙な奴が出て来たぞ（笑）」

二人の出現に夜鳥は慌てるわけでもなく余裕そうに（笑）とキチンと発音してまで台詞を言う

「いやいや…深谷、お前こそ落ちつけよ…口調バラバラだし、何お前…トウーエッヘッヘッヘって…」

「それならアンタもだろう！ククク…ってお前…」

二人が誰も望まぬ漫才を繰り広げていると、夜鳥は無情にも今度は両手から如何にも鋭さそうな銀の刃を作り出す

そして、夜鳥はこう一言

「盛り上がっているところ悪いけど、出て行ってくれるかなあ？」

夜鳥は更に横にあった鉄骨を作り出した銀の刃で真つ二つに切り落とす

その切れ味を見て、男達二人は

「……はっ！全然怖く無いねっ！俺達の妹の説教のが怖いし！（ああ、死んだかな）」

「そうだ！全く怖く無い！妹の晩飯抜きのが怖い！（死ぬ前に一回でもいいからグリーンカレー食いたかったッ…！）」

深谷の台詞に何か思い当たる事でもあったのか、もう一人の男は目

を見開き硬直する

「…あ、門限を約一日半超えてやがる…ッ！晩飯どころか明日の一日の食事も危ない予感ッ！！」

「そ、そうだったア！！昨日一回も帰ってねエ！！しまった…！！本当にしまった！！隣の部屋にいるアイツは絶対に気がつくだろう！！っていうか飯呼びに来たときに確実に気付く！！そう、今日の正午…つまり、今この瞬間だ！」

深谷の言葉が言い終わった瞬間、簡素な音楽が流れ出す

「……………」

二人は顔を見合わせ、結局、携帯に出る

「は、はい……此方刻深であります……」

『お昼できてるよ！さっさと帰ってきて！』

わりと普通な返しが来たからか、刻深は安堵し、気を抜いた、その瞬間

「えい」

夜鳥は容赦なく刃を振り下ろす

それに気が付いた深谷は即座に刃に向かって手をかざす、直後周りの物体が次々と移動し、刃の中にめり込む

そして、刻深は携帯を投げ捨て、右手を横に薙ぎ払う、刃は思いつきり横に吹き飛び、夜鳥は大きくバランスを崩す

「ろおつとお！？」

そこを狙い、深谷は物質をその一点に転移させる

更に刻深は上から叩き付けるように右手を振り下ろす、砂煙が舞い、月山は確かめられない状況に顔を歪ませる

そして、霧が晴れた瞬間

鉄パイプなどが押しつぶされ、更には地面に元々は肉だったであろう物がある

「ほお…確かに威力はそれなりみたいだけどねえ……」

だが、夜鳥はその傍らに屈み込み、肉片を眺めながら言う

「なっ…！？てか、それじゃあ、その肉誰のだよ！？」

「本物だよ、即席の肉だから何処まで再現出来たかは分からないけど」

「風美丘様から聞いてたが…見れば見るほど正体が分からない能力だな・・・」

深谷は怪訝な表情を浮かべる

だが、夜鳥はその表情を見て次は右手からどす黒い刃を作り出す

「よし、わかった、説明しよう…これは『アンノウンオブジエクト幻視物質』、短所が一つも無い完璧な能力だろう？」

24・戦闘中<・Unknown>・(後書き)

夜鳥可愛いなあ (ルイズコピー略)

25・無酸素<Oxygen>（前書き）

2万8千PV突破、おめでとう、自分
7000ユーク突破、おめでとう、自分

25・無酸素<Oxygen>;

「幻視物質…？」

刻深は聞いた事さえ無い能力名に首を傾げるが、その様子を見て夜鳥は自慢げに説明をし始める

「そう、幻視物質…そこに存在するかどうか不明、存在するかもしれないし、存在し無いかもしれない物質、その存在を一方的に肯定し、性質を書き加える能力、それが幻視物質」

夜鳥は右手のどす黒い刃を軽く振り、更に説明する

「例えばこれなら…『形状：刃 用途：切断 属性：破壊』って感じかな、周りの光を破壊してるから真っ黒でしょ？例えばだけど」

不気味な刃を振り回しながら夜鳥は得意げに言う、それに何かの對抗心でも持ったのか、刻深は突如、自分の能力の解説をし始める

「なん…だと…？だが、俺の能力は方向収束…ベクトルシューター一点にベクトルを集める能力だ…珍しいだろう？」

刻深の得意気な表情を夜鳥はゆつくりと眺め、鼻で笑う

鼻で笑われた刻深はその場に崩れ落ち、代わりに深谷が能力を解説する

「フツ、俺の能力は一点集中…ワンポイント複数のポイントAから一箇所のポイントBへ転移させる能力ツ！」

今度は反応さえ無く、無言である

やはりその場に崩れ落ちる

二人がその場に崩れ落ち、悔しさの余り涙を流している時

「なあにやってるんですかあ？」

二人の背後からゆつくりと確実に近づいてくるのは『風美丘』

「ハッ！？しまった！本来の目的を忘れていた…！申し訳ありません！」

刻深と深谷の二人は勢い良く立ち上がり、風美丘に向かって敬礼をする

「そんな事はどうでもいいんですよ、さっさと帰ってください、妹さんが心配してますよ?」

風美丘は若干顔を背けて言い捨てる

「いや、約束は…」

不安そうな刻深の声に対し、風美丘は二人にサムズアップを送り笑顔になる。

そして、そのまま腕を逆さに翻し暗に死ねと言い放つ。

「速く消えてください」

「「うわあああああああッ! 深谷(兄貴)の所為でお食事会抹消されたア!!」」

軽く泣き顔になる二人は何処かのコメディ映画のように走り去って行った。

「さあて、意外と速かったね、ほんと」

「ええ、私の尾行能力は月山さん並みですからねえ……たとえば」
一瞬、砂埃が舞い上がり風美丘の姿が消える。

夜鳥は『形状：槍 用途：刺殺 属性：加速』の幻視物質を出現させ手首で一回転させてカンフー映画の様なポーズを取る。

「雰囲気が大事だよ、雰囲気」

夜鳥が槍をもう一度回し、手の内に戻す瞬間。

風美丘が姿を現し右足を振り上げる、それを槍で受け流し先端を風美丘の腹部へ突き刺す。

また、それを風美丘は気にせず腹部を槍が貫通する。

「良いですねえ! 最ッ高ですねえ!! こうやって刺されることに快感を感じる私は変態なのですかねえ?」

貫通した槍を力強く掴み、夜鳥を引き倒した風美丘は腹部の槍を抜きながら言う、その言葉に対し夜鳥は体勢を整えながら言う

「哀れだよ、殴るか殴られるかしてないと生きてる実感を得られないなんて、哀れだよ」

直後、夜鳥は手元に『形状：クロスボウ 用途：射殺 属性：連射 特殊効果：必中』の幻視物質を出現させ、即座に風美丘に狙いを

定め

「暴れる事しか出来ない猛獣は狩人に狩られるしかない、暴れる事しか出来ないからね」

夜鳥は言いつつもクロスボウのトリガーを三回素早く引くと、通常ではありえないボウガンの三連射が行われた

三回の鈍い音と共に風美丘の肩、横腹、右腕に矢が突き刺さる、風美丘は一瞬怯み、後退りをする

「そして、怪我を負った獣は絶対に生き残る事は出来ない、確実に狩人によって止めを刺される、そしてね」

夜鳥は更に手元に『形状：刀 用途：切断 特殊効果：絶対切断』の幻視物質を出現させる、そして右腕、左腕、左足、右足の順に切断する

風美丘の胴体は地面へと落下し、夜鳥は刀を振り上げ今にも風美丘の後頭部に刀を振り下ろそうとしている、そこで突然の声

「や、やめろ！やめてくれ！」

月山の声であった、まるで自分が殺されるかのような声で夜鳥に制止の言葉を発する

夜鳥は気を取られ、月山の方向を見る、その隙を風美丘は逃さず、再生した足で立ち上がり、夜鳥の腹部を蹴り飛ばす

「ぐっ…！？」

夜鳥は短く声を上げ、月山の足元へと転がってくる

「余計な真似を！あれはもうあんたの思っている風美丘じゃないんだよ！本当に余計な真似を！」

夜鳥は勢い良く立ち上がり、月山の胸倉を掴みながら言う、それに対し月山は夜鳥の目を見ながら言う

「私が、…戦う」

夜鳥は呆気にとられた顔をし、胸倉から手を放す

「…は、呆れた、あなたで太刀打ちできる筈が無い、本当に呆れた」夜鳥は月山に背を向け、工場の外へと歩いていく

「もう、知らないね、興味が無くなったよ、知らない」

そして、工場には風美丘と月山の姿だけが残る

「いいんですかあ？最後の頼み綱を捨てちゃってえ……」

風美丘は心配するような表情を作り、直後に先程と変らない表情になる

「……戻ってくれ、速魅、お願いだ」

月山は風美丘を真っ直ぐに見て言う、と、風美丘は

「はあ？お願い……？はは、くくく……何のジョークですか？……面白いですね、遅いんですよ、遅すぎるんですよ、今まであんなに邪険に扱ってきて今頃お願いですか？なめてるんですか？なめてるんですよねえええ……私はそこまで甘い人間じゃないんですよ？私がどれだけ辛い思いをしてきたか……どれだけ辛い思いをすれば私が表に出て来れるか……知ってますか？知りませんよねええええ！……ふざけるのも大概にしてくださいよお……！」

風美丘は右手で工場の鉄骨を強く打ち、珍しく怒りを露にする

「ま、まってくれ、お前に言いたい事が、いや、言わせて欲しい事が……邪険に扱ったのにも理由が……」

月山は取り乱し、必死に請いながら風美丘に手を伸ばす

「言い訳ですか？聞きたくありませんね、貴方はいつもそうです」

だが風美丘は月山の言葉を塞ぎながら嘲笑うように言う

「ま、待ってくれ、お願いだ」

「いつもいつも、言い訳と嘘で周りを固めて」

「待ってくれ、待ってくれ……！」

月山はまるで壊れたテープレコーダーのように何度も言葉を繰り返すだが、風美丘は鉄骨からネジを引き抜き、高速で月山へと投げつける

「醜いですよ、月山さん」

月山は肩に刺さったネジを見て、啞然とした表情をしばらく浮かべた後

「う、うあああああああああッ……！」

頭を抱えながら月山は屈み込み、咆哮する

「おやおや、遂に壊れてしまったんですか？随分と脆いんですね？」

…ッ!?」

風美丘は硬直する、月山の背中から紫色に淡く光り、蜃気楼の様に揺らめく六枚の翼が出現する

「はは、成る程…そういう事ですか、少しだけ珍しい能力を持っているとはいえLevel 4の人間を態々あそこまで強力な能力者が何故守るのか…疑問に思っていました、こんな奥の手があったとは…」

風美丘が一人で納得している時、月山は尚咆哮を続け背中 of 紫色の淡く光る六枚の翼は更に発光を続け、蜃気楼のような姿からハッキリとした形へと変る

まるで何かを思い出すように

「さあて、思ったより楽しめそ…か…ッ!?」

風美丘が嫌な笑みを浮かべようとした瞬間、地面が一瞬で水浸しとなり、風美丘は急に感じる息苦しさに戸惑う

「く…かはっ…!?か…」

風美丘は喉元に手を当て、何が起きているか確認しようとするが、上手く考えが回らず、その場に崩れ落ちる

（あ…!?何が…起こってるんですか…!?息が、できない…いや、空气中に『酸素』が無い…?…ッ!『酸素の無い環境に適するのに一瞬』…）

風美丘はゆっくりと呼吸を整え、立ち上がる

月山の背中の翼は素早い振動を始め更に光を増す、そして、翼が動きを止めた瞬間、月山を中心に衝撃波が発生し、その衝撃波に触れた物質は消滅していく

「くッ…!?原子の改変、又は、分子の改変に対し防壁を作成するのに一瞬!」

衝撃波は速度を増し、風美丘の元まで到着すると、風美丘は弾き飛ばされ、工場の壁に背中を思い切り直撃させる

そして更に月山の背中の翼が更に光を増すと、衝撃波は連続で発生し、地面にクレーターを作っていく

風美丘は体中の軋む痛みを感じながら、工場の外へと走っていく
より大きな衝撃波が発生した後、工場は完全に消え去り、月山の背
中の翼は消滅し、月山は倒れこむ

：

十九学区に存在する発電所の地下、再び四つの影がそこにはあった

「月光二の能力も『粒子移動』では無い？…またですね…」

「ええ、『また』ですね、しかも…^{イターマシ}今度の物はより凶悪ですよ」
^{エミコレクター}電力食いに乗り込んでいる人物、仮想世界は真剣な声で言う

「なんと仮名しましょうか…、今の所ですと『^{オキシジェン}酸素崩壊』^{ユニフス}とでも言
いましょうか、今度は率直に言います」

「いい心掛けですわよ、それは」

絶対破壊が優しい笑みを浮かべながら言うが、仮想世界は無視し、
話を進める

「酸素原子を縮小させ、その間に水素原子を組み込む事によって酸
素を液化させ、一瞬で無酸素状態を作り出す能力…だといいいので
す」

仮想世界は何かに恐れるような声でゆっくりと言う

「…最悪の場合、原子を縮小させ、その間に違う原子を組み込む事
によって崩壊させる能力かもしれません、さしずめ『^{アトムコプラス}原子崩壊』…、
はあ、もう生きるのがうんざりですよ、もっと安全な場所で暮ら
したいです、茨城とか」

「あなたみたいのが茨城に行ったら時空戦士イバライガーRに撃退
されるに決まってますわ」

「イ、イバライガー…？」

絶対破壊の自身満々の答えに仮想世界は若干恐怖を温和されつつも
一人で戦慄する

『月光二』という存在に

25・無酸素<Oxygen>（後書き）

時空戦士イバライガーは茨城県のご当地ヒーローです

この単語は試験でよく出るのでよく覚えておいた方がいいかもしれません

26・反転色<t・Reversible>・(前書き)

ネタバレ：長い

26・反転色< ; Reversible > ;

病院の一室にて、いくつかの影があつた、それは中心の人物を囲むようになっている

沈黙が続く中で、中心の人物は目を覚ます

「……、悪夢か」

が、直後に中心の人物、月山光二は再び眠りの体勢に入る

「うふふ、逃がさないよう〜？」

しかし、寝る事は許されず、脱色した髪に淡い赤色の目をしている少女、宮田に胸倉を掴まれる

宮田の顔はよくみれば若干イラついている様にも見える、顔が笑っていない

「意味が分からない、説明を求む」

月山はとりあえず胸倉を掴んでいる宮田を引き剥がそうとするが、皮膚に手を付けることも出来なかったので諦め、説明を求める

「あのねえ？あなたが戦っていた場所は私の家なんだよう？そこんところ理解してる？」

宮田は相変わらず胸倉を掴んだままの状態で、凍った笑みを浮かべながら言う

「……ああ、成る程な……」

「ああ、成る程な、じゃないんだよう！？よくも……！よくも私の家を……ッ！！四方八方に飛び散らせてやるうか！」

宮田は遂に猛獣のように牙を剥きガーツという感じで月山の肩を揺する

「ちょ、このままでは死にかねん！Nakada氏！！止めるんグッホア！？少年よ！何故殴る！」

素早く甲冑に指示を出した男、ラヴィ・ヴェゲナーは隣に座っていた男、戦神啓介の素早い拳を顔面に食らう

「此処は病院、神聖……とまでは行かないが、それなりに清められた

場所だ、その場において卑猥な発言をした貴方が悪い」

それだけ言々と再び戦神は席に座り込み、深く目を閉じる

一方宮田は突如動き出した甲冑に戸惑っている

「なん…だと…？…そんな馬鹿な…」

宮田は顔を青ざめて甲冑を凝視し、掠れる声で呟く

「動けるなら私が運ぶ必要は無かったじゃないかよう……」

少女の声が響く前に甲冑は素早く宮田を掴み、見事な背負い投げを決める

「ヒヤッホウ！見たか！エメス！あれがジャパニーズジウドウで最もポピュラーでクールな技！巴投げだ！」

ラヴィは大きく両手を上げ、隣で半分以上夢の世界に入り込んでいた少女、クレア・エメスに同意を求める

「……ふえ？あ、はい、……」

が、エメスは無論何も見て無かったので曖昧な答えを返す、それに満足しないのか今度は戦神に同意を求める

「アレは背負い投げだ、巴投げではない」

「なん…だと…？」

投げられた宮田は未だに虚ろな目でラヴィを睨んでいる、ラヴィはナカダと呼ばれた甲冑に向かい『喋れえ…喋れえ…』と言い続けている、この空間に似つかわしくない、ドールハウスにでも居た方が似合いそうな少女、エメスは完全に夢の世界へと飛び立ってしまった、戦神は先程からチラチラとエメスの方向を見ては顔を背けている

「あ、ロリコンなんだな…」

その事に気がついた月山は以前自分に向かって言われていたような気がする言葉を放つ

どうやらその言葉は戦神に取っては某電撃姫の超電磁砲よりも威力があつたらしく、慌てた様子で言う

「か、か、か、か、勘違いするな！私に別に幼女趣味は無い！そういう勝手な思い込みはやめなさい！…、それより、外で待ち人が居るぞ、早く行ったらどうだ？、そもそもだな…私は幼子の純粋

で無垢で清楚なイメージが好きただけであって、別に性的対象と見ている訳ではない」

ちやっかり気になる事を言いつつ、弁解の言葉のような、自分の首を絞めているような台詞を言い続ける戦神を華麗にスルーしながらふら付く足取りを整えながら歩く月山、しかし

月山は病室を出る前に一言

「そうかそうか、つまりお前はそういう奴だったんだな…、と、結局それはロリコンと呼ばれる物だ」

「なっ…！！今すぐその言葉を訂正しなさい！！今すぐん」

戦神の言葉が終わる前にドアを閉める月山、目の前には予想通りの人物、風美丘が居た

「…あ……」

風美丘はか細い声を出し、月山の表情を窺うが、風美丘の中では見る表情は大体分かっていた

怒りか、怯え、…実際に月山が浮かべた表情、それは

「…え？」

清らしい程の笑みだった

戸惑う風美丘を他所に月山は風美丘の横に座り、風美丘の顔を真っ直ぐと見据え、言う

「ふう、あんまり暗い顔をするんじゃない、お前には似合わない、そんな顔は…、ほら、いつもみたいに明るく笑え」

月山の予想外の言葉に風美丘は戸惑いながらも答える

「だ、駄目ですよ…！無かった事にしようだったって…！私、覚えてるんですからね…？私、月山さんに…いや、それだけじゃありません…もっと多くの人々を…！私…！」

風美丘は自分の顔を手で覆いながら震えた声で言う

その姿を見て、月山は言う

「…気にするな、そんな事…、私、思い出したんだよ…昔の事」

急に語りだす月山の言葉に風美丘は少々驚きつつも、言葉を真剣に聞く

「忘れようとする意思と、現実逃避の所為で忘れてたが……」

月山は何か吹っ切れたような笑みを浮かべつつ、平然とした顔で言い放った

「私が殺した人間は指で数え切れない程いる」

「えっ……？」

風美丘は理解が追い付かず、硬直する

「いやぁ……な、あの紫の翼を見て思い出したんだ、私、学園都市に来る前から能力を持ってたんだ」

硬直したままの風美丘を放ったまま月山は昔話をするかの様に話し続ける

「そうだ、それで……光と知り合ってたんだなあ、確か……私の能力が通じないって事で」

「光二……さん？」

一人で、何もない空間に向かって話し続ける月山、その明らかに異常な姿に風美丘は自分の内に秘められている『もう一人の自分』とは違った恐怖を覚える

「光二さん……？光二さん！」

風美丘は月山の肩を揺すり、月山の顔を正面から見る

「素晴らしい出会いだと思わないか？風美丘速魅さん」

月山の両目、それは見る角度によって色が変わる定まらない色をした目、輝夜望の目とまったく同じ物だった

直後に響く足音、風美丘は足音の正体を確かめべく足音の方向を向く

其処には白であり、白ではなく、白すぎて、白ではない影

輝夜望の姿があった

「お久しぶりです、風美丘速魅さん、……一年弱程前に一度会っていますが……覚えてますか？覚えてませんよね、覚えていたら、私、困ります」

輝夜は手に持った白い百合を何かの力で黒い百合に変えながら風美丘へと近寄る

「『何故此処に來たのか』…、簡単ですよ、其処の月山光二さんを回収しに來ました。精巧な人形として完成しましたからね」

「光二さんが人形…？ふざけないでくださいよ…！！」

元々無表情であつた輝夜の顔はより一層無表情になり

「これがふざけている顔に見えますか」

その直後、横に居た月山は動き始め、風美丘の首を右手で掴み、高く持ち上げ、壁に押し付ける

「こうじ…っさん…！？」

風美丘は突然の行動に驚き、月山の顔を驚きの目で見る。

その顔は機械的な笑みを浮かべていた

月山は右手に紫色に発光する槍を作り出し、それを構える

「な…んで…こんな…こと…するんですか…」

その声は驚愕に彩られていた

「光二さん…」

今にもその槍を突き刺さんとする月山を何者かが蹴り飛ばした

月山は声を上げるでもなく、ひたすらに地面を転がる

急に支えを失つた風美丘は地面へと崩れ落ち、何度も咳き込む

「輝夜望…やっぱり貴方は『あちら』側だったんですのねえ…ほん

つと頭に来るわ、ぶち抜きたいですわねえ…」

突如姿を現した人物はその言葉とは対照的に人に安心感を与える笑

みを浮かべながら、一步一步風美丘へと近づいていく

「あ、あなたは…三重…さん？」

「あらあら、覚えてくださったのねえ、光栄だわあ…完全遂行？…、

いえ、今は超速反射かしら？」

三重神苗、絶対破壊は相変わらずの笑みを浮かべながら風美丘に手を差し伸べる

若干風美丘は警戒しつつもその手を取り、立ち上がる

「な、何事だツ！！Nakada氏！！早く来いいいぎやああああッ！！脱臼したあああ！！」

物音に気がつき、飛び出して來たラヴィは恐らく中の戦神に肩を掴

まれ、再び中へと戻っていく

「……………何かしら？あれ……………まあ、気にしたら負けね…さて、そろそろ行きましよう？運んでくだらない、曲音さん？」

突如、地面や壁が揺らぎ、床の形を変え一人の少女が姿を現す、黒く、そして細長いツインテールを揺り動かしながら面倒くさそうに溜息をついている

「はああ……………面倒ねえ、本当……………」

直後、再び地面や壁が揺らぎ、地面から現れた箱が月山、風美丘、三重、曲音を包み込み、再び地面へと消える

取り残された輝夜は何を言うでもなく、十一次元の世界へと消える

…

十九学区に存在する発電所の地下

「……………」

其処には巨大な影が一つある、電力食いの姿だ

イターマシ

「……………誰も…、いませんよね…？」

仮想世界は再び誰も居ない事を確認し、仮想世界は電力食いの腹部に当たる部分を開く、すると、中には薄いガラスで出来た球体があり、その中には薄青い液体が充滿しており、中には一人の少女の姿があった、服装は以前美羽が着ていたスーツと同じような物であり、髪は無論切った事等無いので腰に届く程に伸びている、が、その分出るところは出て、引つ込む所は引つ込んでいる…肌に限りなく密着したスーツがそのボディラインを更に引き立てている、そして顔は美人とも言えるし、可愛らしいとも言える顔

見かければ男だけではなく女でさえ振り向くだろう

「おっしや、今の内に身体を動かしましょう…日頃はボイスチェンジャーで男声に切り替えているから誰かに見つかるゝと厄介ですしね」
仮想世界はそんな事を言いながら球体内の液体を頭部へ移し変え、

次に球体の一部をスライドさせ、外に出る

「ん、く、うううううう……っ」

大きく背伸びをし、固まった体中の筋肉を解そうとした瞬間

ゴキリ、という嫌な音がした

「ゴツハあああああッッ！！せ、背骨が泣いている！私の背骨は泣いているウー！！」

最近全く動かなかった所為なのか、背骨は単純な背伸びの行為に悲鳴を上げた、

しかし、其処で更に追い討ちが

「いつつつつつええあああああッッ！！右足が攣った！！攣ったア！！」

あまりの右足の痛みに左足で一本立ちするが、無理に力を入れた所為で

「ひざいいいいいつ！！らめえ！！二本同時は無理い！！らめだよお！痛い！痛い！痛いってばあ！！らめえ！！もう立つてられない！！」

見事に左足も攣り、変態じみた悲鳴を上げながら仮想世界はのた打ち回る

「く……くそう……これはさすがに重症ですね……、何とかしないと……」
遂に立っていることすら出来なくなつた仮想世界は青ざめた顔で涙目になって自分の体の状況の深刻さに絶望しながら足の痛みが引くのを待っていた、その時

壁や地面が揺らぎ、地面が変形し、四つの箱が現れる

「あ」

「ん？」

箱が割れ、中から出てきた絶対破壊と仮想世界は目が合う

「……ほおう」

直後、絶対破壊は右手に黒い物質を集め、魚を目の前にした猫のよな目で仮想世界を見る

「おおう……お母さん、お父さん、親不孝者で申し訳ありません……先に逝かせて貰います」

仮想世界はまるで蛇に睨まれた蛙のように硬直する

「ただし……」

しかし、次の瞬間、仮想世界は眼の色を変え宣言する

「諦めんぞオ！諦めんぞオオ！私は諦めんぞオオオ！！倒れ逝くその時までなアア！！」

勢い良く立ち上がり、絶対破壊へ向かって走り出す、が

「ぐはアッ………」

まだ足が攀った後の余韻が残っていたらしく、立ち上がった直後に倒れこむ

「……ふふ、私の負けだ……無様だろ……？笑え、笑えよ」

地面に倒れた仮想世界はなんとも言えない表情で絶対破壊を見るが

「……ハア、馬鹿な事やってないでさっさと電力食いに戻りなさいな、仮想世界」

「なん……だと……？何故私が仮想世界だと……」

仮想世界は疑問と希望に満ちた顔で絶対破壊に問う、恐らく

『仲間だから』とか、『私達の関係でしょう？』とかを期待しているのだろう

が、

「馬鹿だから」

「ですよー、期待した私が馬鹿でしたよ、畜生め」

仮想世界は震える足で何とか電力食いに戻る

その光景を背に、絶対破壊は啞然としている風美丘と寝ぼけた様子の月山に説明をする

「さて、急で少々申し訳ないですわね、何しろ急いだほうがいい話です」

絶対破壊の言葉に月山は同じ事を何度も経験したかのような顔で反応する

「……ん？ああ、何だ……また超展開か、掛かって来い」

「そうですね、では、まず最初に……」

何かが伝わった二人に対し、現実へと引き戻された風美丘が会話の

腰を折る

「ちよちよちよ、待つてくださいよ！それよりも先程の…、何故光二さんが私に攻撃したかの説明とか、あの紫の槍の説明とか…」
焦った様子の風美丘に絶対破壊は面倒くさそうに答える

「…分かりましたわ、まず最初に先程、何故月山光二様が貴女を攻撃したか…それは、希望代償の…、後遺症、とても言いまじうか、あれは相手の希望を食らい尽くすだけでは無く、相手の体内に特殊な細胞を埋め込む事ができますの、…そう、希望代償は『増殖する能力』なのですわ」

「増殖する能力…？」

「ええ…、その細胞は徐々に宿り主の身体を侵食し、最後には能力を強制的に希望代償へと変え、輝夜望というマザーコンピューターの命令に従う一部品となりますの…、つまり希望代償というのは相手の希望を代償に勝手に自分と同化させる……まあ、輝夜望にはそれが人にとつての救い、なのでしょうけど…」

「つまり…光二さんは……もう……？」

風美丘は絶望的な表情を浮かべ、若干涙目になる

「いいえ、その細胞の侵食速度は普通の状態では物凄く遅いんですけれども…、希望代償のA I M拡散力場に当たる事によって劇的に加速しますの、つまり…希望代償を全滅させれば侵食は止まる…、と考えてくださいませ」

その言葉に風美丘は若干の安堵を覚えたが、月山は即座に反論する
「…さて、希望代償は輝夜一人じゃないのか…？」

「ええ、軽く数えて…五人、居ますわね」

「五人！？無理だ！あんなバケモノを…」

月山は叩き出された数字に驚愕するが、落ち着いた様子で風美丘は答える

「大丈夫ですよ、光二さん…、まだよく分かりませんが…とりあえず、私の能力は超速反射、なんていう能力じゃあないんです、その力に手を出すことが…、例えば悪魔に魂を売る事と同じでも。私は光

二さんを救える確率がゼロ以外なら手を出します」

風美丘の中に眠る、もう一つの人格、普段とは真逆、コインの表と裏、命ある物を傷つけ、壊すことに至上の喜びを覚える人格
その人格が目覚めたときに、明らかに異常な力を使っていた

体は動かせずとも、意識だけは覚醒していた為、その事を知っている、自分の目を通して、自分が人を壊す様を幾度も見た

風美丘は決心していた、あの人格とは何時か、どのような形で決着をつけなければならないと

「ふふ、その事で取引ですわ…、今回私達の予想外の出来事が起こったんですの、しかも…私達と仮想世界の四人ではとても收拾がつかない出来事……、そこで貴方達と他何人かに手伝いを求める事にしましたの、これを了承してくれば…絶対順位の精神操作により、貴女の中に眠るもう一つの人格を消し去ってみせますわ、貴方達にとっても悪い話では無いと思いますわよ？」

「私は全然構いません…けど、光二さんは…？」

風美丘は即座に了承するが、隣の月山の様子を疑う

「……、出来ればあの力については思い出したくも無いし、ずっと忘れてたかったが…、まあ、私も行こう」

月山は若干戸惑いつつも、了承するが、思い出したように風美丘は問う

「…そういえば、あれは何なんですか？紫の翼といい、槍といい…」

「あれは…、私が過去に無意識の内に発生させてた能力…、だ、あの力で何人も殺して来た…、それで私は怖くなったんだ、あの能力が…、それが理由で学校を転々としていた時、光に出会った、アイツには能力が通じなくてな…唯一心を許せたよ、…そのうち、自分には能力なんて無い、という自己暗示をし続けたら…いつの間にか本当に能力を使えなくなってたんだ…、だから今まで忘れていた、…けどな、夜鳥にお前が殺されかけた時、不意に思い出してな…、…すまない、邪険に扱ってたのも本当は思い出してたからかも知れない…」

若干バツの悪そうな顔をしつつも月山は風美丘の様子を窺う

「……、いいんじゃないですかね？それにもう…邪険に扱う必要なんて無いじゃないですか、現に、殆ど生活の場と一緒にしても能力は発動しませんでしたし、だから…」

風美丘は月山の手を軽く握り、言う

「もつと…近くに来てください」

何故か妙にいい雰囲気になった瞬間

「ハッハー！新鮮な肉……おう？」

突如、電力食いのメートル程前に一つの影が現れる

見事に暦Project第五位平平甲だった

「お……おいイ？曲音ちゃんよお……今から焼肉食うところだったんだけど…？」

「知らないわよ、第一位の命令じゃあ…仕方が無いじゃない？」

「そ、それも…そうだけだよお……ああ、…カルビ……」

途方に暮れる平平

「……今まで自分で雰囲気をぶち壊しといて、何も感じなかったんですけど……こう、殺意が沸きましたね」

風美丘は固まった笑みで平平を睨む、が本人はお構いなしに焼肉食いたかったなあ…等との言葉を発している

「さて、そろそろ打ち合わせの時間ですよ、っと…リア充爆発しろ」

仮想世界は次々と曲音に指示を出す

その指示に従い、次々に

深川勝海、夜詩亜樹、三重香奈枝、上矢雄一、戦神啓介、迷道誘が現れる

上矢を除いたメンバー全員が、またかよ…、的な表情を浮かべている、その様子をまるで何も無いかのような様子でスルーする仮想世界は次の指示を出す

「えーっと、次に三重鼎…絶対順位をお願いします」

その言葉を聞き、曲音は若干意地の悪い笑みを浮かべ、地面から箱を作り出し、箱が開けば

思いつきり水着姿の絶対順位の姿が現れた

「……………」

日頃は体格の分かりにくいドレスを着ている所為か、水着姿の絶対順位は完璧と言っても過言ではない身体を惜しみなく晒していたその様子を見て、曲音は笑いを堪えているが、堪え切れてなく、普通に笑い声が響いている

だが、声を荒げたのは絶対順位ではなく、絶対破壊

「あ、貴方はアアアアツツ！！こっちが骨を折る思いで物事に対処してるつてのに！！なんで水着なんか着てるんですの！？」

「い、いやあ…夏はエンジョイする物ですわ y」

言葉が発される前に、絶対破壊からどす黒い光線が放たれ、絶対順位の上半身が消し飛ぶ

…が、以前と同じように徐々に回復して行く

水着以外は

「な、な、な、な、何をっ！ただでさえ少ない布地を消し飛ばしてどうする気ですよ！？」

露になった、標準より若干大きい胸を両手で必死に隠しながら顔を真っ赤に染め、涙目で訴えかける絶対順位、曲音は思いつきり腹を抱えて大笑いしている、月山と戦神以外の男子勢は食い入るようにその様子を眺めている、特に上矢

（不味いな…日頃から風美丘の裸体を見てたら何もおかしくないように見えてきた…、不味いなあ…）

月山はそんな事を思いながらとりあえず、物凄い打ち解けている他の男子勢を眺めていた

一方戦神は

（ババアの体なんて見ても何も感じないな…それより、病院に居た、あの…エメス…とかいう子……………頼み込めば、抱かせて貰えただろうか…？）

いつもどおりの感想を述べ、思い出に耽る

仮想世界はその様子すらスルーし、次の指示を出す

しているのだから当たり前だが

三重香奈枝は風美丘と世間話に入り、戦神はずっと惚けている、逆坂と絶対順位は未だにいがみ合っており、曲音は未だに笑い続けている

月山は…、どうした物か…と考えつつ、ただ立ち尽くしていた、その時

「さて、全員揃いましたね…では、始めましょうか」

響く仮想世界の声、だが…この圧倒的に奇妙な雰囲気ではそれすらもギャグにしか聞こえた

26・反転色<lt>・Reversible<gt>;(後書き)

今回のまとめ・長い

27・作戦前&1t・Standby>・(前書き)

ネタバレ：特に今回は進展が無い

27・作戦前<Standby>;

「では、自己紹介から始めましょう、戦場で一番大切な事は自分の軍を把握する事ですからね、名前と簡単な能力の説明を…、私は仮想世界、大半の人物がご存知かと思いますが、脳内に仮想世界を作り上げ、あらゆる可能性をシュミレートする能力です……なので、私は此处で指示を出すことにします、君達は反論できないよ、私は絶対だからね」

仮想世界の言葉に対し、突っかったのは深川勝海、即座に反論する「呼び出して置いて指示だけってのは…ちつと許せねえよなあ…？そんなデカイ図体しといてよ」

「うっせ、重力子放射線射出制御装置で消し炭にすんぞ」

電力食いの頭部が二つに分かれ、内部から直方体の砲身が現れる「マジすみません、せめてヴィブロブレードにしてください、お願いします」

現れた砲身と仮想世界の脅し文句を聞き、即座に神速でジャパニーズ土下座スタイルを取る深川、周りは殆どが呆れた目で見つめるが、唯一曲音だけは未だに笑い転げていた、笑い袋状態だ

「では、次は…、お前だお前、えーっと…なんだ…？あの…うん…

お前、あ、そうそう、深川」

ジャパニーズ土下座スタイルから即座に立ち上がった深川は電力食いに背を任せながら言う

「どうも、深川勝海だ、俺の能力は威力操作、物を静から動へ変えるエネルギーを操作する能力だ、だから…こんな電力食いなんてな、三秒ありや沈めれ」

調子に乗っていた深川の顔の前に現れたチェーンソー、深川はそれを見て硬直

「じゃあ、次は……、そこで笑い狂ってる曲音さんで」

「ぎゃ、ギヤアアアアア！掠ってる！掠ってる！チェーンソーが

掠ってますよ奥さあああああん！！」

仮想世界は深川がいい加減気を失い掛けた頃チェンソーをしまい込み、やっと落ち着いてきた曲音は先程とは打って変わってクールなイメージを持たせる表情で自己紹介を始める

「曲音絵美よ、能力は模様替えトリックルーム、部屋を演算パターン化して構造を変化させる能力よ、例えば部屋Aから部屋Bに続く扉を作って瞬間移動、とかね」

「（ヒヤーツ、マジチェンソーとか鬼畜だわー、マジ怖いわー）はは、それは使えるな…覗きとかゴハアツイエス！？」

懲りない勝海は謎の提案を曲音にする、すると突如壁から棍棒が現れ深川を狙い一直線に飛ぶ

「そ、そ、そんな使い方しないわよ！馬鹿！変態！早漏！童貞！巨根！」

「ジョ、ジョーク…」

罵言と共に飛んできた棍棒が直撃し、深川は既にもう、いろいろとダメになっていた

曲音は何を焦っているのか、両手をバタバタと忙しく振り、全面否定する

無論深川は衝撃で気を失う

「と、と、と、特に！特に！逆坂の部屋なんて覗いてないんだからっ！」

場が凍結した、

これは明らかに逆坂の部屋を覗いてるという自白だろう、間違い無い

「……え？」

その言葉に当の本人、逆坂美羽は顔を硬直させて凍った笑みを浮かべる下着姿で

「うっさいわね！黙れ！黙りなさいよ！少しは！ああ！もう！いいわよ！馬鹿！バカバカバカバカッ！！」

半狂乱で腕を振り回しまくる曲音を上矢は何となく可愛いなあ、なんて思いつつ和んでいた

右を見るまでは

「雄一君？」

死んだ魚のような目で微妙な笑みを浮かべつつも何となく恐ろしい表情で上矢を見つめる逆坂下着姿で

「今、曲音の事、可愛いって思ったでしょ？」

「確かに俺はアイツを一瞬だが可愛いと思ったぜ、だが俺は謝らない」

何故か右手に限りなく白に近い炎を下着姿で揺らめかせる逆坂に対し、上矢は内心泣きそうになりつつも、必死でチャラける

「うっん、私、怒ってないよ、まだ一回目だから」

「申し訳ありませんでした、本当に申し訳ありませんでした、これからは精進致します」

二回目だったらどうなってたんだ、という思いと、まだ一回目でよかった、という不安と共に一安心したりなど、大変上矢の心は忙しかった、過労死寸前になる程に

「さて、次は…じゃあ、その…暇そうにPSPやってる平平さんで」

「ん、俺かあ、すまねえな、どうしてもジンオウガ倒せ無くてな…、なんかこう…超帯電状態になるとコツチもテンション上がって回復禁止縛りとかやつちまうんだよ…わかるだろ？」

わかんねえよ、と大半の人間が思う中、曲音は何故かギギネブラ…

…と呟き、頬を染めていた

彼女が何を考えてるかはご想像にお任せしよう、人の趣味、性癖を絶対に馬鹿にしてはいけない

グラビティショナルカノン

「話が逸れたな、俺の能力は…その名も『重力子砲』！！分かりやすく言くとギユイイイイイン、ギイン、バアアアアン、って事だ」

再びわかんねえよ、と大半の人物が思う中、曲音は何故か…もう止そう

「では、次夜詩さんで」

平平は流れるような動きで再びPSPをやり始め、上矢は何処から持ってきたか、自分のPSPを取りだし、『一狩、行こうぜ?』等といい始める

「私の能力は無意識者、^{ノースンカー}人の意識レベルを操作する能力…、この力は中々の物」

夜詩は得意気にクルクルと淡いピンクの布を右手の人差し指で回しながら言う

「……!?夜詩…!!その布…?!」

何かに気が付いた絶対破壊は急に頬を染め、声を張り上げる

「所詮、布だ……」

「人の下着を取っておいて…!!何キメ台詞を言ってるの!?返さない!!」

右手で黒い霧状の何かをバチバチと光らせながら左手を伸ばし焦った表情で絶対破壊は言う、その光景を見て月山は小さく一言、十二研には変人しか居ないのか?、と

相変わらず無表情で絶対破壊の下着をクルクルと回し続ける夜詩は逆坂に背を向け、言う

「手を貸して貰おうか?逆坂美羽、貴女と私の能力を合わせれば…今のヤツ一人なら勝てる…絶対修復は攻撃は出来ないし、絶対順位は手ブラで更に無き崩れてるから戦力ではない…そう、ヤツになら勝てる、絶対破壊のみなら私と貴女で勝てる…」

その言葉に逆坂は驚愕の表情を浮かべるが、即座に夜詩に向けて手をかざす

「……確かに、私はアイツ等をぶっ潰したい、でもね……今は争っている場合じゃない、とりあえず今は止めておくよ」

「とりあえず、?」

夜詩は、振り向かない。

「ふざけるんじゃない、そんなつまらない事はどうでも良い!理屈も理論もいらない、たった一つだけ答える最下位!!あと巨乳だからって調子のんな!!贅肉の塊だ!!」

夜詩は、息を吸って

「 テメエは、私怨を晴らしたくないのかよ? 」

最下位の吐息が停止した

「 テメエ、ずっと待ってたんだろ? 自分が一切傷つかなくても済む、簡単に私怨を晴らすことができる、そんなお前だけが笑ってお前だけが望む最っ高に最っ高な完璧に自己満足な結末ってやっ」

「 いい加減にしないと、その首、生ゴミとして捨てるよ? 」

「 馬鹿だな、君は実に馬鹿だな、そんな愚かな事していいと思ってるの? 馬鹿かい、君は馬鹿かい、そっだ、馬鹿だから胸がでかいんだよ!!! 馬鹿! 」

夜詩を本気で殺したくなつた逆坂だが、その胸のように大きな心で許す

「 はいじゃあ、次は…逆坂さんは別にいいか、戦神さんも別にいいしなあ、三重さんも別にいいか…上矢さんはふーふー爺さんです…じゃあ次、月山さんですね…彼は原子を縮小させ、出来る狭間に微小な原子を組み込む事によって物質を原子レベルで崩壊させる、物質が相手ならば最強です…で、次に風美丘さんですが…、本来の能力は『完全遂行』^{オルクリア}ですが、記憶喪失の為演算が不完全な状態となり、初期設定されていた身体能力の向上しか機能しないようです…、こんな所ですかね 」

仮想世界が簡単にまとめ、それに対し逆坂は若干不満そうに言う

「 別に私がスルーされたのが不満って訳じゃあないんだけど…、なんか、後半適当じゃない? 私がスルーされたのが不満って訳じゃないけど! 」

「 おい、俺なんて名前すら出なかったぞ! どういう事だ! 」

「 待てよ、ふーふー爺さんはもう忘れてくれって!! なんでこんな所まで出回ってんだよ!!! 」

「 だって、あんた等、話が逸れて長くなるんですもん、あと迷道さ

んはクチュクチュうつさいんですよ」

「ご尤もだ、と半分以上のメンバーは思う、実際かなり話が逸れて曲音なんて酷い事になっているし、迷道は本当にうるさい」

「さて、次は目標です、目標は十二研創設者『逆坂暦』、第一位担当研究者『睦月』、十二研第二位『輝夜望』、十二研第三位『四雲柴輝』、です。既に十二研の何人かは彼等の手に渡っており、恐らく何かの目的に使用されている物と思えます。貴方達には彼等の抹殺を頼みます、これだけの戦力があれば簡単な仕事と思えます…が、一応注意しておいてください、輝夜望の希望代償は今ではどれ程の力が想像できませんし、奴の人形は少なくとも五体は存在します。逆坂暦は以前開発されたスーツの改良型を装備している可能性もあります。四雲柴輝は恐らく、能力の最終段階である『無限回路』メルティングポイントに進化しているでしょう。そして…『睦月』、どうやら何か奥の手を隠しているようです、恐らく十二研メンバーを次々と誘拐しているのもその奥の手の為でしょう…、とにかく、気を付けてください、かなり真剣な面持ちで仮想世界は言うものの、平平は納得できない、といった表情を浮かべる

「待てよ。こつちの戦力はかなりのモンだぜ？たかが四人程度なら人海戦術…とまでは行かないけどよお、人数的な問題で勝てると思うぜ？」

その質問に仮想世界は、思い出したように説明する

「すみません、忘れてました…、どうやら、あちら側には逆坂暦のクローンを半分機械化した兵器『異形なる者』アラクネが恐らく…数百ほど存在します、よって…人海戦術が可能なのは此方ではなく、あちらです、その点をよく頭に入れておいてください、では、作戦は明後日としておりますので…、休養をとるなり、最後になるかもしれない一日を楽しむなり、ご自由に、どうぞ、よい悪足掻きを…、あ、ちなみに風美丘さんと絶対順位は残ってくださいね」

その整理を聞いたメンバーは次々に部屋から出て行き、絶対順位と風美丘は言われた通りに仮想世界の元へと集まる

「風美丘速魅さん、あなたの中に潜む別の人格に付いては…ご理解してますかね？」

「いいえ、余り…よく理解はしていませんよ、ただ、得体の知れない恐怖としか…」

風美丘は若干バツの悪そうな表情を浮かべ、苦笑いを浮かべる

「アレは、恐らくですが、あなたの記憶を失う前の人格でしょう、能力を完全に理解していますしね」

「過去の…私…ですか…？…それより、治療…できるんですか？」

「できません、本来なら多重人格の治療法は人格をどちらかに絞り込むのではなく、調和させ、一つにする事なのですが…、あなたの場合、過去の人格が強すぎる、癖がありすぎるのです、なので…調和させる事は出来ないでしょう、恐らくは…今のあなたが消える事になります」

そう、ですか…と風美丘はより一層表情を暗くする、が

「まあ、それは人道的で尚且つ常識的な治療法なら、ですがね」

「え…？それじゃあ…」

風美丘が仮想世界に問いかけようとした時、隣で服を着ていた絶対順位が突如口を挟む

「そこで、私の出番ですわ、あなたの中に潜む過去の人口を一時的に切り取る…、本来、私の人格破壊は相手の人格を自分に移し変え、自分の中で押しつぶす、という物なのですけれども…、先程も仮想世界が説明した通り、あなたの過去の人格は非常に強いので…だから」

次に仮想世界が少々申し訳なさそうに言う

「あなたの血液検査の際から入手したDNAによって作成したあなたのクローンにその人格を移し変えるんです」

直後、電力食いの右手が開き、中から出現したカプセルには髪が長い風美丘速魅と瓜二つな少女が浮かんでいた

「そして…それを…消す…」

風美丘が話の内容を理解した頃、ただし、と仮想世界は付け加える

「仮にも相手は完全遂行、今現在：我々メンバーでも屈指の強さを誇っています、勝てる可能性があるのは：現在機能していなくても、同じ能力を持つているあなただけです」

仮想世界の言葉に風美丘は問いかける

「では：結局機能しなければ…」

「ええ、あなたは簡単に殺され、終わります……だから最初に言いましたよね？人道的ではなく尚且つ常識的でもない、と……それでもやりますか？無理強いはしませんが……この治療に成功すれば、あなたの人格が入れ替わり、我々が内側から崩壊する、という最悪のパターンは避けれます、…が、もう一度言います、無理強いはしません、あなたが決めてください、我々はあなたがこの治療を否定したとしても、決して軽蔑したりはしません、嫌なら嫌、と言って下さい」

風美丘は言葉を聞き、何か決心したのか、覚悟を決めた顔で言う

「いえ、やります、私は言いましたから、あの能力が悪魔の力でも…、結果的に月山さんを救う事になるなら……1%に満たなくても、0%さえ超えていれば手を出す、と」

風美丘の瞳に迷いも恐怖も無かった、あるのは覚悟、のみ

27・作戦前&1t・Standby>:(後書き)

次の話は既に完成しているので明日には投稿されると思います

28・風美丘<Hayami>（前書き）

今回は本物の風美丘が速魅、クローンが風美丘、となっております

28・風美丘&It;Hayami>

「このドアを開ければ、中でもう一人のあなたが準備しています、入ったら全てが終わるまで開けませんわ、途中で助けが入るなんて思わないでくださいまし…、それでも入りますの？」

研究所の大きなドアの前に立つ絶対順位は三度目の繰り返しの言葉を言う

その言葉を聞き、決心を決めた風美丘は最近では全く見せていなかった表情を見せ、何度目ですか、と言う

最近では全く見せていなかった表情

『笑顔』

その笑顔を向けられた絶対順位は若干顔を背けつつ、ドアの前から退く

そして、風美丘はその重いドアを開き、中へと入る

それとほぼ同時にドアは閉まり、鍵が三つほど掛かる音がし、部屋の中央に寝ているもう一人の風美丘…、正確には風美丘のクローンに旧風美丘の人格を移した物は起き上がる

「…馬鹿ですよねえ…？…んくつ、私がこの体を溺愛、それこそ壊してしまいたいほどに溺愛しているのを知っていて…素直に私という存在を無くせばよかった物を…本当に馬鹿ですよねえ…？…？知らないとは言わせませんよ、何せ…私は貴女、貴女は私なんですからねえ…？」

風美丘の言葉に、速魅は苛立つ訳でもなく、恐怖を覚える訳でもなく、ただ、覚悟を前面に出す

「貴女を消さなくちゃ…何も始まらないし終わらないですよ」

速魅の言葉を聞き、風美丘は薄く笑いを浮かべ、言葉を返す

「私は消されちゃうんですね…私はあなたにそんな酷い事しませんよ？いえ…逆にもっと酷いかもしれませんが、私はあなたを『犬』にします、私という存在が無ければ決して生きていけない『犬』に

い……く、くふっ……！！さ、最高ですよねえ……！！最ツツツツ高
ですよねえええええええ！！」

直後、風美丘は自分の足に例の圧力注射器で薬を注入する、中には
媚薬が入っているのだろう、しかし、風美丘にとって、媚薬は戦闘
意欲を更に高めるドーピングに近い

そして、風美丘は狂ったように笑い出す

その異様な光景を見ても速魅は怖気付く訳でもなく、ただ、冷静に
身構える

「はぁッ！！はぁッ！！もう……ッ！！私は今から私を汚す……！こん
なシユチュエーションが完成する日が来るとは……！はぁ、はぁ……っ
！最高ですよ……ッ……！」

先に動いたのは速魅、超速反射の能力を無理の無いレベルで最高に
出し切り、右肩を狙う拳を繰り出す

それを風美丘は軽く避け、右手を掴む

速魅に以前のような絶対回避スキルは無い、過去の意識は今、目の
前の自分のクローンに納まっている

風美丘はそのまま流れるような動きで速魅の背後へと周り、後ろから
抱きつく形で両手の自由を奪い、更に速魅の右足に自分の右足を絡
め、身動きをとれないようにする

相変わらず風美丘はハッハッハッハッという荒い息遣いを繰り返し、
耳元で囁く

「言いましたよねえ？私はあなたを『犬』にします、だから……決し
て肉体は傷つけません……心はどうなるか知りませんがねっ　うく
くくっ」

そう言いながら風美丘は速魅の身体を胸から徐々に下に向けて、撫
で、喉元辺りに舌を這わせる

「はぁ、はぁ、どうです？私に身を委ねるとい手もありますよ？」

「う……、くう……こんのド変態がッ……！」

風美丘の手が下着に触れるかどうかで、速魅は体制を崩しながらも
左足で風美丘の横腹を蹴る

縛れ合いながら転倒するが、速魅は拘束から抜け出し、体制を整える、風美丘は再び狂ったように笑い、起き上がる

「はあ、はあ、…そんな変態もあなたの一部なんですけどね…んくっ、今の内に抵抗するといいですよ、それが最後ですから…く、くふ…んくく…ははっ！あっはア！！」

風美丘は直後に走り出し、撃退しようとする速魅の蹴りを回避し、そのままの勢いで速魅へと突っ込む、当然風美丘は立って居られるはずが無く、後ろに倒れこむ

今度は風美丘は速魅に覆いかぶさり、両手を両手で頭の上に固定し、二つの足を二つの足で封じる

完璧な拘束状態だ

「あ、ああ…いつみても素晴らしい体ですよねえ…はあ、はあ…ッ！！も、う、抑え切れませんよオ！！」

風美丘は速魅の制服のボタンを食いちぎり、段々と速魅の素肌を露にしている

「く…っ！！や、め…っ！…っ！」

風美丘は速魅のボタンを全て食いちぎると、露になった胴体に舌を這わせていく

「んっ…これが私の味…ッ！はあっ…！はあっ…！」

気色悪い感触に速魅は嫌悪感を覚えながらも、訪れるであろう隙を待ち、耐える

しばらく拷問のような時間が流れたが、突如、風美丘は顔を上げ、先程までとは違う表情で言う、先程までが欲情した獣なら、今度は獲物を狙う獣

「……………やっぱりダメですね、私には若干ズレている部分があるようです、……………私はどうしても……………性的行動よりも、暴力的行動に快楽を覚えるみたいです、殴るか殴られるかしてないとイライラするんですよねえ……………」

直後、風美丘の目つきが変わった、先程までとは違く、大きく眼を見開き、口を裂き、右手で速魅の両手を抑え、自分の左手を自由に

顔を近づける

「この綺麗な顔を見るのも最後でしょうから、ファーストキスぐらいは貰っておきましょうかねえ？」

風美丘の顔が接近してくるのに同調するように、速魅は素早く頭を振り、ヘッドバットを食らわせる

「ぐあッ……!?……くう……!」

風美丘は大きく揺らぎ、その間に速魅は拘束から再び抜け出し、体制を整える

一方、風美丘は不意の頭へのショックから今だ立ち直れないらしく、額を抑えながら、速魅を睨んでいる

「……き……か……痛いじゃないですかあ……」

風美丘は一瞬大きく揺らいだかと思えば、超速反射の速度ではありえない速度で速魅へと高速接近していく

「な……ッ！？く……畜生っ……！！」

眼に見えるはずが無い速度に対し、速魅は蹴りを繰り出す

「無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄アツ

!!どんな素早い蹴りだろうと!!どんなに正確な蹴りであろうと!!

この『完全遂行』の前では無駄アアツツ!!」

風美丘は速魅の足を踏み台にし、速魅の頭部へと強烈な踵落としを決める

「がっ……！？くあ……！！」

強烈な蹴りに、速魅は頭に風穴が開いたんじゃないか、という錯覚を覚えながら地面に勢い良く倒れこむ

「無理なんですよ、貴女には……、ただ少しだけ足が速くて、反応速度が速くてもですねえ、『超速反射』^{クイックリー}なんていう能力じゃ、LEV E L 4じゃあ……この世界では生きていけないんですよ!!」

風美丘は速魅の髪を掴み、虚ろな目をした速魅を見ながら言う

「どうです？ 全て私に任せて見ませんかねえ……？ 貴女はあの世でゆつくりそれを眺めていればいいです」

虚ろな目をし、思考も上手く回らない速魅だったが、弱い笑みを浮かべ、掠れるような声で言う

「…はっ…地獄に落ちろ、下衆野郎……」

その言葉を聞いた瞬間、風美丘は先程までの生理的嫌悪感を最高潮まで引き立てる笑顔を無くし、意味が分からない、といった表情へと変り、次には歯を砕かんとばかりに噛み締め、怒りを露にした表情となり、激昂し、

「うオオオおおアああアアああッッ！！！」

雄叫びを上げながら速魅を投げ捨てる

ありえない速度で投げつけられた速魅の身体は鉄製の壁へと衝突する

（は、はは…内臓潰れてませんか…？、少なくとも…骨は何本もイカれましたよね……）

「ふざけるな…、ふざけてんじゃねえぞ…、いいか？てめえには常識つてのが欠如してるようだから教えてあげますよ？今から死ぬのは貴女、地獄に落ちるのは貴女なんですよ？私は完全遂行、目標さえ決めれば絶対にその目標を遂行する、だから完全遂行、貴女の超速反射なんていうオモチャじゃあ私にまともなダメージを与えないんですよ？分かってるんですか？分かっているのかって聞いてんだよ、答えるよ、答えてみてくださいよ！ああ！？」

風美丘は未だに怒りを発散し切れない、といった感じで地面を踏み抜く

直後、鉄の床は拉げ、何本かの鉄の棒が飛び出る

それを風美丘は手に取り、綺麗なフォームを構える

「はははッ！！お前には何か目標があるんですかア！？この世の中ですわね、手段を選ばなくても結果さえ残せば勝ち組、他の奴等は負け組みなんですよ？わかんないんですかねえ！？」

（私の…目標…、目標…？）

霧が掛かった思考で考えると、速魅は一つの光景を思い浮かべる、自分が記憶喪失である事を間接的に月山に知らせたあの日、あの病院で誓った事、月山を攻略する、といった目標

「さよならですよ、新しい私…、風美丘速魅は今此処にお前から私へと！てめえのシナリオはバットエンド一直線で終了ってねえ！！」
風美丘は手に取った槍を目に見えない速度で投げつける

（そうですよ…！！まだ目標を達成して無いじゃないですか！！そ
うだ　私は　　）

速魅の胸へと槍が刺さる、風美丘はその様子を見て、自分の時代の到来を確信する

が、直後、風美丘の表情はまるで、怪奇現象を目の前にでもしたかの様な表情へと変る

「な……あ……？」

速魅は突き刺さったはずの槍を投げ捨て、ゆっくりと立ち上がる、肌が露になっている所為もあり、よく見えるが傷が閉じていく、逆再生のように

「なに化け物を見るような目で私を見ています？……はあ、貴女が私の一部であるように、貴方が私であるように、私も貴女であり、私も貴女の一部なのです？完全遂行が使えてもおかしくないじゃないですか」

先程までの弱弱い気配は全く無く、いつも通り、いや、いつも以上に生命力溢れる速魅の姿があった

「あ……！！？」

風美丘は気が付く、知らず知らずの内に

自分が後退りしていた事に

「は……はは！！勝てる、私なら勝てるう……！！同じ完全遂行なら……使い慣れている私が……有利……」

風美丘は先程までの狂気の欠片も無く、弱弱しく自己暗示を掛けるだが、速魅はその姿を見て、呆れたように言う

「はあ……ですから、完全に記憶が戻った訳では無いとはいえ、私と貴女は同じなのですから……経験の差などありませんよ、知ってますよね？私は頭より身体で運動を覚えるタイプです」

それに、と速魅は付け加え

「私は此処では止まりませんよ」

直後、速魅の背からは黒い翼のような物が出現する、学園都市第二位【未元物質^{ダークマター}】の翼をそのまま黒の絵の具で塗りつぶしたような、鴉を彷彿させる黒い翼

「なあ……っ！？何ですか…それは…！？」

風美丘の質問に対し、速魅は答える義務は無い、とでも言うかのように右手を横に軽く振る

「対象と壁の距離をゼロにするのに、一瞬」

速魅は旧風美丘のように呟く、すると、風美丘の身体は勢い良く右に吹き飛び、壁に激突する

「があっ…！？嘘だ…！こんなもの…！完全遂行じゃない！完全遂行の効果が適用されるのは【自分を主軸とした目標】のみ！こんな事…出来るはずが無い！」

風美丘は激痛に耐えながらも、速魅を睨む

「ええ、昔の貴女にはできませんよ、これが、旧型と新型の違い、ってヤツですかね……まあ、私も恐らく何時でも使えるって訳じゃないんでしょうが」

先程と立場が逆転していた、風美丘は正常な思考を失い、速魅の元へと突っ込む

「貴女には随分と苦悩しましたが…ッ！これで終わりですよ！」

疾走する風美丘の喉元に速魅は翼の先端を突き立てる、その瞬間、速魅は見逃さなかった、風美丘が子供に母親が見せるような柔らかい笑みを浮かべていた事を

翼の動きと、風美丘の動きは止まり、速魅は先程の表情について考えるが、答えは見つからない

風美丘はそんな速魅を見て、先程と同じような笑みを浮かべ

「あなたの部屋のハードディスクの中」

その一言だけを残して、翼を自分の首へと突き刺す

赤い鮮血が飛び散り、風美丘は完全に沈黙する

…

速魅…、風美丘は自分の分身であつた物から翼を抜く、すると翼は消滅する、風美丘は軽く体の調子確かめ、ドアを三回ノックするすると、鍵が外れる音が鳴り、ドアが開く

「……旧か、新か、どちらだ？」

ドアの前で待つていたであろう月山は風美丘に問う

「………何も解決していません、これでは………光二さん、行きましよう」

いつもとは違う態度に月山は少々驚くも、若干安堵した表情で小声で言う

「……新、か……よかった……」

「ん？今何か言いましたか？ふふ、そんなに心配だつたんですか？」

絶対に聞こえないような声で言つた筈だが、何故か聞こえたらしく、風美丘は振り向きながら、ニヤついた表情で問いかけてくる

「別に」

「デレたな！ツンデレめ！」

「デレてないし、私はツンデレではない」

「顔真つ赤にして何言つてるんですか？ん？はは、You！素直になつちやいなYO！」

「そおいッ！！」

直後、月山は容赦なく風美丘を背負い投げする

「ぐハあっ！！先程の攻撃のどれより痛いッ！！というよりなんと心無い事を！！」

「知るか」

月山は更に深く安堵する、何時もの常識ハズレな常識が帰ってきたな、と

…

風美丘の自室、月山は先に自室へと戻った、そして、風美丘はハードディスクを分解し終わり、中には一枚のディスクが入っていた、速魅は疑問を解消すべく、DVDプレーヤーにディスクを入れ、再生する

しばらく砂嵐が続き、先程まで戦闘をしていた、旧風美丘の姿が現れる、先程までとは違い、若干緊張している表情だ、背景は見慣れた自室であることから、恐らく、全く同じ場所で撮影されたのであろう

『えーっと……何、言ったらいいんですかね……？えーっと……あー

……多分、私がこの映像を見ているときは……？何か変ですね……まあいいか……えと、この映像を見てるって事は、多分……私を殺した後だと思っんです、最初に謝ります、ごめんなさい、多分、私が見た私は無茶苦茶な奴だったと思います、でも、私の性格を変更して、完全遂行を持たせるにはこうするしか無かったんです、荒っぽくてすみません……でも、完全遂行を貴女は使えるようになったと思います、……いいですか、その力の使い道を間違えないでください、その能力は強力です、望んだ結果を絶対に手に入れられるのですから、欲も当然出てくると思います……でも、打ち勝ってください、その欲に、……頑張ってください、月山さんを……頼みますよ、合言葉は【記憶を取り戻すのに一瞬】』

映像はそこで終わっていた、まだ若干の疑問が残っている風美丘は自分の右手に手を当て、言う

「記憶を取り戻すのに一瞬……」

直後に風美丘の脳内に流れ込んでくる映像

最初に火事で焼かれる家と両親
次に親戚に預けられ、幸せに生活するも束の間、強盗により殺される親戚

そして、行き場の無くなった風美丘は学園都市へと置き去りとして入る

自分の能力を上手く隠蔽し、身体向上系能力として、生活する自分

そして、多くの友人が出来た、が

帰宅途中に数人の暴走能力者に襲われ、死んでしまう友人、だが自分
は友人に庇われ、逃げることしか出来なかった

そして風美丘は決意した

自分ではダメだ、次の自分を作り上げよう

そして、風美丘は御代と共に行動している際に輝夜の事を知る

そして、風美丘は能力により一つの答えを得る、輝夜という人間は
いずれ私の記憶、そして人格を奪う

風美丘はその答えに従い、映像を撮り始める

死にたく無い、肉体は死なずとも、自分の意思が消えるのが怖い

そう思い、涙を流しつつも、映像を撮る風美丘

そして、輝夜に風美丘は全てを文字通り奪われた

そして、次からは自分がよく知っている光景が流れ

次には、あの狂気の際の考えが流れ込んでくる

それは

『なるべく安全に完全遂行を機能させる為に、自分との戦闘を故意
に起こす為に殺意を抱かせる事』

殺意を風美丘に抱かせる為に、狂気の演技をし続ける自分

友人や家族を救えないほどに戦いを拒む者が、あそこまでの狂行に
走るのは、どれだけのダメージが与えられるのだろう

「うっ……うっ……ああ……あ……」

そのときの感情が流れ込んだ際、風美丘は壊れそうになる

ありえないほど、まるで生きたまま全身の皮を剥がされる様に良心
を痛める

そして、次には先程の戦闘中の心情が流れ込んでくる

「うっ、うっ……うっ……ああ……あ……あ……」

一種の拷問に近いが、風美丘は涙を流しながらも耐える

戦闘中の心は恐怖で埋め尽くされていた、人格が壊れ、廃人になっ
てもおかしくないほどの恐怖

「……………ッ！……くっ！」

それを押さえ込んでも
自分を狂気の者と見せ

「……ッ……！」

更には

最後には

自分から首に翼を差し込み、首を切り落とす時も笑顔で
最後まで泣く事も無く、全部、やり切った

「……ッ……！ やってやりますよ……！ 絶対に……！」

風美丘は誓った

自分もやり切る、と絶対に光二を攻略してみせる、と

彼女、風美丘速魅はこの日、全てを思い出し、全てを背負うことで、
完成した

『大きな力を得ていても、何も救えず、その罪を受け入れ償いの為
の地獄を進む者』

28・風美丘<Hayami>（後書き）

空気使い先生は、大分この話を気に入っていたみたいですけど、まあいいですね

それよか、何話か先にオマケとしてトーナメント形式の能力者バトルを行う予定なんですけど、その際に希望にあった原作キャラクターも入れたいと思っています、なので、何か出して欲しいキャラクターがあれば感想に書いてください、書かれた奴は全員出すつもりです、人数は考えずに、出して欲しいキャラクターの数だけ書いてください

29・四ツ足<pretender>・(前書き)

ネタバレ：特に進展無し

ああ、私だ…めずらしいな、貴方から私に連絡…か、仕事の予感し
かないな

予想通り…なんだろう？…はあ、少しは休みをくれ…今も後処理を負
えた所で疲れてるんだ……

……。いいさ、私は結局貴方には逆らえないからな

で、今回はどんな仕事なんだ？なるべく楽なのを頼む

何？十二研内部が二つに割れた？……なるほど

はあん、…で、一つは睦月率いる軍勢、もう一つは第一位三姉妹が
率いる軍勢…ねえ、どっちもどっちだがなあ…

で、どちらを消すんだ？……分かった…で、私はどうすればいい？
現場に行つて全て片付けるのか？三時間もあれば終わらせられると
思うが？

……何？それは本当か？…新、旧、どちらだ？

…なるほど、では私はどうすればいい？あの子に直接手を出すのは
お断りだ、第一勝てる見込みが無い

ああ、分かった……結局はそちらを潰すのか

一応援軍を渡すのか？…それで私には仲介人になれと？……ああ、
分かったよ

大丈夫だ、安心してくれ

貴方の期待は絶対に裏切らないよ

風美丘の名にも掛けてね

ああ、大丈夫だよ。私達の目的は同じだろう？だから私は貴方に協
力しているんだ

『能力者達に自由を』

…

十二段階分解式完全能力者開発研究所内部には、五つの影があった、一つは白すぎて白ではない影、一つは右手を握ったり開いたりを繰り返し、自分の体調を確かめる影、一つは以前逆坂が使用していたスーツに似た物を装着している影、一つは何か落ち着かない様子で行ったり来たりを繰り返す影、そして最後は両手に黒いグローブをし、両足にも黒いブーツを履いており、頭には軍事に使われそうなゴーグルを付け、青い光が中で回っている首輪をした男

「おい、輝夜：誰か来てるか？」

逆坂が以前着用していたスーツを着こなした男、暦計画発案者、逆坂暦は白すぎて白ではない男、輝夜望へ問い掛ける、すると輝夜は歩きながら答える

「ええ、施設の前に全員が、……そろそろ準備に取りかかったほうがいいでしょう」

その言葉を聞いた特殊な首輪をした男は楽しそうに、にやにやと笑いながら言う

「んじゃ、始めますかってな、楽しいお祭りの始まり始まりってか」男は施設の壁に右手を当てると、次は左手を右手より上の位置に出し、次に右足を壁に：という行動を繰り返し蜘蛛の様に男は壁や天井を渡っていく

「ハハッ、スパイダーマンってかあ？ユニークだねえ、……んじゃ、俺もそろそろアイツ等の人生コンテニュー不可にしてくるわ」

調子確かめていた男、四雲は口が裂けたような狂気的な笑みを浮かべながら歩みを進める、四雲が歩いた場所は高温で熱せられ、オレンジ色に染まっている

落ち着かない様子であった男はいつの間にか動きを止め、無表情に近い笑みで歩んで行った男達の背中を見ながら一言

「うん、行つてらっしゃい、頑張つてね」

：

『恐らく推定ですと、中にはレーダーで感知できる限りでは異形の者が百体ほど存在します、何せクローンに機械を付けて終わり、ですからね、大量生産はお手の物です、いくらあなた達が強力な能力者であっても油断だけは絶対にしないでください』

「わーってらあ」

平平は手に持った小型の機械から発せられた仮想世界の声に軽く答え、目の前の施設の扉に手を沿える、手を添えた場所から扉は無理矢理左右に押し潰されるようにして扉の隙間は広がっていく

「ま、俺の能力は『重力子砲』つつても、重力を操作する能力なわけよ」

誰も聞いてねえし、誰も説明求めてねえよ、と心の中で各々は大体似た事を言う

そんな時、深川が突然声色を変え言う

「捨て駒のお出ましだぞ」

ガシャリ、という足音を幾つにも重ね、ゆっくりと軍勢は近寄ってくる

その軍勢を見て月山は一言

「どこかで見た事がある形だな……」

出迎えの異形の者の数は約三十体

「随分な数のメイドだな、こりゃ天国だ」

深川は口笛を吹き、大して嬉しくなさそうな声で言う。当然だがそんな深川に対し、異形の者達は白い切断された境界を放つが、三重神苗『絶対破壊』は直後に黒い壁を発現させる。当然切断された境界は黒い壁に打ち消される

その様子を見た絶対破壊は呆れながら言う

「くだらないことを言っていないで！全部ぶっ潰して終わりにしませんこと？」

黒い壁を消したと思いきや、今度は黒い光線で三体、四体、と次々に破壊していく

その様子を見て曲音は天井の形状を変化させ、次々に異形の者を潰

していく

「はあ、全く…私達はあなたみたいに不死身じゃないのよ？」

愚痴を言いつつも、何処か楽しそうな顔をした曲音も絶対破壊と共に進んでいく

後ろで立っていた他のメンバーも次々に前進する

そして、群がっていた異形の者達が肉と鉄の塊へと代わった頃、メンバーは部屋の奥に三つに分かれた道がある事に気が付く

「いかにもって感じよね、じゃあ…月山さんと風美丘さんと曲音と亜樹は左、上矢さんと逆坂と絶対破壊と戦神は右、私と絶対修復と深川と迷道は前、という事で」

絶対順位は適当か狙ってかは分からないが、見事な分担をする。日頃なら絶対順位には反発する逆坂もこの分担には納得したようで、無言で笑っている

大体のメンバーは納得したようで、指示された道を歩んでいく、：

…ただ一人を除いて

「ま、待てつつうの！お、俺どこも分担されてねえよ！？」

完璧に疎外された平平は指示を求めるも、絶対破壊から無情な言葉が下される

「そこで見張る、というのも中々やりがいのある仕事だと思いますわよ？」

一番張り切ってる人物に待機命令を出すのは如何な物か、と数人は思っても、まあ、平平だし、という理由で気にせず各々の道を進んで行く

平平は第一位に言われたからには待機するしかなく、その場に腰を下ろす

：

残された平平は先程から落ち着きなく歩き回っていた

「だー！やっぱ無理だ！じっとしてらねえつつうの！」

そんな若干イライラし始めた平平を観察する影があった

『此方イミテーションあ有象無象、作戦始めっから入り口の扉封鎖してくれ』

天井に張り付き、頭部に付けていたゴーグルを目に当てる、その動作が終わると同時に三本の道は上からシャッターが閉まり、入り口は上から新しいシャッターが残骸を押し潰しながら現れ、完全に密封状態にする

突然の封鎖に驚く平平の様子を見てゴーグルの男はにやりと笑う
すると首の青い光りは赤い光りに変わり、回転の速度を速める

直後、三つほどある通気孔から最初は三体の異形の者、それを追うかのように何十体もの異形の者達が雪崩れのように押しかける
突然の封鎖に驚いている平平はそれに気が付きもしないが、代わりに小型の機械から仮想世界の声が発せられる

『平平さん！気を付けてください！あなたの居るフロアにのみ異形の者が多発しています！』

「うおっ、驚いた…けどよお、そんなの何処にも…」

仮想世界の焦った声に驚きつつも言われた物を探す平平、何かの間違いだろう、と思った矢先、壁に張り付き、手を此方にかざす異形の者に気が付いた

「あ、居たわ……って多ッ！！百体なんてもんじゃねえぞ…！？」

一体見つければ後は自然と目に入ってきた、やけに高く、上の方は暗くなっており傍からすると上限が無いように見える天井までびっしりと並ぶ赤い光、しかも先程までの異形の者は上半身は生身の人間であったが、今度は白い鎧のような物を身に着け、傍から見れば蟹のようであり、何より顔には発光する赤い光のスリットが何本も入っており、それが異形の者の数の多さを強調している

「しかも何かバージョンアップしてやがる！？」

その白と赤の雪崩れは突如動き出し、読んで字の如く波の様に平平へと襲いかかる

「くそっ…この量…行けるか！？」

平平は直後に強力な重力を掛け、何機か潰すが、焼け石に水で雪崩

れは勢いを留めることなく襲いかかる

次に重力の壁を作り上げ、突っ込んできた異形の者を叩き潰すが、不意に波の中の一機が自分の前に存在する異形の者ごと平平の右肩を打ち抜く、平平は痛みにより一瞬演算を狂わせ、重力の壁を解除してしまう

その瞬間、決壊したダムのように異形の者は平平に近寄り、後頭部を殴り気絶させる

それを観察していたゴーグルの男は二機程に平平を運ぶ命令を出し、再び携帯で連絡する

「平平甲を確保、次の段階に移る、って事でシャッター上げてくれないや」

三本の道を塞いでいたシャッターは上がり、男は通気孔へ、異形の者たちは揃った足取りで三本の道をそれぞれ行く

：

月山、曲音、夜詩は恐怖に怯えていた、異形の者にはない、風美丘にだ

彼女は先程から鼻歌交じりに出会った異形の者の頸椎を引っこ抜く作業に集中している

その異様さに三人は実は過去の風美丘じゃね？等と考えるが、結局の所彼女達は同じ一人の人間な訳だ

過去の風美丘は力があつたが戦闘を極端に恐れていた、そして現在の風美丘はどちらかと言えば好戦的な性格だ

それに完全遂行なんて強力な能力が加われば必然とこうなるだろう
「は、速魅イ……」

「ん？どうしました？光二さん」

帰り血で顔やら服やら赤く染めながら元気な笑みで答える風美丘。その無邪気な笑みがむしろ危険な笑みに見える、しいて言うなら虫を潰して笑ってる子供か、蟻とかではなく蝶や飛蝗のクラスの虫

その笑顔を見て曲音、夜詩は敵じゃなくて本当に良かった、と心の底から思う

自分達の後ろに並ぶ軍勢にも気付かずに

短い呻き声をあげて倒れる曲音と夜詩、月山と風美丘が振り向けば総数軽く百は超える異形の者達

曲音と夜詩の姿は既になく、白い海にいくつもの赤い光りが蠢いている

「これはあ……私にはちょっと無理ですねえ……」

風美丘は若干驚いたような表情で白い海を見つめて言う

それに対し月山は発光する紫の刃を作り上げるが、動きを止める急に攻撃を止めた月山を見て、風美丘は険しい表情へと変わり、誰にでもなく話しかける

「……来るとは思っていましたか……まさか、このタイミングで……」

「ええ、このタイミングで、ですよ」

白い海の反対側には更に白く、白ではない悪魔が立っていた

更に輝夜の背後には月山と同じような状態の人間が五人程立っている

「生きる希望はこうでした、『他人の希望を食らい尽したい』、それを解釈した結果……希望代償、私が出来上がった訳です」

風美丘にとってこの状況は手詰まりであった、風美丘の完全遂行の能力が適用される範囲は自分を主軸とした目標のみである、通常時は、だが

しかし、本人自身あの時の翼の発動条件が全く分からないので好き勝手使うことはできない

六人の希望代償と月山、そして異形の者達が攻撃姿勢を取った瞬間爆発音と共に異形の者達のすぐ横の壁が発破された

「無事進入成功、とキリサメは自身満々に言い張ります」

「ごめん兄貴、俺の能力が普通のテレポートをできないばかりに

……！」

「いいや！深谷！お前は悪くない！お前は悪くないんだ！このぶつ飛んでるメイドが一番悪い……！」

聞き覚えのある三つの声と三つの姿があった

「……ああ、キリサメさんに峰織兄弟ですか……」

風美丘は直後に呆れた声を出す

その声に対し何を勘違いしたか、そもそも頭がおかしいのか峰織兄弟、兄、峰織刻深はハイテンションに答える

「風美丘様^{かっさみがおか}アー！ブラド・ツペシュの素晴らしき末裔ことバラバラに刻むよきざみん峰織刻深が来ましたアーツ！」

「確かに、脳なさそうですもんね」

結局頭がおかしい峰織兄弟、弟、峰織深谷は兄に負けじとハイテンションに言う

「コツチも見てくださいよ風美丘様！悪魔の弟こと495年掛かっても降りきれない深いし不快な谷こと峰織深谷も来ましたアーツ！」

「確かに不快ですね、ワンコインやるから帰ってください」

「ふっ……お嬢ちゃん、コイン一個じゃあ……人命も買えないぜ？」

「二度とコンテニユーできない身体にしてやるのか？」

「ま、マジすみません……お、俺、調子に乗って……」

くだらない茶番を黙って待つ輝夜はわりといい人間なのでは？等と言う発想が風美丘に現れかけた時、キリサメが無表情＋下手な笑いという最悪のコンボと共に風美丘に話し掛ける

「ふふ、特にいう事も無いのですが……とりあえず、風美丘様、お前は何人の異形の者を殺した？」

「あなたは今までに食ってきたパンの枚数を覚えてますか？」

「0です、常日頃からカロリーメイトしか食わせてもらえませんでした、最近では食事すらとってませんよ、必要なので、とキリサメはカロリーメイトはチーズだと内心思います」

「あ、なんか……ごめんなさい……カロリーメイトはどれも不味いです」

「なん……だと……？」

好物、というか唯一口にしたことのある食物を全面否定されたキリサメは相変わらずの無表情での反応をする

そんな時、ちゃんと待機している異形の者も中々に可愛いんじゃないか？と風美丘は若干危険な思考をし始めた所で

「先手必勝！とキリサメの素晴らしき交渉術を披露します」

光刃を作り出し、何処かの無双ゲームのように異形の者をバツバツサ切り倒すキリサメ、先手必勝というより不意打ちだろうと思いつつも：

「究 極 合 体！」

何十体もの異形の者が深谷の能力によって一箇所に集められ、見事なキメラが完成する

異形の者が白い切断された境界を放つが、刻深がそのベクトルを一部に集め、そこから更に輝夜に向かって放射する

輝夜は自分の周りに能力を強制解除する空間を作り出し、境界を打ち消し、お返しとばかりにどす黒い赤い三日月型の衝撃波を放つ

「止まって見えますよ？その攻撃」

風美丘は軽い動きで攻撃を避けるが、輝夜は衝撃波を放った構えのまま言う

「ええ、確かに貴女には当たらないでしょう。しかし……月山光二さんはどうでしょうか」

月山は動きを止めたまま見る角度によって色が変わる目で虚空を見つめている

「卑怯な真似をつ……！」

「卑怯もラッキョウもあるものか、とね」

風美丘は空中を蹴るような不自然な動きで月山の元へと戻り、月山を担ぎ風美丘は即座に再び高く飛びあがり輝夜と五人の希望代償を飛び超えて、降り立つと、月山を輝夜と逆の方向に勢い良く投げる地面に叩き付けられると同時に意識を取り戻した月山は現状を確認し、何も言わずに先に進む

「おや、効果範囲内から逃げられてしまいましたか……。まあいい

でしょう、^{クイックリー}超速反射。風美丘速魅さん…片足を失った貴女に勝ち目はありません」

振り返り、膝の下から綺麗に切り取られた風美丘の右足を見て、輝夜は言うが

風美丘は痛みにも顔を歪ませながらも挑戦的な笑みを見せる

「一つ訂正ですよ、『超速反射』レベル4ではなく、『完全遂行』レベル5.5、人殺しですよ」

最初に骨が再生し、そこに肉付けするかのようには風美丘の右足は再生する

その様子を見て輝夜は驚くでもなく、右手を前に差し出し、言う

「おかえりなさい。風美丘速魅さん」

「嬉しくない出迎えですね、……私はもう躊躇しませんよ。人殺しですから」

そう言いながら風美丘が一瞬消え、戻ると

五人の希望代償は倒れ、戻った風美丘の手元には白い何か握られていた、それは

五人の希望代償の頸椎

「成る程。確かに完全遂行ですね」

輝夜はそう言いながら瞳と同じ色をした剣を作る

「……ありとあらゆる物を無くしてでも手に入れる価値があるもの、それは何でしょうか。財産、権利、絆、友、家族、愛、…」

剣を一振りすると風美丘の身体は紙くずのように吹き飛ばされる、風美丘は空中で体勢を立て直し見事に地面に降り立つ

「ある人の生きる希望はこうでした、『理想郷を作り上げたい』、私がそれを解釈した結果…」

より良い方向へと導いてくれる剣、理想郷を作り上げる為に私に力を与えてくれる剣、絶対勝利の剣…不敗の剣、数々の名前を付けられるでしょうが…最も相応しい名前は『理想郷の剣』」

「フレイの剣ですか？一度も敗北の描写が無い神話上の武器…、まあ、描写が無いだけで裏では負けてるかもしれませんがね。どこぞの

装備者の意識や運動能力とは無関係に自動的に最適な判断を取るシステムを付けた駆動鎧も中の人間がそのうち負担で死ぬように、フレイの剣も同じなんじゃないですか？その剣を振るうのは人間ではなく、その剣を振るう為には人間と言う使い捨てのパーツが必要、という事では？」

：

「手応えが無いですね」

絶対破壊の一人勝ちであった、増援らしき異形の者達も絶対破壊の能力の前には塵と同等だった

「塵も積もれば山となる…ねえ」

逆坂は若干遠い目をしながら言う

そこで上矢が軽い口調で言う

「まあ、なんか…意味分かんない間に勝手に…なんか巻き込まれたけど…これなら大丈夫そうだな」

見事にフラグである

このフラグは即回収され、声が響く

「そちらの人はフラグを立てるのが…お上手なようでありんすなあ」

声の主は黄色を主にした着物を着こなした妖艶な女、綺麗に伸ばした黒のロングヘアを一部だけ白く染めている

「そうねえ、罪な男よねえ…でも人生に罪がある事はいい事よ、

『罪の無い人生などスパイスの効いて無い料理だ』って聞いた事があるし、実際私はそう思うわ」

次の声の主は医者に着ているような白衣を着用し、頼れる優しいお姉さん、といったイメージを持たせる女。また、底知れぬ余裕が見るだけで分かり、得体の知れない恐怖も同時に覚えさせる

「じゃあ、取り分決めるよ。あたしがあの戦神ってヤツやるからオマエは上矢ってヤツやりなよ」

次の声の主は小柄で人形のように可愛らしいが、その容姿に反し背中に巨大なコウモリの刺青、その背中を強調するかのように背中が全て露出している奇妙な服を着こなしている少女

「ん？上矢つて空力使いだっけ？別にいいけど？…あ、でも弱かったら交換してね」

次の声の主は金髪に青と灰色の混じった眼、遠目に見ても外人である事が一瞬で分かる少女、派手な髪色に対し、黒を主にした服装の為、首の付け根までの金色の髪はより一層目立っていた

「相手に失礼でありんすえ。どんなものが相手であろうと完璧に容赦なく粉碎するのがわっち達でありんしょう？…さて、行きましょう？」

着物を着こなした女がそう言つと背中に巨大なコウモリの刺青の少女は答える

「ま、それもそっか」

そして余裕を持った白衣を着た女は言う

「んじゃ、行くわよ？ワイアード、コウモリ、あなた達はさっきの分担で構わないわ。サソリ、あなたは完全焼失ちゃんをお願い、私は絶対破壊ちゃんをやらせてもらうわ」

白衣の女の指示を聞いたサソリと呼ばれた妖艶な着物を着た女、ワイアードと呼ばれた金髪青眼の少女、コウモリと呼ばれた背中に大きなコウモリの刺青の少女はそれぞれ答える

「わっちは構いんせん」

とサソリ

「楽しいコンサートが始まりだよ！」

とコウモリ

「うん、分かったよ。お姉様」

とワイアード

突如現れた四人に上矢達は戸惑っていたものの、とりあえず友好的な物では無い。と確信したのか戦闘の姿勢を取る
そこで、白衣を着た女は言う

「地球という巨大な基盤、その一部を埋め込まれた私達にあなたが何処まで戦えるのかしら？」

29・四ツ足<it;Pretender>;(後書き)

今回は真ん中のルート行つた人達、輝夜vs風美丘、右ルートの戦闘、ラストバトルの豪華(?) 四本立てとなります!

では、次回も見てくださいね!

ジャン・ケン(1936~2010)

30・激昂焰&It・Flame> ; (前書き)

大変遅れました！お許してください！

しかも何と今回だけでは納まりきれず又三話程になってしまいそうです！本当に申し訳ございません！

30・激昂焰<Flame>;

暗くも明るくも無い部屋、昼の自然の明るさとも、夜の人工的な明るさとも、どちらとも取れる明るさに満ちた部屋

殺風景な部屋にはテーブルが一つ、そしてそのテーブルを囲むように椅子が四つ

その一つに一つの少女が座っていた

少女の名前は夜鳥命。彼女以外には探知する事も発見する事も触れる事も観測する事も不可能な物質

『幻視物質』に存在する意味を持たせ、性質を設定し、自由に扱うことのできる能力を持つ少女

夜鳥はテーブルに一枚の白紙を広げ、その白紙の先に何かを見るかのような目で白紙を見つめている

不意に夜鳥の手が動いた、次の瞬間には鉛筆、色鉛筆三十二色がテーブルの上に出現する

無表情で無機質に白紙に自由に描く夜鳥

…十分ほど経っただろうか、夜鳥はふと、自分の書いている絵を見るそこにはよく見られる普通の家庭の食事の様子

父親と思われる男、母親と思われる女、兄らしき男、娘らしき女

四人がテーブルを囲み、楽しく食事をする絵

しかし、絵には何かが足りない

…顔だ、全ての顔が黒で塗りつぶされている

夜鳥はふと気付いた、自分が涙を流している事に

「……楽しそうだよねえ、本当に……本当に……」

絵に手を置くと手を置いた場所から円形に炎が広がり、紙は燃え上がる

揺らめく炎を見ながら夜鳥は呟く

「……私には必要ない……。家族、友人、恋人……全て、必要……ない……」

…

上矢雄一空力使いlevel4に対しワイアード。

傍から見ればアウトドアな高校生がそこらに居た中学生を虐めているようにしか見えない…が

能力者なんて物が普通に存在するこの学園都市ではそのルールはあまり通用しない

硬直状態が続く中、ワイアードが先に言葉を発する

「お前はレベル4でしょ？大能力者…。その能力で何人傷つけた？何人脅した？どれだけ好きな事をやった？」

急な質問に対し上矢は意外と冷静に答える

「好きな事はやってるけどなあ…。悪事を働いた事はないぜ？」

上矢の答えを聞き、ワイアードは非常に楽しそうに言う。まるで日常の会話を楽しむように…

「かーっ！痺れるねえ、そこ等の人を助けて善人気取りですかあ？今時面白い人も居るものだねえ…。アイツなら喜ぶだろうよ、」

先程から若干口調を乱しつつも相変わらずな調子で話し続けるワイアード。彼女が牙を剥くのはくるくると回していた人差し指を止め、その指で上矢を指差した時だった

「ところ、で…あなた、もしかして私に勝てる。とか思ってる？だったらその考えは…>>捨てろ<<」

突如ワイアードの声はエコーし、それと同時に衝撃波が発生し地面や壁が抉れていく。上矢は衝撃波に直撃するが、空中で体勢を立て直し宙に留まる

「ハウンドボイス振幅増幅、自分の声を使って音波をコントロールし、衝撃波を作り出す能力……」

上矢はワイアードが悠長に説明する中両手に空気摩擦で作り上げたオレンジ色の剣を作り出し、ワイアードへと突っ込む

その様子を確認したワイアードが取った行動は避けるでもなく、た

だ、右手を上矢の顔の前に付きだすだけ

それだけで上矢の動きは止まる。上矢は一瞬驚くが、即座に右手の剣を振り下ろす、それに対しワイアードはまるで上矢から透明な糸が出ており、それを動かすように左手を動かす

「人の話は聞かないと、ね？こんな中学生のガキの話なんか聞きたく無いだろうけどさ」

ワイアードは上矢に哀れむような笑みを浮かべる、それと同時に上矢の両手は上に吊り上げられる。上矢は何度も剣を振り下ろそうとするが思いに反し、体は動かない

ふと、上矢は思い出す。以前にもこの様な一方的な戦闘があったはずだ…、そうだ、あれは

デュアルスキル
…多重能力者！？」

その言葉を聞いたワイアードは歪んだ笑みを無理矢理堪えたような笑みを浮かべ、言う

「ああ、そうか……あなたにとってはリベンジマッチなのか……。知ってる？あの木原幽平って奴はね、特殊な技術を使って多くの能力を得ていたの、いわば全ての能力が借り物。でもね、私は違う。これらは全て私の能力」

「能力は一人につき一人のはず…！そんな事は絶対にありえない…

！！」

ワイアードは相変わらずの表情のまま実に愉快そうに言う

「そうだね、一人につき一つ…。でも私は違うよ？だって、私は特別だから。納得した？」

納得できるか、と上矢は内心想いつつも、何とか剣を振り下ろそう

ともかく

サイコキネシス マニピュレーター
「観念動力に人形使い」

誰に答えるでもなく、自分に言い聞かせるかのようにワイアードは
呟く

オーバーードエレクトリック
「そして、異常発電」

ワイアードの左手の手のひらを白と金の間の中間の色をした稲妻が這う、

ワイアードは更に右手を壁の方向に勢い良く向けると、それと同時に上矢の体も壁に叩き付けられ、そのまま壁に張り付けにでもされたかのような状態になる

ゆっくりと歩み寄るワイアード、まるで罨に掛かった小動物を狙う猛獣のように、又は蜘蛛の巣に掛かった蝶を狙う蜘蛛のように…

上矢はその表情に若干の恐怖と焦りを覚えるが、その上矢の表情を見たワイアードは何か大きな勘違いをしている人間でも見るような一般的に言う『理解に苦しむ』という表情で上矢を見ながら誰に聞かれたでも無い問いに答える

「安心しなよ。別段喉元を搔つ切つて殺したりはしないよ。私も風のベクトルを操る能力が欲しいだけ。風力系の能力はあるにはあるんだけど、制御が難しくてね。そんだけ完璧に操ってる所見てると妬ましくてね」

そういつてワイアードは余っている左手の人差し指を上矢の額に当てようとする、が、その左腕を青白い光球が切り落とす

ぼとり、という音と共に簡単に折れそうな細い腕が地面に落ちる、

ワイアードは啞然とその光景を見ていたが、そこで声が入る

「おっと、手元が狂ったか？クマを狩る筈がウサギの首を刎ねちまっただけだな」

ワイアードは大きく瞳を見開きながら声の主の顔を見る

そこには無数の青白い光球を自分の周りに従える四雲の姿があった

「製品版の到着だ、そいつは俺がココで落とすからよ。お前は帰れよ、多重能力者」

ワイアードは小首を傾げ、眼を見開いたままで四雲に無い腕を向ける、いや、無かった腕を向ける

既にワイアードの腕は再生していた、ワイアードは悠然と歩く四雲の顔を見据え、不意に笑う

「帰るのはあんただろ？無限回路。私はあんたに指図される覚えは無い」

四雲はワイアードの答えを聞き、鼻で笑ってから答える

「そーかいそーかい、じゃあ出てっくれ、この世から」

直後、四雲の周りに浮いていた光球はワイアードを狙い様々な方向から襲い掛かる

その光球にワイアードは動きもせず、ただ止まってその光球を眺めていた

当然光球はワイアードに直撃し、複数のクレーターを作り上げ、何よりワイアードの姿は無くなっていった

四雲はその光景を見て満足そうに頷く、が

「残念、ハズレ」

突如四雲の耳元にワイアードの声と息が当たる

その感覚に四雲は一瞬で先程までの余裕を全て潰され、顔を青くし硬直する

「どうしたの？あんだ、何にそんなに恐怖を感じてる？こんな中学生のガキ相手に」

ワイアードの落ち着いた声が一層四雲の中の恐怖心を強め、そんな四雲の肩にワイアードはそつと触れ、呟く

「まあ、仕方ないか」

四雲は左肩に異常な痛みを感じたと思えば既に左肩は無くなっており、ワイアードの手には四雲の腕だったであろう物があつた

「これで左袖の分は取った…次は服の血の染みの分だよ」

痛みと恐怖でぐしゃぐしゃになった四雲の体をワイアードは観念動力で壁に張り付け、額を左手で右から左に線を描く、それに伴い四雲の額の皮膚と骨は綺麗に切り取られていく

指が左に完璧に到達した時点で四雲の頭蓋骨と皮膚は綺麗に切り取られ、脳が露になる

その異常な光景を眺める上矢は動くことすら出来なかった

ワイアードはその露になった脳に左手の人差し指を這わせ、何か本でも読んで感心するかのような表情を浮かべ

「…あんだの異常演算能力は貰ったよ…っていうか、あんだのはオリジナルじゃないのね、よく我が物顔で使えたこと…。羞恥心とか

無いの？」

無論四雲は答える事はできず、その四雲を見てワイアードは左手の指を鳴らす

それと同時に四雲の体は炎を上げ始め、瞬時に灰と化す

ワイアードが目線を四雲から上矢に変えた時、突如ワイアードに白衣の女は声を掛ける

「ワイアード、私達はそろそろ時間だから行かせて貰うわ、十二位ちゃんと空気使いくんが残ってるけど…どうするかは任せるけど…無理はしちゃダメよ」

「ははは、大丈夫よ。お姉様、私は特別だから」

「それもそうね、ちよつと自信過剰なワイアードも私は好きよ」

「ありがとっ」

先程までとは明らかに違う声色でワイアードは人懐っこい表情で答える、そこだけ見れば仲睦まじい姉妹のようだ

サソリとコウモリ、白衣の女は四体程の異形の者を引き連れ、奥に進む、それを逆坂は追いかけようとするがワイアードがその道の延長線上に立ち塞がる

「美羽：気を付ける…アイツ、多重能力者だ…！」

上矢の声を聞いた美羽は静かに答える

「…知ってる、前に一度だけ戦った事があるからね…、まあ…、アイツの名前はワイアード、能力はまさに『デュアルスキル多重能力』…って事ぐらいしか知らないけど」

多重能力、と呼ばれたワイアードは心外そうな、それでいて残念そうな表情を浮かべ、言う

「多重能力！困るなあ、そんな平凡な呼び名じゃあ…私は特別なんだから…。…そうだなあ、並外れた、まれにみる、非凡な…そんな意味の込められた言葉、『singular』が私には相応しい。そう…言うなら『シンギュラースキル多様能力』、かな？」

一人で命名した自分の名前に満足したのかワイアードはうんうん、と何度も頷き。それに合わせてワイアードを中心に白と金の中間の

色をした稲妻が発せられる

痛々しい程の閃光の中でワイアードの皮膚や体系は変形し始め、髪の色も変わり肩まで届く茶髪へと変わり、服装もそれに合わせ灰色のプリーツスカートに半袖のブラウスにサマーセーターへと変わり、身長も若干伸び、表情も先程までの邪悪な笑みを噛み殺したような笑顔から凜々しい顔へと変わり、完全に声自体も変化する

まるで別人、通常メタモルフォーゼの肉体変化では再現できないレベル。

「多重面相、触れた相手のDNAを入手し、それを再現する事で100%相手と容姿を同じにする事ができる能力。面白いわよねえ…ダミーフェイス幻影映画なんていう能力と合わせると服装や持ち物も全て再現できるの、ちなみに今回の変身対象は学園都市第三位、超電磁砲こと御坂美琴…さかみことんで、あなた達は超電磁砲って知ってる？」

ワイアードがそう呟くと同時に空中に何十枚ものコインをばら撒き、それを観念動力で空中を漂わせると、次は左手に白と金の中間の稲妻を纏い、勢い良く右下から左上に薙ぎ払う

「ま、知ってても知らなくても関係無いんだけどね」

言葉と同時に音も無くオレンジ色の光の雨が二人を襲う

「ふむ、…結構格好いいねえ、これ…名前は何にしようか？超電磁砲のままだと第三位の真似事みたいで嫌だから…そうだなあ…スターボウシコート虹射出、うん、それがいい」

満足げに頷くワイアードだが、直後にあ、と声を漏らしバツの悪そうな表情を浮かべる

「あ……確実に死んでるじゃん…これじゃ…能力得られない…ハア…、やつちゃったなあ…」

ワイアードは頭を掻きながら、残っているかも分からない死体を確認しようと砂煙で曇った視界を晴らすべく、左手を何かを追い払うかのように動かす、それだけで暴風が起こり、砂煙は全て消し飛び、一つの影が現れる

その影は、如何にも邪魔になりそうな腰まであるポニーテールに背中には白に限りなく近い炎で出来た四枚の羽を携えた少女、逆坂美羽

その姿を確認したワイアードは不思議そうな表情で聞く

「あれ？もう一人は？消し飛んじやった？」

逆坂は勝ち誇った表情を浮かべ、手を組み顎でワイアードの後ろを指す

ワイアードが背後を振り向いて見れば高速で低空飛行する上矢の姿

「あちゃ、逃げられちゃったかあ……まあいいや、二兎追う者は一兎をも得ず、てね」

そんな感じのワイアードに逆坂は質問する

「ねえ、アンタは何なの？お兄ちゃんの間か何かなの？」

逆坂の真剣な表情を見て、ワイアードは逆坂の兄に当たる人物を自分の記憶の中で探す

そして、しばらく考えた後、突如ワイアードは元々の姿へと戻り、残酷な感情と純粋に楽しむ感情を混ぜたような顔、そして、その笑みを更に噛み殺し、必死に抑えたかのような表情で言う

「ああ、それってさ

」

ワイアードの姿が再び変わる、顔の半分は火傷の跡があり、片目は潰れている逆坂にとって見慣れた顔、以前は同じ家で近所一仲がいいとまで言われた程、仲睦まじかった兄妹、自分の兄

逆坂暦の顔であった

「こんな感じの顔で

」

次にワイアードは右手を天井に向け、白い境界線を放つ

紛れも無く境界切断、自分の兄の能力

「こんな感じの能力の人？

」

瞬時に逆坂は理解した、以前見たあの光景、ワイアードが人の頭部を切り落とし、実に楽しそうに露になった脳に指を這わせる姿

その後、ワイアードは殺した相手の能力を使い始めた、間違はなく、あれは相手の能力を奪う行為

なら、

逆坂はよく分からない感情に突き動かされていた

怒りとも、悲しみとも、いや、無感情だったのかもしれない、自然

と涙が溢れ

目の前の少女への殺意で視界が埋め尽くされる

『ゴメン　。　コロシチャッタ』

ワイアードの声は膜が掛かったように聞き取り辛くて、不快だったしそれより、逆坂にその声は届いて無かった

自分の血管の中を真つ赤な液体が流れる音とその液体を送り出すポンプの音のみが逆坂の聴覚を支配していた

口の中が乾く、特に舌の付け根が異常なほどの乾きを覚える

自然と息が荒くなる

『アハハハ　。　ベツニイヨネ？ワタシハトクベツダカラ

』

目の前に居る人間の皮を被ったバケモノを殺すこと意外何も考えられなくなる

思考ではなく、本能的な何かが奴を殺せと叫んでいる

逆坂は声を上げようとしたが、獣の唸り声のような物しか発せられなかった

『セカイジユウノヒトヲスキナトキニコロシテイイノ　、　アン
ダースタンド？』

何かが体中を駆け回っている、血じゃない、赤い何か、

何かが叫んでいる、脳の命令じゃない、本能的な紅色の何か、

何かが脳を支配している、相手への怒りや兄の死の悲しみじゃない、もつと凶悪な緋色の何か、

何かが全てを突き動かした、赤く、どろどろとした何か、それはとても熱く、触れるだけで全てが熔解する

逆坂は瞬時に理解した
そうか

これが『正義』か

逆坂は咆哮した、それと同時に逆坂の背中からは六枚の半透明の虹色の翼が出現していた

その翼は奇怪であった、正義を志す逆坂の持つ者にしては邪悪、殺

人衝動、破壊衝動、様々なマイナスのイメージを圧縮したような翼咆哮する逆坂の瞳からは血の涙が流れていた

「へえ…コレが…翼、かあ…異常なレベルまで達した能力者が発現させるっていう…初めて見た」

不意に逆坂の周りの地面が熔解し始めた、それだけでは無い、逆坂の体は白に限りなく近い光を発しており、その光は逆坂の心臓の鼓動に合わせる様に点滅していた

気が付けば逆坂は咆哮を止めていた

先程までの表情と打って変わり、今度の表情は絶対零度の表情。無感情なんていう生易しいものじゃ無く、仮面よりも更に表情が無かった

周りに荒れ狂う炎とは相対的なその表情

そして、逆坂は両手を顔の前で一度交差させ、そのまま流れるような動きで両手を前に突き出す

その動作に連動して背中の中六枚の羽から半透明の虹色の光線が放たれ、ワイアードを狙う

ワイアードはその光線に見惚れ、動くことすら出来なかった、その光線がワイアードの身体を貫くより速く、何かが一瞬通り、ワイアードの身体を担ぎ上げてそのまま研究所の外へと移動する

残された逆坂はゆっくりと仰向けに倒れ、天井を見上げる

先程の能力の名残か、空中には半透明の虹色の羽根が舞っており、とても幻想的な光景だった

「せい、ぎ……………これが……………私の貫き通す物……………」

舞う羽根を見て逆坂は満足そうに笑みを浮かべる

逆坂は一度深呼吸をし、立ち上がり、意を決した表情で上矢の向かった方向を向く、その表情は先程までの絶対零度の表情とは違い活力に溢れていた

30・激昂焰<Flame>；（後書き）

最近、地道にお気に入り件数や感想が増えてきて、私はもうハイテンションまっしぐらですし、速く更新したいんですが、どうにもこうにも中々時間を取れません、ゴミみたいな人間で申し訳ありません、好きなだけ罵倒してください

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0016n/>

とある拡散の粒子移動（フリーウォーカー）

2011年3月7日17時43分発行